
魔法少女リリカルなのはsts & スーパーヒーロー 青きディケイド伝説

龍斬王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはs t s & スーパーヒーロー 青きディケイド伝説

【Nコード】

N2808N

【作者名】

龍斬王

【あらすじ】

『JS』事件が終わり、1年経ったある日、ミッドチルダに異変が起き、再び『機動六課』が動くが、それが別次元をも巻き込む事になるとは……………。

プロローグ（前書き）

初めて投稿させてもらいました。龍斬王です。ちなみに、この小説は、作者オリジナルの設定等がありますが、ご了承ください。

ブローグ

『JS』事件が終わり、1年経ったある日、ミッドチルダに異変が起き、再び『機動六課』が動くが、それが別次元をも巻き込む事になるとは……。青く美しい星地球、そこには、様々な戦士、様々なロボットが地球を守るために戦っていた、その戦士の1人「レナンジエス・アルマー」、彼がこの物語の主人公。妹キアラから、同年代の女性陣になにかと、モテる。そんな彼が異世界へ転移してしまったのが、この物語の始まりとなる。

第0話 調査準備

第0番管理世界ミッドチルダ、その都市グラナガンにて奇妙な現象が起きていた。

「失礼します。お呼びでしょうか、ナガジマ陸佐。」

彼女は、『八神はやて』最後の夜天の主だ。今彼女は、『ゲンヤ・ナガジマ』陸佐に呼び出しを受けていた。

「ああ……。今グラナガンで起きている事については、知っているか？」

「はい。なんでも灰色のカーテンみたいなのが目撃されてるとか。」

「ああ。で、その現象の調査をあなたにしてもらいてえーんだ。」
「うちがですか？」

疑問に思うはやて。それもそのはず、六課が解散した今、彼女には、動かせる部隊がない。

「ああ。あんたの騎士達だけじゃお手上げなんだとよ。」

「わかりました。八神はやてこれより調査に赴きます。」

そう言って部屋から出るはやてだった。

第1話 調査開始（前書き）

プロローグ含めて連続投稿。正直眠い

第1話 調査開始

グラナガン近郊部そこに3人の管理局員と一匹の狼がいた。

「どうだった？」

「ダメだ、手掛かりがない。」

「こつちもたぜ。」

「こちらもだ。」

彼女達は、普通の管理局員ではない。それは、

「あつ……。こんなところにおつたんか。」

「……はやて（ちゃん）（主）……」

そう彼女達は、八神はやての守護騎士達だ。

冒頭の台詞は、上から、泉の騎士シャマル、烈火の将シグナム、

鉄槌の騎士ヴィータ、盾の守護獣ザウィーラ。

「うん。ほんなら「はやてちゃん」「おいシグナム」ん……

…。

「アギトか。」

「リイン。」

「間に合つてよかったです。」

「ああ」

この妖精みたいな二人は、共にユニゾンデバイスである。

「どないしたん、リイン。」

「はやてちゃん、酷いですう。リインを置いていつちゃんですもん。」

「……ごめんな、リイン」

「で、アギトは、どうした。」

「ああ……。向こうの方で誰か、倒れてたぜ。」

「それは、本当か？」

「ああ。」

「主はやて。」

「うん。行ってみたほうがええなあ」

「『はい！』」「『』」

はやて達は、アギトの案内により、調査をしながらその場所に向かった。

第1話 調査開始（後書き）

ジェス「オイッ？」

作者「なんだ」

ジェス「俺は、いつになったらでるんだ。」
作者「次の話だ。」

ジェス「本当か？」

作者「ああ………。」

ジェス「なんだよ、そのあとの間わ。」

はやて「次回第2話 次元漂流者、そして。
うち、フラグ立つやろうか？」

第2話 次元漂流者、そして（前書き）

先の2話よりも長いです。……………ついに主人公登場、そして、いきなり、KAMENRIDE。

第2話 次元漂流者、そして

アギトに連れられ、現場へはやて達が向かっている頃、その人物が眼を醒ました。

「此処は、何処だ。」

そう彼こそ、本作の主人公『レナンジエス・アルマー』である。

「地球?.....、じゃあゝなさそうだな。」

彼は、今、本来なら行けない、平行世界の次元世界へ来てしまっていた。

「まっ、何とかなるかな。」

以外と能天気。

「なんか、ヒデエーこと書かれたような、まっ、いつか、さてと兄貴こちらジエス.....。」

.....

反応無し

「オイッ、兄貴。まじかよ、繋がらねえ。」

その時、

「ブオオオオオン」

灰色のカーテンが出現した。

そこから、怪人が姿を現した。

「なっ、まじかよ。」

その頃はやて達は、現場へと走っていた。

「まだ、着かんのんリイン。」

「後、もうちょっとです、はやてちゃん。」

「はやて、あたしら先行するぜ。」

「主は、後から来て下さい。」

「了解や。頼むで、シグナム、ヴィータ。」

「「はいっ！！（うん！！）」」

戻って現場では、

「まさか、地球とは、関係の無い所で前等がでるとはな。（だが、どうする？）」

「ウオオオーー」。」「ちっ、」

ジェスが攻撃を避けようとした、その時

???「クロスファイヤー、シュート」

「！？」

???「大丈夫ですか？」

「君は、誰だ。」

「私は、時空管理局執務官ティアナ・ランスターです。早く、避難してください。」

そうあの時の砲撃は、彼女が行った魔法いや、魔砲と、言った方が正しい。しかし、

「この、囲まれている状況で、どう逃げろって、言うんだ。」

「えっ！？」

そう彼等は、今囲まれている

「どうしよう。」

その時、

「シュワルベ・フリーゲン」

「ハッ」

「今のは、」

「今度は、なんだ」

「無事か、ティアナ。」「おまけが、いるけどな、」

「シグナム副隊長、ヴィータ副隊長。」

「オイッ、もう副隊長じゃあねえんだぞ。」

「あっ、すみません。」「それより、貴様は、何者だ。」

「俺っ？俺はレナンジェス・アルマー、まっ、ジェスでも、レナ

ンでも好きにどうぞ。」

「そうか、ならばレナンすぐに逃げる。」

「囲まれてんに逃げねえだろ。それに俺、今の会話の流れでいけば次元漂流者だし、逃げてても意味ねえよ。」

「……何っ（なんだと）（何ですって）」

驚く三人。

「それに、あの怪人どもは、俺が、倒す。」

「ダメっ！……！」

「ティアナ？」

「ダメっやめてよ、『兄さん』」

「大丈夫だ。心配すんな、いくぜこの世界での初めての变身だ。」

「……？」

「变身……！」

— K A M E N R I D E B L U E D E C A D E — そう彼は、世界を渡る者世界の守護者仮面ライダーブルーディケイドだった。

第2話 次元漂流者、そして（後書き）

ジェス「よっしゃー、ついに俺、参上!!」

作者「それ、モモタロスの決めゼリフじゃねえか。」

ジェス「別に、いいんだよ、んなこと。」

作者「完璧モモタロスだよ。」

はやて「なあ？」

作者「これは、これは八神さん。何か御用でしょうか。」

はやて「何で？いきなり、ティアナをだしとるん。」

作者「それは、最初にフラグを立てるのが、ティアナだからだ。」

はやて「そんなあー」

ティアナ「部隊長、落ち込まないでください。」

作者「そんな、こんなで、次回第3話 BATTLE」

????「総てを護り、総てを繋げ。」

は・ティ「誰?!」

????「俺か。俺は、通りすがり仮面ライダーだ。覚えとけ」

第3話 BATTLE（前書き）

第3話投稿させていただきました。……………BATTLEと、
いても戦闘描写あまりない気が……………。

第3話 BATTLE

仮面ライダーブルーディケイド、それが、彼、レナンジエス・アルマーの数有る姿の内の一つ。

「そこで見てろよ、俺の闘いを。」

「何っ?!」

そう言つて、彼は、怪人の群れに向かつて行つた。

「ドーパント、イマジン、ワーム、アンデットにアンノウン、ゲロンギ、それに、各種戦闘員か。」

彼は、怪人の種類を知っていた。

「俺だけじゃ、厳しいか、仕方ない喚ぶか、こんなところかな。」
彼は、もう一つのドライバーを取り出した。

— K A M E N R I D E A G I T O K U U G A K A B U T O D
E N - O B L A D E —

「ハッ!」

そう、彼は、仮面ライダーを召喚できるのだ。

「ドーパント以外は、任せる。」

そう言つて、彼は、さらにライダーのカードを取り出した。

「いくぜ。」

— K A M E N R I D E W —

「さらに、これだ。」

— F o r m R I D E W L U N A T O R I G A R —

「一気に片付ける。」

— F I N A L A T T A C K R I D E K U K U K U U G A A
A A A G I T O B B B B L A D E K A K A K A K A B U T O
D E D E D E D E N - O W W W —

《Kick Thunder Mach Lightning
onic》

《1・2・3》「ライダーキック」《Rider Kick》

《FullCharge》

「俺の、必殺技 Part6」 《TORIGAR Maxim
umDrive》

「うおーりゃー。」

「ハアーー、ハッ、ハアーー!!」

「ウエエーイ!!」

「ハッ!!」

「デエーイ」

「トリガーフルバースト!!」

ードオーーーン

なんと、数十分もしない内に、怪人どもを倒したでは、ないか。

「これが、俺の実力だ。」

「………」 啞然とする三人、するとそこに、はや

て達がやってきた。

「シグナム……、ヴィータ……。」

「あつ、はやて」

「なんや、爆発があつたけど、大丈夫なん？」

「ああ、大丈夫だぜ。」 「問題無しです。」

「そつかあ……。」

「八神部隊長!!」

「ティアナもおつたんか、久しぶりやね。」

「はいっ!!」

「で、ここらへんで倒れとつた人は、どこなん。」

「……えっ!!」

「あ……、多分それ俺だわ。」

「あんさん、誰や？」

「俺は、レナンジエス・アルマー。次元漂流者であり、世界の守護者だ。」

第3話 BATTLE（後書き）

作者「はいっ、というわけで、第3話終了しました。」

はやて「やけに、あっさりと戦闘終わらせたな。何でなん。」

作者「怪人と言っても、たかが雑魚の集まりですから。」

はやて「なるほど。」

ジェス「納得してんじゃ、ねえー」

ティア「落ち着いて、兄さん」

ジェス「ハッ、わりいティア。」

はやて「そういえば、ティアナ、何でジェスさんを『兄さん』、なんて呼んどるや。」

ティア「そっ…、それは、」

ジェス「作者の脳内設定だ。」

はやて「マジで？」

ジェス「マジで」

作者「次回第4話 夜天と守護者の邂逅」

なのは（無印）「リリカルマジカル頑張ります。」

ティア「今のは、」

作者「最後の方に来る台詞は、いろいろ変わるから。」

ティア「はあ」

第4話 夜天と守護者の邂逅（前書き）

ちよつと中途半端な、邂逅です。……………はやてが壊れ気味。

第4話 夜天と守護者の邂逅

「そっかあ、自分で次元漂流者や、って分かつとったんやね。」
と、言つて、彼女は、彼………レナンジエス・アルマーを、見ていた。

（なんや、カッコエエし、エリオや、ヴィータに似た紅い髪に、背の高さに、ウチの理想の男性像やん。）↑若干、こちらのオリジナル設定が、混ざっております。

「どうしたんだ、あの娘は、あんたらは、知ってんのか。」
するとそこにいる内の一人が、

「あっちゃー、はやて、妄想の世界に入ってる。」

「ヴィータ、……なんとかして主はやてを、現実に戻せ。」

「無茶いな、シグナム。」

「まったく………」

その時、ーピ、ピッー全く繋がらなかった、通信機が反応したではないか。

「………何っ（やつ）!？」「………」

「あつ！わりい、俺のだ。………こちら、ジエス。」

「あつ！ジエスっ？よかった。私よ。」

「その声、かれんなのかっ!！」

「ええ!！」

「今、どこにいる？」

『ちよつと待つてて。………』起動六課『つて、建物の近くみた
い。』

「起動六課？なんだそれ？」

「あつ！起動六課やったら、こちらが案内するで、詳しい事も聴きたいし。ええやろ、皆。」

「………はい!！（ああ）（ええ）「………」

「というわけで、こちらについてきてえな。」

「分かった。かれん、そっちで待ってる。」
『分かったわ、ジエス。』

こうして、起動六課の隊舎（現使用者無し）へ向かうこととなった。

第4話 夜天と守護者の邂逅（後書き）

ジェス「かれ〜ん、逢いたかつぜ!」

かれん「ちよつと、ジェス!!《会っ》っていう漢字間違ってるから。」

ティア「兄さんに近付かないで!」

シグナム「なんだこれは?」

作者「ほつといて、次回予告だ。次回第5話新たな戦士、起動六課再結成」

かれん除くプリキュア5 g o g o メンバー「次回も見て見て見てね。」

かれん「みんなっ!!?」

ティア「恥ずかしくありません?。」

シグナム「あれは、流石に……」

第5話新たな戦士、起動六課再結成 前編（前書き）

異様に、長い話になりそうな、予感。……………リリカルなのはキャラ、ナンバーズや、サブキャラを除きフル出演！！

第5話新たな戦士、起動六課再結成 前編

『起動六課の隊舎』へ、着いたはやて達は、まず昼食をとるべく、隊員食堂へと向かった。

「こな、ところかな?。」

八神はやては、料理が、好きで、その腕前は、ヴィータ曰『はやての料理は、ギガウマだぞ。』と、かなり評判だ。

「みんな〜。できたで〜。」

「すみません。なんか、私まで。」

「ええって、気にせんとして。」

こうして、はやて達は、昼食を、食べていった。

はやて達が、昼食をとって、しばらくしたら、めずらしく、今は、誰も来ないはずの、六課に客がやってきた。 「っ!」

「どうした、レナン。」 「誰かが、此処に、用があるようだ。」

なんと、彼は、空気質量の、変化で、何者かの、気配を感じたのだ。

「「「「「「「「「「えっ?」「」「」「」「」」」」」」」」」」」」

「誰だっ!」

「すみません、驚かすつもりは、「スバル!」って、ティア!」

「知り合いか?」

「知り合いと、いうか、同僚です。」

「ひどーい、ティアっそこは、コンビって言ってくれないと。」

「あんたネエー。」

「スバル!!」

「あっ!なのはさん、フェイトさん。こっちです。」

「ちよつとは、落ち着いたら、スバル。」

「ギン姉!!」

なんと、元起動六課の隊長と、ストライカー、それに、メカニッ

ク担当の方々では、ないですか。 「あれっ、なのはちゃん達、ど
ないしたん。」

「やっぱり、はやて少し忘れるね。」

「????」

「今日、六課の隊舎に集まろうって、言ったのはやてちゃんだよ。」

「

「ん~~~~~.....あっ!!思い出した、今日って、六課が解
散してから一周年の日か。」

「そうだよ。」

「ごめん、ごめん。」

「それは、そうと、はやて.....この二人は、誰なの。」

「あっ!紹介するわ。レナンジェス・アルマー君と水無月かれん
さんや。」

「ちなみに、俺とかれんは、次元漂流者だ。」

「そうなんだ。」

その時、はやてが何かを思い付いた。 「あっ!そや、ちよつと
思い付いた。」

「何を、思い付いたのはやて?」

「久々に、集まったんやし、模擬戦やろうかなあ〜って、考えた
んよ。」

と、言い出したはやて。 「模擬戦!!ホント?ですか?」

「スバル!ちよつと落ち着きなさい。」

「あっ!ごめん、ティア。」

「ジェスさんは、どうします?」

「なんで、初対面の俺に聞くんだ。そもそも、あんたらの名前も、
知らねえーぞ。」

「あっ!そうだった。じゃあ、自己紹介からだね。私は、高町な
のは。」

「私は、フェイト・テストロッサ・ハラウオン。」

「私は、スバル・ナカジマです。」

「スバルの姉、ギンガ・ナカジマです。」

「僕は、エリオ・モンディアルです。」

「え〜と、キャ……キャロ・ル・ルシエです。こっちは、私の、使役竜のフリード・リヒです。」

「キユク〜」

「メカニク担当のシャリオ・フィーニノです。気軽に、シャーリーって、呼んで下さい。」

「オペレーター兼ヘリパイロットのアルトです。」

「オペレーターの、ルキノです。」

「俺は、ヴァイス・グラセニスだ。」

「私は、グリフィス・ロウランです。」

「うちらも、自己紹介しよつか。らちは、八神はやてや。」

「私は、シグナムだ。」「あたしは、ヴィータだ。」

「は〜い。私は、シャマルです。」

「んで、うちのユニゾンデバイスの……」

「リインです。」

「あたいは、アギトだ。」

「私は、ザフィーラだ。」

と、一通り自己紹介を終えた。

「あれっ、ティアは、言わないの？」

「私は、彼に、初めて会った時に、してるわよ。」

魔導師組の自己紹介が、終わった。次は、次元漂流者組の番（二人だけだが……）

「まずは、俺が、何人かは、知ってると思うが、俺は、レナンジ
エス・アルマーだ。」

「私は、水無月かれんよ。」

次元漂流者組も終わった。（能力のことは、ふせて）

「そんじゃ、さっそく……《ウィーン×三回》なっ、なんやつ。」

『魔導師一同につぐ、グラナガン近郊にて、未確認巨大生物が暴れている。至急急行せよ。』

「行こつ、フェイトちゃん。」

「うん。なのは。」

「だったら、久々に、スターズ分隊とライティング分隊で、出勤
や。」

『了解』

「ヴァイス君、ヘリ頼める？」

「任せて下さいよ。」

「俺も、いくぜ。」

「民間協力者になるけど？いいの？」

「ああ！」

こうして、彼女達は、現場に向かった。

第5話新たな戦士、起動六課再結成 前編（後書き）

作者「前後編になってしまった。」

ジェス「だったら、やるなよ。かれん少ししか、台詞、言ってねえぞ。」

作者「リリカルキャラが、多過ぎた。」

フェイト「なんか、酷い言われよう。」

なのは「ねえ、作中にあった、《未確認巨大生物》って、何？」

作者「それは、……………」

ジェス「ダアーツ、ストロップツ。ネタバレになるから、言つなよ。」

作者「ホッー（黒い笑み）。作者に、対してその口の聞き方。」

ジェス（ヤベツ）

作者「覚悟は、いいか。」

ジェス（マジで、ヤベツ）

作者「後悔、させてやる。――FINAL ATTACK RAID DE
DEDEDE DECEDE―ディケイドアンリミテッド！」

ジェス「ちつ―ATTACK RAIDEBARIA―」

作者「耐えたか。」

ジェス「そりゃあ、耐えるわ。」

作者「まあ、いい。次回第6話新たな戦士 起動六課再結成」

ダイゴ「自分が、出来ることを最後までやり続けるしかないんだ。」

アスカ「本当の戦いは、ここからだぜ。」

我夢「この星は、滅んだりしない。」

ムサシ「僕は、諦めちゃいない。僕は、本当に、本当に勇者になり

たいんだ。」

ミライ「どんな時も、諦めず、不可能を可能にする。それが、ウルトラマンだ！」

ジェス「今度は、ミライ達かよ。」

第6話 新たな戦士 起動六課再結成 後編（前書き）

超ー長くなってしまったかも？ …… ついにメビウス登場！！
さらに、生身で《コスモス》の、あの技も！！ …… 次回は、な
んと、あの御一行が！！！！

第6話 新たな戦士 起動六課再結成 後編

《未確認巨大生物》出現、の通信で、現場に向かった、なのは達、魔導師一同と、レナンジエス・アルマー。そこで、彼等が、相手をする存在とは…………。

「もうすぐ、現場に着きますぜ。」

「わかったよ。皆、準備は、いい。」

『ハイッ』

「俺は、様子見だ。」

「じゃあ、行くよ！」

「…………セツト、アツプ……」

「これが、魔導師か」

なのは、フェイト、ヴィータ、シグナムは、自分の飛行魔法で、空を飛び、スバルは、ウイング・ロードを造り出し、ティアナと共に、駆けて行く、エリオは、キャロと共に、アルザスの飛竜フリードに、乗り、空に行く。

「スゲーな、魔導師って。」

「一応、なのはさん達と、連絡を取れるようにしやしたので、気軽に言つて下せえ。」

「サンキュー、ヴァイス。」

現場に、到着した、なのは達、そこで、見た物は、なんと……

「なんだよ！あれは。」 「ヴァイス君、今見てる映像そっちに、送るね。」

「何なんすか、これ。」 「どうした、ヴァイス。…………こつ、こいつは、宇宙怪獣ベムスター……」

「怪獣っすか？」

「ああ。俺の世界にいた怪獣だ。」

「どうするんすかつ？」 「とりあえず、『ディバイーン……バスター……』っ……」

「なのはさんが、攻撃したっすね。これで、終了かな。『えっ！？……効いてない。』……マジでどうするんすか。」

「通信を繋げる。」

「了解っす。」

「高町、シグナム、聞こえるか？『どうしたの？』すぐに、攻撃を中断しろ奴は、腹にある口からエネルギーを吸収する。」

『それは、本当か？』

「ああっ！！それと、接近戦も、極力控えろ、奴は、エネルギーだけじゃ無く、魔力を、持つ者をも、吸収する。早く下がれ！！」

「じゃあどうするんすか。」

「俺が、行く。」

そう、言って彼は、ハッチに近付いた。

「いくぜ。」

彼は、そういつてハッチから外へ、飛び出た。

「なっ！？」

（こういう風になるかは、分からないが、やるっきゃない！）
「メビウス！」

（一応、あの巨大生物から、離れたけど。）

その時、ヘリのある、方角から、一つの光が現れた。

「なっ、何？」

その光は、巨人へと、姿を変えた。これが、レナンジエス・アルマーの、数ある内の姿の一つ。ウルトラマンメビウスである。

メビウスは、ベムスターへ、向かった。

「セアッ」

「キュー、キュー」

「あれって一体？」

「ハアー………」

『ライトニング・カウンター』

「タアッ！！」

「キューーッ！！」

「ヘアッ……」

「イける。」

高町なのはは、そう確信した。その時！！

「ダアッ!？」

（なっ、何。どうしたの。）

「デュッ!！」

自分の後方を、見る。メビウス。そこには、……………

「隊長！当たりました。」

「ウム。よし、どんどん撃ち込め。」

「デュッ!！?……………デュアー!？」

なんと、メビウスを、攻撃しているのは、時空管理局の空戦魔導師と、陸戦魔導師ではないか。

「!？あなたたち、何、してるの？」

「高町教導官、邪魔しないで、いたたきたい。」

その会話をしている、最中にも、彼等は、メビウス目掛けて、魔法を、放っている。

「攻撃をする。相手を、間違えてます。あの、巨人は、私達を、助けてくれました。何故、攻撃するんですか？」

「相手は、間違えては、いない。巨人も、怪物も、我等、管理局を脅かす存在だ。」

会話をしていた、その時……………ピコン、ピコン、ピコン、——なんと、メビウスのカラータイマーが、点滅を、始めた。

（どうしたの？）

起動六課隊舎で、はやて達は、その映像を、見ていた。そして、メビウスのカラータイマーが、点滅し始めた時、かれんが

「危ない!」

「どないしたん？」

「ウルトラマンは、三分しか、活動できないの。余り時間が、無

い
ろ

「そんな！」

戻って現場では、

『なのはちゃん、聞こえる?』

「どうしたの、はやてちゃん？」

通信に、応えながらも、目線は、動かさない。

『なのはちゃん、巨人さんの活動出来る時間が、もう余り無いみたいなんよ。なんとかでけへん。』

「わかった。何とかしてみるよ。」

しかし、この会話を、聞いた部隊の隊長は、とんでもないことを、言い出した。

「もう余り時間が、無いのか、よし、全員巨人に、向けて集中砲火だ!!」

「!？」

「撃てー！！！」

「なっ、あいつら！」

「駄目だ、間に合わない。」

「やめてー!!!」

protektion.pw.de

「くう!？」

[illegible]

「へアッ!？」

「巨人さんは、怪物を、こっちは、私が、押さえるから。」

メビウスは、
頷いた

（ベムスターに、勝てると、したら……、よーし！！）

「フツ……フツ、ハツ、セアツ」

メビウスは、メビウスブレスと、ナイトブレスを、一つにしたナイトメビウスブレスを、使い、《ウルトラマンメビウス メビウス

ブレイブ』えと、パワーアップした。

「セアッ……、ハッ」メビウスは、ナイトメビウスブレスから、メビウムナイトブレードを、発生させた。そして、

「キュー、キュー」

ベムスターが、メビウスに、向けて突進した。が、

「セアッ……」

メビウスは、居合切りの要領で、ベムスターを倒し、光ながら、
なのはの方へ、飛んだ。メビウスが、ベムスターを、倒したところ
なのはの、p u r o t e k u s h o n ・ p o w e r d e も、限界に、
きていた。

（もう、持ちそうに無い。）

ーピシッー

（ごめんね。巨人さん。）

その時、

「フルムーン・レクト!!」

「えっ!」

「大丈夫か?高町。」

「ハイッ!ノノノ」

「戻るぞ。」

「うんっ」

この事件から、数日経ったある日、八神はやて号令の本、起動六課は、再結成され、ジェスト、かれんも、民間協力者として、参加した。……また、その日この六課の隊舎に、夜遅く、別世界からの、旅をしている者が、来ようとは……………。

第6話 新たな戦士 起動六課再結成 後編（後書き）

今回の、次回予告は、前回とは、違った物です。

イメージ曲 journey through the Decade

「ここは、何の世界だっ。」

「これより、スターズ分隊VSライティング分隊による、模擬戦を行います。」

「プリキュア・メタモルフォーゼ!!」

「今回は、これだ。――Cyclone――Joker――変身――Cyclone・Joker――……さあ、お前の罪を数えろ!!」

「あんたは、誰だ?」

「俺は、通りすがりの仮面ライダーだ!」

次回 第7話 破壊者と、模擬戦

全てを破壊し、全てを繋げっ！！

主人公設定（随時更新）（前書き）

今更ですが、第7話投稿前に、主人公設定をアップします。

主人公設定（随時更新）

レナンジエス・アルマー

男（19歳）

身長：174cm

体重：54.8kg

特徴：紅い髪、紅い瞳（魔導師になる時は、右眼が、紅、左眼が、翠、のオッドアイになる（予定）。）

特殊能力（技能）：生身での、ウルトラマンや、仮面ライダーの技の、使用。

デバイス：まだなし

魔導師レベル：不明

仮面ライダーブルーディケイド

外見は、ディケイドの、マゼンタ色の所が、青になったたげ。

カメンライドは、クウガWまでのカメンライドと、ファイナルカメンライドを、使用可能。

また、土ディケイドと、違うのは、ウルトラマンに、なれる《ウルトラライド》のカード、プリキュアの、力を、使うことができる《キュアズライド》のカードを、持ち、それぞれの、最終形態への、

ライドカードも持っている。

第7話 模擬戦と、破壊者（前書き）

ついに、破壊者登場！！！。……………えっ、どうでもいい？？

第7話 模擬戦と、破壊者

起動六課再結成した、翌日、……………

「ここは、何の世界だ？」

「案外、ライダーのいない世界だったりして。」

「ユウスケっ！！でも、本当に、どんな世界何でしょう？私と、ユウスケの服も変わってますし。」

彼等は、世界を、旅している。今回、新しい世界に、着いたが、本来、ディケイドである、門矢士だけ服が、変わるのだが、今回は、三人共服が、変わっているのだ。……………しかも、同じ制服へ。

「だが、流石、俺だ。どんな、服でも、似合っている。」

「ムッ！！光家秘伝笑いのツボっ！！」

士の、首筋に、彼女……………光なつみの、『笑いのツボ』が、ヒットした。

「くっ、あははは……………なっ、なつみかん、…おっ、お前なあ…

…」

「なんだ？今の笑い声は？」

「気にするな。いくぞ、シグナム。」

「あ、ああ。」

ジェスト、かれんは、訓練場に、きていた。……………模擬戦を、するために。

「模擬戦のメンバーは、スターズ分隊に、かれんちゃん。ライトニング分隊にジェスさんや。」

「みんな、がんばって行こう。」

「こっちも、負けられないよ。」

『ハイッ』

と、はやてのいる辺りに、士達が、やってきた。

「なんや？あんたら？」

「新しく、この部隊に、配属された、門矢士だ。」

「俺っ、小野寺ユウスケ。」

「光なつみです。」

「よろしく。うちは、部隊長の八神はやてや。もうすぐ、模擬戦が、スタートするから、いっしょに、みよっか。」

「へえー」

「セッ、アッ、」

八人は、バリアジャゲットと、騎士甲冑姿に、なった。

「なにあれ？」

「あれは、魔導師と、呼ばれるもんや。」

「ふーん」

かれんは、ポケットの中から、”キュアモ”を、取り出した。そして、

「プリキュア・メタモルフォーゼー！」

「なっ、なんですか？」 「知性の、青き泉 …… キュアアクア

！！」

かれんは、”プリキュア”に、変身した。そして、ジェスは、…

……

「今回は、こっちだ。」 ジェスは、”ダブルドライバー”を、

取り出し腰に、装着し、すぐに、

「CYCLONE」

「JOKER」

「変身ー！」

「CYCLONE JOKER」

「さあ、お前の罪を数えろー！」

ジェスは、一人で仮面ライダーWえと、変身した。

「仮面ライダー…W」

「あれって、二人で一人の仮面ライダーですよ。」

「ああ。」

「でも、どうして一人で変身できるんだ。」

「さあな……」

「土、もしかして、興味ないのか。」

「それより、始まるみたいだぞ。」

模擬戦が、スタートしてからは、スターズ分隊が、ステージを利用した、戦法で、ライトニング分隊を押していた。もちろん、キュアアクアも、初めての、人達なのだが、冷静に、味方の、行動に、対応していた。しかし、後半、ライトニング分隊が、押し返してきた。それは、何故か、実は、Wであるジェスが、メモリチェンジにより、派生した、LUNAMETALや、LUNATORIGGER等の、ハーフチェンジにより、フロントアタッカーから、フルバックまで、フォローしていたから、である。そして、模擬戦終了、間近に、それは、起こった。

——ブォー——

なんと、訓練場に、灰色のカーテンが、現れたではないか。そして、そこから、出て来たのは、アポロガイストだった。

「アポロガイスト！！」 「土っ！！」

「いくぞっ！！ユウスケっ！！」

土とユウスケは、訓練場に、向かった。

「なんだ、貴様！！」

「私の、名は、アポロガイスト。偉大なるグレード大ショッカーの幹部だ。」

「グレード大ショッカー？」

「貴様らの、命をいただく。」

「「待てっ！！」」

「きつ……貴様は、」

「アポロガイストそうは、させねえぞ!!」

「土っ!!」

「イクゾ、ユウスケ」

そう言うのと、土は、ディケイドドライバーを、腰に当て、ユウスケは、腰に手をやり、右手を、左から、右に、ずらし、土は、カメライドカードを、ドライバーに、差し込んだ。

「「変身!!」」

—KAMENRIDEDECADE—

ユウスケは、クウガに、土は、『世界の破壊者』仮面ライダーディケイドに、変身した。

今、此処に、破壊者ディケイドと、守護者ブルーディケイドが、出会った。

「えーい。」

イラツク、アポロガイスト。

「あんたは、誰だ？」

「俺か？俺は通りすがりの仮面ライダーだ!!」

第7話 模擬戦と、破壊者（後書き）

今回も、また違った感じで、次回予告です。

イメージ曲 journey through the Decade

「世界の破壊者デイケイド……」

「お前は、一体なんだ。」

「教えてやるよ、俺は、世界の守護者ブルーデイケイドだ。」

「士君以外の、デイケイド。」

「俺は、あんたを、追い出すつもりは、無い。」

「どっかの、殿様と、同じ台詞だな。」

次回第8私 守護者と破壊者と 炎と星と雷と夜天の光

全てを、破壊し 全てを、繋げ

第8話 破壊者と守護者 炎と星と雷と夜天の光（前書き）

少し、短めかも。……………クウガと、リリなの三人娘、どうやって、連携を、とらせようか、考えています。……………ディケイドと、ブルーディケイドは、すぐに、いくつか、思い付いてるのだが……………

第8話 破壊者と守護者 炎と星と雷と夜天の光

これまでの、魔法少女リリカルなのはs t s & スーパーヒーローは、

「此処は、何処だ。」

「変身!!」

— K A M E N R I D E B L U E D E C A D E —

(どうなるか、わからないが、やってみるか?)

「メビウス!!」

「アポロガイスト!!」

「俺か?俺は、通りすがりの仮面ライダーだ!」

今、六課の訓練場では、士が、変身した、『世界の破壊者』仮面ライダーディケイドと、ユウスケが、変身した、『笑顔を守るために闘う戦士』仮面ライダークウガが、アポロガイストと、六課のFW陣との間に、立っていた。

「何やってんだ?早く逃げろ!!」

「早くっ!今の内に!」 「かれん、お前は、なのは達と、逃げ

る。」

「ジェスは、どうするの?」

「俺も、闘うさ。仮面ライダーブルーディケイドと、して。」

「わかったわ。」

レナンジェス・アルマーを、除き先程まで、模擬戦を、していた魔導師と、キュアアクア……水無月かれんは、避難した。

「おいっ、お前も、避難しろっ!」

「悪いが、俺は、あんたと、いっしょに、闘うぜ!仮面ライダーディケイド……いや門矢士!」

「お前っ!どうして、俺の、名前を?お前は、一体なんだ?」

「教えてやるよ!俺は、世界の守護者、仮面ライダーブルーディケイドだ!」

—KAMENRIDE—

「変身!」

—BLUEDECADE—

「なっ!?!……青いディケイドだと。」

「土以外の、ノ士君以外の、」

『ディケイド……↑ユウスケと、ナツミカンです。』

「ディケイドが、二人だと?まあいい。二人まとめて、地獄に、送ってやる。」

「来いっ!アポロガイストッ!」

「土っ!……ハッ!?!」 「君の、相手は、これだよ。」

「なんだコイツラ。」

「それは、ガジェットと、言う者だ。おっと、私の、自己紹介がまだ、だったね。私は、……「スカリエッティ!」おやおや。」

「貴様、何故此处に居る!」

「今回は、顔見せだけだからね、では、また。」

「くっ!」

「「フェイトちゃん!」」

「なのは、はやて。」

「スカリエツティ……何を、考えてるんだろ。」

「なのは！！今は、ガジェットを！！」

「うんっ！！」

「俺も、手伝います。」 「ありがとうございます。」

ディケイドと、ブルーディケイドは、アポロガイストと、クウガは、
なのは、フェイト、はやてと共に、ガジェットの軍団に、向かって
行った。

第8話 破壊者と守護者 炎と星と雷と夜天の光（後書き）

次回の魔法少女リリカルなのはstss&スーパーヒーローは、

「クッー!!」

「こいつの強さは、いったい？」

「やあ、土っ！」

「海東……」

—KAMENRIDE—

「変身っ!!」

—DE・END—

「超変身!!」

「姿が、変わった。」

次回第9話 Wディケイド対アポロガイスト、クウガ&リリなの
三人娘対ガジェット軍団、………そして、ディエンド乱入

全てを、破壊し、全てを、繋ぎ、そして全てを、護れ

第9話 Wディケイド対アポロガイストと、クウガ&リリなの三人娘対ガジェツ

かなり、駄文のような気が………

第9話 Wディケイド対アポロガイストと、クウガ&リリなの三人娘対ガジェット

機動六課の訓練場では、ディケイドとブルーディケイド対アポロガイストに、クウガ&リリなの三人娘対ガジェット軍団が戦闘を開始した。

Wディケイド対アポロガイスト

「アポロガイストッ！前の世界から遙々ご苦労なこつたな。今回こそ、絶対に倒す！！」

「それは、こちらの台詞だ。ディケイド。」

「行くぞっ！！土っ！！」 「ああっ！！」

《ATTACK RIDE SLASH》

「ハアッ！！」

「クソッ！ちょこまか、動き回りやがって！！」

「アクセル・シューター……………シュートッ！！」

「プラズマ・ランサー！！……………ファイヤー！！」

「クラウ・ソラス！！」 （クソッ！何か？使えそうな、物は？

…………… あった！！）

（鉄の棒なんか、持ってどうしたんだろ？）

「よーしっ！！超変身！！」

（（（姿が、変わった！）））

クウガは、格闘及び肉弾戦に適した、基本フォームの『クウガ・マイティフォーム』から、スピードの上昇や、専用武器の『ドラゴンロッド』を使う事得意とする、『クウガ・ドラゴンフォーム』へと、フォームチェンジした。……………リリなの三人娘及びそれを、訓練場が、見える位置にいたFW陣は、驚いていた。

魔導師一同『なんで、姿が変わったんだろ？』

……しかし、エリオは、……

「カッコイイです。」

「ウォーリヤー!!」

クウガは、ドラゴンロッドを振るいガジェットを攻撃した。……
フェイトも、自身のスピードでクウガ・ドラゴンフォームに追い付
いていた。

（姿……ううん。色が、変わったただけなのになんで？水流のよう
なしなやかな動きに。）

そう!!実はクウガは、四つのフォームがあり、それぞれ、マイ
ティフォームは炎、ドラゴンフォームは水、まだ見せてない、ペガ
サスとタイタンにも”風”と”地”の属性を持っている。また、そ
の上をいくフォームがあるが、今は伏せておこう。

「ハアッ!!」

「アークセイバー!!」 その時!!

「うわっ!？」

「クッ……!？」

なんとガジェットが遠くから、射撃をしているではないか。

（何か……撃てそうな物は？）

この様子をアポロガイストと闘いながら見ていたブルーディケイ
ドは、

「クウガッ!!これを使えっ!!」

なんと!!自身の銃型の武器をクウガに投げ渡した。

「よしっ!」

その銃を持ったクウガは……

「超変身!!」

なんと!!青いクウガから緑のクウガへフォームチェンジした。

これが、クウガ・ペガサスフォームだ。

「ハアッ!!」

クウガ・ペガサスフォームの最大の特徴は、その卓越された超感
覚と専用武器ペガサスボウガンを使った戦法なのだか、クウガ・ペ

ガサスフォーム最大の欠点は、その使用出来る時間にある。

「くそっ！もう時間が。」

「早く下がってください。後は、私たちが。」

「いや、まだいける。……超変身！！」

『またあ！？』↑魔導師一同

今度は、緑のクウガから、赤のクウガに戻った後次は、紫のクウガ……クウガ・タイタンフォームにチェンジした。

（今度は、紫かいっ！！！）↑はやて心のツツコミ（笑）

ガジェットがなのは達の間隙について攻撃してきた。

『防御！！』

《Purrotekushon》

《Dhifensur》

だが、クウガは、防御をせずに、ゆつくりと敵に向かって行く。クウガ最大の基本防御力の高いタイタンフォームならではの行動である。

その頃……六課の訓練場近くに灰色のカーテンが発生……そこから四人の青年がいた。それぞれの目的のために来た。世界を渡る怪盗『仮面ライダーディエンド』こと海東大樹。自称ハードボイルド探偵左翔太郎、その相棒フィリップ、二人は、『ガイアメモリ』の力で”二人で一人の仮面ライダー”仮面ライダーWに変身する。そして、赤い革ジャンが良く似合う『仮面ライダーアクセル』こと照井竜。この四人の目的はいつたい？

また、別の六課の敷地内に《クロスゲート》を通り降り立つ二組の男女彼らは、いつたい？

一方、訓練場では……………

「その程度か？デイクイド！」

「クツ！！アポロガイストの奴……………また妙に強くなりやがって。」
「どうする。士？」

その時、

「やあ。苦戦してるようだね士。」

「海東……………」

「ぬっ！貴様っわ。」

「アポロガイスト、こつからは、僕も混ざらせてもらっよ。」

— K A M E N R I D E D I ・ E N D —

「デイエンドか……………」

その頃、訓練場では、クウガとリリなの三人娘がガジェットを倒して行っただが、その内の一機がUSBメモリに似た何かを取り出した。

（あれは？いったい何？）

その時！！

《M A G M A》

何かの音が響き、ガジェットの姿を変えていった。

「なんや？」

「ガジェットが姿を変えるなんて。」

「そいつの相手は、俺達がするぜ。」

なのは達は、声が聞こえた方向に向いた。

「あなた達は？」

「俺達は、探偵だ。」

- t o b e c o n t i n y u -

第9話 Wディケイド対アポロガイストと、クウガ&リリなの三人娘対ガジェツ

今回もちと違うかも。

イメーヂソング W - B - X

「ガイアメモリだったら俺達が相手だ。」

「検索を始めよう。」

—CYCLONEJOKER—

「『さあ、おまえの罪を数えろ。』」

次回第10話「メモリの戦士と機神拳」

これで、決まりだ。

第10話 メモリの戦士と機神拳 前編（前書き）

今回は、前後編になります。……今回の前編では、Wやオリジナルのメモリの戦士を出しました。オリジナルのメモリの戦士は、後々紹介します。

第10話 メモリの戦士と機神拳 前編

「あなた達は？」

「俺達は、探偵だ。」

「海東……お前、どうやって此処に？」

「いつもの様に次元の壁を越えて来たのさ。」

（成る程な、納得がいく。）

「クツ！？ディエンドまでくるとは、ディケイド勝負は、お預けだ。」

「まてっ！！アポロガイスト！！」

「逃げたようだね。」

「ああ。……………ユウスケの所に行くぞ。」

「探偵？」

「ああ。」

「翔太郎。検索を完了した。今、あの機械が使ったのは『ガイアメモリ』だが、『T2ガイアメモリ』だ。」

「何だと！！」

「どういう事だ？T2メモリは、お前達が全部『壊した』はずだ。」

「ああ。あの時、…………『エターナルメモリ』も含めて全部『メモリブレイク』した。」

「まあ、いつか……………いくぜ、フィリップ、照井！」

「ああ、翔太郎。」
《CYCLONE》
《JOKER》
「行くぞ。」
《ACCEL》
「「変身!!」」
「変……身!!」
《CYCLONE JOKER》
《ACCEL》
「仮面……ライダー……」
「倒れた人は、大丈夫なんですか？」
「ああ。それなら大丈夫だ。」
『僕らは、”二人で一人の仮面ライダー”だからね。』
「二人で一人の……」
「「仮面ライダー?」」
「いくぜっ!!」
「『さあ、お前の罪を数えろ。』」
「さあ、……振り切るぜ!」

ユウスケ達がいる所に着いたディケイド達。
そこで、

「あのライダーは、いつたい？」
「Wにアクセル。……ガイアメモリを使ったメモリの戦士さ。」
「Wに……アクセルか……」
「んじゃ、俺もいこうか。」

ジェスは、ディケイドライバーを外し、ダブルドライバーの左側の
ないロストドライバーを装着した。

「使うのは、こいつだ。」

—TIGER—

「変身」

—TIGER—

「さあ、切り裂くぜ。」

「クッ……強え。」

『僕らが闘った以上の力だ。』

「だったら俺が、倒す。」

「何っ!？」

「ガァー」

「フンッ。」

—TIGER MAXIMUM DRIVE—

「タイガーデストラクション!!」

タイガーは、必殺技を放つ前に、マグマドーパントの動きを止め氷結の斬撃を放った。

「強い……」

『ああ……僕ら以上だ。』

「さて、ディエンドと、Wにアクセルは、なんで此処に来たのか説明を頼む。」

「ああ、わかったぜ。」

機動六課隊長室……そこで海東達は、この世界に来た理由を話した。

「ガイアメモリに似たメモリがこの世界に?……本当か?フィリップ。」

「ああ。まず間違いない。」

「そういえば、さっき急に倒れたけど、どうしてなの？」

「あつ！それ私も気になる。」

「うちもや。」

「それは、……」

「こいつらは、二人で一人の仮面ライダーだ。」

というろと話しをしていた時、

——ウィーン×3——

「なっ、なんや。」

目の前にモニターがいきなり、表れた。それを見たフィリップは、

……

「実に興味深い、ゾクゾクするね。」

等と言っていた。そのモニターに映っていたのは、

「なんや、あれ。」

「なんなの？」

「なに、あれは？」

と、上からはやて、なのは、フェイトの第一声……だが、一人だけ、全く違う事を考えていた。

（「アインスト」に「修羅」か……）

その頃、クロスゲートで転移してきた者達もこの映像を見ていた。

「アインストか。」

「そうみたいですの。」 「それに、修羅か。」

「私が見ていた修羅とは、違うみたいね、フォルカ。」

「あれは、俺の世界の修羅です。ネージュ姫。」

「ふーん。（アレディとは、違う修羅か。当たり前よね。）」

「アインストは、俺とアルフィミで殺る。フォルカは、修羅を頼む。……ネージュは、人間大のアインストが現れた時を考えて待機だ。」

「はいですの。」
「わかった。」
「いいですよ。」
「ソウルゲイン!!」
「ペルゼイン。」
「来い!!ヤルダバオト!!」
アインストと修羅の大群の前に3体のロボットが出現した。

六課では……
「なんや?あのロボットは?」
「ソウルゲイン、ペルゼイン、ヤルダバオトか……俺もいくか。」

『えっ?』
「訓練場の天井部を開放してくれ。」
「あつ、ハイ。」
そして、訓練場……「モニターを付けたままにしろよ。」
『いったいなにするん?』
「まあ、みてな。……行くぜ!!ソウルサーガ!!」
『なっなんや。』

部隊長室

「反応ロスト」
「みてっ!!ロボットさんの隣!」

クラナガン近郊

「ヤッホー。兄貴。」

「……………ジエスカ。」

「あら、お兄様。」

「今まで、何処にいた。」

「機動六課。」

「此処は、まさか『ミッドチルダ』なのか?」

「大当たり。俺達、『次元漂流者』ってわけ。」

「なるほどな。……………だが、今は目の前の連中を倒す!!」

「オツケー。フォルカもいいな。」

「当然だ。」

「つと、闘う前に……………はやて、なのは、フェイト聞こえるか?」

『聞こえてるよ。』

『どうしたの?』

「なーに、スターズ分隊とライトニング分隊を現場に連れて来てくれねえかな。」

『どうしてや?』

「ロボットの戦闘をあいづらに見せたくてな。駄目か?」

『わかったよ。ヴィータちゃんとシグナムをFW陣と一緒に往けるから。……………いいよね、はやてちゃん。』

『なのはちゃんがいうたら仕方ない。スターズ分隊とライトニング分隊をそちらに向かわせます。』

「サンキュー。なのは、はやて。」

『え、ええよお礼は／＼／』

『はやて、顔真つ赤だよ。どうしたの?』

『なつ、なんでもないよ。フェイトちゃん。』

「はあ。まつ、やるかな?」

そう呟き敵に突っ込んで行つた。

第10話 メモリの戦士と機神拳 前編（後書き）

ジェス「やっと、ソウルサーガで暴れられるぜ。」

作者「フォルカ達も闘うがな。」

ジェス「姫さんは？」

作者「FW陣の目の前でアインストと戦わせるつもりだ。」

ネージュ「なんで、そうなるんですの？」

作者「俺の勝手だ。」

ジェス「まあ、いつか。……次回 第11話 メモリの戦士と機神拳」

フォルカ「機神拳の真髓今こそ見せよう!!」

アレディ「高まれ覇気よ!! 極奥義!!」

フォ・ア「真覇!!」

フォルカ「猛撃!」

アレディ「朧撃!」

フォ・ア「裂波!!」

ジェス・ネージュ「余所でやれ!!（やりなさい!!）」

第11話 メモリの戦士と機神拳 後編（前書き）

今回は、ロボットの戦闘に加えて、無限のフロンティアEXCEE
Dの主要キャラとおまけを出しました。……おまけは、誰か判り
ますか？

第11話 メモリの戦士と機神拳 後編

クラナガン近郊部……………そこで、スーパーロボット達が戦闘を開始しようとしていた。

アクセルSIDE

（クノッペンタイプが40、グリードタイプが60、ゲミユートタイプが50、アイゼンタイプが80か。）

アクセルは、アインストの種類と数を数えていた。ちなみにアインストシリーズは、すべて『アインスト』を抜いて書いていきます。

「俺は、アルトの偽物を叩く。他は任せる。」

『オッケー。』

『はいですの。』

『ならば、修羅は、俺が殺ろう。』

「いくぞ！……………青龍鱗！！」

アイゼン「！！」

「残ったか。ならばっ！舞朱雀！！」

アイゼン「！？…」

―ドォーン―

「決まった。」

アクセルSIDE Out

ジェス&アルフィミイSIDE

「ミイ、クノッペンとグリードを頼むな。後でこ褒美あげるから。」

「はいですの。お兄様。」

「さーて、いくぜ？……アインスト。……青龍爪牙！！！」

「！！」

「白虎風刃閃！！」

「！！??」

「今ので終わりか？……あつけねえーな。」

「ライゴウエ。」

クノッペン&グリード「！！」

「マブイタチ。」

クノッペン&グリード「！！??」

「もう、終わりですの？」

ジェス&アルフィミイSIDE Out

フォルカSIDE

「貴様等の相手は、この俺だ！」

修羅A「なにを!？」

修羅B「やっちまえ！」

「来るか？ならば、……機神双獣撃！！」

修羅共『ギャー』

「最後だ。……機神猛撃拳！！」

修羅「ギャー」

フォルカSIDE Out

現場付近

「もう、終わっちゃったのね。」

「スイマセーン。」

「ん？」

そこに来たのは、スバルだった。

「この辺でロボットの戦闘って……………」

「もう、終わったわよ。」

「そんなぁ……………」

「スバルー！」

「あつ、みんな。」

F W陣と副隊長がやってきた。

「戦闘は、どうなった!？」

戦闘があつたと聞きはやるバトルマニアシグナム。

「落ち着けよ。シグナム。」

「すまない。ヴィータ。」

そこに……………」

「お前等、遅い。」

「うつ、うるせーよ。」 顔を真っ赤にして伏せるヴィータ。

「ロボットでの戦闘は、既に終了した。」

『エーーーーー!……!』

F W陣と副隊長……………特にシグナムとエリオ、スバル…は、がっかりしている。

「まつ、確かに遅かったな。」

「貴様は？」

「俺は、アクセル・アルマー。こっちのちっこいのは、アルフィミイ。」

「俺は、フォルカ・アルバーク。」

「私は、ネージュ・ハウゼンよ。」

アクセル達は、何故この世界に来たのか説明をしていたが、その

時……

「アクセル…… 転移反応ですの。」

「なにっ!!」

・スパロボ敵増援曲・

「何が来るんだ。」

― シュンツ × 5 ―

転移してきたのは、アインストシェーデル、アインストムント、アインストデンケン、アインストヘルツ、アインストゴルトが出現した。

「アインスト…… しかし、こいつらは？」

「エンドレスフロンティアにいた奴らね。」― シュンツ × 5 ―

転移してきたのは、アインストシェーデル、アインストムント、アインストデンケン、アインストヘルツ、アインストゴルトが出現した。

（どうしよう。）

その時、クロスゲートが開いた。

（何が出て来るんだ。） そのクロスゲートから出て来た者達

は、

……

「フルハウス!!」

「タイグレス・バイト!」

「行つて、がちりん月刃鱗」

「鈴鹿・美糸」

「火燐…… 吠えろ!!」 「水憐…… これが参の太刀!!」

「R―BLADE!」

「バーナウ・ファア・ドラグ…… 行け! ファイヤードラゴン!!」

「機神乱獣撃!!」

なんと!! クロスゲートから来たのは、ツアイト・クロコディールのメンバーだった。もちろん、アインストを倒しながら、参上した。

「大丈夫だったかい? エルフプリンセス。」

「ハークン!!」

「誰だよ、ハークンって。っ!!」

その時、空から何かが降って来た。それは、上級アインスト、アインストフェッターだった。

「ちいっ」

しかし……

「ベレイシャスミラー!!」

「もらった!!……機神龍逆斬!!」

なんと瞬殺。

『……………』

啞然としているFW陣。しかし、シグナムは……………

「私と戦ってくれ。」

バトルマニア魂発動…

（どうにかして……）

その後、ハークンやアクセル達は、機動六課にて事情説明などをしていた。

第11話 メモリの戦士と機神拳 後編（後書き）

ジェス「今回ののは、無理矢理なところがあつたな。大丈夫か？」
作者「この俺を誰だと思っている。」

ジェス「スゲー自信。」

かれん「ところで、今出しているキャラは、どれくらいいるの？」
作者「まず、プリキュアからは、かれんだけだろ。仮面ライダーからは、ディケイドの門矢士、ディエンドの海東大樹、クウガの小野寺ユウスケ、仮面ライダーキバの光夏海、Wの左翔太郎、フィリップ、アクセルの照井竜。スパロボからは、アクセル・アルマー、アルフィミィ、フォルカ・アルバーク、吾妻コウタ（ファイターロア……バーナウフアードラグと叫んでる奴）。無限のフロンティアからは、ハーケン、アシエン、神夜、鈴鹿、アレディ・ナアシユ、ネージュ・ハウゼン。無限のフロンティアとナムカブからは、有栖零児、シアオムウ小牟、KOS-MOS。魔法少女リリカルなのはStrikersからは、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエ、シャリオ・フィーニノ、グリフィス・ロウラン、アルト、ルキノ、ヴァイズ・グランセニツク、リインフォース？（ツヴァイ）、アギト。ウルトラマンとスーパー戦隊等からは、まだ出してなくて、オリジナルのレナンジェス・アルマーってところか。」

ジェス「味方キャラだけで40人………」
かれん「敵キャラは？」

作者「今のところ、ジェイル・スカリエッティ、アポロガイストと、予定としては、鳴滝にベリアル、ヤプール、レイブラット星人にするかな？」

ジェス「メインだけでも6人は、少なくね？」
作者「俺の勝手だ。」

ジ・か（何というか。個人的な怒り込み。）
作者「ま、それは置いといて。」

ジ・か（（置いといた！！））

作者「次回第12話管理局の闇とガイアメモリ／誕生タイムセイバ
ーズ。」

マサキ「時を駆け抜けるぜ、サイバスター！！」
ジェス「いや、駆け抜けねえから。」

電王ナレーション「時の列車デンライナー。次の駅は、過去か未来
か。」

ジェス「電王ナレーションが流れたら……この台詞かな？」

作者「最初に言っておく、胸の顔は、飾りだ。」

ジェス「邪魔すんなよ。最初に言っておく、俺は、かなり強い。」

第12話 管理局の闇とガイアメモリ/誕生タイムセイバーズ（前書き）

お互いの自己紹介とガイアメモリの種類、そしてディケイドの新たな力『デバイスライドカード』についての話になり、唐突にタイムセイバーズの結成へと、こじつけました。……………鳴滝とスカリエッティ出番少ないです。

第12話 管理局の闇とガイアメモリ/誕生タイムセイバーズ

アインスト等を迎撃したアクセル達は、機動六課にて今後の事について話し合っていた。

「まずは、自己紹介からやね。うちは、八神はやてやよろしくな。」

「

「私は、高町なのはです。よろしくね。」

「私は、フェイト・T・ハラオウンです。よろしく。」

「次は、俺達か……俺は、アクセル・アルマー。」

「アルフィミイですよ。」

「俺は、フォルカ・アルバークだ。」

「俺は、ハーケン・ブラウニング。しがないバウンティーハンター。」

「さ。」

「その部下、アシエン・ブレイデルだ。」

「南舞神夜です。よろしくお願いします。」

「鈴鹿である。」

「俺は、森羅のエージェント、有栖零児だ。」

「わしは、小牟じゃ。」「私は、KOS-MOSです。」

「俺は、吾妻コウタだ。それから、今は、見えねえが近くにロアがいる。」

「俺は、アレディ・ナアシユです。」

「私は、ネージュ・ハウゼンよ。」

お互いに自己紹介を終えて、双方の情報交換をしたり、質量兵器等をどうするか、話していた時に、デバイスルームから連絡が入った。

『はやて部隊長。』

「どないしたん？ シャーリー。」

『実は、左さんとフィリップさんに言って、ガイアメモリを分析したんですが、ロストログアと同等の反応がありました。』

「なつ、なんやて！」

「まっ、当然だな。」

「ジエスカ……」

「ガイアメモリは、言わば地球の記憶を封じ込めたメモリだ。…俺のこいつが、例になる。」

—TIGER—

「こいつは、タイガーメモリだ。翔太郎とフィリップが持つてるのは、サイクロン、ヒート、ルナ、ジョーカー、メタル、トリガー、フアング、エクストリーム、プリズム。照井のアクセル、エンジン、トリアル。そして、今は、無きスカル。これらのガイアメモリは、純正のガイアメモリで毒素等が無いが、『ミュージアム』が製造していたガイアメモリには、毒素があり使うと力に飲まれるか、下手をすれば、命取りになる。それで、ガイアメモリがロストロギア判定をするのは容易だ。」

『凄い知識。』

「だが、最近になり『T2ガイアメモリ』と言われるメモリが開発されていた。」

「そのメモリも、その『ミュージアム』っていう組織が造ったんか？」

「いや、T2メモリは、……『T2メモリを造り出したのは、財団Xさ。』…フィリップ。」

「そして、T2メモリを使って『街』を泣かそうとしたのが、『NEVER』っていう、戦闘集団だ。」

「翔太郎……。」

「しかも、そのT2メモリは、左達が”あの時”メモリブレイクした。」

「しかも、その時上下3色のライダーに会った。あれは、興味深いゾクゾクするよ。」

「フィリップ……検索は、今は止めとけ。」

「済まない。翔太郎。」（検索バカ？）↑その場の翔太郎、照

沈黙が続くその時に……………

「なるほどな、魔法が使える世界って、わけか。」

「士……………この世界で出てきたカードは、何種類なんだ。」

「まあ、ざつと十枚以上出てきた。しかも、ほとんどがATTA CKRIDEのカードだ。」

と言い、数十枚のカードを出した。どれも絵柄がぼんやりとしていたが、その絵の輪郭は、なのは達のデバイスに似た物やライダーの顔、そのライダーのFINALFORMRIDEとFINALATTACKRIDEのカードだった。

「……………」デバイスライドカード」か……………」

『デバイスライドカード？』

「何だ、そのデバイスライドカードってのは。」

「その名の通り魔導師、この世界で言えば管理局員のほとんどが所持している魔法を使う為の杖もしくは、武器のことだ。」

「なるほど……………だいたいわかった。」

「それにしても、何で管理局がスカリエッティなんかを……………」

「さあな、だが、管理局には、お前等の知らない闇の部分が存在する。……………これからは、機動六課、仮面ライダーズ、スーパードット等を中心とした”時の刃”『タイムセイバーズ』として、活動する。」

とジェスが、宣言したが、はやてが……………」

「それは、ええけど誰が隊長をするん？」

「隊長は、八神はやて、副隊長は、俺の兄貴のアクセル・アルマー、それと、スターズ、ライトニング分隊は、六課と同じメンバーでライダーズのリーダーは、翔太郎……………頼めるか？」

「ああ。いいぜ。」

こうして、『機動六課』は、『タイムセイバーズ』へとその名を変えた。

これがタイムセイバーズの誕生だ。

第12話 管理局の闇とガイアメモリ／誕生タイムセイバーズ（後書き）

ジェス「妙な結成の仕方だな。」

作者「別にいいだろ。」

ジェス「まあ、置いといて……次回は……」

士「待て、次回予告は、早過ぎるぞ。」

ジェス「こんな所にも通りすがりやがった。」

作者「実は、新しいライダーや、戦隊ヒーローもそろそろだそうか、と考えていて士の意見が欲しくてな。」

フィリップ「僕もいるよ。」

作者「で、士、フィリップ何がいい？」

士「俺は、『侍戦隊シンケンジャー』^{オース}だな。」

フィリップ「僕は、『仮面ライダー〇〇〇かな。』」

作者「いい意見をありがとう。」

ジェス「次回予告 第13話 外道の怪人とメダルの怪人／六色の侍とメダルの戦士」

???「いくぞ!! 一筆奏上!!」

???「一貫献上!!」

???「変身!!」

《タカ・トラ・バツタ》 ↑ ちとネタバレ

第13話 外道の怪人とメダルの怪人／六色の侍とメダルの戦士（前書き）

戦闘は、次回持ち越しです。……オーズのメダルとWの使うメ
モリにオリジナルのメダルとメモリをだそうと、考えてます。

第13話 外道の怪人とメダルの怪人／六色の侍とメダルの戦士

タイムセイバーズが結成されて、2週間……………

「なんか、一気に進んでない？」

「気にするな。それよりも、早く始めるぞ。」

「あつ、ちよつと待ってて。模擬戦の会場の準備をしなくちゃ。」

今回は、タイムセイバーズが結成して初めての模擬戦である。

『スターズ&ライトニング分隊とかれんさんとコウタ君にフォルカさんは、準備ええか？』

「いつでもいいよ。」

「同じく。」

「……いつでも大丈夫です。」

「私もいいわ。」

「俺もいいぜ。」

「俺もだ。」

『ジエスさん達は、大丈夫なん？』

「ああ。」

「いくぜ。フィリップ、照井。」

「ああ。」

「いいだろう。」

「いくぞ。ユウスケ、夏海、海東。」

「分かりました。」

「いいだろう。士。」

「ああ。（でも、人数的に、こっちが不利。）」

『アクセルさんらは、どないしたん?』

「質量兵器わんさか有るから今回は、外れてるよ。今頃、自分の機体の整備か、自己鍛練してるんだろ。」

模擬戦のチームを説明しよう。

まず、スターズ&ライトニング分隊側は、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、エリオ・モンドリアル、キャロル・ルシエ、水無月かれん、吾妻コウタ、フォルカ・アルバーク。

ライダーズは、レナンジエス・アルマー、左翔太郎、フィリップ、照井竜、門矢士、光夏海、小野寺ユウスケ、海東大樹。

小野寺ユウスケの思った通り人数的には、ライダーズの方が不利だが……………

「小野寺君、忘れてもらっては困るな。僕が、ライダーを召喚出来る事を。」

「ちなみに、俺もだ。」そう、ライダーズには、他のライダー等を召喚する事が出来るライダーがいるのだ。

「人数的にこっちが有利だから、一気に片付けそうだねティア。」しかし、……………

「甘く見ない方がいいわよスバル。……………特に兄……………『ジェス』さんは。」

「あれ、何で言い直したの。」

「なっ、何でもないわよ。（言える訳無いわよ。あんたの前で兄さんなんて。）」

（俺にはだだもれ何だけど、ティア。）

その頃……時空管理局のアイスラ艦長のクロノ・ハラウン（リ
リなのファンの間では、『KY執務官』と、呼ばれている。）は、
第97管理外世界「地球」で変化が起きてるのを発見した。

（この反応は、一体？）

機動六課模擬戦場にて

「いくよ！みんな。」

『ハイッ！／ああっ！／ええ！』

『セー！』

「バーナウ・レジー・バトー」

「プリキュア！」

「こっちも、やるぞ。」 『ああっ！』

— K A M E N R I D E —

— C Y C L O N E —

— J O K E R —

— A C C E L —

『変…』

『アッ……』

『し……』

『ストップや、みんな。』

「どうしたの？はやてちゃん。」

『今な、クロノ君から連絡があつて、地球の方で変化が現れたらしいんよ。』

「どこなの？はやてちゃん。」

『地球の日本、東京都と風都や。』

「風都だつて！？」

「翔太郎！！」

「ああつー！！いくぜフィリップ、照井。」

「だが左、どうやって風都まで行くんだ。」

「それは……………」

「この時は、海東が適任だろ。」

「そうだね。じゃあいこうか？」

そう海東が言った時、翔太郎達と士達を灰色のカーテンで風都と東京都に送った。

「私達は、どうするなの？」

「追うよ。フェイトちゃん。」

「そんじゃ、二手に分かれるか。」

「うん。」

このジェスの一声で二手に分かれた。

風都には、フェイト、エリオ、キャロ&フリード、かれん、シグナム、コウタ、フォルカ、それにハーケン、神夜、鈴鹿、アシエンのグループ。

東京には、なのは、スバル、ティアナ、ヴィータ、ジェス、アクセル、アルフィミイ、アレディ、ネージュ、森羅のエージェント二人、KOS-MOSのグループ。

「どこに転送する？」

「風都は、風都タワー。東京は、東京タワーでいい。位置は、俺と兄貴が知ってるから。俺の転移手段を使う方が良いだろう。」

「お願い。ジエス君。」 「じゃあ、いくぜ。」

そう言いつと、一枚のカードを取り出した。

—ATTACKRIDE TEREPORT—

そのカードは、《テレポート》のアタックライドカード。その効果は、使用者の想った所に転移させるカードだ。

風都SIDE

風都に転移したフェイト達、ライティンググループは……………

「風車がたくさんある。」

「本当……………でも何で？」

エリオとキャロがそう言つと……………

「それがこの街の特徴だ。」

『左さん（翔太郎さん）。』

「やっぱ、追ってきちまったか。」

「左、何故この街に？」 シグナムが聞く……………

「この街は、俺の庭だ。誰かが困っていたり、泣いていたりしてるのは、好きじゃないからな。」

「左……………」

「翔太郎……………」

《この街は、絶対を守るつ、シグナム。》

《ああ。テストロッサ。》

その時、フェイト達の前に怪人が2体現れた。一体は、カマキリのような怪人、もう一体は……

「こんな、ところで会えましたか。」

「お前は、誰だ！」

「私は、ダミードーパントと同じような力を持つミラードーパントです。隣にいるのは、”グリード”と呼ばれる者です。」

「ドーパントと別の怪人か………」

「左!!」

「照井………いくぜ。」 「ああ!!」

—ACCET—

「フリリップ!!」

『ああ、翔太郎!!』

—CYCLONE—

—JOKER—

「『変身』」

「変……身」

—CYCLONEJOKER—

—ACCET—

「『さあ、お前の罪を数えろ!!』」

「さあ、振り切るぜ。」

「私達もいくよ。」

『ハイツ!!』

『セット………アップ!!』

「プリキュアメタモルフォーゼ!!」

「バーナウ・レジュー・バト………ファイターロア!!」

「準備は、いいかい?レディーズ。」

「完了です。艦長。」

「いつでも良いですよ。ハーケンさん。」

「来るがよい邪鬼眼王。」
「するとそこに……………」
「いたぜ”エイジ”。」
「ありがとう”アंक”。」
「なーに、いいって。」 この二人は、何者なのか？

東京SIDE

一方、東京都に転移したのは達は、早速、敵に遭遇していた。
「あれは……………」
「なんですか？」
スバルとティアナが言った。そこに……………
「あいつらは、”外道衆”っていう、奴らだ。」
『士さん！！』
「行くのか？士。」
「ああ。俺だけじゃないがな。」
『えっ！？』
「士っ！」
「士君！」
「士。」
「遅いぞ、ユウスケ、ナツミカン、海東。」
「しょうがないだろ、士。」
「あいつらは？」
「もうすぐさ。」
（あいつら？）
その時……………
「そこまでだ。外道衆。」
「誰なの？」

「彼らは……………」

「いくぞ！」

『ハッ！／ハイツ／ああ！』

「シヨドーフォン！」

「スシチェンジャー！」 『一筆奏上！！』

『一貫献上！！』

『ハッ！！』

「えっ！？」

「変身……………」

「した？…」

そう彼らは……………

「シンケンレッド・志葉丈留。」

「同じくブルー・池波流ノ介。」

「同じくピンク・白石栞子。」

「同じくグリーン・谷千秋。」

「同じくイエロー・花織ことは。」

「同じくゴールド・梅盛源太。」

「天下御免の侍戦隊、…………シンケンジャー！！……………参る！！！」

シンケンジャー…………それは、三途の河から現れる怪物”外道衆”と闘うスーパー戦隊だ。

「俺達もいくぞ。」

『ああ！／了解！』

— K A M E N R I D E —

『変身！！』

— B L U E D E C A D E —

— D E C A D E —

— D E ・ E N D —

— R E D ・ D E ・ E N D —

『セー！ト…………アップ！』

「行くぜ、殿様。」

「ああ……。」

風都SIDE

再び風都では………今、W、アクセル、ファイターロア、フォルカ、フロンティアズ、ライトニング分隊とミラードーパント、カマキリの姿のグリードとの闘いが始まろうとしていた。そこに………

「ちょっと待ってください、フェイトさん、あそこに人が………」

「あいつ………どこかで………」

「君達、カマキリの怪人は、僕に任せて。」

『君は、一体………』

「僕は、こういう者さ。」

すると、おもむろにベルトを装着し、3枚のメダルをセットした。

「変身……！」

《タカ・トラ・バッタ》

《タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！》

「あいつ………」

『仮面ライダー………000（オーズ）』

「あの怪人は、体全体がセルメダルで構成されているから、気を付けてね。」

『あつ………ハイッ。』

今、風都と東京で二大チームの闘いが始まった。

第13話 外道の怪人とメダル of 怪人 / 六色の侍とメダル of 戦士 (後書き)

ジェス「兄貴……いつディエンドライバーを……」

アクセル「さあな。」

作者「ブルーディケイドとレッドディエンドには、ディケイド、ディエンドにはないカードがあるからな。」

ジェス「マジッ……!!」

アクセル「次回第14話 メモリとメダル of 共闘 / 侍と通りすがりの共闘」

大河長官「これが勝利の鍵ダアツ。」

ジェス & amp; アクセル「関係ねえーだろ……!!」

第14話 メダルとメモリの共闘／侍と通りすがりの共闘 前編（前書き）

……… またもや前後編になってしまった。 …… 次回は、誰
をだそう………？

第14話 メダルとメモリの共闘／侍と通りすがりの共闘 前編

風都SIDE

風都ではW、アクセル、オーズ、ライトニング分隊、フロンティアズ、フォルカ、ファイターロア対ミラードーパントとカマキリ型のグリードの戦闘が開始された。

まず、ミラードーパント対W、アクセル&ライトニング分隊の戦闘だ。

「いくぜ！」

『翔太郎、このメモリを試してみよう。』

—RAND—

—RANDJOKER—

「色が……」

「変わった……」

「でもジェスさんのとは、違いますね。」

『ランド……地と言ったところかな。』

「つまり、”サイクロンジョーカー”が”疾風の切り札”なら、さしずめこの形態は、”地の切り札”ってところか。」

「姿が変化したところで、この私に勝てるとお思いかい？笑わせる。ハッ！」

ミラードーパントは、自身の鏡からビームをWとフェイトに向けて照射した。

「なんだ、攻撃のつもりか？」

『違う、これは……』

「なっ何なの。」

「貴様等に相応しい相手を出してやる。」

ミラードーパントは、次にWとフェイトの前に鏡を出して、そこから二人の人物を出現させた。その二人とは……

『なっ!!』

「おやつさん……」

「お義兄ちゃん……」

なんと！今は、亡き左翔太郎の師、鳴海宗吉とフェイトの義理の兄クロノ・ハラウンではないか。

「これが私の能力、ビームを当てた者の心の奥にある、大切な人を出現させるのが私の力です。」

『じゃあ、さっきのは、翔太郎とフェイトちゃんの心をスキャンしたというのか。』

「そういうことさ。……さあ、やつちまいな。」

――SUKLE――

「変身……」

「セットアップ」

「さあ、お前の罪を数えろ。」

仮面ライダースカルは、Wに……クロノは、フェイトに向かって行った。

「待ってくれ、おやつさん!!」

「お義兄ちゃん……」

「フェイトさん!!」

カマキリ型グリッド対オーズ、ロア、フォルカ、キュアアクアは

……

「俺のコアメダルをよこせ。」

「ごめん、それは出来ないんだよね。」

「コアメダルって何？」 「僕が変身の時に使ってるのがコアメダルさ。」

「そうなんですか。」

「いいから、いくぜ!!」

『ハイツ！／アアッ！』

東京SIDE

東京では、シンケンジャー、ディケイド、ディエンド、クウガ、Rキバール、ブルーディケイド、レッドディエンド、アルフィミイ、零児、小牟、KOS-MOS、アレディ、ネージュが外道衆との戦闘に突入した。

『シンケンマル』

「サカナマル」

「こいつでいくか。」

—KAMENRIDEFALIZ—

「んじゃ、俺はこれだ。」

—KAMENRIDEDEN-O—

「俺、参上！！」

「じゃあ、僕はこれかな。」

—KAMENRIDESASWORD—

「いつてらつしゃい。」

「俺は、こいつだ。」

—METALHEROSRIDEGYABAN・SYARIBAN・SYAIDAR—

「行けっ！！」

「蒸着！！」

「赤射！！」

「焼結！！」

「宇宙刑事ギャバン！！」

「宇宙刑事シャリバン！！」

「宇宙刑事シャイダー！！」

「って宇宙刑事かよっ!」

「わるいか?」

「別に、わるかねえけどよ。」

そうこうしている間にナナシ連中が突撃してきた。しかし……

……

FINAL ATTACKRIDE DE・DE・DE・DEN・

O

FINAL ATTACKRIDE DE・DE・DE・DEEN

D

FINAL ATTACKRIDE FA・FA・FA・FAIZ

ATTACKRIDE CROSS ATTACK

「レーザーブレード!!」

「ギャバン……」

「シャリバン……」

「シャイダー……」

「ダイナミック!!」

「クラッシュ!!」

「ブルーフラッシュ!!」

「ハッ!!」

『シンケンマル・五連斬!!』

「サカナマル!!百枚おろし!!」

ものの、数十秒で全滅。そこへ、何者かの攻撃がとんできた。

「くっ……」

「今のは、誰だ。」

何とか無事だが、全員ぎりぎりですわっていた。すると攻撃を放った者がシンケンジャーや仮面ライダー達に近づいて来た。

???「今の攻撃で倒れなかったとはな。」

「誰だ!テメエ。」

「私は、『凍鏡のゲルタ』。」

「なにっ、ゲルタだと。」

「アレディ……。」

「大丈夫です。ネージュ姫殿。」

「アレディ……闘るぞ……！」

「わかっています。零児殿。」

「今回は、ほんのあいさつだ……今度あった時は本気で潰す。」

そう言くと、ゲルタは、灰色のカーテンを潜って行った。

「逃がしたか。」

（何で、灰色のカーテンを……）

東京での異変はシンケンジャー達の活躍でことなきを得た。

「ジェス君……！」

「どうした？高町。」

「フェイトちゃんと念話が繋がらないの……何かあったのかな？」

「わかった。此処にいるメンバーで風都に向かう。いいな……！」

『ああ！／ハイツ……！』――ATTACK RIDE TERPORA――

――

風都SIDE

風都ではWとフェイトが、ミラードーパーントの出した仮面ライダー
スカルとクロノに攻撃出来ないでいた。

「止めてくれ。おやっさん……！」

「お義兄ちゃん！やめて。」

「ハッ……！」

「ウワァ……！」

「キャ……！」

Wとフェイトは二人の攻撃で吹き飛ばされた。

「クッ……………」

「うう……………」

ミラードーパントの創り出したスカルとクロノは、二人に近づいていく。……………その時。

——バキューン×6——

「えっ!？」

「一体誰が？」

??? 「そんな偽物に何手間どってるんだ。翔太郎？」

「『!—!—』」

「誰？」

「俺は、仮面ライダースカル。……………さあ、お前の罪を数えろ。」

スカルは、Wと同じ決め台詞を静かに言った。

「おやっさん……………」

『鳴海宗吉……………』

スカルは、ミラードーパントの創り出したスカルとクロノに向かって行った。

「おやっさん……………フィリップ、本物のおやっさんに言われたらやるしかねえよな。」

『そうだね……………僕達の本気……………あのドーパントに見せなきゃね。』

『

《クワァー》

『ファング?』

《クルウー》

「エクストリームメモリ……………フィリップ試してみようぜ。」

『そうだね。』

すると、エクストリームメモリは、ファングメモリをその身に入れ、鳴海探偵事務所に居るフィリップを収容し、Wの本へ飛んできた。そして……………エクストリームメモリとダブルドライバーがひとつとなったと同時に……………

—FANG JOKER XTREME—

Wは、ソウルサイドのカラーがサイクロンの緑からファングの白へと変わり、腕や肩等に牙を表しているWFJXへとメモリチェンジを遂げている。

「おやつさん、こっからは……」『僕達も共に闘うよ。』

「だったら付いて来い。翔太郎、フィリップ。」

「アアッ!!」

一方、オーズは………

「何とか……勝てた。」「にしても、………何で上下三色なんだよ。」

（問題点そこなの？）

と、その時黒き水流がオーズ達を襲った。

「……ウワァー……」（今は………でもそんなはずない。）

オーズ達を襲った水流を放った者の正体とは？………Wとフェイ

トは、ミラードーパントに勝てるのか？

第14話 メダルとメモリの共闘／侍と通りすがりの共闘 前編（後書き）

今回は、違うバージョンです。

イメージ曲《ELEMENT》

「あつ、貴女は……」

「ダークキュアアクア……久しぶりねえキュアアクア……。」

「鏡の奴には、こいつだ！」

「一気にトドメだ……！」

—FANGXTREMEMAXIMUMDRIVE—

—SKULLMAXIMUMDRIVE—

—FINALATTACKRIDE……—ACCELMAXIMUM
UMDRIVE—

次回 第15話 メダルとメモリの共闘／侍と通りすがりの共闘
後編

これで、決まりだ。

主人公設定2＋その他（前書き）

第15話に入る前にジエスやアクセル等が変身する仮面ライダー等の紹介をします。

主人公設定2＋その他

主人公『レナンジエス・アルマー』が変身できるライダー等を紹介します。

ジェス「今更だな。」

作者「ほつとけ。」

仮面ライダーW

ジェスが一人で（相性がよければ相棒と）変身できる仮面ライダー。翔太郎と違い、『地球の本棚』に自由にアクセス可能で一人でWになれる最大の能力。

仮面ライダータイガー

ジェスがロストドライバーとタイガーマemoryで変身する仮面ライダー。『

姿は、『龍騎』に出た仮面ライダータイガに似ているが、タイガと違い必殺技の時にだけ爪が装着される。属性は、氷。

ウルトラマンメビウス

ジェスが変身するウルトラマン。

ヒビノ・ミライのメビウスと違い、メビウス・バーニングブレイブではなく、メビウス・ライトニングブレイブになる。

必殺技は、左腕に雷を帯電させ相手に放つ『メビウムライトニング』。

仮面ライダーレッドディエンド

アクセル・アルマーが変身する仮面ライダー。

海東のディエンドと違い仮面ライダーだけではなくメタルヒーロ

ーやスーパー戦隊等を召喚できる。

仮面ライダーJ ランドジョーカー

翔太郎とフィリップが変身できる仮面ライダー。

Wのサイクロンメモリをランドメモリに変えたフォーム。サイクロンの速さの代わりにランドの土等の物体を別の物体に変換できる能力を持つ。

仮面ライダーW FJX ファンクジョーカーエクストリーム

翔太郎とフィリップの変身する仮面ライダーWのCJXを上回る サイクロンジョーカーエクストリーム
戦闘力を秘めるフォームその力は、謎に包まれている。

主人公設定2＋その他（後書き）

ジェス「何で、最初に全部書かねえんだ。」

作者「最初に書いたら、楽しみがへるだろ。」

ジェス「そういう問題じゃねえだろ。」

かれん「このままでは、キリが無いので第15話をお楽しみに、ね。」

第15話 メダルとメモリの共闘／侍と通りすがりの共闘 後編（訂正版）

風都では、ドーパントとライダーの闘いが続いていた。

W、フェイト、スカル、エリオ、キャロ、シグナムは、ミラード
ーパントとミラーズカル、ミラークロノと闘っていた。

「ハッ！」

「……………」

Wとスカルは、的確に相手にダメージを与えていくが……………」

「くっ……………」

フェイトは、防戦一方になっていた。

（やっぱり、攻撃できない。敵が出したとはいえ、お義兄ちゃん
を攻撃したくない。）

「「フェイトさんっ！！」」

「テストロッサっ！！」（ごめん。なのは、お義兄ちゃん……………」

大好きだよ。）

その時……………」

「アクセルシューター！」

「えっ！？」

「フェイトちゃん！大丈夫？」

「なのは？」

「そうだよフェイトちゃん。」

「でも、どうして？……………」なのは、東京にいたんじゃない？」

「ジエス君に送ってもらったんだ。」

「ジエスに？……………」

「うん……………／／／」

一方、アクア達の方は……

「どうして？ 貴女が……」 「久しぶりねえ、キュアアクア……今度こそ倒す……！」

その時……！

「プリキュア・ファイアーストライク……！」

「ダークサファイア・アロー……！」

「くっ……誰だ……！」

上空からいくつもの光が舞い降りた。それは……

「光の使者キュアブラック……！」

「光の使者キュアホワイト……！」

「輝く生命シャイニールミナス……！」

「輝く金の花キュアブルーム……！」

「煌めく銀の翼キュアイーグレット……！」

「大いなる希望の力キュアドリーム……！」

「情熱の赤い炎キュアルージュ……！」

「はじけるレモンの香りキュアレモネード……！」

「安らぎの緑の大地キュアミント……！」

「青い薔薇は秘密の印しミルキィローズ……！」

「ピンクのハートは愛ある印しもぎたてフレッシュキュアピーチ

……！」

「ブルーのハートは勇気の印しつみたてフレッシュキュアベリー

……！」

「イエローハートは祈りの印し採れたてフレッシュキュアパイ

……！」

「真っ赤なハートは幸せの証熟れたてフレッシュキュアパッション……！」

……！」

「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム……！」

「海風に揺れる一輪の花キュアマリン……！」

「日の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン！」

「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト！！」

『プリキュアオールスターズ！！』

「みんなっ！」

「大丈夫？アクア。」

「ええっ。」

なんと！！アクアの危機を救ったのはプリキュア達だった。

「彼女達だけじゃないわよ。」

「えっ？」

なんと以前敵だった者達もいた。

「私は、霧生満。こっちは、薫。」

「ダークファイブズも忘れないでよ。」

「俺は隼人。」

「僕は、瞬。」

「僕は、キリヤよろしく。」

「くっ……邪魔するなあー。」

『っ！………』

「ライジングシールド！！」

「何っ！！」

そこには、プリキュア達を守る『黄色のボディーに黒と金、赤、青のラインを持つ龍の力を秘めた戦士』がいた。

「貴様っ誰だ！」

「俺か？俺は、天を翔ける黄色い雷鳴……雷の龍騎士ドラゴンソ
ルジャーライジング！！推参！！」

『ライジングー！！』

「大丈夫か？プリキュア。」

『ええっ！！』

プリキュアとドラゴンソルジャーは、双方をともに知っていた。

「ええい……邪魔だ！！」

ダークアクア（敵）は、さっきとは違う『赤い光線』を放った。

（さっきとは全く違う！）

「くっ……プリキュア・エメラルドソーサー!!」

しかし……

・ピシッ・

「えっ？」

・パリーン・

なんと！たった一発の光線にミントのエメラルドソーサーが破られたのだ。

「そっそんな……。」

（仕方ない。）

「ハア……。」

（エクリプスブレード!!）

「デュワ!!」

ドラゴンソルジャーは、ウルトラマンコスモス・エクリプスモードの技『エクリプスブレード』をダークアクア（敵）に放った。

「ぐっ……このくらい……ぐあっ……」

突然苦しみだしたダークアクア。

「どうしたの？」

「黙って見てろ。」

『……………』

プリキュア達は、黙って様子を見ていた。

「ぐっ……これは……（助けてジェス……）……ぐあっ!!」

ジェスは、さっきの助けの声に頷いた。

「ハア……デュー……!!」

ドラゴンソルジャーは、コスモス・エクリプスの技『コスミューム光線』をダークアクアに放った。

「ぐっ?……これは?!」

すると、ダークアクアの体から光輝く粒子が出てきて、ダークアクアは、少女の姿に変わった。

（居るな……シャドー。）

（ハッ。）

（この子を機動六課まで連れていけ。転移はこちらで行う。）

（御意。）

ジェスは、シャドーに少女を任せミッドに転移させた。

一方……W達の方では……

「くっ……この私が造り出したコピーが……」

「さあ……観念するんだな。」

オーズ達の方で一問答あった時にW達は、ミラースカルとミラークロノを倒し、ミラードーパントを追い詰めていた。

「くっ……」

『翔太郎、メモリブレイク行くよ。』

「ああ。行かせフィリップ、おやっさんも。」

- EXTREMEMAXIMUMDRIVE - 「ああ……。」

- SKULLMAXIMUMDRIVE -

「照井っ!!」

「ああっ!」

- ACCELMAXIMUMDRIVE -

「俺達も行くか。」

「そうだね士。」

「よし!!」

「俺達もやるぞ!」

『ハッ/オツケー/ハイツ/良いわ丈留/オツケー、タケちゃん。』

『

- FINALATTACKRIDE -

- DE・DE・DE・DECADE -

- DI・DI・DI・DIEND -

「ハアー……………」

「烈火大斬刀・砲筒モード!!」

W達に続きディケイド達も必殺技の準備をしていた。
その時!!!

・スパロボ敵増援曲・

「ちつ、こんな時に!!」

転移してきたのは、アインストシリーズだった（フロンティアバ
ージョン）。

「コール!!ゲシュペンスト!!!」

「ん？」

「アインストは、俺達に任せな。……………さあ、イツツショウタイ
ム!!」

ハーケン達はアインストを倒して行く。

「よしっ!……………行くぜ!!」

「『ダブル・ファングエクストリーム!!』」

「スカル・パニッシャー!!」

「アクセル・グランツァー!!」

「デイメンジョンキック!!」

「ブルーストライク!!」

「オリヤー!!」

「兜・六連弾!!」

W達は、ミラードーパントに必殺技を放った。

・ガシャン・

『メモリブレイク完了だね。翔太郎。』

「ああ。」

だが!!……………

「ぐっ……………まだだ、まだ殺られねえよ。」

『!!!?』

なんと!!メモリブレイクされたにもかかわらずミラードーパン
トになっていた者がいたのだ。しかし、その姿は、ウルトラマンレ

オ、ウルトラマンメビウスに出てきていたババルウ星人だった。

（ちつ、こんな奴が居たのか？）

その時！！

????「ゼロスピッキュー！！」

「ぐあっ！？」

ババルウ星人が何者かの攻撃でぶっ飛んだ。

「なんだ？てめえ。」

「俺は、ゼロ、ウルトラマンゼロ。セブンの息子だ。ババルウ、

お前はもうこれまでだぜ。」

「なにいゝ？……そんなのでめえに判るわけ……「メビウムライトニングブラスト！！」……てっぎやー！！??」

ババルウは、台詞の途中でジェスの変身したメビウスライトニングブレイブの必殺技『メビウムライトニングブラスト』よって倒された。

「お前は？」

ジェスは、メビウスからドラゴンソルジャーライジングに、さらにソルジャーの変身も解き目の前に居るゼロに質問した。

「俺は、ウルトラマンゼロ、セブンの息子だ。だけど……」

そう言つと、ゼロは人間に変わり……

「此処じゃ、諸星零矢と呼んでくれ。あんたがこの世界でのメビウスか？」

「ああ、メビウスだけじゃ無いがな。……で、何の用だ。」

「あんたの居る部隊に俺も入れてくれ。師匠や親父から地球に行き修行を積み俺自身も強くなれって言われちまってな。」

「わかった。俺達の部隊タイムセイバーズは、人手が足りなくな。歓迎するよ。」

「サンキュー！」

こうして、風都、東京での戦闘は、終了し、ジェス達は、新たに、シンケンジャー、仮面ライダーオーズ、プリキュアオールスターズ、そしてウルトラマンゼロこと諸星零矢をタイムセイバーズとして迎

えミッドの機動六課隊舎前に転移した。

第16話 風と氷雪の二人の戦士（前書き）

これまでの魔法少女リリカルなのはs t s & a m p ;スーパーヒーローは……………

「此处は……………」
ミッドに転移してしまったジエス。

「変身！」
- K A M E N R I D E B L U E D E C A D E -

「メビウス!!」

「俺は、通りすがりの仮面ライダーだ。」
世界を渡る”世界の破壊者” デイクイド

「俺達は、二人で一人の仮面ライダーだ。」
二人で一人の仮面ライダーW

「侍戦隊シンケンジャー!!! 参る!!」
外道衆と闘うシンケンジャー

「変身ー!!」

《タカ・トラ・バツタ……………タ・ト・バ…タトバ…タ・ト・バ》
三枚のメダルで変身するオーズ

「俺は、ゼロ。ウルトラマンゼロ。セブンの息子だ。」

そして、ウルトラセブンの息子、ウルトラマンゼロ。との出会い。

『ふたりはプリキュア!』(MAX Heart組+Splash
Star組)

『YES!プリキュア5!』

『レッツ!!プリキュア!』

『ハートキャッチプリキュア!』

プリキュア達と再会するジェス。

世界の守護者ブルーデイクイド……………その瞳は何を写し、何を護
る。

OP「All right ハートキャッチプリキュア!」

挿入歌1「Ride the wind」(仮面ライダーブルー
デイクイド対ホースファンガイア)

挿入歌2「プリキュアモードにSWITCHCON!!」(ハート
キャッチプリキュア+サイクロン&アイス対ホシイナ)

ED「道^{タオ}」

第16話 風と氷雪の二人の戦士

ジェス達が地球から戻って来た時、すぐさまジェスは医務室に駆け込んだ。

「シャマルツ！……さっきの子は？」

ジェスは、若干息を切らし、シャマルに尋ねた。

「大丈夫よ。少し安静にしておけば、じきに良くなるわ。」

「そうか。良かった。」　そう言って、ジェスは少女が寝ているベッドに近づいた。

「寝てるからって、変な事しちゃダメよ。」

「判ってるよ。」

一方、部隊長室では………

「私は、高町なのは。こっちにいるのが、フェイトちゃんとはやてちゃん。」

「そうか。俺は、志葉丈留。」

「私は、池並龍之介だ。」

「俺は、谷千秋。よろしくな。」

「うち、花織ことはです。よろしく。」

「私は、白石栞子。」

「俺は、梅盛源太だ。」　「俺達は、侍戦隊シンケンジャーとして闘っている。士から話は聞いた、俺達も力を貸そう。」

「ありがとうございます。」

「で、そっちの子達は、どうするの？」

フェイトは、のぞみ達に聞いた。

「かれんさんにだけ闘わせる訳にはいかないっしょ。」

「そうね………このところ『砂漠の使途』の襲撃も『スペースギ

ルダー』の襲撃も無いから………良いわ。私達も手伝うわ。」

「よし。皆で一緒にこの世界を護ろう。けってーい！」

シンケンジャーとプリキュア達は、タイムセイバーズとして共に闘う事となった。（仮面ライダーオーズの火野映司とウルトラマンゼロの諸星零矢も同様であった。）

その頃………

グラナガンのとある路地裏

???「はっ、はっ、はっ………。」

???「ええい、待てー！」

???「待てって言われて、待つ奴なんかいないわよ。」

ある少女が何者から逃げていた。

（これを早く『フェニー』に渡さなきゃ。）

???SIDE OUT

（今日は、意識を戻さなかったが、明日あたりでまた見舞いに行こうかな。）

ジェスは、グラナガンの街を歩いていた。

運命の出会いが有るとも知らず。

ジェスSIDE OUT

???（光だー！）

???「逃がすかつー！」

なんとー！追っている者の右目が光り、閃光を放った。

???「きゃーー！」

少女の足元にあたり、少女は、光があるところまでもう少しのところで動きを止められてしまった。

???「もう、逃げられんぞ。」

???? (此処までなの?ごめん。フェニー。)

???? 「死ねえ!」

???? (誰か……………助けて。)

???? SIDE OUT

ジェスSIDE

ジェスは、近くの音と光に反応していた。

(今のは?)

その時!!!

(誰か……………助けて。) 微かな念話で、助けを求める声が聞こえた。

(あの路地裏か!!!)

「間に合え……………瞬転!!!」

ジェスは、瞬転で急ぎ現場へ向かった。

ジェスSIDE OUT

ジェス&?????SIDE

少女に追跡者の攻撃が迫ろうとしていた。

その時!!!……………

- RisingDefenser -

「なにっ?!」

(誰?)

「こんな、女の子を追い掛け回すとは、良い趣味してんな。」

「何者だ!貴様っ!!!」 「ただの通りすがりだ。」 (大丈夫か?)

???? (念話!あなたは?)

(俺は、レナンジエス・アルマー。この世界を護りし者だ。)

（レナンジェス？もしかして、レナン兄様？）

（まさか？氷狐……………なのか？）

（ハイッ？お兄様！！） その少女は、ジェスを兄と慕う氷狐という名の女の子だった。……………ちなみに魔力ランクAA。

（なんでこんな奴に追われてたんだ？）

（実は……………私の手元にこんな物が来たので。ひとつは、私のもうひとつは、『フェニー』の分です。）

（フェニー！？……………まさか！）

ジェス & 氷狐 SIDE OUT

機動六課医務室

（ジェス……………氷……………！！）

なんと！！さっきまで寝ていた少女が目を覚ました。

「ジェスと氷が危ない！」

そう言うと、彼女は医務室内の鏡の前に立ち『デッキ』を取り出した。

「こっちは、あまり使いたく無いけど。」

そして、彼女はデッキを鏡にかざした。

「変身！！」

すると彼女は、原典世界の龍騎には登場しないライダー……………仮面ライダーフェニックスに変身した。

（頼むわ。フェニックスウイング。）

・ケーン・

ジェス & amp; 氷狐 SIDE

「ぐっ！……………良い一撃……………受けちまったな。」

「お兄様っ！！」

「お前だけでも逃げろ、氷狐。あいつは、俺が引き付ける。」

「いやですっ。お兄様！！」

「フッ……………これで終わりだ。ダークタクト……………」

（何っ！？）

（助けて、フェニー。） 「ダークフォルテ…………… - s t r i k e
v e n t - はっ……………ちっ。」

危機一髪、仮面ライダーフェニックスのストライクベントに助けられた、ジェスと氷狐。

「遅いよ。フェニーー！！」

「さっきまで寝てたんだから、仕方ないじゃない。」

今の言葉に、反応したジェスは……………

「寝てたってお前、俺が助けたあの少女か。」

「えっ？あなたが助けてくれたの。ありがとう。私は、フェニー
よ。よろしく。」

「ああ。」

「ところで、ジェスって人知らない？」

「そのジェスは、俺だ。レナンジェス・アルマーそれが俺の名前
だ。」

すると……………

「会いたかった……………」 「えっ？」

「会いたかったよ？。ジェスっ！！」

なんと！！そう言って抱き着いて来た。

「ムッ！ちよつと、フェニーー！お兄様に抱き着かないで。」

「良いじゃない、氷。」 「絶対にダメですわ。」 妙な言

い争いをする二人。と、その時！！！

「隙有りだ。ダークフォルテウェーブ！」

（何っ！！これに似ている技……………何処かで。）

敵の攻撃が当たる瞬間！！

「サンシャイン・イージス！！」

「何っ！！」

なんと！！キュアサンシャインが敵の攻撃を防いだのだ。

「大丈夫ですか？」

『ああ。ノハイッ。』

「サンシャイン！！」

そこに、ブロッサム、マリ、ムーンライトがやってきた。

「もー、ちょっとは、こっちの体力を考えてよね。」

と、マリはサンシャインに言うが……………

「日々の鍛練が足りないんじゃないのか？」

そうマリにツッコミを入れるジェス。

「何ですってー。」

「って、誰ですか？」

なぜか、知らないがドラゴンソルジャーライジングの正体を知っているプリキュアメンバーは、少ないのだ。

「やってくれるな……………プリキュア！」

「しぶとい！」

「いい加減、諦めなさい。『ダークプリキュア』！！」

「黙れ！！キュアムーンライト！！」

その時！氷狐の持っていた物が光輝き、氷狐とフェニックスを包み込んだ。

（何だ？この光りは？） その光りがやんだ時、そこに二人の戦士がいた。

「貴様ら！！」

突如、怒りをあらわにしたダークプリキュア。その理由は……………

……………

「疾風に舞う一輪の花。キュアサイクロン！」

「氷雪に咲きほこる一輪の花。キュアアイス！」

なんと！！光りに包まれた二人がプリキュアに変身したのだ。

「へえー、キュアサイクロンか。私にピッタリね。」

「ふーん。……キュアアイス、悪くは無いですわね。」

「キュアサイクロンに……」

「キュアアイス……」

新しいプリキュアの誕生に驚く四人。

「ちっ……仕方ない……」

するとダークプリキュアはディエンドライダーに似ている物を取り出した。

「相手をしてやれ。」

ムーンライトは、自分の変身前の名前は、まだ言っていないから不思議に思った。

「行くぜ……ファンガイア！！変身！！！」

- K A M E N R A D E B L U E D E C A D E - ジェスは、ブロッサム達の目の前で世界の守護者ブルーディケイドに変身した。ム

ーンライトは、自分の変身前の名前は、まだ言っていないから不思議に思った。

「行くぜ……ファンガイア！！変身！！！」

- K A M E N R I D E B L U E D E C A D E - ジェスは、ブロッサム達の目の前で世界の守護者ブルーディケイドに変身した。

（（（えっ……！！）））

（仮面ライダー……）（（ブルーディケイド））

上から順に、ブロッサム& マリン& サンシャイン、ムーンライト、サイクロン& アイスの心の声

「いや、心の声出しても、聞こえてっから。」（念話と似てるしな。）

「聞こえてたんだ。」

「それより、目の前の敵を！」

「怪人は、俺に任せな。……………ファンガイアには、これだ。」

- K A M E N R I D E K I V A -

ブルーディケイドは、仮面ライダーキバにチェンジした。

「ハッ！」

「私達は、ホシイナーを。」

『ハイッ！！』

B D キバ V S ホースファンガイア

「ハッ！」

「グワッ！！」

「弱ーな、お前。まだ本物の方が強いぜ。」

と、言つて相手を挑発しているが……………

「まあいい。止めだ。」

- F I N A L A T T A C K R I D E K I ・ K I ・ K I ・ K I V A -

すると辺りが夜になり、B D キバが右足を振り上げると同時に…

……………

「よっしゃー！キバって行くぜー！！」

キバの相棒『キバツトバツト？世』が右足の運命の鎖^{カテナ}を解放する。

「ハッ……………」

そのまま、左足だけを使い大きくジャンプした。

「ハアー！！！！」

そして、ホースファンガイアに必殺の『ダークネスムーンプレイ
ク』を放った。

「グアー！！！」

- パリーン -

ファンガイアは、B D キバの必殺技を受けて、ステンドグラスの
様な破片になった。

ハートキャッチプリキュア+サイクロン& a m p ・アイス V S ホ
シイナー

「ホシイナー！」

「何が『ホシイナー』よ、凍りつけ！アイスコフィン！」

キュアアイスは、ホシイナーをアイスコフィンで氷漬けにした。

「あんなに大きいのに、一瞬で……………」

それに驚くサンシャイン。

「さてと。やるわ！」

サイクロンはどこからか、フェニックスバイザーを取り出し……………

- s a v a i v -

サイクロンはサバイブのカードでフェニックスバイザーをフェニックスバイザーツヴァイに変化させた。

- ピシッ…………… -

「ホシイナー！！！」

なんと、ホシイナーが凍りついた状態から、脱出した。

（まずい！！）

「みんな！！サイクロンが必殺技を放つから、足止めしよう。」

『うんっ！！』

ブロッサム達は、アイスと共にホシイナーの足止めに入った。

- f i n a l v e n t -

「ハッ！」

キュアサイクロンは、フェニックスランザーの背中に立ち、フェニックスバイザーツヴァイをソードモードにした。

「みんな！離れてっ！！！」

サイクロンの一言でブロッサム達は、ホシイナーから遠ざかった。

「集え！！花の力よ！！……………プリキュア・フェニックス・フォルテスラッシュュ！！！」

サイクロンのプリキュアの力とフェニックスのライダーの力を融合させた技『フェニックスフォルテスラッシュュ』がホシイナーに直撃した。

「よしっ。」

勝ち誇るマリン。しかし……………

「ホシイナー！」

「えっ」

「そんなんっ?!」

マリンはもちろん必殺技を放ったサイクロンも驚いてる。そこに

.....

「ドラゴン・ライジングアロー!!」

「ホッ.....ホシイナー??」

ドラゴンソルジャーライジングがやってきて、『ドラゴンライジングアロー』を放ち、ホシイナーを倒した。

「助かったわ.....ありがとう。」

お礼を言うムーンライト。

「ああ、んじゃ、六課の隊舎に戻るか。」

「えっ? 六課の隊舎って.....あなた! ひょっとして、『ジェス』.....なの?」

「そうだぜ.....『ゆり』.....。」

なんとキュアムーンライトこと月影ゆりとドラゴンソルジャーライジングことレナンジェス・アルマーは、知り合いだった!! だが!...二人の出会い、また別の話し.....。

その頃.....謎の異空間.....

??? 「ふん。失敗した様だな。ダークプリキュア。」

「黙れ! 次は必ず。」

??? 「ならば、次は、私が行きましょう。」

「貴様!!」

入って来た『男』に敵意をあらわにするダークプリキュア。

??? 「行ってくれるか? 『ロン』よ。」

「ええ。」

その男の名は、『無間龍ロン』かつて、自分の退屈を紛らわす為だけに世界を破壊しようとした幻獣拳使いそれがロンだ。

「ただ、私の場合個人的に復讐したい連中もいるので、それをお忘れなく。ベリアル、それとダークザキ。」

「おいっ！あれでいいのか？」

「今は、様子見だ。鳴滝もふくめてな。」

果たして、ロンとダークプリキュア、ベリアルにザキと鳴滝の關係は？

闘いは、まだ始まったばかりだ。

第16話 風と氷雪の二人の戦士（後書き）

作者「さて、新しいプリキュアが登場しましたが！新しいキャラの紹介も同時に行います。」

ジェス「大丈夫か？」

作者「多分……。」

氷狐↓変身後キュアアイス

年齢：15歳

スリーサイズ：「なーに書こうとしてんのよ、バカ。」

ジェスを兄と慕う少女。何故、兄と慕うのかは不明。雪と氷のプリキュア、キュアアイスに変身する。技は敵を凍りつかせる『アイスコフィン』、単体で放つ必殺技『プリキュアホワイトフォルテウエーブ』、フェニックスと同時に放つ、『ツインフォルテアタック』。

フェニー↓変身するのは、仮面ライダーフェニックス、キュアサイクロン

年齢：16歳

スリーサイズ：「少なくとも氷よりかは上よ。」

別次元のジェス自身、何故か同性に好かれ最低でも必ず一回はレズってる。不死鳥の力を宿した仮面ライダーフェニックスと疾風の

プリキュア・キュアサイクロンになる。

技は、仮面ライダーフェニックスの時は、フェニックスバイザーを使つての剣激とアドベントを使つての戦法が得意。キュアサイクロンの時は、疾風を纏つての『サイクロンアタック』、必殺技は、単体では、『フェニックスフォルテスラッシュ』と『フェニックスフォルテウェーブ』と『レッドフォルテブラスター』。アイスと同時に放つ『ツインフォルテアタック』を得意とする。

ジェス「おいつー!!!」

作者「なんだ？」

ジェス「こういう設定でいいのか？」

作者「良いんだよ。さて次回 第17話 獣拳と炎神拳／大地と海の巨人／怪獣対怪獣使い」

ジャン「オ、なんだかワキワキだあ。」

走輔「俺達もマッハで行くぜ。スピードル」

スピードル「ああ。そうだな、走輔。」

藤宮「我夢、行くぞ。」

我夢「ああ、藤宮。」

我夢「ガイアー!!!」

藤宮「アグルー!!!」

レイ「行けっ！ゴモラっ!!!」

《バトルナイザー・モンスロード!!》

ジェス「大丈夫か？」

作者「レイと我夢達は、一緒に出すから大丈夫。」

第17話 獣拳と炎神拳／大地と海の巨人／怪獣対怪獣使い（前書き）

かなり、長くなった。……スーパー戦隊とウルトラマンを出すから当たり前か……………。

第17話 獣拳と炎神拳／大地と海の巨人／怪獣対怪獣使い

宇宙空間

「このまま地球に向かうぞ。いいな、みんな。」

「もちろんですよ。ねえ、クマさん。」

「オキの言う通りですよ、ボス。副長もそうですよね。」

「当たり前でしょ。レイは？」

「俺も行きたいさ。地球に……故郷に。」

彼達は、ZAPスピーシー所属スペースペンドラゴンの五人のクルーだ。

船長もといボスのヒュウガ、副長のハルナ、整備と攻撃担当の魔法使いことクマさん、オペレーターの怪獣博士オキ、そして、惑星ボリスで行動を共にした、レイオニクスのレイ。彼達は、今…地球に向けてペンドラゴンを進ませた。

同じ頃地球 日本東京都

「パルが言ってた通りだ。地球と別の星を結ぶゲート。」

「我夢。」

「藤宮!!」

「ここか？」

「ああ。」

この二人は、高山我夢と藤宮博也……………二人はウルトラマンガ

イアとウルトラマンアグルとして地球の光を受けた青年だ。彼達は、今、別の惑星に移動できるゲートを発見した。

「このゲートが……………」

「ああ、パルの推測が正しければ、別の星に行ける。」

同じ頃 スクラッチ本社

「なあ〜ネコ〜、なんかねえ〜か？」

「ジャンー！！だらけ過ぎよ。」

「いや、たまの休みだ、別に良いじゃないか。」

「そうそう、レツの言う通りだぜランちゃん。」

「ケンが言うのは判るけど、レツまで……………」

「まっ、少しは、休んでろ、ってことじゃないのか。」

彼達は、獣拳戦隊ゲキレンジャー。臨獣殿の臨獣拳使いとの死闘を繰り広げたスーパー戦隊だ。

「っ！！！！……………この気……………ロン！」

『！！！？』

ジャンは、ロンの気を感じ取った。

同じ頃 ガンマンワールド

「今日は、ガイアークの反応があっただけどウガッツばっかだったな。」

『そうだな。走輔。まあ、それだけ幹部連中の力が強かった、っ

てわけだな。』

ガンマンワールドやほかの世界を護ってる。炎神戦隊ゴーオンジャー彼達は、今日もまた世界を護る為闘い続ける。

同じ頃 異空間

「さて、貴方達をこの世界に招待しましょう。」
すると、ロンは、幻気を使い、時空震を人工的に発生させた。

宇宙

「謎のホールが前方に出現!!」
「振り切れ!!ハルナッ!!」
「駄目です!!操舵不能です!!」
ペンドラゴンは、ホールに吸い込まれ宇宙空間からその姿を消した。ゴーオンジャー、ゲキレンジャーも似たようなホールで姿を消した。我夢と藤宮は、突如ゲートが発動し、パルを乗せたシグファイターEXと共に地球とは違う世界に転移した。

タイムセイバーズ・訓練場

「はいっ。今日の訓練は、ここまで。」

そこでは、高町なのはがスターズ分隊とライティング分隊の訓練をやっていた。

「……ありがとうございます。」

挨拶を返す。両分隊のメンバー。

「今日は、ジェスさんいなかったよね。」

「そうね、スバル。」

と、背後から……

「わっ！！」

「ひいひい……！！！」

と、頭を抱えてうずくまるティアナ。

「わりい、わりい。驚いた？」

「おっ、驚くよ『兄さん』！！（若干涙目）」

なんと、ジェスだった。「あれっ？ねえティア。」

「なっ、何よ。」

すると、スバルはものすごい笑顔で……

「なんで、ジェスさんのこと『兄さん』って、呼んだのかな？」

「あっあんたには、関係無いでしょバカスバル。」

「ひっひどいよ。ティア。」

妙な馬鹿騒ぎに発展した。

「妙な反応？」

はやては、クロノから連絡を受けていた。アクセルも同席している。

『ああ。これが反応の有った地域だ。全部で二箇所、調べてくれるか？』

「わかった。りょうか……」「クロノ、反応の有った地域に他に

何かなかったか？」……………。（言いそびれた。）」

『ああ。こんな、反応値が出たんだか……………管理局の上の方は、動こうともしない。』

「わかった。」

クロノとの通信が終わり、はやてとアクセルは急遽作戦会議を行う事にした。

『謎の反応？』

見事にハモる。

「せや。」

「で、二チームに別れてもらうが、別れる方法はそちらに任せる。」

そして、どうチーム分けをするか話してる時に……………

・ウィーン×3・

「なつ、何や？？」

『八神部隊長！！クラナガン郊外と陸と海で未確認物体出現。映像を回します。』

そこに映ってたのは、臨獣殿のリンシーズ、ガイアークの雑魚ウガッツ、外道衆のナナシ連中、ショッカー戦闘員、マスカレードーパントがクラナガン郊外にミサイル超獣ベロクロン、どくろ怪獣レッドキング、液体怪獣コスモリギッド、怪獣超コップが陸地に津波怪獣シーゴラス、冷凍怪獣レイキュバスが海に出現していた。

「なんや、あれら？」

「ジェス君が初めてこの世界でウルトラマンになった時に出てた怪獣に特徴が似てるし、クラナガン郊外に出てる赤いのは私が東京

でみた怪物だし。」

「外道衆とガイアークか……………行くぞ。」

『ハッ／うん／オツケー／はいっ／よっしゃー。』

「ちよつと待って、行くって？」

「フェイトちゃん、丈瑠さん達は、シンケンジャーだよ。」

「あつ、そうだった……………」

少し天然さんで忘れっぽいフェイト。

「私、天然じゃないよ。」

「誰に向かって言ってるん？」

「ショツカーも居やがるのか。」

「ドーパントもか。」

「海東、移動は頼む。」

「仕方ない、じゃあいくよ。」

シンケンジャー、ディケイド一行、風都ライダーズは、灰色の力

ーテンを潜り現場に行った。

「怪獣はどうする兄貴。」

「そうだな……………」

その時、

『八神部隊長！！現場近くのビルに人が！！』

「なんやとつ？」

シャーリーからの連絡通りビルの屋上に三人の青年がいた。

「助けなきゃっ！」

だが！！

「待てスバル！！もうちよつと、見とけ。」

ジェスが止めたが……………

「見てるなんてできません。スバル・ナカジマこれより、民間人の救出に向かいます。」

スバルが部屋を出て、5分後スバルは、ビルの屋上伝いに現場のビルに到着した。

「ウイングロード……………使ったな。」

「使ったね……………」

「使ったわね……………」

ジェス、なのは、ティアナは同じ様な台詞を言った。

現場付近のビル

「そこの人達！」

『！！』

「此処は、危険です。避難してください。」

しかし……………」

「ありがとう。…………でも君の方こそ逃げるんだ。」

「えっ？」

青年の言った言葉に驚くスバル。

「『我夢』…………俺は、海に出た怪獣を倒す。」

「ああ、…………じゃあ陸に出てるのは、僕と『レイ』でやる。良いね。」

「ああ。だが、『エレキング』は、そっちの援護に回す。いいな、藤宮。」

「行くぞ。藤宮！！」

「ああ、我夢！！」

我夢は、『エスプレンダー』を持ち、左胸にもっていき、藤宮は右手首に付けている『アグレイダー』を自身の前にもっていき、我夢はエスプレンダーを自分の前に、藤宮はアグレイダーを右胸にもっていきながら姿を変える言葉を発した。

「ガイアー！！」

「アグラー！！」

と、叫んだと同時に我夢を赤と青の混じった光、藤宮を青の光が

包み込み次の瞬間には、二人の姿はなく、レイだけがいた。

時間を少し戻しクラナガン郊外

「ウジャウジャいる。しかも、こいつらからロンの気を感じる。」

「それは、本当なのか？ジャン！！」

「ああ。この気はロンの気だ走輔。」

なんと！！それぞれ別の世界から転移されたにもかかわらず、ゲキレンジャーとゴーオンジャーはほぼ同じ場所に転移していた。

その時……………

・ブオーン・

灰色のカーテンが発生し、そこから、シンケンジャーとディケイド一行、風都ライダーズがそこにいた。

「走輔……………」

「丈瑠！！」

「知り合いか？走輔。」

「ああ。バッチードと一緒に倒してくれた。シンケンジャーのレツドだ。」

「へえー！そうなのか！俺、ジャン。漢堂ジャン、トラの子だ。」

「今は、話をしている暇じゃ……………ん？」

・ブルルル……………

「ワーム！！ショッカーが絡んでいるからまさかとは思ってたけど

……………」

「仕方ない……………走輔、美羽を頼む。」

「兄イ！！」

「大翔！！」

すると大翔は、ゴーオンジャーの時では言わない言葉を放った。

「これからだつたと、いうのにお前らのおかげで完全調和が台なしだ。覚悟しろ……。」

すると大翔の元に『ザビーゼクター』が舞い降りた。

「変身!!」

- HEN'SHIN -

「キャストオフ!」

- CAST'OFF -

- CHANGEWASP -

なんと!!大翔はカブトライダーズの一人仮面ライダーザビーに変身した。

『えーっ!!』

ジエスを除く(スバルも除く)全員が驚いた。

「クロックアップ!」

- CLOCKUP -

「フッ!!」

クロックアップ中の動きは、常人では見えず、ワームと同じカブトライダーズでなくては見えない。………唯………ジエスといっ

も凄い速さで空を翔けるフェイトを除いて。

「ライダーステイング」

- RIDERSTING -

「ハアッ!」

- CLOCKOVER -

「ふう。ん?どうした、皆。」

「いや、なんでもない。皆………行くぞ。」

『よっしゃー。(一部を除く男性陣)』

「たぎれ、獣の力!」

「響け!獣の叫び!!」

「研ぎ澄ませ!獣の刃!」

『チェンジソウル・セット!!』
 『ショドーフォン!』
 「スシチェンジャー!」
 ・ヘイ、ラッシャイ・
 『一筆奏上!!』
 「一貫献上!!」
 「『『『ビースト・オン!!』』』」
 『レッツ・ゴーオン!!』
 『ハッ!!』
 『メット・オン!!（ゴーオンジャーのみ）』
 ・KAMENRIDE……・
 ・CYCLONE・
 ・JOKER・
 ・ACCEL・
 ・SKULL・
 『変身!!/変……身!!』
 ・DECADE・
 ・DI・END・
 ・CYCLONEJOKER・
 ・ACCEL・
 ・SKULL・
 ・キュイン、キュイン、キューーイン・
 ・パリーン・
 「身体に漲る無限の力。アンブレイカブル・ボディ、ゲキレッド
 ！」
 「日々是精進、心を磨く。オネスト・ハート、ゲキイエロー!」
 「技が彩る、大輪の花。ファンタスティック・テクニク、ゲキ
 ブルー!」
 「紫激気、俺流我が意を尽くす。アイアン・ウィル、ゲキバイオ
 レッド!」

「才を研いて、己の力を解き放つ。アメイジング・アビリティー、ゲキチョッパー！」

『燃え立つ激気は、正義の証！……獣拳戦隊ゲキレンジャー！！』

「マッハ全開！！ゴーオンレッド！！」

「ずばり正解！！ゴーオンブルー！！」

「スマイル満開！！ゴーオンイエロー！！」

「ドキドキ愉快！！ゴーオングリーン！！」

「ダッシュ豪快！！ゴーオンブラック！！」

「ブレイク限界！！ゴーオンゴールド！！」

「キラキラ世界！！ゴーオンシリバー！！」

『テイクオフ！！……ゴーオンウィングス！！』

『正義のロードを突き進む！……（五人で右回し蹴り）炎神戦隊ゴーオンジャー！！』

「シンケンレッド！……志葉丈瑠……。」

「同じくブルー！池波龍之介。」

「同じくピンク！白石梨子。」

「同じくグリーン！谷千明！」

「同じくイエロー！花織ことは。」

「同じくゴールド！梅盛源太！」

「天下御免の侍戦隊シンケンジャー！！……参る！！」

『俺は、いや俺達は、通りすがりの仮面ライダーだ！』

『さあ、お前達の罪を数えろ！』

「さあ……振り切るぜ！」

今、此処に三大スーパー戦隊と二大仮面ライダーが揃った。この世界を護る為に……。

スバルは、ビルの屋上にいた。

「ねえ、あの二人は？」

「すぐに判るさ。」

「??」

スバルが疑問に思ったと、同時に……陸と海の怪獣の前に赤い巨人と青い巨人が降り立った。

タイムセイバーズ・会議室

「あの二人の巨人は？」 「ジェス君が変身したウルトラマンに似てるよね。」

「後、零矢のにもね。」 上から順にはやて、なのは、フェイトの感想。

「ガイアとアグル……。」

「我夢と藤宮か……。」

「あれも、ウルトラマンなのか……。」

上から順にジェス、アクセル、零矢の感想。

「青い巨人って有りっ?！」

「青が海なら、赤は?」

「赤は……炎じゃないかな?」

これも上からティアナ、エリオ、キャロの順に感想を言っている。

「じゃあ行ってくるよ、兄貴。」

「ああ。」

「零矢!行くぜ。」

「ああっ!!」

二人は会議室を出て機動六課隊舎の屋上に行った。

「俺はコスモリギッドを零矢はベロクロンを相手にしろ。」

「オッケー!!!」

「行くぜっ!!!メビウス!!!」

零矢は、ウルトラゼロアイを取り出した。
「デュワッ!!」

ビルの屋上

「頼むぞ!!」

レイは、そう言つと『ネオバトルナイザー』を取り出して、上空に掲げ……………

「行けっ!!ゴモラ!!、リトラ!!、エレキング!!。」

・バトルナイザー・モンスロード・

レイは、怪獣を操ることができる、怪獣使い。通称レイオニクスなのだ。

「ゴモラは、ガイアの援護、エレキングは、アグルの援護、リトラは俺を乗せて上空で待機だ!」

「グアーー!!」

「キーー!!」

「ケエーン!!」

レイの命令により、それぞれ動く怪獣達。

陸では、ベロクロン、レッドキング、コスモリギッド、超コップ対ガイア、ゴモラの戦闘が始まるうとしていた。そこへ……………

「セアッ!!」

「デュワッ!!」

メビウスとゼロが到着した。

「（君達は？）」（以後、ウルトラマン「メビウスとゼロを除く」が人間の声を発する時、「（）」と表記する。）

「俺達もウルトラマンだ。」

「ガイアは超コップを、ゴモラは、レッドキング、ゼロはさっき言った通りベロクロンを俺は、コスモリギッドをやる。」

「（はい！）」

「ああ！！」

「グアーー！！」

海の方では……………

「（俺がレイキュバスをやる、エレキングは、シーゴラスを頼む。」

）

「キーーー！！」

今、ウルトラ戦士とレイオニクス対怪獣軍団の闘いが始まる。

スーパー戦隊& a m p・仮面ライダーズ対グレートショッカー& a m p・外道衆・ガイアーク・臨獣殿残党

シンケンジャー対外道衆・ナナシ連中

『シンケンマル！』

「サカナマル！」

シンケンジャーは、それぞれ自分のシンケンマルを、シンケンゴルドは、サカナマルを抜き、ナナシ連中に切り掛かる。

「火炎の舞！！」

「水流の舞！！」

「木枯らしの舞！！」

シンケンレッド、ブルー、グリーンは、自分の技を……………

「ヘブンファン!!」

「ランドスライサー!!」

ピンクとイエローは個人武器に変えて。

「サカナマル……百枚おろし!!」

ゴールドも自分の技でナナシ連中を倒していく。

ゴーオンジャー & amp; ゴーオンウィングス対ガイアーク戦闘員ウガッツ

『マンタンガン!!』

『ロケットブースター!!』

マンタンガンやロケットブースターでの攻撃を加えたが、ウガッツは、倒れなかった。

「どういうこと?」

「普通のウガッツではないな。」

『走輔、あのウガッツ共、前にロンと闘っていたときと似たような気を感じた。』

「サンキュー!スピードル。皆っ!!あれ、いこうぜ。」

『ああ/うん。』

「行くぜ!マンタンガン!スピードルソウルセット!!炎神拳ドルドル弾!!」

「マンタンガン!!バスオンソウルセット!!炎神拳オンオン弾

!!」

「マンタンガン!!ベアールソウルセット!!炎神拳ブイブイ弾

!!」

!!」

「マンタンガン!!ガンパートソウルセット!!炎神拳ガンガガン弾!!」

『アテンション！！ウイングブースター！！』
『トリプターソウル/ジェトラスソウル……セツト。』
『ゴーオン！！』

ゴーオンジャーとゴーオンウイングスは自分達の銃に炎神ソウルと自分の激気を籠めてウガッツに発射し、ウガッツを倒した。

ゲキレンジャー 対臨獣殿残党

「激気技！！砲砲弾！！」
「激気技！！瞬瞬弾！！」
「激気技！！転転弾！！」
「激気技！！敵敵拳！！」
「激気研鑽！！サイブレードカッター！！」
ゲキレンジャーは、自分の得意技でリンシーズを倒していく。

仮面ライダーズ対グレートショッカー & amp ; マスカレード
ー パント

「全く、しつこい奴らだ。」
「同感！！」
- - ATTACK RIDE BLAST - -
ディケイドとディエンドは、同じアタックライドカードを使って
攻撃していく。

「オリヤー！！！！」
「ハアーーーー！！」
クウガとキバールは、接近戦でショッカー戦闘員を倒していく。
- LUNATRIGGER -

『いくよ。翔太郎。』

「ああ、フィリップ！」 - TRIGGER MAXIMUM DRIVE -

「『トリガー……フル・バースト!!』」

Wは、ルナトリガーWLTにメモリチェンジし、マスカレードドーパントとシヨッカー戦闘員を倒していく。

- TRIAL -

「全てを、振り切るぜ!!」

- TRIAL -

アクセルは、赤を中心としたノーマルアクセルから、スピード重視のアクセル・トライアルにメモリチェンジした。

- ピッ…… -

- ENGINE MAXIMUM DRIVE -

「ウオオーーー!!」

- ピッ…… TRIAL MAXIMUM DRIVE -

「9.9秒……それがお前達の絶望までのタイムだ。」

- SKULL MAXIMUM DRIVE -

「スカル……パニッシャー……」

スカルもマキシマムでマスカレードドーパントとシヨッカー戦闘員を倒していく。

「やはり……彼らの相手は、私がすべきですね。」

次にウルトラ戦士とレイオニクス対怪獣軍団の闘いだ。

ウルトラマンメビウス対液体怪獣コスモリギッド

「セアッ！」

「ギャー!!」

（コスモリギッドは、液体怪獣……… だったら、凍らせて倒す！
けど、俺は、怪獣を凍らせる技を持ってねえしな。）

- タイムセイバーズ 会議室 -

タイムセイバーズの会議室で戦闘を見ていた、機動六課メンバーとプリキュアメンバーは、心の中で応援していた。

（がんばってな。）

（がんばって、ジェス。）

（零矢君………。）

（兄さん………。）

（がんばって、ジェスさん。）

（勝って。お兄ちゃん／兄さん。）

上から順にはやて、フェイト、なのは、ティアナ、シャーリー、
エリオとキャラ。

（負けるなよ！レナン。）

（ぜってー、勝てよ。） シグナムとヴィータ。

《勝って、ジェスさん。》

プリキュアメンバー（一部除く。）

（兄様。）

（お兄ちゃん………。）

（先輩………。）

（ジェス………。）

上から順に氷狐、舞、うらら、フェニー。その時！プリキュア
メンバーが持っていた、変身アイテムが光り輝き、それぞれの色の
光りの球体を出し、メビウスに送った。

同じ頃、我夢達がいた世界のウルトラの星や地球からの光が時空
と次元の壁を越えてメビウスのもとに飛来した。

（これは！）

「あの、様々な色の光は？」

「つばみ達のプリキュアの光の一片ですう。」

「???」あの光は、プリキュアじゃない者とひとつに成るとき、
その双方の力が使える様になるのだ。」

「貴方は？」

「私は、地球を護りし宿命の騎士・ゴセイナイト！」

『ゴセイナイト？』

.....

「あつー！」

「ちよっ、どうしたの？つばみ。」

「ゴセイナイトって、ゴセイジャーに出てる！あのゴセイナイト
ですか？」

「ああ。」

「あゝ.....。感激ですっー！」

「この光は？」

『受け取るのだ！もう一人のメビウスよ。』

「誰だっー！」

『私はウルトラマンキング。メビウスよ、この世界を邪悪なる者
から護るのだ。』

「言われなくても。」

『メビウスよ。ゼロにこれを渡してくれ。』

「ああ。判ったぜ、”ウルトラセブン”。」

『貴方がもう一人の僕ですね。』

「ああ。」

『貴方に僕ら全ウルトラ戦士の技を使える様になる、”スーパー
ブレス”を渡します。この世界をお願いします。』

「ああ。」

光が収まった時……………ウルトラマンメビウスは、メビウス・キュアズウルトラブレイブへと進化した。

『ウルトラマンの姿が……………』
『変わった！……………』

「行くぜ。『アイスフリージング』！」
「ギャ……………」

なんとコスモリギッドが凍りついた。

「トドメだ！ハッ……………ハア————セアツ——！」
メビウスは、メビウス・キュアズウルトラブレイブからメビウス・バーニングブレイブにタイプチェンジした。

「『バーニングメビュームスピッキング——！』」
コスモリギッドは、バーニングメビュームスピッキングの受けて、粉々に砕け散った。

ウルトラマンゼロ対ムサイル超獣ベロクロン
「ちっ、ミサイルをぶっ放しやがって、うるせーんだよ。」

なんと！ゼロは、ミサイルの雨の中を速く移動し、ベロクロンを投げて、空中に飛ばし、落ちて来る前に、ワイドゼロショットでベロクロンを倒した。

ウルトラマンガイア対怪獣超コツヴ
挿入歌「ガイアノチカラ」

「デュアツ——！」
「グア——！」

ガイアは、超コップをパンチやキックで攻撃していた。

「（よーし。）……………デュアッ！ハァー！……………デュアー
ー！ー！」

ガイアは必殺技フォトンエッジを繰り出し、コップを倒した。

レイのゴモラ対レッドキング

イメージ曲「Eternal traveler」

「ゴモラっ！！」

「グアー！ー！！」

「ギャー！ー！！！！」

ゴモラは、尻尾、腕等を使ってレッドキングを攻撃していった。

「ギ……………ギャー。」

レッドキングは、ゴモラの攻撃で弱ってきていた。

「ゴモラっ！！『超振動波』だ！！」

「グア……………グアー！ー。」

ゴモラは、レッドキングに超振動波を放ち、レッドキングを倒した。

海では……………

エレキングがシーゴラスを追いつめていたが、シーゴラスが発生させる津波に苦戦していた。そこへ……………

「ワイバーンミサイル発射！！」

リトラに乗ったレイは、それを遠くから見ていた。

「ボス！」

「待たせたな！レイ！！」

「エレキングを援護します。」

ペンドラゴンは、ミサイル等を発射して、エレキングを援護した。
「エレキングー！トドメだ。」

「キイーー！！」

エレキングは、尻尾をシーゴラスに絡ませ、放電攻撃をやり、シーゴラスを倒した。

ウルトラマンアグル対冷凍怪獣レイキュバス
イメージ曲「アグルのテーマ」

「デュアッ！！」

「キュー……キュー……」

レイキュバスは、その難い殻であり、打撃が効きづらいといったところだ。

（効きづらいな……なら！）

「ハアー……ダアー！！」

アグルは、フォトンクラッシャー、フォトンストリームに次ぐ必殺技フォトンスクリューをレイキュバスに向けて発射した。しかし

……

「キュー……キュー」

「デュワッ？！」

レイキュバスは健在だったが……

（レボリウムウェーブ！！）

「ダアッ！！」

背後からのレボリウムウェーブでその姿を小ブラックホールの中に消した。

「間一髪って感じだな。」

ウルトラ戦士とレイオニクス対怪獣軍団は、ウルトラ戦士とレイ

オニクスの勝利で終わった。

一方、スーパー戦隊& a m p ;仮面ライダーは……
既にほとんどの戦闘員を倒していた。そこへ……

……

「ハッ！…この気は……ロン！！」

「何！」

「ボオン、ドッカーン！！」

『ウワァー！！』

なんと、ロンが上空から姿を現した。

「お久しぶりですねえ！ゲキレンジャーにゴーオンジャーそれからはじめましてシンケンジャーに仮面ライダー達。」

「あいつが……ロン。」 「ああ、ただどあの時、走輔達と一緒に倒したはずなのに……」

士の言葉にジャンが返す。

「そいつは、ただ蘇った訳じゃなさそうだな。」

その言葉に全員が振り向く。

「えっ？ロンがもう一人？」

「ふんっ、俺はアंकだ。覚えとけ。」

「アंकっ！！」

そこに映治がやってきた。

「遅いぞ！映治！！」

「仕方ないだろ。」

「まあ、いい。」

と、言いながら三枚のメダルを投げ渡す。

「と。変身！！」

《タカ・トラ・バッタ！……タ・ト・バ！タトバ……タ・ト・バ！！》

映治は、仮面ライダーオーズに変身した。

「いいでしょう。ならば、相手をしてあげましょ……………」
「貴様の相手は、その仮面ライダーだけじゃないぞ!」……………なに?」

「臨技!!剛勇轟波!!」

『サバイバスター!!』

「サガスナイパー!!」

『ゴセイブラスター!!』

それぞれの攻撃がロンを襲う。

「ぐっ!!」

その、攻撃を加えた者達とは……………

「ジャン!!あそこだ。」

「あれは……………」

そこにいた者達は……………

「熱き冒険者!ボウケンレッド!!」

「速き冒険者!ボウケンブラック!!」

「高き冒険者!ボウケンブルー!!」

「強き冒険者!ボウケンイエロー!!」

「深き冒険者!ボウケンピンク!!」

「まばゆき冒険者!ボウケンシルバー!!」

「果てなき、ボウケンスピリッツ!!轟轟戦隊ボウケンジャー!

!」

「猛きこと獅子の如く、強きことまた獅子の如く。我が名は黒獅子理央。」

「理央様の愛のために生き、理央様の愛のために闘うラブウォーリアー。臨獣カメレオン拳使いのメレ。」

「嵐のスカイクパワー!ゴセイレッド!!」

「息吹のスカイクパワー!ゴセイピンク!!」

「巖のランディックパワー!ゴセイブラック!!」

「恵みのランディックパワー!ゴセイイエロー!!」

「怒涛のスカイクパワー!ゴセイブルー!!」

『地球を護るは天使の使命！天装戦隊ゴセイジャー！！』

「理央、メレ、明石。」

「それに、ゴセイジャーか……」

「くっ……………いいでしょう。今回は、ほんの挨拶に來ただけです。また会いましょう。」

ミッドの大地に足を付けた。ボウケンジャー、ゲキレンジャー、ゴーオンジャー、ゴセイジャー、ウルトラマンガイア、ウルトラマンアグル、ZAPスピーシー・スペースペンドラゴンクルー。

彼らは、タイムセイバーズと協力し、世界を護ることを新たに誓った。

それから数日後……………ナカジマ家の長女『ギンガ・ナカジ

マ』が帰宅していた時、家の近くで倒れてる二人の男性と五個のトランクケースを見つけた。

「あの……………大丈夫ですか？」

「……………」

倒れてる二人の内一人が気が付いた。

「……………此処は？」

「此処はミッドチルダのクラナガンです。私は、ギンガ・ナカジマです。貴方は？」

「俺は、巧。乾巧だ。……………木場っ！！……………おいっ！起きろ！

木場っ！！」

「乾君……………」

「はぁ……………良かったぜ。」

「あの……このトランクは、貴方達のですか？」

「ファイズギア！！カイザギアにデルタギアまで！！」

「こっちは、天の帝王のベルトに地の帝王のベルトだ。」

乾巧と木場勇二はその後、ナカジマ家に厄介になった。……………

ふたたび闘いに巻き込まれないようお願いながら。

第17話 獣拳と炎神拳／大地と海の巨人／怪獣対怪獣使い（後書き）

作者「長くなりすぎた。」

ゆり「出しすぎだと思っけどね。」

作者「そうなんだよなー。」

巧「次回、第18話 オルフェノクと戦闘機人。

またみてくれよな。」

第18話 オルフェノクと戦闘機人（前書き）

仮面ライダーファイズのライダー変身者四人と仮面ライダーディケイドのファイズの世界のファイズを出しました。

あと、オリジナルライダーはファイズ系列のオリジナルライダーは色や装備が違っただけでほとんど元のライダーと変わらない。

仮面ライダー蒼龍は完璧にオリジナルライダーです。

では、第18話 オルフェノクと戦闘機人 楽しんで下さい。

第18話 オルフエノクと戦闘機人

クラナガン某所

一人の管理局員が、帰宅しようと、していた。すると……………管理局員の前に灰色の怪人が現れ、管理局員を殺害し”オルフエノク”に成るかを見ていた。

「こいつも、駄目か。」

その姿は、トラに良く似たタイガーオルフエノクだった。

ナカジマ家

「おかわりつす!!ギンガ。」

「ウエンディ……………ちよつとは考えろよ。」

「良いではないか。ノーヴェ。」

「チンク姉……………仕方ねえな。」

この三人娘は、ウエンディ、ノーヴェ、チンク……………訳有ってナカジマ家の一員に成っている。

「フリー、フリー、フリー……………」

「どうかした?乾?」

この娘は、ディエチ。ディエチもチンク達と同じ理由でナカジマ家の一員に成っている。

「なんでもねえよ。」

「猫舌は治らないのかい、乾君。」

「うるせーな、木場。」 乾巧と木場勇二……………この二人は、先の四人娘とは違う理由でナカジマ家に厄介になっている。

『ニユースをお伝えします。……………昨夜、自宅に帰宅中の管理局

員が何者かに殺害されました。』

そのニュースを聴いていたナカジマ家一同は……………

「またか……………」

「お父さん…………少しおかしくない？」

「ああ。」

「何が、どうおかしいんだよ。ギンガ。」

ノーヴェは、ギンガに質問した。

「うん。殺害されているのは、本当なんだけど……………」

巧と木場も話を聞いていた。

「死体が見つかって無いの。現場にいつも残ってるのは…………殺害された局員の服と少しの灰なの。」

それを聞いた巧と木場は……………

「何だとっ!？」

「乾君……………」

「仕方ねえな…………行くぞ、木場。」

「ん?おいつ、どこ行くんだよ。」

「別に、何処だって良いだろ。」

ノーヴェの問いにそう答える巧。

「散歩ならあたしも行くっス。」

「ウエンディ……………」

ウエンディは、巧達と出ていった。

「まったく…………だが、今回は、おおめに見るか。」

なんと!チンクはウエンディの服に発信機を取り付けていた。

（（（手際良すぎ。）））

デイエチ、ノーヴェ、ギンガは心の中でそう思った。

一方……………

「今日は、スバルうかれてんな。」

「仕方ないわよ。ギンガさんに久々に会いに行くんだから。」

「そうか。」

スバルとティアナ、ジェスとゆりの四人は、休日を利用し、スバルにつき合っていた。

「あつ！そうだ。ギン姉。」

『どうしたの、スバル？』

「ギン姉、今何処にいるの？」

『クラナガンのデパートよ。家の方に居候が二人いるから。その二人の服とか、日常生活に必要な物を買いに来てるの。あつ！ちょっと、荷物が多くなりそうだから手伝ってくれない？ティアナと友達二人も。』

「了解。」

「（すごい勢いで話を決めてたわね。）」

「（あんまり、逆らいたくないタイプの女性だな。）」

すると……………スバル達の目の前に灰色のカーテンが発生した。

そこからバイクに乗った二人の青年と一人の学生が現れた。

「此処は、何処だ？三原。」

「俺に聞くなよ！草賀。」

「此処は？」

それに駆け寄る四人。

「どうしたんですか？」 「誰だ？」

スバルが聞くが、質問に答えようとしない青年。

「まずは、名前を言え。」

「ふつ、良いだろう。俺は、草賀雅人。」

「俺は、三原。」

「僕は、尾上タクミ。」

「「タクミ！？」」

驚く二人の青年。

スバル達が三原達にこの世界や今の状況等を歩きながら説明し、ギンガがいるだろうデパートに到着した。

「あつ！スバル！！」

ギンガがこつちだと、いうふうに手を振っていた。

「ギン姉へ。」

ギンガの方に走る、スバル。それを追う六人。

「元気だった？スバル。」

「元気が無かったらスバルじゃないですよ。ギンガさん。」

「ひどいよーティアへ。」

「ところで……………どちら様？」

ティアナとスバル以外こけそうになる。

「はあー、俺はレナンジエス・アルマー。」

「私は、月影ゆり。」

「俺は草賀雅人だ。」

「俺は三原。」

と、自己紹介をする四人。

「はじめまして。スバルの姉のギンガ・ナカジマです。」

「ところでギンガさん。居候がいるって言っていましたよね。どこ

にいるんですか？」

「あの人達ならウエンディと一緒に散歩中よ。」

そして、スバル達はナカジマ家の方向へ歩いて行った。

「「ただいまー。」」

『お帰りー。』

『おじやまします。』

スバル達はナカジマ家の居間に行った。

「チエツクだよ。乾君。」

「木場には敵わないな。」

チエスをしている二人。「へえー、けっこう上手いのね。」

「ギンガさんその二人ですか？」

「ええ。名前は……「乾君に木場さん!!」えっ？」

二人の名前を言った三原。

「三原っ！ってことは……草賀もいんのか。」

「ああ。」

「えっと……知り合いですか？」

そう問い掛けるギンガ。するとジエスが……

「そりゃそうだろ。乾に草賀に三原それに木場は『仮面ライダー』

だからな。まっ、乾と木場は別の一面もあるがな。尾上もそうだろ。

士が巡った世界のファイズ。」

「門矢君をしってるのか？」

「ああ、まあな。」

ナカジマ家の中で互いの自己紹介等をしていると……

『ジエス！聞こえるか。』

「聞こえてるよ。兄貴。いったい何なんだよ。」

『そこから近い公園で、管理局員が襲われている。至急向かえ。』

「了解。」

「休日ば、取り上げみたいね。スバル。」

「ギン姉へ……」

ジエス達は、公園に向かった。

「こっ、来ないで………（泣）。」

「フッ………死ね。」

「ひっ………（泣）。」

攻撃が当たる瞬間………

・ブォーン・

一台のバイクが突っ込んできた。

「くっ……?!」

「早く逃げろ!!」

「／／／……はっ、はいつ。」

（顔が赤かったけど大丈夫かな。）

（フラグはつくらないでジェス。）

「くっ何だ、貴様。」

そこへ……………

「兄さん……………速いよ。」

「わりい、わりい。」

その時、尾上タクミが……………

「お前は、百瀬!!」

「ほう、これはこれは、人間になりましたつもりか？同じ”オルフェノク”の分際で。」

「俺は、お前とは違う。」

すると尾上タクミは、ファイズギアを取り出した。それを遠くから見ていた巧達は……………

「あいつ!!ファイズギアを!!」

・ピ・ピ・ピ・

《stand by》

「変身!!」

《complete》

尾上タクミは紅いフォトンストリームのラインの仮面ライダーファイズに変身した。

「なっ!!」

「乾君以外のファイズ……………」

そこへ……………

「あいつに言われて来てみれば。久しぶりだな。尾上。」

「門矢君……………」

「俺も行くぜ。変身!!」

・KAMENRIDEDECAD E・

士は仮面ライダーディケイドに変身した。

それと同時に灰色のカーテンが発生し、中からショッカー戦闘員

やスナツキー、ロブスターオルフェノク、ドラゴンオルフェノク、スキッドオルフェノク、マスカレードドーパント、ワーム（蛹体）が現れた。

「ちつ………ゆり！行くぞ。」

「ええ！」

「ライジングパワー、オーバードライブ。メタルフォーゼ！」
「プリキュア・オープンマイハート！」

「乾君。」

「ああ、俺達も行くぜ。草賀、三原。」

「「ああ。」」

justiφ'sを頭の中で流しながら変身の所を呼んでみてください。

- 5・5・5 -

- 9・1・3 -

- 0・0・0 -

- standy by -

「変身」

- standy by - ↑三原のみ

「「変身！」」

- complete - x 4

乾巧は、仮面ライダーファイズ

草賀雅人は仮面ライダーカイザ

三原は仮面ライダーデルタ

木場勇二は仮面ライダーオーガにそれぞれ変身した。

justiφ's 終了

「月光に冴える一輪の花。キュアムーンライト！」

「天を翔ける黄色い、稲妻………雷の龍騎士・ドラゴンソルジャ

ー・ライジング！」

「どうする、ティア？」 「どうするって言うても。」

すると、ナカジマ家に置いていた、残り三つのケースと他の空間から一つのケースが飛び出した。四つのケースの内二つ飛び出た。

それは、スバルとティアナの下に行った。

「これって……」

「カイザギアとデルタギアさ。」

「大樹さん!!」

「海東!!」

「やあ、士。」

「何の用だ。」

「用があるのは、僕じゃないよ。そろそろ出て来ればどうたい鳴滝さん。」

すると、また灰色のカーテンが発生し、鳴滝が現れた。

「鳴滝!!」

「何の用だ!! 鳴滝!! いや『真の世界の破壊者』。」

ジエスは、鳴滝を真の世界の破壊者と言った。

「さすがは、世界の守護者と呼ばれるだけの事はあるな。」

「デイケイドを世界の破壊者だの悪魔だの言って回ってるのがお前だ、っていうのは調べが付いてるんだよ。あと………別の次元にいるあんたも同じようなことやってるよな。」

「それがどうした。」

「歴史とは、常に一つとは限らない。様々な可能性がある、どれが正しい歴史か、なんていうのは存在しない、全ての歴史に正解が存在しているからな。あと、運命も切り開いて行きたんに分岐点がある。それらも全て正しい事なんだ。」

「しかし……このままデイケイドを放って置いたらこの世界は消滅す「しないな!!」なに？」

「破壊者と守護者その力は守護者一人につき破壊者が十人分の力だ。だから、この世界はいや、この次元が消滅することはない。ずっと。」

「何故、そう言い切れる。」

「士が激情体の力を使っていた時、士は一度、夏海に倒された……しかし、夏海や大樹、ユウスケや士が旅をした世界のライダーの想いで、士はまたディケイドとして通りすがりの仮面ライダーとして世界を護っていた。」

「……………」

「それにダークプリキュアに怪人ライド専用のドライバーを渡したのもお前だろ……………それこそ世界の破壊者の肩書きが相応しいと思うがな。」

「くっ……………」

そう言われ鳴滝は、灰色のカーテンの中に姿を消した。

「スバルっ!!」

「ギン姉!!それにノーヴェ!!どうしたの?」

「さつき、私とギンガのところに『紅 渡』って奴がディケイドとブルーディケイドを援護してくれて、言ったからスバルのところに来たんだよ。」

すると残り二つのケースが浮かび、ギンガ達の手に納まった。

そのケースは、サイガギアとオーガギアのケースだった。

そして、四人の手に納まったと、同時にベルトが光り四人は、仮面ライダーに変身していた。

スバルは、仮面ライダーカイザ。

ティアナは、仮面ライダーデルタ。

ギンガは、仮面ライダーサイガ。

ノーヴェは、仮面ライダーオーガに、しかし乾達が変身したものは、色が違いそれぞれの魔力光の色やデバイスの能力を表している、仮面ライダーブルーカイザ、仮面ライダーミラージデルタ、仮面ライダーキャリバーサイガ、仮面ライダージェットオーガにな

っていた。

スバルカイザ「これが仮面ライダー……」

ティアナデルタ（兄さんと同じようなライダー……）

「バリアジャケットとは、違う感じ……」

「すげえ、力が沸いて来る。」

「ぼーっとするな！行くぞー！」

「……ハイツ……」

「じゃあ、僕も参加しよう。」

- KAMEN RIDE…… -

「変身……」

- DI・END -

ムーンライト、ライジング、ディエンド、サイガは、ワームやシヨッカー戦闘員の相手をしていた。

「ハッ……」

「ライジング・デイス・クロー……」

ムーンライトとライジングは抜群のコンビネーションで敵を倒していく。

「今回は、これかな？」

- KAMEN RIDE ZECTTORUPARS DOREIK -

「行つてらっしゃい。」

「ワームを殲滅する……」

「さて、行きましょうか。」

ディエンドは、ゼクトトルーパーズと仮面ライダードレイクを呼び出した。

「飛びながら攻撃は、慣れないわね………だったら……！ウィングロード……」

サイガは、変身者がギンガである為に空を飛びながらではなくて

ウイングロードを使用しての戦法に切り替えた。

「雑魚へのラスト、いつてみるか。」

「ドラゴニックチャージ」

「ムーンタクト!!……花よ、輝け!」

- EXE SEED CHARGE -

- FINAL ATTACK RIDE DI・DI・DI・DIEND -

「ドラゴン・ライジングブレイカー!!」

「プリキュア!シルバーフォルテウェーブ!!」

「ウインググランドンファア!!」

「ハアッ!!」

ドラゴンソルジャーライジングは『ライジングブレイカー』でキ
ュアムーンライトは『シルバーフォルテウェーブ』で仮面ライダー
キャリバーサイガは『ウインググランドンファア』で仮面ライダー
ディエンドはディメンションシユートで敵の雑魚を倒していった。

仮面ライダーカイザ & 仮面ライダーブルーカイザ対ドラ
ゴンオルフェノク

「気をつけろ、こいつは命を三つ持っていた。今の姿からあと二
つある。」

「それじゃ、時間差を置いてのエクシードチャージとコンビネー
ションで行けるね。」

「その提案には同意する。……しかし、初撃は、誰がやる?」

「初撃は、私。復活した所を怯ませたら、トドメをお願い。」

「だが奴のスピードは普通じゃ……大丈夫!!……何?」

「私も……」人「じゃないから……」

「君は……」

「じゃあ、タイミングは任せるよ。『雅人』。」

「わかつてるさ。『スバル』。」

二人のカイザは、同時に動きだした。

草賀カイザは、右手にカイザブレイガンを持ち、スバルカイザは、右手にリボルバーナックルを装着してドラゴンオルフェノクに挑んでいく。

「グオツ…………グツ…………」

（今だ！！マツハキャリバー、カートリッジロード！！）

《Load Cartridge》

- EXE SEED CHARGE -

「デイベイン…………インパクト！！」

「！！」

ドラゴンオルフェノクは、スバルのデイベインインパクトを受け崩れ落ちた。しかし、一分も経たない内に復活した。

（読み通り！！）

「リボルバー…………ショート！！」

- EXE SEED CHARGE -

「伏せる！！スバル！！」

「！！！！！！」

「ウオーーーー！！！！」

カイザは、相手が怯んだ一瞬の隙を突き必殺のコルドスマッシュを放ち、ドラゴンオルフェノクにトドメを刺した。

三原デルタ & amp ; ティアナデルタ対スキッドオルフェノク

「スキッド…………イカか…………」

「じゃあ…………乾燥させてスルメイカなんてどう？」

「あんなの食べれないでしょ。」

と、三原のボケにティアナがツツコミを入れた。

「まあ、あいつはオルフェノクの中じゃあ下っ端だし……………」

「一気にきめます?」

「それでいこう。」

「あと私蹴りは…………得意じゃないので…………」

「わかった。じゃあいこう。」

「チエック!!」

- EXCEED CHARGE -

「ルシファーズブレイカー!!」

スキッドオルフェノクは速攻で灰と化した。

仮面ライダーオーガ&仮面ライダージェットオーガ対ロ
ブスターオルフェノク

「なんで、海老なんだ?」

「オルフェノクにはいろんな種類があるから。」

そんな話をしていると、ロブスターオルフェノクからの攻撃を受けそうになった。

「ちっ!!エアライナー!!」

ジェットオーガは、エアライナーを発動させ、空中へ走る。

オーガはオーガストライザーにミッシヨンメモリーをセットしつつでも、チャージできる様にした。

さらに、ジェットオーガは空中を走りながら、木場オーガには付いてないオーガポインターにミッシヨンメモリーをセットした。

(行くぜ!!勇二!!)

(ああ。ノーヴェー!!) - EXE SEED CHARGE -

「行くぜ!海老ヤロー!!ジエツトスマツシュ!!」

「ストライザースラツシュ!!」

「くっ……………」

ロブスターオルフェノクは、二人のオーガの必殺技を受け灰となった。

仮面ライダーディケイド&・巧ファイズ&・タクミ
ファイズ対タイガーオルフェノク

挿入曲「RIDE The Wind」

「ハアッ!!!!」

「くっ……………」

ディケイドと二人のファイズはタイガーオルフェノクを圧倒していた。

「諦める百瀬!!お前は、俺達には勝てない。」

「それはどうかな?」

するとタイガーオルフェノクは触手のようなものをだした。

「あれは?」

「まさか!!」

「くそっ……………忘れてたぜ。」

巧ファイズは何をするのかまったく解らなかったが、ディケイドとタクミファイズは気づいていた。

「さあー蘇れオルフェノクよ!!」

しかし……………

- CONFINE BENT -

電子音声とともにタイガーオルフェノクがだした触手が消滅していた。

「誰だー!!」

そこには、青き龍の影を纏いし戦士……仮面ライダー蒼龍がいた。……その左には仮面ライダーフェニックス、右に蒼龍のパートナーモンスター……ドラグブルーの人間体……ソウランと龍覇、そして蒼龍に抱き着く形でムーンライトがいた。

「貴様ー!!!」

「龍覇……」

「応ー!!!」

龍覇は無双龍ドラグブルーに変化した。

「行くぞー!! 尾上ー!!!」

「いつでも……門矢君。」

FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE・DE
E -

EXE SEED CHARGE -

FINAL BENT -

「デイメンションキックー!!」

「Wクリムゾンスマッシュー!!」

「ブルードラゴンライダーキックー!!」

ガ・ガ・ガ・ガッ -

「くっ馬鹿な……この俺が……」

- - - Φ - - -

タイガーオルフェノクは四人のライダーの必殺技を受け灰と化した。

敵を倒して、二時間後……灰色のカーテンが発生し、草賀と三原、尾上タクミが元の世界に戻る時が来た。

「草賀っ……………真理と啓太郎に俺は大丈夫だって伝えてくれ。
三原っ……………オルフェノクが出たら、草賀とお前が相手をしろ
よ。」

「ああ。」

「わかってるよ。」

「三原君……………もし、海堂に会ったらよろしく伝えてくれないか
？」

「解ってますよ。木場さん。」

「尾上……………これから、人間として生き、良い写真を取り続け
るサポートをしてやれよ。」

「そういう門矢君も写真を撮り続けて下さい。……………貴方だけの
世界を。」

「ああ。」

草賀達が元の世界に帰る寸前……………

「行っちゃヤダ！！！！雅人！！！！」

「ちよつと！！スバル！！」

「ヤダよ……………一緒に居てよ……………雅人。」

「俺は……………自分の世界を護る義務がある。……………一緒に居れ
ない……………」

「なんで……………」

「此処がスバルの世界なんだろ？……………だったら守り抜け、自分
の世界を……………じゃあ……………」

草賀は三原とともに自分の世界に戻っていった。

異空間

「この世界で新たなライダーが何人も生まれてしまった。おのれ、
デイクイドー。」

「鳴滝の策は、失敗に終わったな。」

「???」ならば、次は……………私が行こう。」

「誰だ!」

「私は…………『スペースギルダー』の一人口ウガだ。お見知りおきを…………ダークザキそれとケイサル・エフェスにダークブレイン。」

「スペースギルダーと言えば…………前に我等、砂漠の使途とともにプリキュアに挑んでいた者だな。今度は、グレードシヨツカーに協力する気?」

「ええ…………障害は、少ない方がいいですからね。」

「ならば…………任そう。期待しているぞ。」

スペースギルダーとは、いったい何なのか?グレードシヨツカーの狙いとは?……………

(そろそろ…………『あの書』が覚醒するな…………『ブレイティック』そろそろ…………お前の覚醒の時だ。)

第18話 オルフエノクと戦闘機人（後書き）

作者「やつと書けた。」

えりか「ご苦労様。はいっ、えりか特製ドリンク。」

作者「サンキュー！。えりか。」

えりか「えへへ／＼／……………」

ジェス「このまま見るのは生にあわん。

次回第19話 聖王と霸王の拳／青き魔導書と」のデバイス

次も見てくださいな。」

ヴィヴィオ&mp・なのは（9才）「リリカル・マジカル頑張ります。」

ジェス「締めを盗るな！！」

第19話 聖王と霸王の拳／青き魔導書とJのデバイス（前書き）

今回は長くなってしまった。……………ウルトラマンやスーパーボット軍団の活躍等を書いていたら当たり前か……………。

ジェス「そんじゃ、第19話 聖王と霸王の拳／青き魔導書とJのデバイス 始まるぜ！！」

古代怪獣ゴルザ

スフィア合成獣ネオダランピア

自然コントロールマシン深緑& a m p ; 炎山

カオスヘッダーイブリース

グローカールーク、グローカービショップ

無双鉄人インペライザー

暗黒鎧装アーマードダークネス

宇宙忍者バルタン星人

登場

第19話 聖王と覇王の拳／青き魔導書とJのデバイス

クラナガンのとある公園

「ハッ！！ハッ！！ハアー！！」

今、ストライクアーツの練習をしているのは、高町ヴィヴィオ。彼女は、聖王のクローンだが、今は一人の魔導師もしくは、『夜天の騎士』と同じベルガの騎士を目指している。

「ハッ！！ハッ！！ハアッ！！！」

彼女は、アインハルト・ストラトス。霸王としての記憶を持ち、『覇拳流』（カイザーアーツ）を使う稀にみるベルガの騎士タイプである。

「よしっ！！一日集合！！」

「ハイツ！！」

そう言われ四人は集まった。えっ何故四人か、って、それは先のキャラ説にはなかったが、ヴィヴィオの友達のリオとコロナも居るからだ。

「私達は、おまけじゃない！」

「おっ、落ち着いて!!! リオ、コロナ!!!」

「そっ、そうです。」

（こんな練習風景ですが、次の時はまた違う練習をしたいな。）

とある空間……………

「うつ……………此処は？」

「此処は、次元と時空の狭間です。」

「お前は……………誰だ。」

「私はリインフォース。元夜天の書の管制人格で、今は新たな魔導書の管制人格として機能している。」

「私は、何処に向かっている？」

「ミッドチルダのクラナガン……………その郊外にある一軒の空き家に向かっている。」

「何!?!」

「私が管制している魔導書も、覚醒の時が近づきつつある。覚醒してすぐは動きづらいそこで、お前も共に居るのだ。」

「わかった!?!お前の所有者が見つかるまでの間、護衛を勤める。」

「感謝する。」

とある日の休日

「おい、本当に良いのか?……………俺もついて行っても。」

「大丈夫だよ。だって、ヴィヴィオやその友達に零矢君の事、紹介したいもん。」

「それは、良いけどよ……………フェイトはともかくフォルカとコウタにアレディにネージユは来なくていいんだがな。」

「二人……………忘れてるぜ……………零矢。」

「ジェスに……………月影か……………」

（この人数で大丈夫かな？）

公園では……………

ヴィヴィオとリオ、コロナが狼形態のザフィーラと子犬モードのアルフと遊んでいた。

「ザッファイー！！アルフさん！！いつくよー！！」

「ワウッ！！」

「アンツ！！」

そこに……………

「ヴィヴィオー！！」

なのは達がやって来た。

「あっ！！なのはママ、フェイトママ！」

なのは達のところにヴィヴィオが走ってくる。

「なのはママとフェイトママは、今日休みなの？」

「うん。なのはママとフェイトママは、今日お休みの日なの。」

「あっ！！フェイト。」

アルフが子犬モードを解き、フェイトに駆け寄る。

「アルフ！！元気だった？」

「うん！……………まあー本当はさ、ザフィーラと……………その……………」

デ……………デートのはずだったんだけどノノノ」

「仕方あるまい。ヴィヴィオのあの澄んだ瞳で見られたら相手をしてない訳には、いくまい。」

「ありがとう。ザフィーラ。」

「ザッファイー！！アルフさん！！遊んでくれてありがとう。」

ヴィヴィオの笑顔で（まっ……………こんな日が有っても良いか）、
と考えているアルフだった。

それから、ジェス達は、ヴィヴィオに自己紹介して、ノーヴェが来るまでヴィヴィオとリオ、コロナはストライクアーツや後から来たアインハルトもカイザーアーツの基礎運動を始めた。

その時……………灰色のカーテンが発生し、中からガジェット型の？型とガジェット？型、ダイダル兵、ショッカー戦闘員、スナッキー、羅刹機が姿を現した。

「ガジェット……」

「スナッキー……」

「ショッカー戦闘員にダイダル兵……」

「おいっ！アレディ、あれは……………」

「間違いない！！ゲルダの一派が扱う羅刹機だ。」

「んもう！こんな時に出て来るなんて、空気を読みなさい！」

「ネージユ……………それは……………」

「無理だと思う。」

そんな会話をしていると、『ソーディアン・ダガー』が出現、それと同時に劣級修羅神とバルツールがダガーから『瞬転』で出現、『クロスゲート』も発生し、中から、AG X01『バクス』、『フレ』、AG X04『ファットマン』が出現し、普通の転位で量産型ゲシュペンストMk.？、ソルブレッサ、ランドグリースが現れた。

「修羅神にバルツール……………」

「なんで！！ゲシュペンストが『エアロゲイター』の機体と一緒に出るんだよ。」

『どうする！！コウタ……！』

「どうするもこうするも、やるしかねえだろ！」

「なのはママ〜。コウタお兄ちゃん、どうして独り言を言ってるの？」

「さあー？どうしてなんだろうね。」

実は、コウタとロアの会話は、事情を知ってる者以外は、独り言に聞こえるのだ。（良太郎とイマジンスも同じ事が言える。）

「アレディ！ー姫さん！ー羅刹機のほうは、頼むぜ。行くぜ！ーフォルカ！ー！」

「ああ！ーコウタ！ー！」

「行くぜ！ー！……バーナウ・レッジー・バトー！ー！……ファイターロア！ー！」

コウタは、掛け声と共にその姿をファイターロアへと変えた。

「ーカッコイ！ー！ー！」

（凄い戦闘力を感じる。）

ヴィヴィオとリオ、コロナは感想を言うと、共に目がキラキラしていた。

「行くぜ！ー！コンパチブルカイザー！ー！」

「いでよ！ー！ヤルダバオト！ー！」

ロアとフォルカは自分の愛機を呼んだ。

「なのは……！」

「うん！フェイトちゃん。」

「なのはママ！私も行く。」

「私も行きます。」

「ありがとう。二人とも。」

「アルフは、ザフィーラと一緒にリオとコロナを守って。」

「判ったよ。フェイト。」

「心得た。」

「レイジングハート！ー！」

「バルディッシュ・アサルト！ー！」

「セイクリッドハート！ー！」

「ーセット、アップ！ー！ー！」

「戦闘形態!!」

なのは達はデバイスを起動させた。

「プリキュア!オープンマイハート!!」

「今回は、これだ。……………ライブメダルモデルD……………ロックオン!!」

「月光に冴える一輪の花、キュアムーンライト!!」

「ロックマン!!モデルD!!」

ゆりは、キュアムーンライトへ、ジエスは、新しく見せる姿『ロックマン・モデルD』に変わった。

「ライジングの方が……………私は、好きよノノ。」

「それは……………また今度な。ゆり。」

「私とアレディは、羅刹機を担当するわ。」

「じゃあ、私はスナッキーを担当するわ。」

「俺は……………」

突如、謎の無数の色のカーテンが発生!!そこから、ロックマンXシリーズの敵レプリロイドの雑魚、ロックマンZXの敵レプリロイドの雑魚、ロックマンEXEと流星のロックマンに出る敵ウィルスが合計80体現れた。

「何故にロックマン……………」

すると、ジエスの後ろで灰色のカーテンが発生し、何人かの若者が出てきた。

「行くぞ!!エックス!!」

「ああ!ゼロ!!」

「エール、アッシュ!!遅れるなよ。」

「大丈夫だよ。」

「あんたは、心配しすぎなんだって。」

『熱斗君!!』

「行くぜ!!ロック!!シンクロチップ……………スロットイン!!フルシンクロ!!」

「ウォーロック!!」

『応よ！！スバル！！』

「電波変換！！ロックマン！！」

彼らは、それぞれのロックマンの世界からきた戦士達だ。それと彼らとは別の世界からきた戦士もいた。

「行くぞ！！ダイダル！！……………変身！！」

「チェンジ！スイッチ・オン！！1・2・3！！」

「チェンジ…キカイダー01！！」

「剛力招来！！……………超力招来！！」

「俺は、太陽の子……………仮面ライダーBlackRX！！」

「キカイダー！！」

「キカイダー01！！」

「イナズマン！！」

彼らは、『ガイアセイバーズ』という組織の一員で、ダイダルの野望を食い止めるために闘っている。

「BlackRX？南光太郎か？」

「何故、知ってる。」

ジェスは、ロックマンから一旦戻った。

「俺は、こういう者さ。……………変身！！」

・KAMENRIDEBLUEDECADE・

「仮面ライダーブルーディケイド……………または、世界の守護者だ。」

「そうか……………俺達は、ダイダル兵の相手をする。」

「じゃあ、ショッカーの相手でもしますかね。」

「なのは……………私達は、ガジェットを。」

「うん。」

それぞれの闘いが始まった。

アレディ&ネージュ対羅刹機

「行くぞ!! 覇皇轟雷脚!!」

「ベレイシャスミラー!!」

アレディとネージュが羅刹機の相手をしていると、二人のパートナーユニット、羅刹機『アルクオン』と妖精機『フェイクライド』が駆け付けた。

「アルクオン!!」

「フェイクライド!!」

二機は、アレディとネージュの方を向き、頷いた。

「よしっ!! ハアッ! うおおー! 信じるぞ、アルクオン。……

…奥義・覇皇魔滅拳!!」

「フェイクライド!! 来なさい。……私も参りましょう。…やあ

ー!! ……ロイヤル・ハート・ブラスター!!」

アレディとネージュは、それぞれの技とパートナーユニットとの連携で羅刹機を倒した。

仮面ライダーブルーディケイド&キュアムーンライト対
ショッカー戦闘員&スナッキー

「なんで……ショッカー戦闘員とスナッキーが同時に来るかな?」

「あら…私は、べつに問題無いけど。」

「あつそ……」

「…「イーーーー」」

「黙れや! 雑魚共!!」 - ATTACKRIDE BLAST -

「ハッ!!」

「…「イーーーー?!!」」

「こうなったら! ……このカードだ!!」

- CURE SATACKRIDE DECADE DETACT -

「ふう……………妙なライドカードがあつたもんだ。」

「あら……………じゃあ、一緒にやる?」

と、ムーンライトはブルーディケイドに言う。

「仕方ねえ……………連携……………行くか。」

- CROSS ATTACK RIDE B・B・B・BLUE DECA
DE & amp; M・M・M・MOONLIGHT -

「デイメンション……………」

「プリキュア!! シルバーフォルテ……………」

『ウェーブ!!』

ブルーディケイドとムーンライトの連携合体技でショッカー戦闘員とスナッキーを一気に全滅させた。

ガイアセイバーズ対ダイダル兵

「リボルケイン!!」

「デンジ・エンド!!」

「プラズマエンド!!」

「マフラー稲妻走り!!」

ガイアセイバーズのメンバーはそれぞれの個人技でダイダル兵を倒していく。

各ロックマン対レプリロイド & amp; ウィルス群

『熱斗君……此処は、一気に全員のバスターをくらわそう。』

「オツケー！ ロックー！……皆、行くぜー！」

『ああー！／オツケーー！／わかったよ。熱斗君！』

全ロックマンがバスターをチャージしていく。

『オールー！ ロックバスターー！！』

『！！？？』

レプリロイド& amp; ウィルス群をオールロックバスターで全滅させた。

魔導師& amp; 霸王対ガジェット群

「アクセルシューター……」

「プラズマランサー……」

「ソニックシューター……」

「ハアー……」

「シューターー！……」

「打ち砕けー！ ファイアーー！」

「霸王断空拳ー！」

魔導師チームとアインハルトは、自分の魔法やアーツでガジェットを沈黙させていく。

その時……アインハルトとヴィヴィオの前に瞬時にして、宇宙忍者バルタン星人とアラクネアーム、タランチュラアーム、モールイマジンが二人に襲いかかろうとしたが……

「ダアッ！」

「フォッー！」

「俺が居るのは、計算外だった様だな！バルタンー！」

二人のピンチを救ったのはウルトラマンゼロに変身した零矢だっ

た。

「ありがとう。零矢君。」

「良いさ、なのは。」

「ほら、ヴィヴィオも。」

「うん。ありがとうございます。零矢『パパ』。」

・ズゴー――

敵味方問わず、ずっこけてしまった。

そうこうしているうちに、ワームはクロックアップし、二人に迫っていた……。その時……。灰色のカーテンが発生、仮面ライダーカブトと仮面ライダー電王ライナーフォームがワームをはね返した。

「まったく、ワームがこんなところにいるとはな。」

「イマジンもいる……………」

そこへジェスが来た（ムーンライトも一緒に）。

「天道！！野上！！」

「ん？」

「ジェスさん？」

ジェスは、天道と野上の二人と知り合いだった。

「よう！久しぶりだな。」

「うん。あつ！オーケーから預かり物が有ったんだ。…………この

パスとベルトをヴィヴィオって子に渡したいんだ。」

「こっちも、田所からこのライダーブレスを渡すって言われてな。」

・

「それは、好都合……………そこにいる、金髪のオッドアイの子がそうだ。」

「そうなんだ。ありがとう。」

「ちゃんと使えるかは、お前次第だ。」

ベルトとパス、ブレスをヴィヴィオに渡すと、イマジンとワームに向かい、カブトと電王は走っていった。

「よし！！……………変身！！」

・G電王フォーム・

ヴィヴィオは、G電王に変身した（イブの無い）。

「仮面ライダー？」

ヴィヴィオは、初めての变身にしては、飲み込みが早く、既に自分の身体のように闘っていた。

コンパチブルカイザー & ヤルダバオト対エアロゲイター等

「スパイラル……ナツコー!!」

「機神猛撃拳!!」

コウタとフォルカは愛機に乗り、闘っていたが、敵の方が数が多く苦戦していた。そこへ……………

「青龍鱗!!」

「ライゴウエー!!」

アクセルのソウルゲインとアルフィミイのペルゼイン・リヒカイトが援護にやって来た。

すると、クロスゲートが発動し、中からクロガネ、ヒリユウ改、ラーカイルム、アークエンジェル、ミネルバ、ナデシコ、アートのツセイ号が転位していた。

そこから、マジンカイザー、真ゲッター、真ドラゴン、vガンダム、ストライクフリーダム、デステイニー、ブラックサレナ、アルトアイゼン・リーゼ、サイバスター、R-1、アガレス、ビレフォール、ペイリネス、Gサンダーゲート、ガッツウィング一号、ガッツイーグル、シグファイターSS、テックサンダー四号、テックスピナー、ガンフェニックスが出撃した。

「フッ……遅い到着だな。キョウスケ!」

「そちらの転位先を割り出すのに意外と時間がかかってな。」

「よっ!!!コウタ!久しぶりだな。」

「そうだな、マサキ。………そんなじゃ、ショウコ！！Gコンパチフォーメーション、行くぜ。」

「うん！お兄ちゃん！！」

コンパチブルカイザーとGサンダーゲートは合体して、Gコンパチブルカイザーになった。

「竜馬、甲児、行くぞ！！」

「いつでも良いぜ。ゴウ！！」

「カイザー！！パワー全開だ！！」

真ゲッター、真ドラゴン、マジンカイザーはパワーを最大に発揮して敵に突進していく。

「行くぜ、R-1！！」

「Vガンダム」

「ストライクフリーダム」

「デステイニー」

「……行きます。」

三機のガンダムは、その起動性で敵を翻弄していく。

「行くぞ！」

ブラックサレナは、ボソソジャンプしながら、攻撃を加えていく。
そこへ………

「紅蓮魔炎陣！！」

「あの技は、」

「まさか！」

「……兄さん！！」

「久しいな、フォルカ、フェルナンド、メイシス。」

「アルティス様！！」

その人物は、ソーディアン内部でフォルカ達と闘い、ミザルの策略で命を落とした、アルティスだった。

アルティスがフォルカ達のところにいったと、同時に、青い魔導書を持った……リインフォース・アインがなのは達の側に降り立った。

「リインフォースさん……。」

「本当にリインフォース？」

「そうだ。あの時の小さき勇者達よ。」
すると……

「この波動……蒼天の書が近くにあるな。」

「ようやく、お目覚めか？『ブレイティック』。」

「すまぬマスター。我は、マスターと蒼天の書……二つが揃わねば目覚めぬ存在故。」

「そうかい……まあいい、行くぞ！ブレイティック！！アイン！！」

「ハッ！！」

「ああ！」

「ブレイティックブレイカー……セットアップ！！」

「get set」

ジェスは、ブルーディケイドの姿のまま、ブレイティックブレイカーをセットアップした、そして……

「アイン！！」

「ああ！！」

「「ユニゾン・イン！！」」

リインフォース・アインとユニゾンし、ブルーディケイドの青い部分が銀色となり、黒い部分が青となり、複眼部分の右眼が紅、左眼が翠のオッドアイになっていた。

（あの目の色は……聖王の力を受け継いでる証。……でも何故、彼が？）

アインハルトは心の中でそう呟いていた。

スーパーロボット軍団がバルトル等と交戦中の時に………空間が一部歪み中から、古代怪獣ゴルザ、スフィア合成獣ネオダランピア、自然コントロールマシン深緑と炎山、カオスヘッダーブリス、グローカールーク、無双鉄人インペライザー、暗黒鎧装アイマードークネスが姿を現した。

（ちっ……………こんな時に……………）

するとバルタン星人も巨大化した。

「ダイゴ……………」

「わかってるよ、レナ。」

「行つてこい、アスカ！」

「ラジャー！隊長……！」

「頼むぜ、ムサシ、ジユリ。」

「了解、フブキさん。」

「わかった。」

「行くぜ……ミライ……！」

「はいっ……リユウさん……！」

呼ばれたパイロットは、それぞれの变身アイテムを取り出した。

「ティガー……！」

「ダイナー……！」

「コスモース……！」

「うお……！」

「メビウス……！」

「うお……！」

ダイゴはティガ、アスカはダイナ、ムサシはコスモス、ジユリはジャステイス、ミライはメビウス、リユウはヒカリに変身した。

「ウルトラマンが……………」

「あんなに、たくさん……………」

すると、我夢と藤宮、レイが零矢のもとに駆け寄る。

「行くぜ！！ンー……………デュワ！！」

「ガイアー！！」

「アグルー！！」

「行けっ！！ゴモラー！！」

- バトルナイザーモンスロード -

零矢は、ヴィヴィオとアインハルトをバルタンから守るために変身したあとだったのでそのまま巨大化、我夢はガイア、藤宮はアグルに変身し、レイはゴモラを召喚した。

「そろそろ、やるか。……………クロックアップ！」

- CLOCKUP -

カブトはクロックアップした。

「次は……………これ。」

ヴィヴィオは、G電王から別のライダーになるツールを付けた。

「変身！」

- HEN'SHIN……………change mantthisu -

「クロックアップ！」

- CLOCKUP -

ヴィヴィオは、G電王から仮面ライダーマンティスに変身した、同時にクロックアップしカブトと共にワームに挑んでいく。

- 1・2・3 -

「ライダーキック…！」 「ライダースラッシャー…！」

- riderkick -

- riderslashar -

「ハッ…！」

「セヤー…！」

カブトとマンティスは同時に必殺技を放ち二体のワームを倒した。

「皆、行くよ。」

モモ『応、ちゃんとやれよ、良太郎。』

ウラ『こっちは、いつでも良いからね。』

キン『バシツと決めたれ良太郎。』

リュウ『早くやろうよ！良太郎。』

- change & amp; up -

「ハアー……………電車切り！！」

電王ライナーフォームも必殺技でイマジンを倒して行く。

アインハルトは、ガジェット？型を倒していくが、ガジェット？型の装甲に手を妬いていた。

「くっ……………なかなか、倒せない……………（なのはさんやテストロツサさんは、簡単に倒しているのに……………）。」

「手を貸すぜ……………アインハルト。」

アインハルトにブルーディケイド・ユニゾン形態が協力を申し出た。

「わかりました。お願いします。」

快く、申し出を受ける、アインハルト。それを良く想ってない人が一人……………

（私のジェスに手を出したら許さないわよ。……………絶対に……………

）

ムーンライトである……………それを見たアインハルトは……………

……………

（こっ、恐い（泣）……………）

「まずは、動きを止める。……………ドラゴニックウェイブ！！」

「霸王断空拳！！」

「龍皇残影牙！！」

アインハルトとブルーディケイド・ユニゾン形態は、コンビネーションでガジェット？型を攻撃するが、致命傷には至らなかった。
「仕方ない……………蒼天の書……………その中にある魔法の一つを見せるか……………」

すると蒼天の書は、『赤い魔本』に変わり、ブルーディケイド・ユニゾン形態の前に金髪の少年が具現化した。

「行くぞ！『ガツシュ』！！」

「ウヌー！！」

ガツシュと呼ばれた少年はガジェット？型の方を向いた。すると

……………蒼天の書が姿を変えた赤い魔本が光り出した。

（あの本の光り方……………はやてちゃんの夜天の書とは違う。）

「第4の術　ザケルガ！！」

すると……………ガツシュから一直線に向かう電撃がガジェット？型を襲い、なんとか倒した。

ウルトラヒーロー対怪獣軍団

ティガはゴルザ、ダイナはネオダランピア、ガイアとアグルは深緑と炎山、コスモスはカオスヘッダーイブリース、ジャスティスはグローカールク、メビウスとヒカリはインペライザー、ゼロはバルタン星人、ゴモラはアーマードダークネスに挑み、アーマードダークネス、グローカールク以外の怪獣にトドメをさすところだった。

「ティ……………ハアアー、テュアアー！！」

「デュウー！！」

「ハアアー……………ダアーツ！！」

「デュアアー！！」

「ハアアー……………、シュワッ！！」

「ハアアー……………セヤーー！！」

「オリヤー！ー！！」

ティガはゼペリオン光線、ダイナはソルジェット光線、ガイアはクアンタムストリーム、アグルはリギティター、コスモスはコスミューム光線、メビウスとヒカリはメビュームシュートとナイトシュートの同時光線、ゼロはウルトラゼロキックでそれぞれの敵怪獣を倒していった。

ジャステイスはグローカールークに挑んでいたが、途中グローカールークを倒したがグローカーマザーが変形したグローカービショップを相手していた……が、ジャステイスのカラータイマーが点滅し始めた。

「ジユツ！？」

グローカービショップがジャステイスに襲い掛かるうとした時……

……

「チエツ！！」

ティガ、ダイナ、ガイア、アグル、コスモスがジャステイスの援護に駆け付けた。

ゴモラもまたアーマードダークネスに苦戦していたが……

……

「セアツ！！」

メビウス、ヒカリ、ゼロがゴモラの援護に来た。

グローカーに挑む六大ウルトラマンは連携攻撃やコンビネーションアタックでグローカーを圧倒していき、最後の攻撃に移ろうとしていた。

「（皆……行くぞ！！）」

ティガとダイナは『TDスペシャル』、ガイアとアグルは『バーストストリーム』、コスモスとジャステイスはコスモス・フューチャーモードとジャステイス・クラッシュャーモードにモードチェンジして『クロスパーフェクション』を発射してグローカービショップ

を倒した。

ゴモラ、メビウス、ヒカリ、ゼロはアーマードダークネスの攻撃の隙を突きながら攻撃を加えていく、その最中、メビウスとヒカリは仲間との想い一つになった『ウルトラマンメビウス・フェニックスブレイブ』に進化し、ゴモラはレイの心が最高に高ぶった時になる姿、『EXゴモラ』に超絶進化した。

「皆……………これで決めるぞ！」

「ああー！！……………ゴモラー！！……………超震動波だー！！」

メビウス・フェニックスブレイブはメビウムナイトシールド、ゼロはゼロツインシールド、EXゴモラはEX超震動波をアーマードダークネス目掛け一斉攻撃をかけるが、なかなか倒れない……………そこへ……………

「セヤーー！！」

ジェスの変身した、ウルトラマンメビウス・キュアズウルトラブレイブの形態の一つ『ウルトラマンメビウス・ムーンナイトブレイブ』の必殺技『シルバーメビウムナイトフォルテニックスシールド』をアーマードダークネスに放ちながら、ゼロ達に加勢し、アーマードダークネスをようやく倒した。

そして……………スーパーロボット軍団の方は……………

「行くぞー！！ファイアーブラスターー！！」

「「ゲッタービームー！！」」

「行けっ！フィンファンネルー！！」

「ターゲット確認、マルチロック。……………行つけー！！」

「こいつー！！」

「デイスターションアタックー！！」

「念動拳……T・LINKナツコー!!」

「どんな装甲だろうと……ただ、打ち貫くのみ!!」

「サイバスターの奥義を見せてやるぜ……秘剣!!デイス
カッター乱舞の太刀!!」

「行くぜ……マイハニー、アガレスちゃん……魔隴百裂拳!
!」

「これが俺の機神拳だ!……機神轟撃拳!!」

「行くぞ!ペイリネス!!……氷華絢爛覇!!」

「行くぞ!!紅蓮魔炎陣!!」

「我が機神拳に敵は無い!!……機神猛撃拳!!」

「バーナウ・ファー・ドラグ!!……行け!ファイアドラゴン
!!」

「お別れですの……貴方の体と魂に……。」

「ソウルゲイン!フルドライブ!!行けえい。……ハア

ッ!タアッ!ハッ!ハアッ!ウオオー!!コード麒麟!!この
一撃で極める!!でいやぁー!!」

マシンカイザーはファイアーブラスター、真ゲッターロボ&am
p・真ドラゴンのゲッタービーム、vガンダムフィンファンネル、
ストライクフリーダムのハイマツトフルバースト、デステイニーの
アロنداイト、ブラックサレナのディストーションアタック、アル
トアイゼン・リーゼのリボルビングハンガー、R-1のT・LINK
Kナツクル、サイバスターのデイスカッター乱舞の太刀、Gコンパ
チブルカイザーのファイアドラゴン、ソウルゲインの麒麟、ペル
ゼイン・リヒカイトのマブイエグリ、アガレスの魔隴百裂拳、ペイ
リネスの氷華絢爛覇、マルディクトの紅蓮魔炎陣、ビレフォールの
機神轟撃拳、ヤルダバオトの機神猛撃拳で敵勢力を一気に粉碎した。

「アクセル!ここにいたのか。」

「ああ……」

アクセルとアルフィミイは、アムロ達……『ロンド・ベル隊』、キョウスケ達の『地球連邦軍極東支部所属クロガネ・ヒリユウ改』のメンバーと久しぶりに顔を合わせた。もちろん……この男も

……

「元気そうだな、あいつら……。」

「知り合い？」

と、ゆりがジェスに聞いた。

「ああ、前まで世話になっていた……」「ジェスー？」部隊
つて……わっ……！

「ギョッ……！ダキッ……」

「……？」

「離れる！アイビス……！」

「イヤーだ……」

「ねえ……私のジェスから離れてくれない？……」

「えっ？……でも、ジェスと一緒に寝たこと無い人が何を言っ
てるの？」

「へえー？……言ってくれるわね。」

「落ち着け……！ゆり……！」

「アイビスもやめておけ。」

ゆりを宥めるジェスとアイビスを宥めるスレイ。

その後、ガイアセイバーズのメンバーとロックマン達はそれぞれの世界に帰っていく。

それから、ジェスのライドブッカーのカードにウルトラライドやカメンライド、キュアズライドのカード以外にユニットライドとロ

ツクマンライド、メタルヒーローライド、スーパー戦隊ライドのカードが追加された。

第19話 聖王と霸王の拳／青き魔導師とJのデバイス（後書き）

ジェス「長くね……………これ？」

ゆり「ジェスが魔導師に……………じゃあ、私とジェスが結婚して子供ができたら……………その子が魔導師になることがある……………」

……………ジェス……………子供は双子がいいわ？」

ジェス「ゆりー戻って来ーい！！！」

マサキ「まっ……………やっと俺達も出れたって訳だ。」

作者「悪かったな……………出番が遅くて……………」

ゆり「私は……………ジェスといれば別にいいわ。」

ジェス「ゆり……………」

作者「このままだとピンクオーラを出しかねないので次回予告に移る。……………次回 第20話 魔物とモンスターマスター。」

????「今、伝説が開かれる。」

作者「誰？」

第20話 魔物とモンスターマスター（前書き）

ガツシュキャラとモンスターマスター（オリジナル設定キャラ）を
だしました。

第20話 魔物とモンスターマスター

先の戦闘から二週間……………クラナガンは、平和な日々が続いていた。……………そして……………タイムセイバーズ・訓練場では……………

「デイベイーン……………バスター!!」

「ティオ!!」

「ええ!!」

「マ・セシルド!!」

なのはとジェスがデバイスと魔導書だけの装備で模擬戦をしていたが……………なのはが使用する魔法をジェスは、蒼天の書にインプットされている、魔本の力だけで防いだり、相殺していた。

「レナンの奴……………魔導書だけで高町の魔法のほとんどを防いでいるのか。」

その模擬戦を見ていた烈火の将シグナム……………バトルマニアです。

ミッドチルダ とある砂漠地帯

「此処は……どこ？」

「キュウ？」

「お前もそう思うか？ドラ吉。」

この少年と一匹のドラゴンはいっ……たい……。

タイムセイバーズ・会議室

「このところ、平和やけど……砂漠地帯で微量の魔力反応を観測した、と……調査隊から連絡があつたんや。」

『微量の魔力反応？』

「ああ……だが、その魔力反応を分析した結果、高町や八神とは違う魔力パターンだった。……そこで、ジェスとハートキヤッチプリキュアのメンバーで確かめに行つてほしい。」

『了解！！／はいっ！！』

そんでもって、砂漠地帯

「あつっー。」

「もう……歩けないです。」

「ほら、がんばろう二人とも……。」

暑さでバデてきたつばみとえりか。その二人を励ますいつき。

「仕方ない……青龍！」

ジェスは、青龍の力でミネラルウォーターを自分を含めて五つ生成した。

「ほらよ！！いつきも！……ゆりも持つておけ。」

『ありがとう。』

砂漠を歩いていたら、オアシスの手前で倒れている、一人の少年と一匹のドラゴンを発見した。

そして、オアシスに少年とドラゴンを運んだ。（少年をゆりが、ドラゴンをジェスが魔本で召喚した、ウォンレイ、ブラゴ、ダニーと一緒に運んだ。）

「んっ……………はぁ…。」

「目が覚めた？」

「あれっ？……………僕は……………はっ！！ドラ吉！！」

「安心しろ。お前のドラゴンなら、大丈夫だ。……………いま、

みずから見張りをしてる。」

「そうですか……………よかった。」

ジェスの言葉に安堵した少年。

「お前……………名前は？俺はレナンジェス・アルマー。」

「私は、月影ゆりよ。」

「私、花咲つぼみです。」

「私は、えりか。来海えりかだよ。」

「僕はいつき。」

自己紹介をした、ジェス達……………

「僕は……………ユウ。」

「ユウ……………」

「ユウ君は、どうしてあんなところで、倒れてたの？」

「わからない。僕は……………」旅の扉”に入って、”ダーマの

神殿”の周辺でドラ吉の”レベル上げ”をしてたら、いきなり光に包まれて……………気が付いたら此処に。」

『ダーマの神殿?』

疑問詞を浮かべる四人。しかし、一人だけ違う反応をした。

「ダーマの神殿……………それに旅の扉……………もしや、”モンスターズの世界”か?そしてユウ、お前は、”モンスターマスター”だろ。」

「うん。」

ユウという少年から事情を聞いて、『一旦、戻って来い!』との連絡が入り、戻ろうとした時……………

「この辺で良いだろう。……………暴れろ……………最凶最悪獣・キマイラドラゴンよ。……………それと、『ザランガ』貴方の兵を借りますよ。」

ジェス達の前にキマイラドラゴンとアンドロイド軍団が現れた。

「こいつらは……………」

「デカイ方は解らないけど、周りにいるのは……………スペースギルダーの一人が使う戦闘兵……………」

そこへ……………

「ご明察……………そう、ザランガの使うアンドロイド兵ですよ。……………キュアムーンライト……………是非とも、我が”コレクション”に加……………」

えたい。」

「貴様……何者だ！」

「おおっと、失礼……私の名は、ロウガ……収集のロウガです。」

「お前は………ゆり達が言ってた”スぺースギルダー”の一員か！」

「その通り………今日は、ご挨拶に参りまして………我がコレクションの一つキマイラドラゴンの相手を探していたところです。」

………さあ、貴方達にこのキマイラドラゴンが倒せますか？」

そう言つと………ロウガは姿を消した。

「皆……行くわよ！」

『はいっ！！』

つばみ達は、自分の変身アイテム……ココロパフームを取り出した。

『プリキュアの種、いくです（ですう。）（でしゅ。）』

ゆりは、ココロポットを取り出した。

『プリキュア！！オープン・マイハート！！』

「ライジングパワー！！オーバードライブ！メタルフォーゼ！！」

つばみとえりかはピンクとブルーの光、いつきは金の光、ゆりは銀の光、ジェスは黄色の光に包まれた。

「大地に咲く、一輪の花！……キュアブロッサム！！」

「海風に揺れる、一輪の花！……キュアマリン！！」

「陽の光浴びる、一輪の花！……キュアサンシャイン！！」

「月光に冴える、一輪の花！……キュアムーンライト！！」

『ハートキャッチ！！プリキュア！！』

「天を翔ける、黄色い稲妻……雷の龍騎士！！ドラゴンソルジャ―・ライジング―！！」

ゆり達は、プリキュアにジェスは、ドラゴンソルジャーにそれぞれ変身した。それを見ていたユウは……………

（ほんとに違う世界なんだ…………。）

「俺はデカブツを、ムーンライト達はアンドロイド兵を。」

『ええ！／はいっ！』

プリキュアとドラゴンソルジャーがキマイラドラゴンとアンドロイド兵に向かい走って行く。

ハートキャッチプリキュア対アンドロイド兵

「マリン！」

「オツケーー！！ブロッサム。」

ブロッサムとマリンはアンドロイド兵の真ん中で背中を合わせて、手を繋いだ。

『プリキュアー！！大爆発！！』

ブロッサムとマリンの合体技でアンドロイド兵のおよそ70％が倒れた。

「プリキュアー！ゴールドフォルテ・バーストー！！」

サンシャインの必殺技で20％が倒れた。

「やるわね、あの子達……………はっ！！？」

ムーンライトがブロッサム達の方を見た、一瞬の隙を突き、アンドロイド兵の剣装備型がムーンライトの眼前に迫っていた。

『ムーンライトー！！』

（やられる！！でもっ！…………）

剣がムーンライトに振り下ろされる……………その時!!

「マ・セシルド」

巨大な盾がムーンライトを護り、アンドロイド兵を吹き飛ばした。

「えっ!？」

「大丈夫ですか？」

「貴方は？」

「私はめぐみよ。そしてこの子は、私のパートナーのティオ。」

「ありがとう。でもアンドロイド兵は？」

「ああ……………それなら……」

「バオウ・グロウ・デイスグルグー!!」

残りのアンドロイド兵が『金色に輝く龍の爪』によつて、2%迄に減少した。

「めぐみさん!そっちは、大丈夫ですか。」

「ええ、大丈夫よ。清磨君。」

「そうか……………よかつ「清磨」……………ガッシュ。」

「ガッシュ？」

「残った輩を早く倒そうぞ……………ウヌ??」

「君は……………」

ムーンライトは、ガッシュと呼ばれた少年に覚えがあつた。

「御主、あの時の龍騎士の近くにいた者だの。」

「あの時の少年ね、君は。」

「なに、じゃあガッシュが話してた事は本当だったのか。」

ムーンライト達が話していると、残りのアンドロイド兵がムーンライト達の方へ向かってきた。

「ちい……………ガッシュ!!」

「ウヌ!!」

「私も!!」

「バオウ・ザケルガ!!」

「プリキュア!!シルバーフォルテ・ウェーブ!!」

ガッシュから雷の巨大龍、ムーンライトの銀の力を秘めた花の蕾

がアンドロイド兵に向かい、残りを全て、倒した。

ドラゴンソルジャー対キマイラドラゴン

「なんて……………馬鹿でかい上に……………ハッ!!」
「ガァー!!」

ドラゴンソルジャーは、キマイラドラゴンの巨大な身体とその身体から繰り出される攻撃に苦戦していた。

（頭はしんりゅう、腕と胴はエスターク、脚は白竜王、羽は神鳥レティス……………ほぼ最強クラスの合成獣じゃねえか。）

「モンスター達をあんな風に……………許せない!」
（!!……………この気……………ユウか。）

「ドラ吉は休んで……………出番だ。……………デュラン!グレイトドラゴン!ダークドレアム!」

ユウは、魔物達を無理矢理、合成して戦闘に出している、奴らに怒り……………本気のパーティーを召喚した。

「ユウの奴……………本気だな。俺もだすか……………コール!!ゴー
ルデンゴーレム!デスピサロ!キラーマシーン2!」

ドラゴンソルジャーは、三体の魔物を召喚した。

「ユウ!やるぞ!!」
「ああ!!」

「デュラン!ダークドレアム!」
「ゴー
ルデンゴーレム!キラーマシーン2!」
『ギガスラッシュ!!』 四体が放つギガスラッシュがキマイラ

ドラゴンを襲う。

「ガア？」

「グレイトドラゴン！」

「デスピサロ！」

『ビックバンー!!』

二体のビックバンがキマイラドラゴンに直撃した。

「ゲウー?.....」

キマイラドラゴンの一瞬の間を見逃す.....はずもない.....。

・ドラゴニック・フルチャージ・

そこにムーンライト達も駆け付けた。

「皆、行くぞー!!」

『ええ!／はいっ!／ああ!／ウヌ!』

『プリキュア!フローラルパワー・フォルテッシモー!!』 ↑プロ

ツサム&マリ

『プリキュア!フローラルパワー・フォルテッシモー!!』 ↑サン

シャイン&ムーンライト

「シン・バオウ・ザケルガー!!」

「ライジング・デイスグロウ・ボルガニックー!!」

ドラゴンソルジャー達の必殺技が決まり、キマイラドラゴンはそのばに倒れ、ユウにだけ聞こえるモンスターボイスでユウに言った。

「我等を倒してくれて礼を言う。そなたなら.....最高のマスターになれる。.....頑張るのだ!!それと、ありがとう。」

キマイラドラゴンを倒すと、同時にユウの身体が光りはじめた。

清麿達は.....灰色のカーテンにより自分達の世界に戻った。

「ユウ.....」

「元の世界に戻るのか.....。」

「うん。……少しの間だったけど……楽しかった。……
さよなら、お姉ちゃん達。」
そう言っ、ユウは、自分の世界に戻って行った。

その後………砂漠地帯で起きた戦闘映像を公開し、魔物への警戒心を無くし、魔物と人との共存を推奨したジェスであった。

第22話 驚き！！切り札と杖、二人の少女戦士／降臨！！魔弾の龍騎士（前書

今回、私が書いている、もうひとつの作品からのゲストが登場します。あと、新キャラクターも出ます。

第22話 驚き!!切り札と杖、二人の少女戦士/降臨!!魔弾の龍騎士

クラナガン 某所

???「ねえー”ジョー”。」

「なに?”ツエ”………って言うか、私の名前は”シヨウ”よ。」
「いいじゃんかー。だったら私は、ツエじゃなくて”璃杖^{リジョウ}”だよ。」

この二人は、俗に言う、一般市民である。だが………ある日の出来事が二人の日常を変えていく。

タイムセイバーズ・訓練場

カラオケ大会が終了した三日後………スターズ分隊とライトニング分隊は、高町なのはのトレーニングを受けていた。

「リボルバー………」

「クロスファイアー………」

「「シュート!!」」

「レイジングハート………」

- protection -

スターズ分隊はなのはと模擬戦をしていた。

ライトニング分隊は………

「じゃあ………少しスピードを上げていこう。」

「「はいっ!!」」

二人一緒に回避練習をしていた。

そして、訓練場には……………自身の鍛練を行う者もいた。

「ハアッ！！」

「ハッ！！」

アレディとフォルカである。

同・会議室

「改めまして、フェニーです。」

「氷孤ですわ。」

『よろしく願います（わ）。』

「はい、よろしく。うちがタイムセイバーズ部隊長の八神はやてや。」

「俺は、副部隊長のアクセル・アルマーだ。」

自己紹介をする、フェニー、氷孤、はやて、アクセルの四人。

「アルマーって……………ひょっとして、レナンお兄様の……………」

「兄だ。」

「そっそんなー！！お兄様にご兄弟がいらっしゃるなんて……………聞いてませんわ。」

「おーい、氷？」

下を向いて固まる氷孤、それ呼び続けるフェニー。

（本当にこいつらが、新しい戦士なのか？）

疑問に思うアクセル、何にも考えてないはやて……………そんな日だった。

三日後……………クラナガン郊外のパトロールを
命じられたジェスは、フェニーと氷孤、ゆり達ハートキャッチチー
ムとかれん達プリキュア5チームを連れていた。
「ねえ、ジェス……………どうして二人つきりじゃないの？」
ジェスと二人つきりじゃない状況に不満なゆり。
「仕方ないだろ……………くじで決まったんだし。……………それより
……………氷孤、かれん……………いい加減に離れてくれ。」
ジェスは今……………背中に氷孤をおんぶし、かれんに右腕をホル
ドされている状態だった。その状態に不満と怒り浸透中のゆりだっ
た。

「嫌ですわ。お兄様？」

（お兄様……………？）

「ごめんなさい……………でも……………もう少しだけ。」

（もう少し〜？）

それを見ていた他メンバー。

『（ゆりさんが……………怖い……………）』

そんなメンバーのパトロール光景だった。

異空間

「次は誰だ……………」

ダークザギが問う……………。

「私が行こう。……………この者共を連れて。」

「いいだろう……………行け！！ダークプリキュア！」

「ハッ！！（待っている、月影ゆり……………今回こそは……………倒す！！）

「

一方……………」

「ねえ見て見て、シヨウ……………」
「なんか？」

「なんで……………」
同じ女性の私があんたの着替えた姿を見て感想を言わなきゃいけないのよ。」

と、シヨウは呆れと怒りが混ざった様な声を出して、歩き出した。
「あつ！シヨウ。」

「だいたい、あんたは少し子供っぽいのよ。下着だって、一週間の内、五日間はプリキュアの下着を着けてるでしょ。」

「なつ、何故それを！」

「誰が……………」
洗濯してると思ってるのよ。」

「アハハハ……………」
「すいません。」

実はこの二人……………」
同じ部屋で暮らしているが、シヨウが掃除、洗濯を担当して、璃杖が料理を担当している。

「でも、シヨウは……………」
椎茸……………」
残すでしょ。」

「そつ……………」
それは……………」
「おいっ！『デネブ』っ！！お前、また椎茸入れやがっただろ。」
……………」
えっ誰？」

「ごっ、ごめん！『悠斗』。」

（あの二人……………」

シヨウが見ている二人組の一人は、デネブ。デネブは、仮面ライダー電王に出てるデネブと同じで、もう一人は、仮面ライダー電王の『桜井』とは違う桜内悠斗……………」
……………」
シヨウが悠斗達の方を見ていると……………」。

「ボスッ」

「ニヤッ！？」

何故か？猫の様な声で転ぶシヨウ。

「悪い、大丈夫か？」

「んもう、ちゃんと……前を見……て……。」

シヨウとぶつかったのは、現在パトロール中のジェスだった。そのジェスの顔を見たシヨウは……

（カツコイ……私のタイプにピッタリの人だ。）

などと、思っていて……

「立てるか？何なら、手を貸すが？」

「あつ……ありがとうございますノノ。」

赤くなりながら、ジェスの手を取り立つ、シヨウ。しかし……
立つてすぐに殺気を感じた。（ジェスも）

（私のジェスに近寄らないで……絶対に！！）

ゆりからの鋭い視線と黒いオーラを感じた、ジェスとシヨウ……
他のメンバーは……ゆりに対し恐怖しか抱けなかった。

そんな時……

「見つけたぞ！！プリキュア！！」

『！！』

ダークプリキュアが舞い降りて来た。

「ダークプリキュア！！」

「月影ゆり……今日こそ倒す！！行け！！」

ダークプリキュアがそう言うつと、モルイマジン、ジャマンガの
使い魔、スナッキー、マスカレートドーパント、ワーム（蛹体）が
合計120体現れた。

「くっ……」

すると……

灰色のカーテンが発生し三人の青年が現れた。

「此処は？」

「あけぼの町じゃあ……ないようだ。」

「ああ。」

「あつ！！剣二さん。」（ダキッ）

「鋼ーッ!!」(ギョッ!!)

「オワッ………って、つばみちゃん!?!」

「放せ!来海!!」

「お久しぶりです。不動さん。」

「そうだな。」

三人の青年を知っている、ハートキャッチチームとプリキュア5
チーム。

「あの三人は………」

「……誰?」

三人をまったく知らない、フェニー、氷孤、シヨウ、璃杖。そこ

へ………

「モールイマジン!!」

ジェス達から、離れたところにいた悠斗がやってきた。

「おいっ!!やるぞ!!」

『ああ!!/ええ!!』

すると……ジェスのデバイスである『ブレイティックブレイカー』
に変化が起きた。

- マスター……魔弾モードの封印が解除されました。いけます。 -

「オッケー!!……行くぜ!!」

イメージ曲 GO!!リユウケンドー

「ゴッドゲキリユウケン!!」

「ゴウリユウガン!!」

「ザンリユウジン!!」

「ブレイティックブレイカー・魔弾モード!!」

「ゴッドリユウケン!!」

「マグナリユウガンキー!!」

「リユウジンキー!!」

「ナイトリユウケンキー!!」

『発動!!』

『チェンジノゴッドリユウケンドー/マグナリユウガンオー/リ

ユウジンオー/ナイトリユウケンドー』

「撃龍……」

「剛龍……」

「斬龍……」

「騎龍……」

『変身！！』

それと、同時に剣二は青い龍、不動は赤い龍、白波は黒い龍、ジエスは銀の龍の力を身につけていく。

「ゴッドリユウケンドー！！」

「マグナリユウガンオー！！」

「リユウジンオー！！」

「ナイトリユウケンドー！！」

『ライジン！！』

ジエス達が変身した直後、シヨウと璃杖の右手が光りだし、のぞみ達と同じ変身アイテム『キュアモ』がその手にあった。

「みんな！行くよ！！」

『YES！！』

イメージ曲 ハートキャッチプリキュア変身BGM

『プリキュア……メタモルフォーゼ！！』（のぞみ、りん、うらら、こまち、かれん、シヨウ、璃杖）

「スカイローズ・トランスレイト！！」

『プリキュア・オープンマイハート！！』（つばみ、えりか、いつき、ゆり、フェニー、氷孤）

のぞみ達やゆり達は、それぞれの光の中で戦士に変わっていく。

「大いなる希望の力……キュアドリーム！！」

「情熱の赤い炎……キュアルージュ！！」

「はじけるレモンの香り……キュアレモネード！！」

「やすらぎの緑の大地……キュアミント！！」

「知性の青き泉……キュアアクア！！」

『希望の力と未来の光り！華麗にはばたく五つの心……Yes！
プリキュア5！！』

「青い薔薇は秘密の印……ミルキィローズ！！」

「大地に咲く一輪の花……キュアブロッサム！！」

「海風に揺れる一輪の花……キュアマリン！！」

「陽の光り浴びる一輪の花……キュアサンシャイン！！」

「月光に冴える一輪の花……キュアムーンライト！！」

『ハートキャッチ・プリキュア！！』

「疾風に舞う一輪の花……キュアサイクロン！！」

「氷雪に咲き誇る一輪の花……キュアアイス！！」

「必勝の黒い切り札……キュアジョーカー！！」

「魔を覆滅する金の杖……キュアロッド！！」

のぞみ達はプリキュアに変身した。

イメージ曲 ACTION - ZERO

「デネブ！！」

「了解」

悠斗は、ゼロノスカードを出した。

「変身！！」

- ALTAIRU FORM -

悠斗はゼロノス・アルタイルフォームに変身したと、同時に……

……

「最初に言っておく！俺は、かなり強い。」

デネブは……悠斗の横に立っていた。

すると、ジェスの手元に四枚のカードがライドブッカーから飛び出した。

「これは……面白い。」

すると……ブレイティクブレイカー・ナイトゲキリユウケンに仮面ライダーナイト・サバイブのダークバイザツヴァイの様なカードインスロットが現れた。

「おいっ！その四人！！」

『何？』

- CURESRIDER RIDE..... -

- CYCLONE -

- JOKER -

- ICE -

- ROD -

「痛みは、一瞬だ。」

『えっ？…ちよつ、ちよつと待っ……………う！』

- CYCLONE -

- JOKER -

- ICE -

- ROD -

キュアサイクロン達は、キュアズライダーライドの効果で、キュアサイクロンはキュアズライダーサイクロン、キュアジョーカーはキュアズライダージョーカー、キュアアイスはキュアズライダーアイス、キュアロッドはキュアズライダーロッドに超絶変身した。（FINAL FORM RIDEではないので”超絶変形”ではなく”超絶変身”と書いてます。）

「これって……………」

「仮面ライダーWに似てますわね。」

「でもさあ……………」

「マスカレートドローパントの相手には……………ちようどいいかも。」

ちなみに……………サイクロン、アイス、ロッド、ジョーカーの順の台詞です。

全員が戦闘に入ろうとした時に……………空中に時空の歪みができ、中からデンライナーが空中に線路を形成しながら降りてきた。そして、デンライナーから一組の少年と少女と一人の青年と6体のイマジンがいた。

「ハナさんは……………下がってて。」

「うん。」

「みんな……行くよ。」

少年がそう言うと一緒に以外のイマジンと青年がベルトを巻き、少年もベルトを巻いた。

『変身。』

- SWORD FORM -

- ROD FORM -

- AX FORM -

- GUN FORM -

- WING FORM -

- LINER FORM -

- STRIKE FORM -

少年達は、なんと！！仮面ライダー電王に変身した。

「俺、……参上！！」

「お前達……僕に釣られてみる？」

「俺の強さにお前が泣いた。」

「お前達……倒すけど良いよね？……答えは聞かないけど。」

「降臨！……満を辞して。」

『幸太郎、カウントは？』

「要らないさデイ。ゼロになってからが、本当のスタートだ。」

「みんな……行くよ。」

それぞれの電王が登場時の台詞を言った時にジェスは……

「あいつら……野上達が……。」

電王が登場した後、バイク音が轟いたと思ったら、ジェス達魔弾戦士とゆり達プリキュアの間にハードボイルダー、スカルボイルダー、ディアブロッサが停まった。

「翔太郎！」

「よっ！……行くぜ、フィリップ！！」

『ああ、翔太郎！！』

- CYCLONE -

- J O K E R -

「俺を忘れるな。左！」

- A C C E L -

「俺も忘れるなよ。翔太郎……。」

- S U K L L -

「『変身！』」

「変……身……！」

「変身……」

- C Y C L O N E J O K E R -

- A C C E L -

- S U K L L -

「『さあ……お前達の罪を……数えろ！』」

「さあ！……振り切るぜ……！」

魔弾戦士、風都ライダーズ、プリキュア、キュアズライダー、仮面ライダーゼロノス、仮面ライダー電王各種フォームが横に並んだ。

「みんな……行くぞ……！」

ナイトリユウケンドーの掛け声で全員、敵の集団に突っ込んで行く。

ゴッドリユウケンドー、マグナリユウガンオー、リユウジンオー
対ジャマンガの使い魔

「ハアッ……！」

「ダブルショット……！」

「フンッ……！」

順調に使い魔を倒して行く魔弾戦士……すると

「半月の太刀……！」

「セイツ！……………今は……………」

「流石だな、リュウケンドー！！」

「ジャークムーン！！」

なんと！！ゴツドリユウケンドー……………鳴神剣二のライバル…ジャークムーンがそこにいた。

「今回は、挨拶に來ただけだ。リュウケンドー！！相應しい舞台でまた会おう。」

そう言うと、ジャークムーンは消えた。

「ジャークムーン……………」

『剣二！！今は、目の前の敵を討て。』

「判ってるって。不動さん！鋼ー！！」

「ああ！」

「ふっ……………いいだろう。」

ゴツドリユウケンドー、マグナリュウガンオー、リュウジンオーは、使い魔を前に横に並んだ。

『ファイナルキー……………発動！！』

《ファイナルクラッシュ！！》

「龍皇魔弾切り！！」

「マグナドラゴンキャノン……………発射！！」

「ザンリュウジン……………乱舞！！」

「ガァー！！！！」

「闇に抱かれて眠れ。」

「THE・END！」

仮面ライダー電王チーム&仮面ライダーゼロノス（ミッド）対モルイマジン

「こう……数が多いとねえ。……ハッ！」

「オリヤー！……ブツブツ言ってるじゃねえよ亀！」

「そうやで、亀の字。……フンツ！」

「イエーイ！……それ！……そこ！」

「フツ……ハッ！」

『幸太郎、右からだ。』

「サンキュー。デディ……ハッ！」

「来いっ！デネブ。」

「了解！！」

- VEGA FORM -

「最初に言っておく、胸の顔は飾りだ。」

『（んな事は、どうでもいいんだよ。）』

悠斗とデネブは、ベガフォームになったらデネブがボケて悠斗がツツコミを入れる構造になっていた。

「（デネブと僕らが知ってる『侑斗』と一緒にだ。）」

「何と何が一緒、何だよ野上！！」

「えっ……侑斗？」

「フンツ……来いっデネブ！！」

『了解！！』

- ZERO FORM -

「最初に言っておく……俺は、かなり強い！！」

『その通り！！』

なんと！！野上良太郎の世界の桜井侑斗がやって来ていた。

「野上！！一気に決めるぞ！」（電王・ゼロノス）

「うん。……みんな、準備は良い？」

「いつでも、かまわねえよ。」

「同じく。」

「ドンッと行くで。良太郎。」

「よし、やるぞ。」

「かまわんぞ。良太郎。」

「こっちも良いよ、じいちゃん。」
「こっちも良いぞ!」(ミッド・ゼロノス)

- FULLCHARGE -

「必殺…………俺の必殺技…………」

- FULLCHARGE -

「さあて……………」

- FULLCHARGE -

「フン……………」

- FULLCHARGE -

「よし……………」

- FULLCHARGE -

「フツ……………」

- FULLCHARGE - x2

「ハアーーーー……………」(電王・ゼロノス&ミッド・ゼロノス)

『幸太郎…………』

「12…………いや9で良い。」

- CHARGE&UP -

「ハアーーーー……………」

「異世界バージョン!」

「それっ!…………ハアーーーー!」

「行つけー!」

「フツ…………ハッ!」

「オリヤー!」(電王・ゼロノス)

「ヌウン!」(ミッド・ゼロノス)

『3…………2…………1…………0!』

「ハアーーーー!!」

「電車切り!!」

「ドガーーン」

「必殺!ダイナミックチョップ……」

(やっぱ……後から言うんだ。) ↑ 良太郎です。

風都ライダーズ&キュアズライダー対マスカレートド
パント&ウーム(蛹体)

「いっぱい……いんな。」

「仕方ないわね。フォルムチェンジ……トリガー!!」

「TRIGGER」

『翔太郎……僕らもやろう。』

「そうだな、フィリップ。」

「LUNA」

「TRIGGER」

「LUNATRIGGER」

「行くぜ……お嬢さん。」

「そちらも……しくじらない様にね。」

「TRIGGERMAXIMUMDRIVE」

「『トリガー……ツインマキシマム!!』」

「翔太郎の方は……派手にやってるな。」

「シヨウ、すごい!!私だって……フォルムチェンジシャド

ー!!」

- SHADOW -

「ほう……影の力が……なら、同時に行こうか、レディー？」

「まだ、”ベイベー”でも良いですよ。」

- SHADOW MAXIMUM DRIVE -

「フッ……そうかい。」

- SKULL MAXIMUM DRIVE -

「ライダー……ツインマキシマム!!」

「ハアッ!!」

- CYCLONEMAXIMUMDRIVE -

「サイクロン・ブロー!!」

「アイスセイバー!!」

キュアズライダーアイスはアイスセイバーを取り出し、構えた。

「サイクロンブレード!!」

キュアズライダーサイクロンもサイクロンブレードを取り出し構えた。

「俺も行くか……。」

- ENGINE -

「さあ……二人共、準備は良いな？」

「んーと……照井さんの言葉を借りると……」
すると、サイクロンとアイス同時に……

「私達に質問しないでくれる。」

と、アクセルに返した。

「そう言う照井さんは？準備……良いですか？」

「俺に質問するな!……行くぞ。」

- ENGINE MAXIMUM DRIVE -

「オッケー!!」

- CYCLONEMAXIMUMDRIVE -

「わかりましたわ。」

・ICE MAXIMUM DRIVE・

「……ライダートリプルマキシマム!!」」」

風都ライダーズ&・キュアズライダーはマスカレード・パントとワームをマキシマムドライブを発動させて全滅させた。

プリキュア5対スナッキー

「プリキュア!プリズムチェーン!!」

「ガシッ!!」

「束ねました。アクア!!」

「ええ、ルージュ!!ミント!!ついて来て。」

「オッケー!!」

「ええ!!……プリキュア!エメラルドソーサー!!」

「プリキュア!!ファイアーストライク!!」

「プリキュア!サファイアアロー!!」

アクア、ルージュ、ミントの攻撃でスナッキーの半数を倒した。

「よし……久々にプリキュア・クリスタルシュート!!」

「ミルキィローズ・メタルブリザード!!」

スナッキーの残りがドリームとローズの攻撃で全滅した。

「あとは……ダークプリキュアだけ……」

「頼んだわ……プロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト、ナイト……」

ハートキャッチプリキュア&・ナイトリユウケンドー対ダークプリキュア

「残ったのは……貴女だけよ、ダークプリキュア!!」

「観念しろ!!」

「観念か……その前に……ナイトリユウケンドーとやらよ、貴様に聞く。」

「なんだ?」

ダークプリキュアがナイトリユウケンドーに聞きたい事とは?

「お前のその力は……」

しばしの沈黙。

「チート能力なのか?」・ドンツ!ガラガラ、ガツシャーン!!……その質問を聞いたその場の全員が某お笑い番組の吉。新喜劇の如く転んだ。

「俺の力はチートじゃねえ!!」

「じゃあ、何なんだ!!」

「俺の力は、俺自身の激気や気力、ダイノガッツ、モジカラ、光の力、魔力、超力、それに……星の力^{アース}、超能力、お前と同じ闇の力を様々な世界を渡ったり、戦士として闘ってたら自然と身に付いたんだよ!!」

「いやいや、自然と身に付かない物が入ってるだろ!!」

何故か、昔からの親友の様に言い争いを始める、ナイトリユウケンドーとダークプリキュア。

「だいたい、何故……貴様がムーンライトといつも行動しているんだ!」

……

『ハイ?』

「お前の隣は私だろ!」

「いや、ちょっと待て!……何がどうなってそうなるんだよ。」

「

「私だって、私だって……………あんたと一緒にずっと居たいんだよー!」

「……………ハッ?」

いきなりのダークプリキュアの爆弾発言に、眉間と眉がピクツと動いたムーンライト。

「本当なら……………あの時(第16話 風と氷雪二人の戦士の回参照)、一緒に行こうと思ったが……………あの時はさすがに我慢したが……………もう限界だ!」

「おいっ!!もうちよつと…考え……………!!」

ナイトリュウケンドーはダークプリキュアに何かを言う前に……………

…ダークプリキュアを狙う様に伸びるレーザーサイトを見つけた。

「危ねえ!!」『闇^{アシ}!!」

「フェッ!?!/!/」

ナイトリュウケンドーに抱き寄せられて顔が赤くなるダークプリキュア。その直後……………

…ダアン!」

ダークプリキュアがいたところに銃弾の弾頭部分が埋まっていた。

「!」

ナイトリュウケンドーが弾が飛んできた方を見たが……………既に、誰も居なかった。

「仕方ない……………一緒に来るか?」

「ああ!」……………「レジス」/!/」

「どう……………いたしまして……………『闇お嬢様』」

こうして、ダークプリキュアを仲間に引き込んだジェス。……………

……………しかし、これがゆりと闇とジェスの三角関係の構図の下地となるうとは、誰も解らなかった。

第22話 驚き！！切り札と杖、二人の少女戦士／降臨！！魔弾の龍騎士（後書

作者「ダークプリキュアの性格その他もろもろキャラ崩壊しちゃった。……………まあ、別の次元や別世界には影響ないからな。」

ジェス「次回、第23話 ブルーディケイド新たな力／零矢、新アイテムゲット」

主人公設定3 + その他（前書き）

23話、投稿する前に投稿しておきます。

主人公設定3＋その他

作者「やってまいりました！主人公設定3です。」

ジェス「妙な設定じゃあ、ねえだろうな。」

作者「その他の設定も掲載します。」

ウルトラマンメビウス・キュアズウルトラブレイブ

ウルトラマンメビウスに全ウルトラ戦士の技と能力、プリキュアの力が一つと、なった時、誕生した進化形態。ウルトラ戦士の技にプリキュアの力をプラスすることができる。……………組み合わせの例として……………ティガフリーザー＋アイスコフィン＝アイスフリージング。……………アローレイ・シュトローム＋サファイアアロー＝サファイアアローレイシュトローム。……………等など様々な組み合わせがあるが………プリキュアの力とウルトラマンの力の組み合わせの……………『ウルトラマンメビウス・シルバーナイトブレイブ（ウルトラマンメビウスブレイブ＋キュアムーンライト）の時にしか出せない、……………『メビウムナイトフォルテニックシュート』の様に特定のフォームでしか出せない技もある。

ナイトリユウケンドー

ジェスがブレイティックブレイカー・魔弾モードを使用することで変身する魔弾騎士。ゴッドリユウケンドーの様に剣と盾を駆使して闘う。ちなみに……………たまに、ライドカードやアドベントカードを使う事がある。

ブレイティックブレイカー C・V稲田 徹

ジェスが使用するデバイス。インテリジェントデバイスなので、デバイスに人格があり、ジェスの能力を120%引き出す事ができる。……何故、眠りについてたのかは……闇の書のマテリアルが居た世界（ゲームのなのはの世界）で……マテリアルの一人、星光の殲滅者と一戦交えた結果、損傷して回復の為、リペアモードに入っていたから。

蒼天の書

ジェスが使用する魔導書。管制人格は元夜天の書の管制人格だったリインフォース・アイン。……ブレイティックブレイカーの起動キーの一つでありブレイティックブレイカーがリペアモードに入ったと同時にジェスの前から消えた魔導書。……ただし、ジェスが魔法（なのは系やガッシュ系）を使う時はリインフォース・アインとユニゾンしなければならない。

ドラゴンソルジャー・ライジング

ジェスがプリキュアのサポートをする時に基本的に変身する姿。

……プリキュアとの連携攻撃や合体攻撃が得意。

仮面ライダーG電王/仮面ライダーマンティス

ヴィヴィオが変身するライダー。G電王が基本フォームだが、状況によりガンフォームやストライクフォームになることができる様にデンライナーのオーナーに渡す前に黒崎レイジが改良した……ちなみに人工イマジンのイヴは付いてない。……マンティスは、名前のとおり、カマキリのライダー。カブトとは違い最初からライダーフォームだ。必殺技は、両腕のマンティセイバー（オーズのガタキリバコンボのカマキリブレードを細く鋭くした物）で敵を切り裂く『ライダースラッシャー』だ。

キュアズライダー

ブルーディケイドのキュアズライダーライドの効果で、キュアサイクロン、アイス、ジョーカー、ロッドの四人が超絶変身したライダー。Wと同じ様なフォームチェンジ能力『フォルムチェンジ』を持ち、W、アクセル、スカルとの連携を得意とする。

主人公設定3＋その他（後書き）

作者「こんにちは皆さん。……………実はこの小説を読んでいる読者の皆さんにお願いがある……………それは、どんなアニメキャラを出してほしいか、『この特撮ヒーローを出してほしい』……………という、お願いだ。……………あと、『この世界とコラボをして』、というお願いも有りです。では……………お願いします。」

第23話 ブルーディケイド新たな力/零矢、新アイテムゲット！（前書き）

新たな力と言っても……とあるフォームになるだけです。

第23話 ブルーディケイド新たな力／零矢、新アイテムゲット！

地球 海鳴町

「やーっと、出れたわね。すずかもそう思うでしょ？」

「うん！そうだね、アリサちゃん……………やつ！／／もく、くすぐりたいでしょ。後でちゃんと遊んであげるから。」

『ニヤーンー！！』

こちらの二人はアリサ・バニングスと月村すずか。二人共、なのは、フェイト、はやての親友で中学と高校（なのは達は、管理局に勤めながら）を一緒にすごし、二人は大学生になり、アリサはたまにすずかの家に行き、すずかと話したり、猫達とあそんだりしている。

「なのは達は、元気かしら？」

「元気じゃないかな。」

アリサとすずかが話をしていると……………二人がお茶をしている辺りに灰色のカーテンが発生した。そして……………灰色のカーテンが消えたら二人の青年が倒れていた。

「大丈夫ですか？」

「ちよっと！大丈夫？」

はたして！二人が見た青年とは？……………そして、彼らは何なのか。

タイムセイバー・会議室

「私はショウ。で、こっちが璃杖。……………妙ないきさつで戦士に

なりましたが、よろしく願います。」

「俺は……桜内悠斗。こっちに居るのが相棒のデネブだ。」

「最初に言っておく、悠斗をよろしく!!」

「バカッ!! どういう挨拶してるんだよ。お前!!」(言いながらコブラツイスターを掛ける悠斗)

「ごっ、ごめん悠斗。」

会議室でショウ達が話しをしている時、良太郎と幸太郎、侑斗がジェスと話しをしていた。

「野上、桜井、幸太郎……これから、どうする?」

「まず、元の世界に……「そーもいかないんですよ。」……オーナー?」

「無理矢理、時間を超えて来ましたからね。……デンライナーの方にも支障が出まして……修理に最低でも……三日はいるでしょう。その間は……この世界を探索しましょう。」

こうして、良太郎達は三日間だけミッドに滞在することになった。

次の日……

ジェスは零矢のところに來ていた。

「零矢!!」

「ん?……ジェスか……何か用か?」

「ああ。……セブンからの預かりもんだ。……零矢……いや、ゼロが使える新アイテム、『ウルトラゼロブレスレット』だ。」

ジェスは、零矢にセブンから預かってた、ウルトラゼロブレスレットを渡した。

「……………親父……………」

そして……………デンライナーの修理が完了し、良太郎達は、元の世界……………『電王の世界』に戻って行った。

「もう、帰っちゃったんだ。」

「ああ……………あいつらには、あいつらの護る世界がある。……………俺達のように。」

「そうだね。」

そんな会話をしている、ジェスとなのは。……………そこへ……………

「おい、なのはー！」 「なのはママーー!!」

「零矢……………」

「ヴィヴィオ……………」

零矢とヴィヴィオがやって来た。

「どうしたんだよ？」

「いや……………今日から三日間……………なのはと俺、休みだからヴィヴィオとフェイトと一緒に『海鳴市』に行こうって事になったから、ヴィヴィオと一緒になのはを迎えに来たってわけ。」

「そうだった。ありがとう！零矢君。」

「おっ……………おう。／＼／」

「パパ、顔真ッ赤ッ。」

「えっ!!……………そっ……………そんなに赤いか？」

「私から見ても赤いよ。……………でも、だから好き。」

「まあ……………この事件が終わったなら……………一緒に暮らすか？もちろん、ヴィヴィオも一緒に……………」

「うんっ！／＼／」

（こんなところで……………カップル成立させるなや。）

二時間後……………零矢達が海鳴市に行った後、ジェスは自室に居た。

（この世界は、既に『PT事件』も『闇の書事件』も『JS事件』も終わってる。……………プレシア・テストロッサとアリシア、リニスを何とか見つけて助けなきゃ。アインは今、はやてと一緒に仕事だから戦闘時以外で俺が顔を会わすことはない。それに……………ダークプリキュア……………いや、闇は^{アン}より達と一緒に特訓をしてるから大丈夫だろう。）

すると……………

「マスター、こちらに居ましたか。」

「おう、シャドー！……………どうした？」

「いえ……………匿名の情報ですが……………次のグレード大シヨツカの動きですが……………鳴滝が行動を起こすかと……………」

「わかった。」

シャドーにそう返して、ジェスは用意をはじめた。

（今回は……………より達抜きでやる。）

そう心で言い部屋を出た。

「ダークプリキュアが……………奴らの仲間になった様だな。」

「……………ダークプリキュアを仲間にした連中か……………面白い。」

「なんだ？貴様。」

「別に……………そうだな、仮に『次元の破壊者』とでも名乗らせていただく。」

「次元の破壊者ですか。」

「ああ……………ダークプリキュアの穴は俺が埋める。」

「いただろう。」

ダークザギの下に現れた、次元の破壊者とは一体誰なのか。

とある世界

「このぐらいの数なら、いくらディケイドだとしても、耐えられまい。」

鳴滝はある世界で怪人軍団を集結させていた。

クラナガン近郊の立入禁止エリアX

「ここでいいだろう。……………サーチャーセット。……………」

……………さあっ！！出てこい鳴滝！！」

「そちらから来るとは、予想外だよ。守護者よ。」

ジェスがクラナガン近郊に行つて、立入禁止エリアXを選んだのは理由がある。

タイムセイバーズ会議室

「ジェス！！」

「兄さん！！」

会議室にいたメンバーは全員驚いていた。

「助けなきゃ。」

のぞみが助けに行こうとするが！

「やめとけ……………逆にお前が死ぬことになる。ここは、俺と海東で行く。」

「仕方ないなあ。」

士と海東は灰色のカーテンをくぐり、ジェスのいる場所に向かった。

ジェスの背後に灰色のカーテンが発生し、士と海東が出てきた。

「士と海東か……………予想通りだ。」

「来たか、ディケイド。」

「鳴滝！」

「今回の目的は何かな？鳴滝さん。」

と、鳴滝に問い掛ける海東。

「フツ、……………私の目的はディケイドを倒すことだ。貴様らがここに足を踏み入れた時点でこちらの勝ちは確定した。」

鳴滝がそう言ったと、同時に全てのライダー世界の怪人軍団が現れた。

「なるほど。」

「やるしかないようだね。」

「ああ……………行くぞ。」

- KAMENRIDE …… -

「『変身！』」

- DECADE -

- BLUEDECADE -

- DI・END -

ジェス、士、海東はそれぞれ、『世界の守護者……………仮面ライダーブルーディケイド』、『世界の破壊者……………仮面ライダーディケイド』、『世界を渡るお宝ハンター……………仮面ライダーディエンド』に変身

した。

「殺れえ！！ディケイドを倒せ！！！」

鳴滝の号令で動く怪人達。

「行くぞ！！二人とも！！！」

「ああ！！！」

士の合図で駆け出す三人のライダー。

タイムセイバース会議室

「あんな、大群……………兄さん。」

「私達は……………見守ることしか出来ないの？……………ジェス。」

（どうする？はやて……………なのはを呼び戻す？）

（そんな事はできへん……………なのはちゃんは、少しお休みが必要だから。）

（わかったよ、はやて。……………必ず勝って、士、

大樹、ジェス。）

機動六課のメンバーやプリキュア達はただ見守ることしか出来なかった。……………だがその場には翔太郎達やミライ達、丈留達、アムロ達はいなかった。

立入禁止エリアX

今、ディケイド達と怪人軍団が激突していた。

- ATTACK RIDES SLASH -

「ハァー！！！」

ディケイドがグロンギやオルフェノクを斬り……

- ATTACK RIDE BLAST -

「ハッー!!」

ディエンドがアンウンやアンデットを撃ち……

「ハアッ! ハッ、ハアッ!!」

ブルーディケイドがミラーモンスターやワームを格闘戦で攻撃していく……しかし、いつこうに怪人の数が減らない。

「ちっ………どうする?」

「と、言われても………」

「この数では、流石に貴様も耐えられまい。」

『ガアーー!!』

鳴滝が言い放った、と同時に一部の怪人がディケイド達目掛け怪光線を撃った。

『うわあー。』

- ドガアーン!! -

タイムセイバース会議室

「兄さん!!」

「ジエス!!」

『ジエスさん!!』

「レナン………門矢………」

六課とプリキュアのメンバーは、それぞれに名前を叫んだ。

場所は戻り……

「ぐつ、…………無事か？土、海東。」

「ああ…………」

「しかし、なんて威力だ。」

ジェス達は、無事だったが……………先の攻撃で変身が解けてしまった。

「この世界が貴様の墓場だ！ディケイド！！」

「……………」

怪人軍団がジェス達に攻撃を仕掛けようとした……………その時

！！

…………ぶおーん…………

灰色のカーテンが発生し、中から計28人の青年や少年がいた。

「彼等は……………」

すると……………

「土ー！」

「土君。」

「ユウスケ、ナツミカン。」

小野寺ユウスケと光夏海が土の下に駆け寄る。

「大丈夫か？土。」

「まあな。」

そして、灰色のカーテンから出た28人の内13人が土達の方へ駆け寄る。

「ショウイチ、シンジ、カズマ……………」

「少年君……………」

「ソウジさん……………」

「ワタル……………」

「それに…………野上と左、フィリップ、照井、莊吉さん、映司……………」

……………」

なんと！これまで、ディケイドが旅をしたライダー世界のライダー達とこの世界で会ったライダーだ。

「後は…………本郷さん達の先輩ライダー……………」

なんと！昭和ライダーの方は原典世界のライダー達だ。

「よーし…………行くぜー!!」

ジェスの一声を合図にそれぞれが変身の構えをする。

「ライダー…………変身!!とおっ!!」

「変身…………ブイ・スリー!!」

「覚悟しろ!!やあ!!」

「大・変・身!」

「アーマーゾーン!!」

「変身…………ストロングァー!!」

「スカイ!!変身!!」

「変身!!」

「変ー身!!」

「変身!!」

「うおー!!」

「変身!!」

「超変身!!」

「変身!!」

「変身!!」

- s t a n d i n g b y -

「変身!!」

- c o m p l e t e -

「変身!!」

- t u r n u p -

「変身!!…………ふー…………たあっ!!」

「変身!」

- H E N S H I N …… C H A N G E B E E T L E -

「変身!!」

- S W O R D F O R M -

『キバツて、行くぜ。ワタル。…………ガブツ!!』

「変身!!」

- CYCLONE -

- JOKER -

- ACCEL -

- SKULL -

「『変身！』」

「変……身！』」

- CYCLONE JOKER -

- ACCEL -

- SKULL -

「変身！』」

《タカ・トラ・バツ………タツトツバツ…タトバ…タツトツバツ！！》

士、海東、ジエス、夏海を除く全員が変身した。

「この状況でも………諦めない？………ディケイド！！貴様は一体………」

鳴滝はそう士に問い掛けた。

「何度も、いつてんだろ。………俺は、通りすがりの仮面ライダーだ。」

- KAMEN RIDER …… -

『変身！』』

- DECADE -

- BLUE DECADE -

- DI・END -

士達は仮面ライダーに、変身した。………今、オールライダー対鳴滝率いる怪人軍団の戦闘が始まるうとしていた。

タイムセイバーズ・会議室

「氷……………行ってくるわ。」

「ええ……………お兄様のこと……………頼んだわ。」

「うん。……………変身!!」

フェニーは氷狐に頼まれ、鏡にデッキをかざし仮面ライダーフェニクスに変身し、なのは達にきずかれない様にジェスの下に向かった。……………そこにシヨウと璃杖もいた。氷狐にシヨウと璃杖はジェスの手助けがないとライダーには変身出来ないのだ……………だから彼女達は、単独でも変身できるフェニーに頼むしかなかった。

とある科学の超電磁砲 & a m p ・ とある魔術の禁書目録の世界

「……………『セイ』の奴、無茶してんな……………仕方ない手助けしてやるか。」

謎の青年は灰色のカーテンの中に消えた。

勇者口ボの世界

「……………まったく……………すぐに無茶をするな……………俺も行くか。」

こちらの青年は緑色に光るカーテンをくぐった。

戻り、エリアX

ジェス達がライダーに変身した時、彼等の背後で灰色のカーテンと緑色に光るカーテンが現れて、二人の青年とミラーワールドから仮面ライダーフェニックス、がやって来た。

「『黒^{コク}っ！』それに、『ジオ！！』」

「無茶すんなよ、セイ。」

「そうだ。」

黒とジオと呼ばれた青年は『リリカルなのはの世界』とは違う世界から来たのだ。

「ふんっ。………たかが普通の人間に何ができる。」

と、鳴滝は言う。………しかし！！

「普通の人間………チツチツチ………甘く見ない方がいいぜ、オッサン。」

そう言つと、黒は黒いディケイドライダーを……ジオはブレイブドライバーを装着した。

「『変身！！』」

- K A M E N R I D E B L A C K D E C A D E -

- K A M E N R I D E D E D I B R A V E -

黒は仮面ライダーブラックディケイドに、ジオは仮面ライダーデブレイブに変身した。

「俺は通りすがりの………黒き仮面ライダーだ！！」

「俺は勇気と破壊の力……二つを一つにして闘う仮面ライダーだ！！」

それぞれの名乗りを言った後、本郷達も続く。

「俺は、仮面ライダー1号！！」

「同じく2号!!」

「仮面ライダーV3!!」

「俺は、ライダーマンだ。」

「仮面ライダーX!!」

「アマゾン!!」

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ。…悪を倒せと俺を呼ぶ。…
…聞けっ、怪人共!!俺は、正義の戦士!仮面ライダーストロンガ

!!」

「スカイライダー!!」

「仮面ライダースーパー1!!」

「仮面ライダーZ^{ゼクロス}X!!」

「仮面ライダーBLACK!!」

「俺は、太陽の子……仮面ライダーBLACKRX!!」

「仮面ライダー・シン!」

「仮面ライダーZO!!」

「仮面ライダーJ!!」

「仮面ライダークウガ!!」

「仮面ライダーアギト!!」

「仮面ライダー龍騎!!」

「仮面ライダーファイズ!!」

「仮面ライダーブレイド!!」

「仮面ライダー響鬼!!」

「仮面ライダーカブト!!」

「仮面ライダー電王……俺、参上!!」

「仮面ライダーキバ!!」

「『仮面ライダーW』」

「仮面ライダースカル……」

「『さあ……お前達の罪を……数えろ。』」

「仮面ライダーアクセル……さあ、振り切るぜ!」

「仮面ライダーオーズ!!」

「俺は、仮面ライダーディケイド……通りすがりの仮面ライダーだ!!」

「仮面ライダーディエンド……この世界のお宝は、必ず護る。」

「仮面ライダーフェニックス……さあ、燃え尽きなさい。」

「『仮面ライダーキバ……参ります。』」

（（（一体、いつ変身した。）））↑他のライダー全員

「仮面ライダーブルーディケイド……世界の守護者だ!!」

此処に、平行世界の新旧ライダーとオリジナル世界のライダーが揃った。

「ええい……殺れ!!我が怪人達よ!!」

鳴滝の号令で怪人達が一斉に動き出した。

「門矢、海東、黒……行くぞ。」

「ああ。」

「良いだろう。」

「オッケー。」

ジエス達はケータッチを取り出した。

「まずは俺だ。」

- KUUGA AGITO RYUUKI FAIZ BLADE
HIBIKI KABUTO DEN'O KIVA ……

FINAL KAMEN RIDER DECADE -

「次は……僕だ。」

- G4 RYUGA GUREIBU KABUKI CAUCASIA
ARKUSKULL……FINAL KAMEN RIDER
DEIEND -

「次は、俺だ。」

- GIRUSU NIGHT KAIZA CARISU IBUKI
GATTAKU ZERONOSU IKUSAAACCEL……
FINAL KAMEN RIDER BLACK DECADE -

「ラストは俺だな。」

- RIDER SPOT URUTORAPOT CRES

POWER SUPERHERO POWER SUPER ROB
OTPOWER.....FINALKAMENRIDEBLUEDE
CADE -

ディケイド、ディエンド、ブラックディケイド、ブルーディケイ
ドはコンプリートフォームに強化変身した。（ブルーディケイドの
みクレストの空きがある。）さらに.....

「これも追加だ。」

- FINALKAMENRIDE.....ALLRIDERS -

士の使用したカードの効果によりクウガからキバまでのライダー
は最強フォームへ.....Wとアクセル、フェニックスは自分達のア
イテムで最強フォームへ姿を変え、オーズは最適なコンボにかえた。

- RISINGULTIMATE -

- SHINNING -

- SUBAIV -

- BURASUTAR -

- KINGU -

- ARMUDE -

- HYPER -

- SUPERCLIMAX -

- EMPEROR -

- EXTREME -

- TRIAL -

「全てを.....振り切るぜ！」

- TRIAL -

「これで.....勝負よ。」

- SUBAIV -

「映司！.....ちとやばいが、これが最適だ。」

アंकはそう言って、クワガタとカマキリのメダルをオーズに投
げ渡した。

「サンキュー、アंक。」

《クワガタ・カマキリ・バッタ……………ガータ・ガタガタ…ガータ
キリバ…………ガタツキリバ!!》

数で勝ってる怪人軍団だが……………個々の能力ではライダーに勝
てる怪人は、そうはいなかった。

ライダー1号&2号対ショッカー怪人

「本郷!!」

「おう!!」

「とおっ!!」

1号と2号は横に並びジャンプした。

「ライダー…………ダブルキック!!」

「グワッラッ?」

1号と2号の同時キックを受けた、ガラガンダやその他のショ
ッカー怪人は爆発した。

ライダーV3&ライダーマン対デストロン怪人

「ロープアーム!!」

デストロン怪人は、ライダーマンのロープアームで一カ所にまと
まった。

「今だ!V3!!」

「おう!……………V3…………フル回転キック!!」

「カーメー……………??」

デストロン怪人達はV3のキックを受けて爆発した。

X、アマゾン、ストロンガー、スカイ、スーパー1、ZX対各種

戦闘怪人

「Xキック!!」

「大・切・断!!」

「電キック!!」

「スカイ…キック!!」

「冷熱バンド!!」

「ZXキック!!」

『ギヤアー!?!?』

六人のライダーの攻撃で各種戦闘怪人は爆発した。

BLACK&BLACKRX対ゴルゴム&クラ
イシス戦闘怪人

「BLACK、行くぞ!!」

「おう!!」

「ライダーパンチ……………ライダーキック!!」

BLACKとBLACKRXの連携、連続攻撃で怪人達を倒して
いく。

シン、ZO、J対改造怪人

「ウオー……!!」

「トオツ!!」

「ハッ!!」

シン、ZO、Jは、改造怪人に格闘戦で挑んでいく。

「ならば……………こいつらを使うしかない……………」

鳴滝は、灰色のカーテンを作り出し、中から怪人を出現させた。

……………その怪人は……………

「なんだ?あいつらは……………」

黒の言葉でジェスは、出現した怪人等の種族と名称を考えた。

(グロンギの『ン・ダクバ・ゼバ』に『ン・ガミオ・ゼタ』、アン
ノウンの『バッファローロード』が二体、ミラーワールド関係の『
仮面ライダーアビス』に『仮面ライダーリュウガ』、オルフェノク
の『タイガーオルフェノク』に『ローズオルフェノク』、アンデッ
トの『アルビノジョーカー』に『パラドキサアンデット』、魔化猛
の『牛鬼』に『オロチ』、ワームの『グラリスワーム』に『アラク
ネアワーム』、イマジン関係の『アリゲーターイマジン』に『デス

イマジン』に『仮面ライダー牙王』に『仮面ライダー幽汽』に『仮面ライダーネガ電王』、ファンガイアの『バットファンガイア』に『ビートルファンガイア』、スーパードラゴンの大ショッカーの『ドラゴン』に『アルティメットD』、ガイアメモリ関係の『ウエザードーパント』に『仮面ライダーエターナル』……………最悪だ。）」

それは、ディケイド……………門矢士が九つのライダー世界を巡った時の怪人とクウガからWまでの怪人達だった。

（どうする……………）

その時……………灰色のカーテンをくぐりNEWデンライナーとゼロライナーが現れ、ジェス達の前を通り過ぎ9人の若者と遠くからオートバシンに乗った『乾巧』が並んだ。その者達は……………。

「あいつらは……………オリジナルの平成ライダー……………。」

「お前らは……………」

士がそう言った。

「俺、五代雄介……………変身！！」

「俺は、津上翔一……………ハア……………変身！！」

「俺、城戸真司……………変身！！」

「乾巧だ、覚える……………変身！！」

- complete -

「俺は、剣崎一真……………変身！！」

- turn up……………EVOLUTION・KING -

「俺は、ヒビキ。よろしくなつ。……………ふ……………」

たあつ……………」

「俺は、天の道を行き、総てを司る男……………天道総司……………変

身……………」

- HEN SHIN……………CHANGEHYPERBEETL

E -

「野上幸太郎と……………」

「桜井侑斗だ。」

「覚えとけ……………」

「変身!!」

- STRIKE FORM -

「変身!!」

- ZERO FORM -

「僕は……紅渡です。……キバット!!」

『おっしゃー!! キバツて行くぜ、渡!……ガブツ!!』

「変身!!……タツロット!!」

『ドラマティックに行きましょう。……変身!!』

五代は、クウガ・アメイジングマイティーに、津上は、トリニティ・アギトに、城戸は、龍騎に、巧は、ファイズ（アクセルブルース付き）に、剣崎は、ブレイド・キングに、ヒビキは、響鬼・紅に、天道は、ハイパーカブトに、幸太郎は、NEW電王に、侑斗はゼロノス・ゼロフォームに、渡は、キバ・エンペラーに変身した。

その後……オリジナル世界のクウガからキバとデ

イケイド世界のクウガからキバ（電王を除く）は、それぞれの最強攻撃で怪人を粉砕し、良太郎達もアリゲーターイマジンや仮面ライダーネガ電王等をコンビネーションやフルチャージャータックで倒していき、Wとアクセルはオーズと協力しながら、ウエザード・パンと仮面ライダーエターナルを倒して行った。……後は、アルティメットDとドラスだけだった。

「士!! アルティメットDは、お前に任せる。」

「ああ。……だいたいわかった。」

「フェニー、黒、ジオ……手伝え!!」

- FINAL ATTACK RIDE……-

「オツケー!!」

「「応!!」」

- BU・BU・BU・BLUE DECADE -

- BU・BU・BU・BLACK DECADE -

- BU・BU・BU・BRAVE -

- FINAL BENT -

『ハアーーーー!!』 四人が同時に必殺技を放った時、ドラスの背中にアルティメットDがいて、デイケイドとWの連携必殺技を喰らうところだった。

ジェス達が怪人軍団を倒した時、鳴滝は既におらず………静寂が辺りを支配していた。

それから、本郷達は元の世界に戻り、ジェスの手の中に完璧な絵柄になった『オールライダー』のカードが現れていた。

第23話 ブルーディケイド新たな力／零矢、新アイテムゲット！（後書き）

作者「次回 剣と蝙蝠と二人の女性と／ゼロ、新パワー……………」
お楽しみに。」

第24話 剣と蝙蝠と二人の女性とノゼロ、新パワー（前書き）

仮面ライダー剣^{フレイド}のライダー達と仮面ライダーキバのライダー達を出しました。ちなみに………すずかとアリサが！！………これは、ネタバレになるのでここでは書きません。

第24話 剣と蝙蝠と二人の女性とノゼロ、新パワー

海鳴市 月村邸

そこには、月村すずかだけではなく、友人のアリサ・バニングスと二人の青年がいた。

「どうする？すずか。」

「目が覚めるまでは、家で……………」
「その心配は無い。」…………えっ？」

なんと！！二人の青年の内、一人……………青いジャケットを着た青年が体を起こした。

「ちよつと！！大丈夫なの？」

「ああ……………大丈夫だ。」

青年は、起きたあと、アリサとすずかに事情を説明した。

一方……………

「フェイトちゃん……………遅いな。」

「何か……………向こう（ミッド）の方で起きたんじゃないのか？」

「そうかなあ？」

なのはと零矢が、なのはの実家の『翠屋』で、フェイトが来るのを待っていた。

月村邸では……………

「別の…………次元……………」

「仮面ライダーの……世界……。」

「ああ。……俺はそのライダーの世界の一つ、『ブレイドの世界』から来た。」

この時、すずかは……何かに巻き込まれそうな予感がした。

零矢となのはが海鳴市について二日目……

「なのはっ!!」

翠屋に來客が来た。それは……

「遅かったね? フェイトちゃん。」（目が単色になってるなのは）

「はうっ!!」

「なのは……それ、怖いから。」

「なのはママ。」（涙）

「あっ! ご、ごめんね。零矢君、ヴィヴィオ。……それで、

なんで遅くなったの?」

「実家の方への連絡と戦闘の事後処理をしていたら……」

「『戦闘?』」

実は、戦闘（オールライダー対グレード大ショッカー）の情報は、なのは達には届いてなかった。

「誰が闘ってたの?」

「土に大樹さんにジェス達だけど……映像記録は録ってないから見せるのは無理だけど……。」

「そうなんだ。」

だが……零矢は……

（おかしい……現場にいなかったとしても……タイムセイバーズの会議室の映像記録を『バルディッシュ』に移す事はできるはず……まさか!!）

その頃……ジェスが蒼天の書にバルディッシュからのSOS信号が来ている事に気付き、リインフォース・アインと共に海鳴市に来ていた。すると……海鳴市に着いて早々に地に伏せてバルディッシュを握りしめている血まみれのフェイトを発見した。

「おいっ、フェイトー!!」

「ジェ……ジェス……良かった……早く……なのはの……ところに……行って……なのはが……危ない。」

既に息をするのも辛いフェイト。

「わかった。……リイン、蒼天の書を持っていれば俺の魔法も使える……フェイトを頼む。」

「ああ、わかった。」

ジェスは、リインフォース・アインにフェイトを任せなのは達のところに向かった。

月村邸では……もう一人の青年が目を覚ましたので、お互いに自己紹介をしていた。

「いきなりですみません。僕は、紅渡です。それでこっちの二匹は……」

「俺は、キバットバット?世だ。よろしくな、嬢ちゃん達。」

「私は、キバットバット?世だ。」

「俺は、剣崎一真。よろしく。」

「私はアリサ・バニングスよ。で、こっちは……」

「月村すずかです。よろしくね。」

それぞれが自己紹介を済ましたちょうどその時……渡とキバットにしか聞こえない『ブラッティローズ』の音色が聞こえた。

『渡!~!』

「うん。……行くよ、キバット。」

「俺も行くよ。」

渡と剣崎は、キバットを先頭にして月村邸を出た。

「あゝも、すずか！私達も行くわよ。」

「えっ？アリサちゃん！………？世さん、道案内してくれる？」

『レディーのお願いだ、仕方ない引き受けよう。』

「ありがとう。」

すずかとアリサもキバットバット？世に頼んで、渡達の後を追った。

翠屋では……………

「ん？……………何かが出やがったな。」

「本当に？」

「ああ……………しかも、ガジェットもいやがる。」

「今回は、私も行くよ。ガジェットの相手は得意だし。」

「私も行く！」

「オツケー。行くぜ！なのは、ヴィヴィオ。」

「「うん！！」」

零矢と一緒になのは達が出る時、フェイト（偽）は……………

……………

（行動に移るのが早すぎる。まさか……………！！）

内心、焦っていた。

ジェスは……………

（こんな時に、ファンガイアとアンデットとガジェットの反応を
探知するとは……………）

その時……………

『マスター……………フェイトの容態が安定し、今、共にそちらに向かつてます。』

「わかった。」

ジェスもまた、ガジェットなどの反応を感知し現場に向かっていた。すると、ライドブッカードから、一枚のライドカードが現れた……

……………その絵柄は、カリスラウザーを中心に金髪の女性と茶髪の青年が背中合わせで立っている絵柄だった。

（これは……………）

海鳴市 某所

そこでは……………

「ギヤースー！」

「はーはっはっは、さあひざまずけ、人間よ。」

アンデットのペツカーアンデットとファンガイアのムースファンガイアが人間を襲い、ガジェット？型が宙を舞いガジェット？型が街を歩いていた。……………すると……………

－ブウーン－

街を結界が覆った。

「これで、街への被害は無くなった。」

ジェスが海鳴市を全て包み込む結界を張り巡らした。そこへ……………

……………

「アンデットー！」

「ファンガイア……………」 「あれが……………」

「一真達の敵……………」

剣崎と渡、アリサとすずかが来た。それと……………

「ガジェットがあんなに……………」

「やろっ！なのはママ！！」

「そうだぜ、なのは。」

「うん。……………あれっ？フェイトちゃんは？」

「本当だ！フェイトママ……………何処に行ったんだろ？」

なのは達も現場にやって来たが……………一緒にいたはずのフェイト（偽）を探していた。

遠くの方で……………

「ちっ……………早過ぎるぞ、ジェル……………鳴滝。」

フェイト（偽）がそう呟いていた。そこへ……………

「……………「こんな所に隠れていたのですね。……………フェイト・テストロツサ……………いえ、ザラブ星人！！」」

「くっ……………」

フェイト（偽）は、ガジェットのいる方へ走り出した。

「……………「逃がしません！……………」ルシフェリオン」セットアップ！」

『SETUP！』

謎の少女はなのはに似ているバリアジャケットを身に纏い、フェイト（偽）を追った。

現場にて……………

「あっ！フェイトママだ。」

「何かに追われてる。」

フェイト（偽）が謎の少女から逃げていると、

「サンダー……………レイジー！！！」

フェイト（偽）の逃走ルートを遮断するかの様に雷が落ちた。
「くっ！！！」

「デアポリック・エミッション！！！」

「パイロ・シューター！！！」

ルートを遮断されたと同時にリインフォース・アインの『デアポリック・エミッション』と謎の少女の『パイロ・シューター』が炸裂した。

「ぐあつ、ああー！ー！！」

「……えっ？」「……」

驚く、なのはとヴィヴィオとアリサとすずかだが、………零矢だけは冷静だった。

「くつ、くそ……」

なんと、二つの技を喰らったにもかかわらず、フェイト（偽）は、立っていたのだ。

「どうして？」

「なのはー！！」

「えっ？……フェイトちゃん??」

なのはの下にバリアジャケットを身に纏ったフェイトが舞い降りた。

「大丈夫なのは？……怪我は無い？」

「どうして？フェイトちゃんは確か……」

??「あれは、偽物です。高町なのは。」

「えっ？……貴女は？」

「わからないのは無理も無いですね。……『星光の殲滅者』と言えば……お分かりいただけますか？」

「あの時の……闇の書のマテリアル。」

「はい。……訳有って、今は貴女と同じ年齢に、同じ身体構造ですが。」

「そうなんだ。」

なのはは、星光の殲滅者と話をしていた。

「くつ、おのれー。」

「話をしている場合じゃ……なつ、『星光の殲滅者』……」

「そういう、貴方は『世界の守護者』……」

「にしても、やっぱ、名前が長い……よし、今日からは『セ

イス』って呼ぶから、俺の事はジェスと呼べ。」

「セイス……………良い名前ですね。……………わかりました。よろしくお願ひします。ジェス…／／／」

「ばっ……………馬鹿かつ、こんなんで、顔を……………赤くしてんじゃねえ／／／（以外と胸がでかいな。……………後で、味見してみるか。）」
（以外とカッコイイですね。……………あっ／／／ダメッ／／／……………アソコが疼いて、欲しいって言ってる。／／／）

ジェスとセイスは心の中で似た様なことを考えていた。

「マスター／／／……………私には、考えが共有されますので……………

……………その／／／……………私も良いですか？／／／」

リインフォース・アインは、ジェスに恥じらいで顔を赤くしながら上目遣いで懇願した。

「ああ、リインもセイスも……………俺が相手をしてやる。」（クル気取りで）

「おいっ！…んな事、やってる場合か？」

「わかってるよ……………行くぞー！」

ブレイド変身曲 『ELEMENTS』

「変身ー！」

- turn up -

「アンデットの好きにはさせない！」

剣崎一真は仮面ライダーブレイドに変身した。

キバ変身曲 Break the Chain

「キバットー！」

『よっしゃー！！キバって行け、渡！！……………ガブッ！

！』

「変身ー！」

紅渡は仮面ライダーキバに変身した。

なのは&mp;ヴィヴィオセットアップ曲 星空のSpica
「レイジングハート・エクセリオン!!」

「セイグリットハート!!」

「セットアップ!!」

『standby red hi.....setup』↑レイジングハ
ート

『ピッ!!』↑セイグリットハート

ジエスセットアップ曲 覚醒

「ブレイティックブレイカー!!」

- standby -

「セットアップ!!」

- get set -

「リイン!!」

「ああ!!」

リインフォース・アインは、セットアップしたジエスと右手を合
わせた。

「ユニゾン・イン!!」

ジエス、なのは&mp;ヴィヴィオは、セットアップし、バリ
アジャケットを身に纏った。(ヴィヴィオは、大人モードになった。
)

ゼロ変身曲 新しい光

「デユワッ!!」

諸星零矢はウルトラマンゼロに変身した。(本来の姿に戻っただ
け。)

「セイス、フェイト…………準備は良いな。」

「もちろんです。」

「大丈夫、行けるよ。」 セイスはジェスの右隣り、フェイトはなのはと大人ヴィヴィオの隣に立った時…………ジェスとセイスは背中に鋭い殺気を感じた。

（殺気…………） ↑犬夜叉の弥勒風に読む又は、言ってみて（笑）。

（この殺気は、一体…………）

「他の子と並んで立つなんて、良い度胸ね、ジェス？」 ↑怒り浸透中のゆり

「ゆりならまだしも…………他の女に色目を使うとは…………」 ↑呆れている闇

「ゆ…………ゆりに闇…………あつ、いや…………これは!」

「誰、何ですか? 『ジェス』この方達は…………」

「いらん事を今、聞くな、『セイス』!」 ↑墓穴を掘ったジェス
「もう…………名前…………呼び合ってるのね……………なんで、

そんなに『恋愛フラグ』を発生させるのかな?」

（こいつは…………まずい!……………此処は!!）

どうするか考えていると……………

「貴様ら……………私を無視するな!」

『忘れてた……………』 ↑一同

すっかり、存在を忘れてた一同。すると……………

「見つけたぜよ! プリキュア! それに、裏切り者のダークプリキュア!」
「ユア!」

「『クモジャキー!』」

そこに、砂漠の使途のクモジャキーがスナツキーを引き連れ現れた。

「面白いことに成ってるな。」

「プリキュア……………しかも、ムーンライトにダークプリキュアか……………」

…………カプトを倒す前に貴様らを葬り去ってくれる!」

「くっ……」

クモジャキーに続き、ジャマールのギガロとメルザートのライジヤが現れ、ゆりと闇に狙いを定めた。その時……遠くから二体のバイクが来て、ゆりと闇の前に停車した。そのバイクに乗っていたのは……

「ギガロー！」

「やめろ！ライジャー！」

「ぬう、甲斐拓也……！」

「来たか！カブト……！」

それは、甲斐拓也と鳥羽甲平だ。

「甲平……」

「大丈夫だってせつな。」

「せつな！」

「ゆりさん……」

ゆりは、せつなが甲平と一緒にバイクに乗っていたのに疑問を感じた。

「どうして？甲平君と同じバイクに？」

「えっ！……えっと……甲平とは……その……付き合
っていて……今日一日中、デートの約束してたから。／／
／」

せつなは顔を赤くしながら答えた。

「そんなことより、やるぞ。」

「うん……」

「ああ……」

甲斐拓也はビーコンダーを甲平はコンドボイサーをせつなはリンクルンをゆりはココロポットを取り出し、闇は右手を上に向けた。すると……

「拓也……」

「大作、舞、朱也。」

『甲平／コーヘー！』

「健吾、蘭、マツク、フリオ、李、ソフィー！」

拓也の下に片霧大作、鷹取舞、朱也が甲平の下に橘健吾、鮎川蘭、マツク、フリオ、李、ソフィーがやって来た。

「みんな……行くぞー!!」

ビーファイター変身曲 重甲ビーファイター

『重甲!!』

叫んだと、同時に……拓也は青、大作は緑、舞は赤、朱也は黒のインセクトアーマーを身に纏った。

ビーファイターカブト変身曲 ビーファイターカブト

『超重甲!!』

この叫びと、共に……甲平は金、健吾は銀、蘭は紫、マツクは水色、フリオは肌色、李はオレンジ、ソフィーは白のネオインセクトアーマーを身に纏った。

パッション、ムーンライト、ダークプリキュア変身曲 フレッシュ
ユプリキュア変身BGM

「チェンジ！プリキュア!! ビートアップ!!」

「プリキュア!! オープンマイハート!!」

「チェンジ!!」↑ダークプリキュアに関しての変身はオリジナル設定のもの

自分の変身プロセスを言ったあと、せつなは赤、ゆりは銀、闇は黒に光り、戦士に変身した。

全戦士が戦闘できる状態になったら、戦闘に入る前にやることがあった。

なのは達の場合

「スターズ1……高町なのは……」

「ライトニング1……フェイト・テストロッサ・ハラオウン……」

…」

「スターズ5……高町ヴィヴィオ……」(ちなみに、アインハルトはライトニング分隊のライトニング5……)

『行きます!~!』

ジェスの場合……

「セイグリット・ブルーソウル……レナنجエス・アルマー……参る!~!」

ビーファイター達の場合

「ブルービート!~!」

「ジースタッグ!~!」

「レッドル!~!」

「ブラックビート!~!」

『重甲!~!ビーファイター!~!』

「ビーファイターカブト!~!」

「ビーファイタークワガー!~!」

「ビーファイターテントウ!~!」

「風の戦士……ビーファイターヤンマ!~!」

「光の戦士……ビーファイターゲンジ!~!」

「音の戦士……ビーファイターミン!~!」

「花の戦士……ビーファイターアゲハ!~!」

ゼロの場合

「ウルトラセブンの息子……ウルトラマンゼロ……貴様の野望……俺が粉碎する!~!」

プリキュアの場合

「真つ赤なハートは幸せの証……熟れたてフレッシュ……キュアパッショーン!!」

「月光に冴える一輪の花……キュアムーンライト!!」

「私は、ダークプリキュア……」

仮面ライダーとセイスを除く全員が名乗りを終えた時………なのはようやく二人の存在に気付いた………

「あっ!! アリサちゃんにすずかちゃん!!」

「なのはちゃん………気付くの遅い………」

「こっちは、あの二人とずっと一緒に居たっていうのに?」

「ご、ごめんなさい。」

すると………ペッカーアンデットの背後に灰色のカーテンが生じ、中からジョーカーの作り出すローチとアルビノジョーカーが作り出すアルビノローチとジョーカーとアルビノジョーカーが現れた。………また、ムースファンガイアの背後にはファンガイアの『ルーク』と、呼ばれるライオンファンガイアとレジェンドルガであるマミレジェンドルガそれに………先代のキング……バットファンガイアが変身した仮面ライダーダークキバがいた。

『ダークキバ………よもや、あの時間からやつが来ようとは………』

………

「?世さん………」

(なんで………始が志村なんかと一緒に………)

そんな事を考えていると………キバとブレイドの後ろに青いカーテンと赤いカーテンが現れ、中から四人の若者が出てきて、キバとブレイドの隣に並んだ。

「橘さん!! 睦月!!」

「兄さん………名護さん………」

それは、ブレイドの世界にいる……剣崎の先輩の『橘朔也』と後輩の『上城睦月』と、キバの世界にいる……渡の兄『登大牙』と渡の友人『名護啓祐』だった。

「行くぞ！睦月！！」

「はいっ！！橘さん！」

「「変身！！」」

- turn up -

- open up -

橘は仮面ライダーギャレン……睦月は仮面ライダーレンゲル（カテグリーAのカードのクラブの色が黄色のもの）に変身した。

「名護……行くぞ。」

「わかってます！！」

「サガーク！！」

「行きます！！」

- レ・デ・イ -

「「変身！！」」

- ヘンシン -

- フ・イ・スト・オ・ン -

大牙は仮面ライダーサガに名護さんは仮面ライダーイクサ・バーストモードに変身した。

すると……キバのすぐ横に灰色のカーテンが発生し、紅音也が歩いて来た。（カーテンからは出ずに）

「父さん……」

『元気そうだな？渡。……実は俺は、そっちには行けそうにない。……そこで、そちらの紫の髪のお嬢さんにキバになってほしい。』

「えっ？……私？」

戸惑うすずか……

「無茶だよ、父さん。闇のキバの鎧は普通の人間だったら、魔王力の波動は毒なんだ。」

止めようとする渡。

「大丈夫だよ。渡さん。……………私、『夜の一族』っていう、闇の眷属の末裔なの……………だから、大丈夫だよ。……………？世さん、お願い、力を貸して。」

「わかった。……………引き受けよう。」

渡達が話を終らせた時、突然！ジョーカーが苦しみ出した……………。

「っ！！……………始っ！！」

ブレイド……………剣崎はジョーカーを始と呼んだ。

「剣崎か……………頼む、剣崎……………俺を封印しろ！！」

「始……………」

「俺は、お前の世界の相川始ではない……………頼む！俺を封印しろ！！」

「わかった……………始……………」

（相川始をジョーカーの柳から解放するには……………ブレイドとカリスによる同時攻撃！！……………であれば！）

- SPECIAL RIDE……………CARISURUSER -

「アリサ！！……………受け取れ！！」

ジェスは、アリサにカリスラウザーを投げ渡した。

「えっ？……………これは？」

「始のカリスラウザー……………アリサ！！ハートスートのラウズカードだ。これを使って変身するんだ！」

「アリサちゃん……………」

「やるわよ、すずか！！」

アリサ & am p ; すずか変身曲 take it a t r y

「力を貸して……始さん。変身!!」

- change -

「?世さん!!」

『ああ!!……絶滅タイムだ!!……ガブリっ!!』

「変身!」

アリサは、仮面ライダーカリスになりブレイドの右隣りに、すずかは、仮面ライダーダークキバになりキバの左隣りに並んだ。

ここから戦闘シーンに突入しますが!!………ビーファイターとプリキュアの戦闘シーンは割愛させていただきます。(こちらの戦闘シーンは、別の作品で………)

ブレイドライダーズ対アンデット

その1 ギャレン対ペッカーアンデット 曲 rebirth

「ジャック・フォーム時の必殺コンボに必要なカテゴリーか……

……」

「ギャー!!!!!!」

「ハッ!!」

ギャレンは、ペッカーアンデットが近づいたのを利用して、至近距離で銃撃を炸裂させてペッカーアンデットを怯ませた。

(今だ!!)

ギャレンはその隙を見逃さず、必殺技を出す準備をした。

- drop -

- fire -

- jemi ni -

- burning dhibaide -

「はぁーっ!!」

「ぐげえー!!」

・パカッ・

「フッ……」

ギャレンは、『バーニングデバイド』でペッカーアンデットを倒し、封印した。

その2 レンゲル対ローチ群 曲HERO

「橘さんは、やっぱり違う………僕だつて!!」

・blizzard・

・byte・

・blizzardcrash・

「うぉーー!!」

レンゲルは、『ブリザードクラッシュ』を、ローチに命中させ、全滅させた。

その3 ブレイド・カリス対ジョーカー 曲wannabe strong

「始……」

「始さん……」

『来い………剣崎!!』

「ああ………」

・ABZORBQ………EVOLUTIONKING・

「こっからは………私が、貴方の代わりに………カリスとして闘うわ。だから………」

・EVOLUTION・

ブレイドはキングフォームに、カリスはワイルドカリスになった。

「行くぞ………始!!」

「おやすみなさい、始さん。」

- SPADE 10 SPADE J SPADE Q SPADE K
SPADE A ROYAL STRAIGHT FLAS
H -
- WILD -

「うおー！ー！ー！はあーっ！！」

ブレイドとカリス 剣崎とアリサは一緒に走り出しジョーカーを切り裂いた。

『ぐっ 今だ、剣崎 俺を封印しろ！！』

「許せ 始」

ギャレン、レンゲル、ブレイド、カリスの活躍で今いるアンデットは、アルビノローチとアルビノジョーカーだけとなった。

魔導師対ガジェット

曲 Play

「ハーケンセイバー！！」

「ソニックシューター！！」

フェイトのハーケンセイバーとヴィヴィオのソニックシューターで数は減ったが 如何せんガジェットの数が多く、手数が足りなかった。

『マスター ここは一気に』

「ああ！ー！なのは、フェイト、セイス、ヴィヴィオ 一気に行くぞ！！」

『了解！！』

ジェスの提案に答えるのは達

「「「全力 全開！ー！ー！」」」

「スターライト」

「ルシフェルライト……………」

「セイグリットスター……………」

「雷光一閃……………プラズマザンバー……………」

「『蒼光一刃……………ブループリズム……………』」

「『「ブレイカー!!」』↑なのは、フェイト、セイス

「プラスター!!」↑ヴィヴィオ

「『スラッシャー!!』』↑ジェス&リイン

五人の全力全開の魔法でガジェットを全滅させた。

キバラライダーズ対ファンガイア&レジェンドルガ

その1 イクサ対ライオンファンガイア

「その命……………神に返しなさい。」

「うおー……!!」

「ハッ、ハアッ!!」

イクサはライオンファンガイアをイクサカリバーで切り裂き後退させた。それと、同時にフェッスルを発動させた。

「イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ・ハアッ!!」

イクサは、ライオンファンガイアにイクサジャッジメントを炸裂させた。

その2 仮面ライダーサガ対ムースファンガイア&レジェンドルガ

「貴様達に王の判決を言い渡す……………死だ。」

「何をー!!」

「があー!!」

サガに迫る、ムースファンガイアとマミーレジェンドルガ……………
だが

「ハアッ!!」

サガは、ジャコーダを鞭の様にして、ムースファンガイアとマミーレジェンドルガを攻撃した。

「トドメだ。」

・ウエイクアップ・

「ハッ!!……………フッ!!」

サガは、サガークにウエイクアップフェッスルを吹かせ、ムースファンガイアとマミーレジェンドルガを同時に突き刺し、上空に展開させたキバの紋章をくぐり、ムースファンガイアとマミーレジェンドルガを吊るし上げ、最後に軽くヴァイオリンの弦の様に光りの鞭部分を弾き、敵を倒した。

キバの方は、残ったのは、仮面ライダーダークキバ（バットファンガイア）だけとなった。

しかし……………

「ぐっ……………」

「きゃあ……………」

『おいっ！大丈夫か？渡。』

『すずか……………』

「つつ……………強い……………」

「前に倒した時より、力が増している。」

ダークキバ（バットファンガイア）の猛攻に変身が解けてしまっていた。また……………

『うわあっ!!』

「一真?!.....はっ!!.....きゃあ!」

「剣崎さん.....橘さん.....」

「アリサちゃん.....睦月君.....」

剣崎達もアルビノジョーカーの攻撃で吹き飛ばされ、変身が解けてしまっていた。

「アリサ!」

「すずかちゃん!」

「剣崎!...渡!」

なのは、フェイト、ジェス達は、アリサ達に駆け寄った。

(どうすれば.....ん?)

すると、アリサの手の中に一枚のラウズカード.....ハートの2のラウズカードが現れ、光っていた。

(何なの.....これは?でも.....折角だし、使ってみよう。)

アリサは、そのカードをラウズした。その効果は.....。

- spirit -

カードをラウズした瞬間.....アリサの姿は、一人の青年に変わっていた。

(えっ?.....何?これ?)

姿が変わったことに戸惑うアリサだが.....

(なんか.....喋れない.....)

喋れない状態だった。.....しかも身体を動かす主導権も変わっていた。

「剣崎.....」

「始.....始、なのか?」

そう呼ばれ、頷く。.....ハートの2.....それは、ヒューマンアンデットの力を封印していたカードだ。

「行くぞ!!.....剣崎!橘!上城!」

『ああ!!ノはいっ!!』

大牙も渡の方に変身を解除しながら渡に言った。

「渡.....奴を倒すには、俺がダークキバに変身した方が良い、

サガークを一時的に彼女に使って貰う。良いね？」

「うん……………？世さん……。」

『よかるう……………』

？世は大牙に、サガークはさすがの方へ移動した。

『渡！タツちゃんも、呼ぼうぜ。』

「うん……………キバット！」

ブレイドライダーズ 変身曲ELEMENTS

『変身！！』

- t u r n u p -

- t u r n u p -

- c h a n g e -

- o p e n u p -

剣崎達は再び、ライダーに変身した。

キバライダーズ 変身曲 B r e a k t h e C h a i n

「キバット！！……………タツロッド！！」

『よっしゃー！！再び、キバって行くぜ！！渡！！……………ガブッ！

！』

『テンションフォルテツシモ！！』

「？世！！」

『よかるう！！……………絶滅タイムだ！！……………ガブリッ！！』

「サガーク……！！」

- ウィー -

『変身！！』

渡達も再び、ライダーに変身した。

- ラ・イ・ジ・ン・グ -

「イクサ………爆現!!」

イクサはバーストモードから、ライジングイクサにパワーアップした。

「俺も、行くか………セットオフ………ユニゾン・アウト。」

ジェスは、セットアップとユニゾンを解いた。

- K A M E N R I D E …… -

「変身!!」

- B L U E D E C A D E -

ジェスはブルーディケイドに変身した。

「アルビノローチは、俺とイクサで片付ける。」

「ああ!!」

ブレイド達はアルビノジョーカーに、キバ達はダークキバ（バットファンガイア）に、ブルーディケイドとイクサはアルビノローチに向かい、走り出した。

ブルーディケイド & amp ; ライジングイクサ対アルビノローチ群

「行くぜ! 名護………」

そう言いながら、一枚のライドカードを取り出すジェス。

「良いでしょう。」

- F I N A L F O R M R I D E …… I ・ I ・ I ・ I X A -

「痛みは、一瞬だ………」

ライジングイクサは、ファイナルフォームライドの効果で『カリバークサライジング』に超絶変形した。

「一気に叩く!!」

- F I N A L A T T A C K R I D E …… I ・ I ・ I ・ I X A -

「ディケイドジャッジメント!!」

ブルーディケイドの『ディケイドジャッジメント』で、アルビノローチの大半を倒したが……残りの半数がなのは達の方へ行つたが……ジエスは動かなかった。それは何故か……

『ゴギブリは嫌……!!』

そう……機動六課の女性陣はほぼ全員……『黒い物体Gもしくはそれに似た様な生命体』が嫌いなのだ。だから……この様な時には……全力全壊の非殺傷オフの魔法を叩き込むのをジエスは知っていた。

(なのはや……セイス達が今ばかりは怖い……。)

ブレイドライダース対アルビノジョーカー 曲ELEMENTS

「絶対に倒すぞ!……… 剣崎!橘!」

カリスはそう言つて、ハートのKを取り出した。

「始………その前にこれを使う。」

ブルーディケイドがブレイド達に合流し、一枚のカードをカリスに見せた。

「良いだろう。」

- ATTACK RIDE……… SPIRIT RELEASE -

SPIRIT RELEASE……… 精神解放のライドカードの効

果でカリスは二人に別れた。

「行くぞ!」

「うんっ!」

「橘さん!!」

「ああ、行くぞ! 剣崎!!」

- ABZORBQ……… FUSIONJ -

- ABZORBQ……… EVOLUTIONKING -

- EVOLUTION -

「アリサ!!このカードを使え!!」

「オツケー!!」

- BURRN' UP -

ギヤレンはジャックフォーム、ブレイドはキングフォーム、始力リスはワイルドカリス、アリサカリスはジェスから受け取ったカードで、バーニンカリスへ強化変身した。

「そんなものが……この私に通用するか!!」

「黙れ!!……貴様だけは……必ず倒す!!」

「俺と睦月で奴の動きを停める。」

「最後は頼みます。」

「ああ、わかった!!」

「睦月!!……烏丸所長からのプレゼントだ。」

ギヤレンはレンゲルにラウズアブゾーバーを投げ渡した。

「ありがとうございます。橘さん。」

- ABZORBQ……FUSIONJ -

「今回は、二つに絞ろう……。」

ジェスは、平成ライダーのクレストとプリキュアのマークが入ったカードを取り出し、ケータッチに入れた。

- KUGA・AGITO・RYUKI・FAIZ・BLADE・
HIBIKI・KABUTO・DEN・O・KIVA・W・BLA
CK・WHITE・RUMINASU・BLOOM・EAGLEE
DO・BRIDE・WINDY・DREAM・ROUGE・LEM
ONADE・MINT・AKUA・ROSE・PEACH・BER
RY・PINE・PASSION・BLOSSOM・MARINE・
SANSHAIN・MOONLIGHT・CYCLONE・JOK
ER・ICE・ROD……FINALCRESKAMENRI
DE……DECADE -

レンゲルは、ラウズアブゾーバーを使い、ジャックフォームに、ブルーディケイドは、ケータッチを使い、ブルーディケイド・ライ

ダーキュアズコンプリートフォームに強化変身した。

「行くぞ……睦月。」

「はいっ！」

- RUSH -

- BLIZZARD -

- POISON -

- BLIZZARD VENOM -

「はぁー……」

「さて……」

- ICE -

- ROD -

- W -

- アイスメタルロッド -

「フンッ！」

- W…… KAMENRIDE…… HEATMETAL -

「ふう……」

- FINAL ATTACKRIDE…… DA・DA・DA・W -

- METAL MAXIMUMDRIVE -

- ROD MAXIMUMDRIVE -

「『ライダー……ツインブランディング！』」

「はぁっ！！」

レンゲルの『ジャック・ブリザードベノム』とブルーディケイド・ライダーキュアズコンプリートの『ライダーツインブランディング』がアルビノジョーカーに炸裂し、一時的に動きを停めた。

（今だ！！）

その隙を見逃すギャレンではない。

- RABBIT -

- BULLET -

- FIRE -

- BURNINGSHOT -

「ハアッ!!」

「ぐっ!?!」

「今だ! 剣崎! 始! アリサ!」

『ああ! / はいっ!!』

ギヤレンの『バーニングショット』をまともに受けたアルビノジョーカーにさらに追撃をかける。

- WILD -

「はぁー……」

(ももとのラウズカード以外も入ってるのね……)

- FLAME -

- DRILL -

- TORNADO -

- SPINNING SARAMANDAR -

「はぁっ!」

- SPADE 10 SPADE J SPADE Q SPADE K

SPADE A …… ROYAL STRAIGHT FLAS

H -

「はぁー……」

技を発動する準備が整った三人。

「ハアッ!!」

「スピニングサランダー!!」

「ウェーイー!!」

アルビノジョーカーに迫る三人の必殺技……

「馬鹿な……この私が!!」

- ドガアーン -

「ハア、ハア……ハア……」

「ふう……」

「やったな! 始、アリサ。」

ブレイド達の活躍でアルビノジョーカーは倒れた。

(後は………ダークキバ(バットファンガイア)とザラブ

星人か……)

キバライダーズ対ダークキバ(バットファンガイア)

『フンッ……掛かって来い。』

「行くぞ……渡!」

「うん……兄さん!」

そう言つて、渡と大牙は同時にキバの紋章を足元に出し、ダークキバ(バットファンガイア)の背面に回し……

「ハッ!……ハアッ!」

『ぐっ!?!』

「「フンッ!……タアッ!」」

『ぐわっ……』

キバの紋章とキバ・エンペラーとダークキバ(大牙)の間に働く魔皇力で自分達のところに引き、パンチとキックをくらわした。

『ぐっ……』

「ハアッ!」

「ヤアッ!」

怯んだところに、ライジングイクサとサガ(すずか)が斬撃を当てた。

『おっ……おのれ……』

『そろそろ……トドメと行こうぜ渡!』

「うん……兄さん、名護さん、すずかちゃん……行くよ。」

「ああ!」

「うん!」

「任せなさい!」

「イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ・

「ハアッ!」

『ぐっ……』

「ウェイクアップ」

「ハッ……………フッ!……………渡君!大牙さん!!」

『ウェイクアップファイバー!!』

『ウェイクアップ2!!』

「ハッ……………フッ……………ハアッ……………」

ダークキバ（バットファンガイア）に三人の必殺技が連続で炸裂し、ダークキバが爆発する前に、バットファンガイアからキバットバット?世が離れ偶然、発生した灰色のカーテンをぐり音也の手に?世が停まった。

『やはり、お前のやり方は気に入らない。』

「だ、そうだ。」

「ぐっ……………まさか、ファンガイアと人間の共存を目指す者と、闇の眷属の末裔にやられるとは……………」

そう言つて、先代のファンガイアのキングは、ステンドグラスとなり消滅した。

ウルトラマンゼロ（人間大）対ザラブ星人（フェイト変身）

「ハッ!!」

「オリヤ!!」

ゼロは、フェイトの姿のままのザラブと戦っていた。

（フェイトの姿のままじゃ、やりづらいなあ……………。）

「ハッハ、ハ、ハ……………さしものゼロも……………人間の女には手も出ない様だな?」

「ぐっ……………フェイトの姿で、そんな声、出すんじゃない!」

ゼロは、頭に血が上りそうになりながらエメリウムスラッシュを
発射しようとした。

「私を撃つの？零矢？」

「ぐっ……………」

「隙あり！！」

「しまった！」

一瞬の隙を付かれて、攻撃を受けてしまった。

「終わりだ！ゼロ！！」

しかし……………」

- ATTACKRIDE……………PARTYKURUFETHER -

「うおっ！！」

「何やってんだ、ゼロ！！」

ブルーディケイドがゼロの助けに入った。

「うるせえっ！！……………フェイトの姿じゃ、やる気でねえんだよ。」

「仕方ない……………今回だけだ。」

- ATTACKRIDE……………SENREIKOUSEN -

「ダアッ！！」

「ぐっ……………しっ、しまった！！」

ザラブ星人は、洗礼光線で変装が解けてしまった。

「その姿だったら、やる気が出るぜ！！」

ゼロはザラブに向かって行った。

「ウルトラゼロキック！！」

「ぐおっ！！」

「サポート……………出すか。」

- MONSTERRIDE……………RITORA -

「けえーん！！」

「行けっ！！」

ブルーディケイドは、リトラを召喚した。

「こいつを使うぜ！！……………デュア！！」

ゼロは、ゼロブレスレットをザラブの頭上に投げた。ゼロブレス

レットは、ザラブの頭上に行くと、ウルトラマンのキャッチリングに似た『ゼロリング』をザラブに放射し、ザラブの動きを停めた。

「ぐおっ……動けん!!」

「トドメだ!!」

- CROSS ATTACK RIDE……ZERO・RITORA -

「けえーん!!」

リトラは、ファイアーリトラとなり、必殺の『ファイーストライク』を放った。

「デュワッ……怒りのファイアーゼロキック!!」

ゼロは、リトラの放ったファイーストライクを身に纏いながらウルトラゼロキックを繰り出し、ザラブ星人に向かった。

「ぐわーーーーー……」

ザラブ星人は、ゼロとリトラのクロス技『ファイアーゼロキック』を受け、爆発四散した。

「まさか、ザラブがフェイトに化けるとはな……ウルトラマンだけじゃ無いのか。」

「フェイトちゃん……本当に大丈夫？」

「怪我の方は……ほぼ無い様ですが……」

「ジェスの蒼天の書に入ってる、回復魔法が良かったからだよ。」

「それって、本当に？」

「疑うな、小娘!!」

（親父から貰った、ウルトラゼロブレスレット……まだまだ、未知の力がありそうだな。）

なのはとセイスがジェスの蒼天の書の回復魔法の回復力を疑っている時……零矢は、ウルトラゼロブレスレットについて考えていた。

第24話 剣と蝙蝠と二人の女性とノゼロ、新パワー（後書き）

作者「ゼロの……新しい力を上手い具合に書けなかった。」

ジェス「ブルーディケイドとライダー達は良く書けてるのにな。」

ゆり「それは、言わないであげて。」

ジェス「まっ、良いけど……次回 第25話 守護者とプリキュ

アとセーラー戦士……お楽しみに……って、セーラー戦士!?!…

…まずいな……。」

ゆり「何が？まずいの？」

ジェス「あっ……いや……何でもない。」

セーラームーン「見ないと……月に代わって、お仕置きよ。」
ジェス「今、言うか!!」

世界を護り、全てを救え!!

第25話 守護者とプリキュアとセーラー戦士（前書き）

セーラー戦士以外にも……キャラクターが出てます。

第25話 守護者とプリキュアとセーラー戦士

タイムセイバーズ・会議室

そこでは、『星光の殲滅者』のセイスと、タイムセイバーズ・魔導師チームが話をしていた。

「ほんなら、マテリアルのあと二人も人間になってるのかな？」

「そこまでは……………私もあの二人には……………会ってませんから。」

「そっか……………」

「ところで……………ジェスは今、どちらに？……………この一週間、見てませんが。」

セイスは、一週間……………ジェスがいらないことをはやて達に問い合わせた。

「ジェス君なら、今は……………日本の新宿でちょっとした任務を……………ゆりちゃんとフェニーちゃんと氷孤ちゃんと……………あと、森羅のエージェントの二人と一緒にやってるよ。」

セイスの問いになのはが、そう答えた。

「そう……………ですか。……………わかりました。」

（（（暗いっー！）））

日本 新宿区

「すまん、ジェス。俺達の仕事に付き合ってもらって……………」
「気にすんなよ、エージェント。……………俺もこういう事は、やりたかったからな。」

「ハーケンの性格が……………混じってないか？」

「レイジ……まだ、終わらんのか？……ワシは、疲れたぞ。」

「我慢しろ、小牟。……まだ、気配が消えてない………出てこいっ……！沙夜……！」

「あら、呼んだ？坊や。」

「黙れっ……！沙夜……！」　そう、ジェス達は……森羅のエージェントの零児と小牟と一緒に新宿を中心に暴れている……鎌鼬等の妖怪を退治していた。……しかし、最近になって森羅のエージェントでは倒せない、妖怪の類いが出現し、複数の隊員が戦闘中に『セーラー服を着た戦士に助けられている。』、という情報が届き、調査を始めて一週間……いまだに零児達は『セーラー服を着た戦士』には会わず、鎌鼬ばかり相手をしていた。……今、ジェス達は妖狐の沙夜と会っていた。

「最近の鎌鼬以外の妖怪について、お前に聞きたくてな。」

「鎌鼬以外の妖怪ね……それは、今……こちらでも調べてる最中だし……出所は、こっちの上の方も否定してるし……調査に向かわした、毒午頭に毒馬頭の二人も帰ってきてないし。」

そう、沙夜は返答した。

（沙夜とは……違う組織があると言うことか。）

零児は、そこで少し考え込んだ。……すると……

「……「ゆりさーん……！」」

「花咲、来海、明堂院……」

「あなた達……」

つばみとえりかといつきがゆり達の下に駆け寄った。

「どうしたの？」

「もも姉から、授業のノートを預かったんだ。」

「六課の方に連絡を入れたら……」

「『新宿で任務に当たってる』って聞いて、持つて行くついでにお手伝いしようと思ひまして、やって来ました。」

「そう………ありがとう。」

つばみ達がゆりに手伝いを申し出て、30分後………新宿から

渋谷に移動した瞬間にジェスとフェニーは、何かの気配を感じた。

「……新宿で零児が感じていたのと同じ気配を……」

「感じた？ジェス。」

「ああ……。だが……。この気は？」

すると……。ジェス達の前方が揺らぎだし……。鎌鼬や天狗に混じり、まったく別の妖怪のような者がいた。それに加え、スナッキーやシヨッカー戦闘員、マスカレイトドーパント、電腦ウイルス、ウルフ等の動物系の魔物が出現した。

「ちっ……。仕方ない、やるぞ!!」

「はちやめちやにしちやる。」

『プリキュア！オープンマイハート!!』

「変身!!」

- K A M E N R I D E B L U E D E C A D E -

つばみ達は、ピンク、青、黄色、銀、緑、白の光に包まれてプリキュアに変身し、ジェスは、電子音と共に九つのライダーの虚像が一つにまとまり、青い九つのプレートがマスク部分にささり、青いラインが走ると、ブルーディケイドへの変身を完了した。そして、零児と小牟も自分達の武器を取り出した。

「大地に咲く、一輪の花……。キュアブロッサム!!」

「海風に揺れる、一輪の花……。キュアマリン!!」

「陽の光り浴びる、一輪の花……。キュアサンシャイン!!」

「月光に冴える、一輪の花……。キュアムーンライト!!」

『ハートキャッチ！プリキュア!!』

「疾風に舞う、一輪の花……。キュアサイクロン!!」

「氷雪に咲き誇る、一輪の花……。キュアアイス!!」

「俺は、……。世界の守護者……。仮面ライダーブルーディケイドだ

!!」

「森羅のエージェント……。有栖零児!!」

「同じく、小牟!!」

「いざ、尋常に勝負!!」

と、言ったものの……………

「なんで、ワシがこんなことをせにや、ならんのじゃ?」

「空気を壊すな、小牟……………後で、お尻を千叩きだ。」

「そつ、そんなにするでない!!逝つたらどうするんじゃ!!」

「その時は、その時だ。」

「うゝゝゝ、零児の鬼畜、サド!!」

「プラス千叩きだ。」

()()()(容赦(ねえ)()(ないなあ)()(ないわね)
()(ないです)()(ないですわ)()()()()

心の中でそう思つてゐる、ブロッサム達とブルーディケイド。

???「おや?……………見慣れない、連中ですね。」

『!!?』

ブロッサム達は、声が聞こえた方を向いた。

「誰だ!!」

???「誰でも、良いでしょう。……………やつておしまい!!」

敵の群れがブロッサム達に向かおうとした時……………ブロッサム達の後ろに虹色のゲートが開いた。そこから、剣や斧等を装備した男女や片手が銃になつてゐる少年と少年に付き添う少女、ナビを持った二人の少年と二人の少女がいた。

「彼らは!!」

「レイジさん、お久しぶりです。」

「ヤッホー!!」

「軽いぞ、ルーティー。」

「おいっ!ジューダス……………その二人、ひよつとして……………」

「若い頃の……………」

「父さんと母さん……………なの?」

「スタンにルーティーにジューダスか……………」

「ほかの三人は新顔じゃな。」

「あつ!!俺、カイル!カイル・デュナミス!!」

「リアラです。」

「ロニ・デユナミスだ!!」

カイル達は、それぞれ名前を言った。そこへ……

「レイジさん!!」

「シャオムウさん!!」

「ロックに、メールか……スタン達にしろ、あの時以来か。」

「「ハイっ!!」」

片手が銃になつて少年はロック、それに付き添う少女はメールと名乗った。

「「同じ名前………ややこしくないか?」ロック?」」

「言つてる、場合じゃないでしょ?熱斗。」

「そうだよ。スバル君。」

「「オツケー!行くぜ、」ロック」!!」」

「いつでも、良いよ。熱斗君。」

「応よ!いこうぜ、スバル!!」」

「メール!!」

「うん!!」

「「シンクロチップ!スロット・イン!!……フルシンクロ!!」」

「「ミソラちゃん!」

「行くよ、スバル君!!」

「「電波変換!!星河スバル!!ノ響ミソラ!!……オンエア!」

「!!」

「熱斗君、オペレートよろしく。」

「メールちゃん、お願い。」

「任しとけ、ロック!!」

「大丈夫よ、ロール。」

（熱斗に星河達が来たのか。）

さらに……虹色のカーテンが発生し、一人の少年と一人の少女が出てきた。

「此処は………一体?」

「お兄ちゃんとスピルリングが切れてる……………此処は、私達の世界じゃない。」

「本当？コハク。」

「うん。」

「君達は？」

二人の存在に気付いた、零児。

「あつ、俺、シング・メテオライト。」

「私は、コハク・ハーツです。」

零児に自己紹介をする二人。

一方……………零児達が調査を終えた新宿では……………

「今日は、まだ出てきてないのね。」

「そんなしよっちゅう出られちゃ、美奈子達の体力が持たないよ。」

「それもそうね。……………！！まずい、此処とは違う場所で、

妖魔の反応が！！」

「早く、知らせよう。」

「ええ、急ぐわよ！『アルテミス』。」

「ああ、『ルナ』。」

渋谷区

零児達が、敵と交戦していた。

零児、小牟、ロック&メイル対鎌鼬、天狗

「火燐……………吠えろ!!」

「水憐!……………時雨の型!!」

「マシンガンアーム!!」

「クラッシュボム!」

鎌鼬や天狗が残り数体になったところで……………

「銃の型……………極!!……………ハアツ、ハツ!!……………これで、終わりだ。」

「ほとんど、大道芸じゃな。」

「やつちゃって、ロック。」

「うん!!シャイニング・レーザー!!」

トドメは、零児と小牟の協力技『銃の型・極』とロックの必殺技『シャイニング・レーザー』で、鎌鼬と天狗共を一掃した。

ブルーディケイド対ショッカー戦闘員、マスカレイトドーパント

「一人でも、行けるが!……………手伝ってもらっ。」

- KAMENRIDEW -

ジェスは、仮面ライダーWを召喚した。

「『さあ、お前の罪を数えろ!!』」

「最初っから、とばすぜ!!」

- FORMRIDE……………WLUNATRIGGER -

『行くっか?翔太郎?』

「ああ、フリップ。」

- FINALKAMENRIDEBLUEDECADE -

ブルーディケイドは、ライダーの力だけの通常コンプリートフォームに強化変身した。

「行くぜ……………」

- KABUTO……………KAMENRIDEHYPER -

ジェスは、自分の隣にハイパーカブトを出現させた。

「一気に叩くぞ、W!!」

「ああ!」

- FINAL ATTACK RIDE KA・KA・KA・KABUT
O: DA・DA・DA・W -

- ALLZEKUTAR COMBINE..... -

- TRIGGER MAXIMUM DRIVE -

「マキシマムハイパーサイクロン!!」

- MAXIMUM HYPER CYCLONE -

「トリガー...フルバースト!!」

ブルーデイクイドコンプリートフォームとWルナトリガーの必殺技でショットカー戦闘員とマスカレイトドーパントを一掃した。

ハートキャッチプリキュア&サイクロン、アイス対スナツキーズ

「マリン!!」

「やるつしゅ!ブロッサム!!」

マリンとブロッサムはスナツキー達を中心に背中合わせて手を繋いだ.....そして.....

「プリキュア!大爆発!!」

二人の協力技でスナツキー達の数を半数まで減らした。

「はぁー!」

「ハッ!ハアッ!!」

サンシャインとムーンライトは体術でスナツキーを倒し.....

「アイスコフィン!!」

「フェニックスの力を一緒に使う時は、赤だけど.....通常の

時の技も見せなきゃ。…………プリキュア！！グリーンフォルテシューティング！！」
アイスの『アイスコフィン』でスナッキー達を固まらせた所に、サイクロンの『グリーンフォルテシューティング』が決まった。

一方…………

「みんな、こつちよ。」

「さつきは、妖魔以外の気配も感じたけど……………今は、妖魔にそれを率いている奴に、本来いない魔物や電脳ウイルスだ。」

「ルナやアルテミス話を聞く限り本当みたい……………みんな！急ぎましょう。」

『うん！！』

ルナとアルテミスの先導の下、少女達は渋谷を目指した。

渋谷区 - -

Wロックマン&ロール、ミソラ対電脳ウイルス群

『一気に決めるぜ！ロック。』

「わかったよ。熱斗君。」

「メールちゃん、私達も…………」

『わかったわ、ロール。』

「ミソラちゃん、ロック、一気に行くよ。」

「オッケー、スバル君。」

『ぶちかませ、スバル！！』

『バトルチップ、』ソード』、』ワイドソード』、』ロングソード』スロット・イン！！』

『バトルチップ、』スプレット』×3枚、スロット・イン！！』

『ドリームソード！！』

『ハイパースプレット！！』

『ロックバスター！！』

『ウェーブシューター！！』

ロックマン達は、特定の組み合わせで発動する『プログラムアドバンス（PA）』と個人装備の武器で電腦ウイルス群を撃退した。

スタン&ルーター、カイル&リアラ&ロニ、ジューダス、シング&コハク対モンスター群

「行くぞ、デймロス！！」

『ああ、スタン！』

「アトワイトもいいわね？」

『ええ、やりましょう。ルーター。』

「久しぶりに行くぞ、シャル！」

『わかりました。坊ちゃん。』

「よし、スタン、ルーター！！」

「おうつ」

「「虎牙破斬！！」」

「スナイプロア！！」

「獅吼爆炎陣！！」

スタン、ルーター、ジューダスは、協力技『ソーディアンマスタール』を発動させモンスターを三体、倒した。

「ジューダスやる。俺だって！………塵葉枯葉！………フレイ

ムボール!!」

「どりゃ!!」

「エアカッター!!」

カイル達はそれぞれ、技や通常攻撃、晶術でモンスター達を倒していく。

「コハク!!」

「うん。シング!!」

「爆炎剣!!」

「炎舞陣!!」

シングとコハクは共に炎を纏わせた攻撃をモンスター群に叩き込んでいく。……………モンスターの数があと一、二体になると……

……………

「スタン、きっちり決めなさい!!」

「ああ!!」

「コハク、大丈夫か?」

「大丈夫だよ。シング。」

スタンとコハクは、モンスターに向けて駆けていく。

「ハアツーー……………」

「「殺劇舞荒剣ノ拳!!」」（剣の方がスタン、拳の方がコハク）

二人は、型は違えど同名の技で残りのモンスターを倒した。

「よっしゃー!!」

『浮かれるな!スタン!!』

「デймロスは、厳しいな。」

一方……………

「反応が妖魔とそれを率いている奴だけに、なった……………誰かが戦闘しているのかな?」

「みんなは、変身できる準備をして。」

そこに……………

「あら？スモールレディ。」

『せつなさん！！』

「プー！？」

「どうしたの？せつな？」

「何か？あつたの。」

「あれ？月野達じゃないか。」

『みちるさん、はるかさん。』

「ほたるちゃん！」

……………ルナとアルテミス、説明中……………

……………

「はるかさん、みちるさん、せつなさん、私達も行こうよ？」

「ええ。」

「わかった。」

「構いません。」

「みんな、急ぎましょう。」

渋谷区 - -

「後は、あいつら……………だけか。」

謎の妖怪とそれを率いる者以外を全滅させた零児達……………だが！

????「セーラー戦士がいないのは……………こちらとしては好都合……………

…やれっ！！『妖魔獣スフィンレオン』！！奴らを倒すのです。」

「がおー……………ん！」

（妖魔獣だと……………一筋縄じゃいかねえな。）

そう、ジエスは予想した。

タイムセイバーズ対妖魔獣

「マリンシユート!!」

「青龍槍!!」

「地雷………春雷の型!!」

マリン、小牟、零児が連続で攻撃を仕掛ける。………しかし………

「ギャオーーーーー!!」

妖魔獣は、効いたそぶりを見せず、逆にマリンに向けて口から、溶解液を放った。

「ん?………そんなに攻撃してるつもり?」

と、マリンは強気に言うが………

???「自分の姿を確認してから言っんだな。」

「えっ?」

「マリン!!服っ、服!!」

「えっ?………………きゃあっ!!／／／」

なんと!!キュアマリンの服が溶解液で溶けていた。

「かなり、強力なようじゃな。」

「マリン、あなたは離れなさい。」

「ごめん……／／／」

「でも、………あの液があるんじゃあ………」

ブロッサムの呟きにサイクロンとアイスは顔を合わせた。

「サイクロン………」

「考えることは………同じか………ブルーデイクイド!!」

「ああ………ちょっと、くすぐったいぞ………」

- CRESRIDERRIDE……… -

- CYCLONE -

- ICE -

「あっ／／／んっ／／／」(アイス)

「変身………んっ／／／」(サイクロン)

- CYCLONE -

- ICE -

キュアアイスとキュアサイクロンは、キュアズライダーアイスとキュアズライダーサイクロンに変身した。

「これなら……………」

「おい、アイス……………あんまり色っぽい声……………出すな。」
「はい。」

そこへ……………

「ちよつと待って!!」

「へっ?」

複数の少女達が走ってきた。

「君達、此处は危険だ!!」

「早く、逃げなさい!!」

零児とムーンライトがそう言うが……………

「大丈夫です。……………みんな、やるわよ!!」

『うん!! / ええ!!』

少女達は、変身アイテムを取り出した。

(まさか!!)

「ムーン・クライシス……………」

「マキユリークリスタルパワー!!」

「マーズクリスタルパワー!!」

「ジュピタークリスタルパワー!!」

「ヴィーナスクリスタルパワー!!」

「ウラヌスプラネットパワー!!」

「ネプチューンプラネットパワー!!」

「プルートプラネットパワー!!」

「サターンプラネットパワー!!」

『メイクアップ!!』

(やっぱり……………)

(((((プリキュア以外の少女戦士……………))))))

????「来たか……………セーラー戦士……………」

少女達は様々な色に包まれていき、戦士に変わった。

「水星を守護に持つ……セーラーマーキュリー!!」

「火星を守護に持つ……セーラーマーズ!!」

「木星を守護に持つ……セーラージュピター!!」

「金星を守護に持つ……セーラーヴィーナス!!」

「天王星を守護に持つ……セーラーウラヌス!!」

「海王星を守護に持つ……セーラーネプチューン!!」

「冥王星を守護に持つ……セーラープルート!!」

「土星を守護に持つ……セーラーサターン!!」

「そして!!月を守護にする……セーラームーン……とセーラーちびムーン!!……せっかく、平和な世界になったのにそれを壊す悪い奴は……月に代わって、お仕置きよ!!」

（あの、少女達が……セーラー戦士……）

そう、森羅のエージェントを助けていたのは、彼女達、セーラー戦士なのだ。

???「来たか!!セーラー戦士……だが、お前達に……この妖魔獣が倒せるか?」

妖魔獣がセーラー戦士に迫る。

「気をつけて、そいつが吐き出す液は……服を溶かす性質があるの!!」

ムーンライトがセーラームーン達にアドバイスを送る。

「あの、戦士……マーキュリーに声が似てない?」

「そうかしら?」

（気楽なやつら……まあいい、スキャン!!……はっ!

!そういう事か……）

- ATTACK RIDE……BODY SEPARATES -

「はっ!!」

ブルーデイクイドは、妖魔獣に身体分離の光弾を放った!!

???「しまった!!」

妖魔獣は、光弾を受けた瞬間、『妖魔』と『妖魔獣』に分離した。

「妖魔と……あと一体は……」

「あれは、幽魔獣だ……。」

そこに、ゴセイナイトが通りがかった。

「『ゴセイナイト!!』」

ブロッサムとムーンライトとブルーディケイドは同時に声を出した。

「もう、正体を現せ!!」

「ちっ……さすがは……ゴセイナイト。すぐに見破るとは……」

「武レドラン!?!」

なんと!!妖魔獣を連れていたのは、武レドランだった。しかし

……

「おかしい、ブレドランは今……10(TEN)才のブレドRUNとして『マドリンティス』にいるはず……何故だ武レドラン!!」

「そんな事を教える、私ではない!!」

「くっ……」

「ゴセイナイト!!」

そこへ……アラタ達と明石達が駆け付けた。

「ゴセイジャーにボウケンジャー。」

「武レドラン!?!」

「どういう事だ!!」

「護星天使か……」

アラタ達を見て、そう呟く武レドラン。

「私達を知ってる!?!」

「どうやら、前回、倒した奴らしいな。」

「みんな行くよ!!」

『ああ!／うん!!』

アラタ達は、テンソウダーを取り出した。

「ガッチャ!!」

『チェンジカード!!天装!!』

「チエンジ！ゴセイジャー！！」

アラタ達は、ゴセイジャーに変身した。

「嵐のスカイクパワー！！……ゴセイレッド！！」

「息吹のスカイクパワー！！……ゴセイピンク！！」

「巖のランディックパワー！！……ゴセイブラック！！」

「恵みのランディックパワー！！……ゴセイイエロー！！」

「怒涛のシーニックパワー！！……ゴセイブルー！！」

「地球を清めし宿命の騎士！！……ゴセイナイト！！」

『地球を護るは、天使の使命！！……天装戦隊ゴセイジャー！！』

「ド、ドッーーンー↑スーパー戦隊お馴染みの背後で爆発！！」

「なんで、後ろで爆発するんでしょう？」

「さあ……なんでだろう？」

「あれっ？マリン。もう大丈夫なんですか？」

「なんか、気付いたら……服、戻ってたし。」

そんな、会話をする……ブロッサムとマリン。

「フンッ！……ゴセイジャーになったところで、この波動は防げまい！！」

「ぶうーーーんー」

武レドランと妖魔と幽魔獣が一斉に、何かの波動を発生させた。

……その瞬間！！

「ぐあっ！！」

「身体が……」

「重い……」

「何だ、これは？」

「この……状態じゃ、天装術も……」

「くっ……私にも、効力があるとは……」

ゴセイジャーだけではなく、プリキュアやセーラー戦士、零児達も動けなかった。

『くっ……』

しかし……

「みんな、行くぞ!!」

『ああ!! / 了解!!』

明石達はアクセルラーを取り出し、高岳はゴーゴーチェンジャーを装着した。

『レディ!! ボウケンジャー!! / ゴーゴーチェンジャー!!』

『スタートアップ』

明石達はボウケンジャーに変身した。

「熱き冒険者……… ボウケンレッド!!」

「速き冒険者……… ボウケンブラック!!」

「高き冒険者……… ボウケンプール!!」

「強き冒険者……… ボウケンイエロー!!」

「深き冒険者……… ボウケンピンク!!」

「瞬き冒険者……… ボウケンシルバー!!」

「果てなき、ボウケンスピリッツ冒険魂!!」

『轟轟戦隊ボウケンジャー!!』

「何をしようと無駄だ!!」

武レドランは、さっきと同じ様に何かの波動を放とうとしたが!

! それより先に、ボウケンジャーが動いていた。

『サバイバスター!!!!』

「ぐっ!!」

「シルバー!!」

「応っ……… サガスラッシュ!!」

「ぐあっ!!」

ボウケンシルバーのサガスラッシュが武レドラン達にヒットした瞬間、ゴセイジャー達を苦しめていた、身体の重みが消えた。

「今のは、一体?」

ゴセイブルーは、そうつぶやいた。

「貴様、一体何を?」

武レドランは、そう言った。

「簡単な事だ……… お前達の中にある、『ゴードムエンジン』を

破壊しただけだ。」

「俺様達のスーツは、ゴードムエンジンの干渉を打ち消せる様に、ビッグルの『ネオパラレルエンジン』をリンクさせてるからな。」
武レドランの問いや、ゴセイブルーの疑問にボウケンレッドとボウケンシルバーが答えた。

「くっ………… スフィンドム、レオネル………… この場は、任せるぞ。」
武レドランは、そう言って………… 姿を消した。

「レオネルは、ボウケンジャーと私達でやる。スフィンドムは、プリキュアと仮面ライダーと零児達とセーラー戦士で頼む。」

「オツケー、ゴセイナイト………… 行くぞ……！」

『はいっ……！／ああ……！／ええ……！／わかりました。』

「行くぞ、みんな……！………… アタック……！」

『了解……！／ああ……！／うん……！』

零児達と仮面ライダー、プリキュア、セーラー戦士はスフィンドムへ、ゴセイジャーとボウケンジャーはレオネルに向かって行った。

タイムセイバース&セーラー戦士&ナムカプメンバー対妖魔スフィンドム

「ギシャーーーー……！」

「くっ………… なんて、気迫なの？」

プリキュアとセーラー戦士は、スフィンドムの気迫に押されてた。

（妙だな………… よし……！）

- ATTACK RIDE………… SCOPE -

「…………… これは……！」

「どうしたの？ブルーディケイド？」

「ムーンライト………… うん……！」

ブルーディケイドは頷いた後…………… ムーンライトを自分の方に引

き付けた。（腰の部分を持つて…）

「ノノノノ！……ちょ……ちよつと！！ジェス！！………一体どうし……はっ！！」

ムーンライトは、ブルーディケイドに引き寄せられた時………スコープの効果で、心の花と何かの結晶体と妖魔の姿が目に入った。

「これは………倒す前に………心の花とあの結晶体を取り出さなきゃ！！」

「そういう訳だ………ムーンライト頼むぞ。」

「ええ。………ブロッサム、マリン、サンシャイン、サイクロン、アイス………行くわよ！！」

『はいっ！！ノやるっしゅ！ノうん！ノオッケー！ノ了解！！』

ブロッサム達はスフィンドムの前に立った。（サイクロンとアイスは、ライダーからプリキュアに戻って………）

「まずは………動きを停める！！」

・FINAL CRESULTRAKAMENRIDE………BLUE
DECADE・

ブルーディケイドは、プリキュアとウルトラマンと仮面ライダーの三つの力を使う………キュアズウルトラライダーコンプリートフォームに強化変身した。

「行くぜ………」

・CRESPOWER………ICE・

・RIDERPOWER………RENGERU・

・ULTRAPOWER………THIGA・SKY・

・FUSIONATTACKRIDE………BLIZZARDFREEZINGKOFIN・

「ブリザード・フリージングコフィン！！」

「ギ………シ………」

ブルーディケイドの攻撃で凍り付いたスフィンドム。

「今だ！！」

『ええ！！………集まれ花のパワー！！』

「プロツサムタクト!!」

「マリンタクト!!」

「シャイニータンバリン!!」

「ムーンタクト!!」

「サイクロンセイバー!!」

「アイスセイバー!!」 『集まれ、すべての花の力よ。』

『プリキュア!!ダブルフローラルパワーフォルテツシモ!!』

『プリキュア!!フローラルパワーフォルテスラッシュ!!』

動きの停まつてる間に……サイクロンとアイスの『フォルテスラッシュ』とプロツサムとマリン、サンシャインとムーンライトの『フォルテツシモ』でスフィンドラムを攻撃した。

『ハートキャッチ!!』

『ハアッ……!!』

「よし…… ウィンドラムのマケットカプセル……」

「この心の花…… まだ枯れきってない。」

その時……

「ギシャ……!!」

『ムーンライト!!』

「ゆりっ!! 危ない!!」

「えっ？」

ムーンライトにスフィンドラムの攻撃が迫っていた。

「くっ!？」

その時……

「『フレイドライブ!!』」

「閃空裂波!!」

「崩龍斬光剣!!」

カイル達がスフィンドラムを攻撃した。

「小牟、鬼門封じ、発動!!」

「レディ……」

零児と小牟はスフィンドラムを同時に蹴った。

「鬼門封じ……ハアッ……!!」

「此処しかない………木は火を生み、火は土を生み、土は金を生む、そして金は………」

「水を生む!!」

「森羅………万象!!」(前半の台詞小牟、後半の台詞零児)
零児の連続攻撃のあとで、小牟の水憐の一閃が決まった………これが零児と小牟の必殺技『森羅万象』である。

『ムーンライト!!』

「大丈夫か？」

「ええ。」

しかし………

「フウ………フウ………」

「うそ………」

「あれだけの攻撃を受けて、立っているとは………」

「シャーーーーー!!」

スフィンダムがプリキュア達やセーラー戦士に迫る………その時

!!

・ヒューン………カッ!!

スフィンダムの目の前のアスファルトに赤いバラの花が刺さった。

「シャ？」

(何だ………誰なんだ。)

「平和な世界を乱そうとする者よ、そんな事は………この私が許さない!!」

『タキシード仮面様! (?!!)』(？は、セーラームーンとセーラーちびムーン)

(タキシード仮面………一体、何者何だ?)

「セーラームーン! ……相手が妖魔なら………」

「うん。マークュリー。」

セーラー戦士達がスフィンダムの前に並んだ。

「マークュリー………アクアラプソディ!!」

「マーズ…… フレイムスナイパー!!」

「ジュピター…… ホークレボリユーション!!」

「ヴィーナス…… ラブハンドリーショット!!」

「ラウンド…… シェイクング!!」

「デープ…… サブマリン!!」

「デッド…… スクリーム!!」

「ハアッ……!!」

マーキュリーからブルートの技が当たった、直後にサターンの攻撃が炸裂。

「今よ!! セーラームーン!!」

「うん!!」

セーラームーンとセーラーちびムーンが前に出た。

「お願い!! ペガサス、みんなの夢を護って!!…… トウインクルベル!!」

「ムーン・ゴージャス……… メーディ・ケーション!!」

「シャ…… シャー!!」

「くっ!!」

セーラームーンの攻撃を受けながらもなお立っているスフィンダム……

（どうすりゃあ……… つ!!）

・ピカー………

此処から、ジェスの精神空間での会話です。

（こっこれは?……… 《目覚めるのです…… 太陽を守護に持つ戦士よ。》っ!? 誰だ!! 《私は、クイーンセレニティー……… かつて月にあったミレニアムキャッスルにいた者です。》……… その、あなたが俺に何の用だ。……… 《貴方は、太陽を守護に持つ戦士なのです。……… 目覚めの時が来たのです。さあ、セーラームーンを助けるのです。》……… だいたい、わかった。）

「っ!!」

ジェスは、精神空間から戻って来た。

「くっ……………」

「シャーーー……………」

「きゃあ……………」

なんと！スフィンドムがセーラームーンの攻撃を弾き飛ばした。

『セーラームーン！！』

（スフィンドムは……妖魔の体にゴードムエンジンや、心の花があつた……………ちっ！！）

その時……ブルーディケイドの右手とキュアサイクロン、キュアアイスの右手が光りだした。……………キュアサイクロンとキュアアイスは……セーラー戦士のマーキュリー達が使ったのと同じ物（マークは、サイクロンが地球の大地を表すマーク、アイスが、地球の海を表すマーク。）が……ブルーディケイドは……絵柄が太陽のマークを背に立っている戦士のライドカードと変身アイテムが出現していた。

「サイクロン……アイス……行くぞ。」

「「うん！！」」

ブルーディケイドとサイクロン、アイスは変身を解いた。

「ガイアクリスタルパワー！！」

「アクアクリスタルパワー！！」

「サンシャインパワー！！」

「「メイクアップ！！」」

「ウエイクアップ！！」

その瞬間、フェニールは赤、氷狐は青の光に包まれ、ジェスは、太陽を背に受け輝いていた。

「セーラーガイア！！」

「セーラーアクア！！」

「シャイニングウォーリアー！！」

フェニールは、セーラーガイア……氷狐は、セーラーアクア……ジェスは、シャイニングウォーリアーに変身した。

『セーラーガイアにセーラーアクア……………』

「そして……シャイニングウォーリアー……」

セーラー戦士一同とムーンライトは、そう呟いた。

「行くぞ……スキャン……開始………やはりな……」

……ブレイティック……」

- get' set -

「二つの力を合わせる。」

- KAMENRIDE……AGITO・SHINNING -

- SUPERHERORIDE……MAJISHINE -

すると……シャイニングウォーリアーの横に仮面ライダーアギト・

シャイニングフォームが現れ、シャイニングウォーリアーの左手に

……『グリップフォン』が現れた。

「天空変身……ゴール・ゴル・ゴル・ゴルデューロ……」

『ゴール・ゴル・ゴルデューロ……』

シャイニングウォーリアーは、別の姿に変わった。それは……

「輝く、太陽のエLEMENT……！天空勇者……！マジシャイン……！」

マジレンジャーの魔法の先生………ヒカルこと、サンジエルの変

身する……マジシャインだった。

「マジランプバスター……」

マジシャインがマジランプバスターを手に取ると……アギト・シ

ヤイニングフォームは、自分の武器『シャイニングカリバー』を出し

た。

「行くよ。……ルルド……」

マジシャインが呪文を唱えると、アギトはマジランプバスターの

中に入った。

「行くぞ……ルーマ・ゴー・ゴジカ……」

- FINALATTACKRIDE……A・A・A・AGITO -

- FINALATTACKRIDE……MA・MA・MA・MAJ

ISHINE -

「アギト・スーパースhayニング・クラッシュ……」

マジシャインは、『スモークシャイニングアタック』のアギト

版『アギト・スーパーシャイニングクラッシュ』をスフィンドムに放った。

「シャッ!？」

「ハアッ!?!……………タアッ……!?!」

「シャ!?!」

マジシャインの放った攻撃で、ゴードムエンジンが外に飛び出し追撃の一発でゴードムエンジンを破壊した。

「ガイア!!アクア!!」

「ガイアセイバー!!」

「アクアロッド!!」

セーラーガイアは、ガイアセイバーを……………セーラーアクアは、アクアロッドを手にとった。

「ふうっ……………シャイニングエッジ!!」

マジシャインは、シャイニングウォーリアーに戻り、シャイニングエッジを取り出した。

『ファイナルチャージ!!』

- GAIAMAXIMUMDRIVE -

- AKUAMAXIMUMDRIVE -

- SHINNINGMAXIMUMDRIVE -

『マキシマム・トリプルブレイク!!』

三人の同時必殺技がスフィンドムに直撃し……………ついに、スフィンドムを倒した。

(あとは……………レオネルだけか……………)

ゴセイジャー & amp; ボウケンジャー 対 幽魔獣レオネル

ゴセイジャーとボウケンジャーは、レオネルと戦っていた。

『スカイクブラザーカード!……………天装!!』

- サモン……………スカイクブラザー -

「レオンレイサー……」

「サガストライク!!」

「シューターハリケーン!!」

『スナイパーモード!!』

ゴセイジャーは、スカイクブラザーヘッドをゴセイブラスターにセットし、ゴセイナイトは、レオンレイサー・ガンモードを手に持ち、ボウケンジャーのレッドからイエローは、サバイバスター・スナイパーモードを持ち、ピンクは、シューターハリケーンを、シルバーは、サガストライクを撃てる準備をした。

『シュート!!』

「ぐわっ……ぐっ!! たかが、人間と護星天使の分際で……」

「俺達を甘く見るな! レオネル!!」

そんな時……

- ピピピッ、ピピピッ…… -

「チーフ! 呼び出しです。」

「何だ?」

『あゝ、明石君。 やつと繋がりました。』

「牧野先生。……どうしたんですか?」

『はい。 アクセルテクターの改良、量産とデュアルクラッシャーの強化が、たった今、終わりました。 今、転送します。』

「了解した。……みんな、アクセルテクターを装着するぞ!!」

『了解!!』

「アラタ、私達もやろう。」

「うん。……みんな、行くよ。」

ボウケンジャーは、アクセルラーとゴーゴージェンジャーに手をあて、ゴセイジャーは、ゴセイカードとテンソウダーを手を取った。

『アクセルテクター! 装着!!』

『ミラクルゴセイパワーカード!!……天装!!』

- サモン……ミラクルゴセイパワー…… -

ゴセイジャーは、右手にゴセイテンソードを持ち、左手に持って

いた…『ミラクルゴセイヘッダー』をセットした。……………そして

………

『超天装!!』

- スーパーチェンジ……… -

「奇跡の嵐……… スーパーゴセイレッド!!」

「奇跡の息吹……… スーパーゴセイピンク!!」

「奇跡の巖……… スーパーゴセイブラック!!」

「奇跡の恵み……… スーパーゴセイイエロー!!」

「奇跡の怒涛……… スーパーゴセイブルー!!」

ゴセイジャーはスーパーゴセイジャーに強化変身し、ボウケンジャーはアクセルテクターを装着した。

「これは………」

「俺達の色と同じ………」

「牧野先生のおかげだな………」

ボウケンジャーのアクセルテクターは通常一つ……………だが!!今は……………ボウケンジャー全員の専用アクセルテクターを開発するまでになった。

「みんな……… 一気に決めるぞ!!」

『ああ!! / うん!!』

ゴセイナイトの一言で……………ゴセイジャーとボウケンジャーは必殺技の準備をした。

『テンソウダー!!……… セット!!……… ゴセイテンソウダーソード!!………』

ゴセイジャーは、ゴセイテンソードにテンソウダーをセットした。

「デュアルクラッシャー!!」

ボウケンジャーは、レッドがデュアルクラッシャーを持ち、ブラックからシルバーはレッドを支えていた。

「バルカンヘッダーカード……… 天装!!」

- サモン……… バルカンヘッダー!!……… -

「断罪のナイティックパワー………」

・ナイトダイナミック！

『ミラクルスカイランドシーダイナミック！』

『パニツシュー！』

「デュアルクラッシャー……ドリルヘッド！……シュート！！」

ゴセイジャーの『ミラクルスカイランドシーダイナミック』とゴセイナイトの『ナイトダイナミック』、ボウケンジャーの『デュアルクラッシャー』の光弾がレオネルに迫る。

「ぐっ……」

そこへ……

・FINAL ATTACK RIDE……BU・BU・BU・BLU
EDECAD E

「ハアッ！！」

シャイニングウオーリアーから、ブルーディケイドに変身したジエスのブルーディメンションプラスターがゴセイジャー達の攻撃と共にレオネルに直撃……

「ぐわっ……」

そこへ、ビービ虫がレオネルに取り付くが……巨大化せずにその場でレオネルと共に爆発した。

その後……プリキュアは、心の花を持ち主に返し、セーラー戦士やゴセイジャー達のいるところに向かい……そこで……

「これで、集まったか……」

スタン達は戦闘終了と同時に自分の世界に帰還した。……

……その後……ジエスの変身アイテムから『クイーンセレニティー』の言葉で地球の事件だけ手伝うようになった、セーラー戦士達……ジエスの右手には、ライドブッカーから出たセーラー戦士のライドカードが握られていた。

第25話 守護者とプリキュアとセーラー戦士（後書き）

作者「いつになったら……スーパー戦隊のロボバトル書……」

ジェス「少し、やる気が無いので、次回 第26話 第二回カラオケ大会 ……またすんの!？」

第27話 二つの獣機神（前書き）

タイトルを見て、わかる人は、わかるかも知れません。

第27話 二つの獣機神

ある空間……

「くっ……ちょっと、まだなの？」

「もう少し、待ってください葵さん。」

「なんか……飽きたなぐくからもそう思わね？」

「それは、朔哉だけ。」

「私も、くららさんと同意見です。」

「エイーダさんまで、厳しいね」

彼らは……Dチーム……今、自分達の世界から別の世界に行く
うとしている。

クラナガン某所……

「ライジング・インパクト!!」

「イー……!!」

ドラゴンソルジャー・ライジングがショッカー戦闘員と戦闘して
いた。

「しつこい奴らだなあ……ライジング・スラッシャー!!」

「イー……」

ライジングスラッシャーを回転切りの要領で放ち、ジェスはその
場を去った。

数日後……………

「リボルバー……………シュート!!」

「クロスファイアー……………シュート!!」

「ラシルド!!」

スバル、ティアナがジェスと模擬戦をしていた……………。

「（ラシルドで防げたのは、リボルバーだけ……………）ちっ
セウシル!!」

ド、ド、ドーン!!

（砂煙か……………利用しない手はないな。）

セウシルとクロスファイアーがぶつかった時に起きた砂煙にスバルとティアナは気を抜いていた。

「やったかな？ティア？」

「多分……………ね……………だが……………」

「はい……………チェックメイト。」

「え!!」

なんと!!ティアナとスバルの首筋にジェスの手刀が当てられていた。

「俺の勝ち……………だな？」

「はい……………まいりました。」

模擬戦後……………ティアナ達は、食堂にいた。

「そっちは、どうだったのエリオ？」

「今回は、翔太郎さんの単独変身の仮面ライダージョーカーとやりましたけど……………」

「最後の最後で、二人いっぺんにチェックメイトされちゃいました。」

「こっちと同じ結果って訳ね。」

そんな……日に、隊長陣は、集まっていた。

「実は……………カリム経由でちょっとあるからもうしばらく待ってな。」

「（なあ……………カリムって？）」

「（聖王教会の騎士なの。）」

そんな会話をしていたら、カリムがモニターに映った。

「（やっと、出番。）実は……………夢を見たの。」

「そんな事で呼び集めたのか？」

「いいえ……………夢の内容が問題なの……………その夢が……………」

カリムは夢で見た出来事をはやて達に話した。

『二体の獣型のロボット？』

「それに緑色のロボット……………兄貴……………」

「おそらく……………考えてる、通りだろ。」

「ミスカリム……………その獣型のロボットの特徴は……………」

『そうですね……………二体とも……………五体編成で、一方は背中に

翼、もう一方は両肩に紅いキャノン砲みたいなものを持っていたわ。』

「ありがとう……………ブライト艦長。」

『こちらでも、話しは、聞いた……………二体の内の一体はこちらで所有している。『ダンクーガ』に違いない。』

「そうですか……………」

カリムやなのは達はジェス、アクセル、ブライト艦長の話しに耳を傾けていた。

「八神……………そのロボットの件は、こちら……………『地球連邦軍第13独立部隊 Rond・ベル隊』が処理をする……………いいな。」

「仕方ない……………了解や。」

「ん？……………アイビス？……………どうした、アイビ……………ジェス……………」

助け……………っ！！……………アイビス！……………アイビス！！……………まさか……………くっ……………」

「ジェス……………」

ジェスは、アイビスからの SOS を受けて飛び出した。

「くっ……………」

『アイビス！……………もう、アステリオンは限界よ。早く戻って！』

「それは……………無理だよ、ツグミ。……………左ウイングの破損と……………テスラ・ドライブの出力低下……………この状況だと……………戻れないよ。」

アイビスの操縦するアステリオンは、パトロール中に現れた『緑色のロボット』と交戦……………その結果、アステリオンの左ウイングを損傷し、テスラドライブのトラブルで動けなくなっていた。

「ギイイー……………」

「くっ……………。(ジェスが来るまでは……………)」

そこへ……………

「ブーストノヴァ……………ナックル!!」

「ギイイー!!?」

「えっ!!?」

「そのロボット!大丈夫?」

「(ダンクーガ!?) あっ!!はい!大丈夫です!!……………けど……………」

「葵さん……………あの機体マシントラブルで動けないようです。」
アステリオン……………アイビスを助けたのは、ダンクーガノヴァマックスゴッドだった。

「ギイイー……………」

なんと!ダンクーガに飛ばされた謎のロボットは、まだ動いていた。

「マジ!(今動いたら、後ろの機体が……………)くっ!!!」
その時……………

「愛の心にて……………悪しき空間を断つ……………名付けてファイナル断

空牙剣！！やああってやるぜ！！」

「ギイイー！？」

「なんなの？」

「大丈夫か？アイビス！それと、『別世界のダンクーガ』！」

それは、ロンド・ベル所属獣戦機隊所有ロボット『超獣機神ファイナルダンクーガ』だった。

「ギイイー」

「ちっ！！」

「あの『ディラド戦闘メカ』こちらの技術と別の技術の複合により誕生したようだな。……………藤原！！」

「わかってるよ、アラン！！」

『忍！！』

「おう、レナンか？」

『俺も手を貸すぜ……………アステリオンを大破させた礼をする。』

ジェスは……………キれていた。

「まあいつか……………行くぜ！！」

「そちらのダンクーガもこちらに合わせてもらう」

『了解！！』

そして……………ディラド戦闘メカの前にファイナルダンクーガ、ダンクーガノヴァマックスゴッド、ソウルサーガの三機が並んだ。

その映像は、ラーカイルムを通して、タイムセイバーズの会議室にだされ、騎士カリムも通信越しに見ていた。

『夢で見た、ロボットと同じ……………』

ソウルサーガ・Wダンクーガ対ディラド戦闘メカ

「行くぞ……………ソウルブレード!!……………ブレイクイン
パルス!!」

「ギイイー……………」

「一発で決めてやる!」

「同感!!」

二機のダンクーガは、それぞれチャージをはじめた。

「おくれんなよ……………」

「そつちこそ……………」

そして……………

『ファイナル断空砲!!』

「ギイ!?!」

ディラド戦闘メカは、ソウルサーガのブレイクインパルスを受け
たあと、続けざまにファイナルダンクーガとダンクーガノヴァのフ
ィナル断空砲を受け、爆発した。

アステリオンは、戦闘終了後……………ファイナルダンクーガがハガネ
まで連れていき、ダンクーガノヴァは、ファイナルダンクーガのパ
イロットの一人、アラン・イゴールからの指示でラーカイルムに着
艦した。

そして、タイムセイバーズの魔導師チームは、二機のダンクーガ
の戦闘力が解析不可と出ていた事に驚いた。

第27話 二つの獣機神（後書き）

作者「二機のダンクーガの共演は、無理があるかな？」

セツコ「新しいスーパーロボット大戦では、共演するので……良いのでは？」

作者「セツコ……」

セツコ「ハイ？」

作者「我慢できん……やらして。」

セツコ「わかりました。……良いですよ。」

ジェス「次回 番外編 ライダーズ対プリキュアオールスターズ& a m p ;機動六課……何をやる気だ。」

なのは& a m p ;フェイト「次回も魔法少女リリカルなのはS T S & a m p ;スーパーヒーローにテイクオフ……。」

プリキュア5「みてみて見てね。」

キバット「ウェイクアップ！！運命さだめの鎖を解き放て！！」

番外編 ライダーズ対プリキュアオールスターズ& a m p・機動六課（前書き）

単なる遊びです。

番外編 ライダース対プリキュアオールスターズ&機動六課

とある演習場

何重にも重ねられている結界で覆われた演習場の真ん中に……
プリキュアオールスターズ+αと機動六課、ライダースがいた。

ライダースSIDE

「今回は……模擬戦に近い……魔導師に関しては非殺傷魔法があるが……プリキュアは、接近戦主体が多いが……対戦相手はアंकとシヤマルが決めるらしいから……誰と当たるかわからない。」

「要するに……相手に注意しろっ……ってとこだろ？」
アクセルの言葉に土がそうかえした。

プリキュア&魔導師SIDE

「みんな！……気を引き締めて行こう！！」

『ハイッ！！／ああ。／おうっ！』

（それにしても……すずかちゃんとアリサちゃんは……ライダーのチームか……）

（なんで……フェニーは、ライダーの方なんだろう？）

ここで、各チームのメンバーを紹介しよう。↑ガオガイガーの次

回予告のナレーション風で

ライダーズチーム

門矢士・ディケイド

海東大樹・ディエンド

小野寺ユウスケ・クウガ

光夏海・キバラー

津上翔一・アギト

城戸真司・龍騎

乾巧・ファイズ

剣崎一真・ブレイド

ヒビキ・響鬼

天道総司・カブト

野上良太郎・電王プラットフォーム／ライナーフォーム

紅渡・キバ

左翔太郎・W／ジョーカー

フィリップ・Wファンゲジョーカー／サイクロン

火野映司・オーズ

ジェス・ブルーディケイド／蒼龍

特別ゲストライダー

秋山蓮・ナイト

橘朔哉・ギャレン

上城睦月・レンゲル

加賀美新・ガタツク

木場勇治・オーガ

コク・ブラックディケイド

準レギュラーライダー

相川始・カリス（ワイルド）

アリサ・カリス（バーニング）

すずか・ダークキバ

照井竜・アクセル

鳴海莊吉・スカル

桜井侑斗・ゼロノスアルティフォーム／ゼロフォーム

モモタロス・電王ソードノクライマックス／超クライマックス

ウラタロス・電王ロッド

キンタロス・電王アックス

リュウタロス・電王ガン

ジーク・電王ウイング

デネブ・ゼロノスベカ

幸太郎+テディ・New電王

フェニー・フェニックス

プリキュア&魔導師チーム

美墨なぎさ・キュアブラック

雪城ほのか・キュアホワイト

九条ひかり・シャイニールミナス

日向咲・キュアブルーム／キュアブライド

美翔舞・キュアイーグレット／キュアウインディ

夢原のぞみ・キュアドリーム

夏木りん・キュアルージュ

春日野うらら・キュアレモネード

秋元こまち・キュアミント

水無月かれん・キュアアクア

美々野くるみ・ミルキィローズ

桃園ラブ・キュアピーチ

蒼乃美紀・キュアベリィ

山吹祈里・キュアパイン

東せつな・キュアパッション 花咲つぼみ・キュアブロッサム
来海えりか・キュアマリン
明光寺いつき・キュアサンシャイン
月影ゆり・キュアムーンライト
氷狐・キュアアイス
シヨウ・キュアジョーカー
璃杖・キュアロッド

高町なのは・一等空尉・スターズ1
フェイト・T・ハラオウン執務官・ライトニング1
八神はやて・ロングアーチ1
シグナム・ライトニング2
ヴィータ・スターズ2
スバル・ナカジマ・スターズ3
ティアナ・ランスター・スターズ4
エリオ・モンディアル・ライトニング3
キャロ・ル・ルシエ+フリードリヒ・ライトニング4
高町ヴィヴィオ・スターズ5
アインハルト・ライトニング5
ザフィーラ
アルフ
ギンガ・ナカジマ

両チームともに36名……………尚、司会者は……………
「俺様…アंकと……………」
「はい、シャルさんです。」
「まずは……………一回戦のカードは……………ライダーズからは……………仮面ライダーカブトだ。」
「プリキュア&mp;魔導師チームからは……………フェイトちゃ

んよ。」

「負けるなよ、天道……。」

「ああ……わかってる。」

天道は加賀美にそう言っでフィールドに立つ。

「フェイトちゃん……頑張ってね。」

「「頑張ってください、フェイトさん!!」」

「無理はなさらずに……分隊長。」

「クロックアップには気をつけろ、テストロッサ。」

「ありがとう。なのは、エリオ、キャロ、シグナム、アインハルト。」

「ぜったい、勝つてよね。フェイト。」

「うん。アルフ。」

なのは達に答えてから、フェイトは、フィールドに立った。

「変身!!」

- H E N S H I N -

「行くぞ……。」

天道は、仮面ライダーカブト・マスクドフォームに変身した。

「（前に見た時と違う……けど!!）バルディッシュ・アサルト

……セツトアップ!」

- g e t s e t -

「ライトニング……フェイト・T・ハラオウン! 行きます!!」

フェイトはバリアジャケットを身につけた。

「（先手を打つ!）……ハーケンセイバー!!」

フェイトはハーケンセイバーを放った。

「なるほど、先手を打つのはいいアイディアだ……だが……ハアッ!!」

カブトは、カブトクナイガン・アックスモードでハーケンセイバ

―を切り裂いた。

「くっ……」

「フェイトちゃんのハーケンセイバーを切り裂くなんて……」

「（あの時………なのはに使った『あの技』………プラズマランサーでもできるかな？）………スフィア展開！」

「ん？」

カブトの周辺に魔力スフィアが形成されていく。

「フェイトちゃん………ひょっとして………」

「『あれ』をやるんだ………」

「「「「「？？？」」」」」

なのはとアルフは………フェイトがどんな魔法を使うのか予想していた。

「（これはやばいな………）」

カブトはゼクターホーンに手をおき、いつでもキャストオフできるようにした。

「（ん？………バインドか………）」

カブトがゼクターホーンに手をおいたと同時に、バインドが発動した。

「プラズマランサー・フランクスシフト!!」

- plasma lancer・frankus shift -

「打ち砕け、ファイア！」

「くっ………（だが、一発目でバインドが解けたな………なら後は待つだけだ。）」

カブトの周辺を砂煙が覆う……。

「（やったかな？でも、なのはの例もあるし……）バルディッシュ、最後のランサーを打ち終わったら、すぐにソツニクへ……」

- yes sar -

すると……

「キャストオフ！」

- CASTOFF……… CHANGE BEETLE -

「くっ………うわぁー！！！」

- ONE・TWO・THREE -

「ライダー………キック。」

- RIDER KICK -

「ハアッ！！！」

カブトはライダーフォームになりプラズマランサー・ファランク
スシフトの最後の一発をライダーキックで跳ね返した。

「真・ソツニクフォーム！！！」

- ALRIGHT -

「ソツニクムーブ！！！」

フェイトは、真・ソツニクフォームになり、ソツニクムーブで高
速移動を始めた。

「ハイパーキャストオフ……」

- HYPERCASTOFF……… CHANGE HYPER BEET

LE -

「ハイパークロックアップ……」

- HYPERCLOCKUP -

カブトは、ハイパーキャストオフしてハイパーカブトになると同
時にハイパークロックアップして超高速移動を始めた。

- HYPERCLOCKOVER -

「くっ………」

「俺の勝ちだな。」

ハイパークロックアップが終わると………フェイトの首筋に手刀

を置いている、ハイパーカブトの姿があった。

「やっぱ、凄いな……天道は……」

「当然だ。……なにせ俺は、天の道を行き、総てを司る男……だからな。」

「ごめんね、みんな。」

「気にしないで、フェイトちゃん。」

「……そうですよ。」「」

「でも……ハイパークロックアップは……見切るのは難しいよ。」

「ここからは、いくつかの戦闘は、割愛させてもらう。」

「両チームとも……人数が人数ですし……」

二回戦のキバ対ヴィータは、互いにハンマー対決となり、ヴィータがギガントシュラクを使用して勝利し、三回戦のファイズ&mp;オーガ対スバル&mp;ギンガのダックバトルでは、両方のパワーバランスが互角なためにドロー、四回戦のワイルドカリス&mp;バーニングカリス対アルフ&mp;ザフィーラでは、スピードを活かしたスピードアタッカーのワイルドカリスをバーニングカリスがサポートを取る形で勝利し、五回戦の電王チーム（幸太郎、侑斗を除く一人+五イマジン）対プリキュア5go goチームでは、双方のコンビネーションの良し悪しでプリキュア5go goチームが勝利し、六回戦のガタック対エリオは、ガタックがカブトと同様にハイパーキャストオフし、ハイパーガタックとなり……ガタックダブルカリバーの連撃で勝利し、七回戦のWファンゲジョーカー（フィリップ）対キュアブラック&mp;キュアホワイトでは、闘争本能を極限まで押さえていたとはいえ、Wファンゲジョーカーが勝利し、八回戦のキュアブルーム&mp;キュアイーグ

レッド対Wサイクロンジョーカー（翔太郎）では、タイプチェンジの豊富さからWサイクロンジョーカーが勝利した。

「ほう……………次は、変則試合だな。」

「対戦カードは……………仮面ライダー龍騎対仮面ライダーナイトです。」

なんと、第九回戦はライダーの戦いだ。

「って、蓮とかよ！」

「仕方ないだろ……………行くぞ、城戸。」

「あつ、おいっ！蓮っ！！」

蓮と真司は、フィールドにある鏡の前に立った。

「どうして、鏡の前なんだろうね？ティア。」

「私に聞かないでよ。バカスバル！！」

プリキュア&魔導師チームは、蓮と真司が鏡の前に立ったのに疑問に思っていた。

「なるほどな……………」

「フェニー、もしもの時に備えるぞ。」

「オッケー。」

ライダーズチームは、全員わかっていた。

蓮と真司は同時に鏡の前にデッキを翳した。

「（デッキを翳してるけど……………どうして？）」
さすがのなのもこれだけでは、分からなかった。

「「変身!!」」

掛け声と同時に、蓮と真司の姿がオーバーラップして、二人は…
…仮面ライダー龍騎と仮面ライダーナイトに変身した。

「よっしゃ!!」

「ふっ!」

変身した二人は、勢いよく、鏡に「入って行った」。

プリキュア&魔導師SIDE

「……………ええっ……………」

「……………」

ライダーズSIDE

『（驚き過ぎだ!!）』

ミラーワールド内

「よし!……まずは!」

- SWORDBENTO -

「ふっ……………」

- SWORDBENTO -

龍騎とナイトは、ともに『ソードベント』を選びベントインした。

「そりゃ!」

「ハッ!!」

「うわぁ…………くそ…………だったら。」

- STRIKEBENTO -

「よっし!!」

「（まずいな……）」

- SHIELDBENTO -

「フンッ!!」

「ハア……ハアッ!!」

龍騎は、『ストライクベント』で装備した、ドラゲクローから出る『ドラグファイヤー』をナイトに放ったが……龍騎とともに闘った事のあるナイトは、『シールドベント』で装備した、『ダイクウイングマント型のシールド』で防御した。

外側の空間では、ミラーワールド内を見れるのは、士、ジェス、フェニー、海東の四人だけだった。

「ほぼ、本気だね。あの二人……」

「それは、見りゃわかる。」

「”本気”（まじ）で、準備しよっか？ジェス。」

「ああ。」

ミラーワールド内

「少しは、やる様になったな。城戸。」

「別に、いいだろう。」

「ふっ、そうだな。」

- TRICKBENTO -

『ハッ!!』

「なっ!!マジかよ!!」

- SHIELDBENTO -

「（くっそ……これじゃ、どれが本物が……）」

- BURASUTOBENTO -

「げっ!!」

トリックベントで分身したナイトに囲まれた、龍騎に向かって『
ダークレイダー』が発生させた突風が接近する。

「こうなったら!」

- SURVIV -

龍騎は、『烈火』のベントカードで、龍騎サバイブに強化した。

- ADBENTO -

『ガアッーーーーー!!』

龍騎はなんとか、『ドラグランザー』で凌いだ。

「やるな、城戸。」

「お互い様だつて、蓮。」

龍騎サバイブの前にナイトサバイブが降り立った。

- - SWORDBENTO - -

両者ともにソードベントをベントインした。

「フェニー……」

「オツケー……」

ジェスとフェニーは、それぞれデッキを持ち、鏡に翳した。

「「変身!」」

二人の姿が、蓮と真司と同じ様にオーバーラップし、仮面ライダー蒼龍と仮面ライダーフェニックスに変身しミラーワールドに突入した。

ミラーワールド内

「行くぞ、城戸。」

「ああ、蓮!!」

二人が駆け出し、剣を当てる前に……………

- S W O R D B E N T O -

- S A B E R B E N T O -

《ガッ！！》

「ハイ、そこまで……………両者、ドロ。」

「ちえっ……………」

「命拾いしたな。」

「それ以前に……………」

「二人とも、時間ギリギリだよ。早く戻らなきゃ。」

見れば、龍騎とナイトの双方からは蒸発現象が起きていた。

「仕方ない……………戻るぞ、城戸。」

「ああ、蓮。」

「俺達も戻るぞ。」

「イエッサーー！！」

龍騎達は、ミラーワールドから現実世界に戻った。龍騎とナイトの戦闘結果は、ドロ。

十回戦は、ゼロノス（侑斗 & デネブ） & 幸太郎 + ティ対ルミナス、キャロ + フリード、アインハルトは……………

侑斗「子供を相手にできるか。……………俺は、パスだ。」

幸太郎「俺も……………等の理由でルミナス達の不戦勝、十一回戦はブレイド、ギャレン、レンゲル、オース対シグナム、アイス、ジョーカー、ロッドの四人対決は……………シグナムがブレイドを退けるが……………プリキュア三人はライダーに負けていた。

「ブレイドよりも強いのか……………」

「シグナムは、烈火の将であると同時に剣の騎士なので……………」

十二回戦はスカル、アクセル、フェニックス、キバール対フレッシュチーム……………だが……………コンビネーションにより、フレッシュ

ムの勝利、十三回戦はブルーディケイド、ブラックディケイド、ムーンライト、以外が一斉に戦闘開始（なのはとディケイドの独断だが……）、ライダーチームがなのはのガイアメモリ使用のスターライトブレイカーに降参（おいっ！！）……最終組……ブルーディケイド&ブラックディケイド対ムーンライト。

「なんで……ゆりと……」

「ジエスとなんだ。」

「俺もいるんだが……」

ジエス達が変わ身しようとしたら……突然！カオスウルトラマンメビウス、カオスプリキュア、仮面ライダーダークブラックディケイドが現れた。

「やるしかねえ……メビウーース！！」

「プリキュア！オープンマイハート！！」

「変身！」

- K A M E N R I D E B L A C K D E C A D E -

カオスメビウス対メビウス

「セアッ！！」

『ハアッ！！』

メビウスとカオスメビウスはメビウススラッシュとカオススラッシュをぶつけた。

「くっ……力は……五分五分……だが！！」

その時……メビウスを緑の光と赤き光が包む。

「セアッ！！」

ライダーチームの翔太郎とフィリップは……

「今の緑の光は……」

「地球の……記憶……」

「（これは……）」

「貴方は手にしたの……地球の記憶の最大の力……エクストリームと……」

「地球を護るために戦った……スーパー戦隊魂の力を……」

「（シユラウド……アカレッド……ああ！！）」

「行くぜ……カオスヘッダー！！このメビウス……レッドエクストリームが相手になるぜ！！」

メビウスレッドエクストリームとは……スーパー戦隊の赤き勇者の力とエクストリームメモリの光でメビウスが強化された状態だ。

『デュアツ！』

「メビュームブレード……レッドゾーンクラッシュ！！」

『デュ！？』

「トドメだ！！……メビュームエクストリームシュート！……」

デュアツ！！！！

メビウスは……ボウケンレッドの技『レッドゾーンクラッシュ』をメビュームブレードで応用して放ち、最後にメビュームエクストリームシュートを放って、カオスウルトラマンメビウスを倒した。

キュアムーンライト対カオスプリキュア

「ハッ！！」

『フンツ！！』

「くっ……ハアツ！！」

キュアムーンライトとカオスプリキュアの戦いは、カオスプリキ

ユアに若干分があつた。

『キュアムーンライト……………この程度とはな……………』

「ハア……………ハア……………ハア……………」

『終わりだ……………』

その時……………

・ピカアーーーーー……………・

「何？」

『この光は……………』

（私を手にとれ……………）

「（えっ？）」

（あの者を倒すには、私の力とそちらの力が必要だ。）

「（わかつたわ。……………あなたの名前は？）」

（私は……………月光弓。）

「行くわ……………月光弓！シルバーフォルテエンジンジ！！」

『何っ！？』

「キュアムーンライト・アローシルエツト！！」

『馬鹿な！！強化変身だと！？』

「プリキュア！！シルバーフォルテアロー……………バーストシュー

ト！！」

『ぐわっ……………』

キュアムーンライトの放ったシルバーフォルテアローでカオスプ

リキュアは消滅した。

仮面ライダーブラックデイクイド対仮面ライダーダークブラック
デイクイド

・・ATTACKRIDE……………SLASH・・

「ハアッ！！」

『フッ！！』

二人の……光と闇の黒きデイクライドはともに……ブラックライ
ドブッカー・ソードモードで切り合っていた。

「ちっ……」

『フッ……』

「（やるしか……なさそうだな。）」

『どうした？……本気で来い！！』

「へっ……いくぜ。」

- FINAL KAMEN RIDE……DECADE -

ブラックデイクライドはコンプリートフォームにチェンジした。

- FINAL ATTACK RIDE……DE・DE・DE・DE

C A D E -

「ハアーーーーーッ！！」

『くっ……計算外の力だと……ぐわっ！！』

結局……カオスウルトラマン等の襲撃により、最終組の戦闘は
なしとなった。

作者「よし。」

ジェス「『よし』……じゃ、ねえだろ!!」

作者「ん？」

ジェス「何だよ最後！普通の戦闘じゃねえか!!」

作者「そこは、気にするな!」↑アंक風

ゆり「次回、第28話 新たな侍／護星の龍騎士。………お楽しみに。」

シンケンレッド「お前は………」

????「七人目の侍だ。」

ゴセイレッド「君は？」

????「護星の龍騎士………」

第28話 新たな侍／護星の龍騎士（前書き）

オリジナルの護星騎士と侍をだします。

第28話 新たな侍／護星の龍騎士

タイムセイバーズ・隊舎

「……………よしっ！！できた。」

そこに……………

???「よう。」

「なんだ……………次元の破壊者か……………ちょうどよかった……………
『闇のモジカラ』を使えるショードーフォンだ。」

そう言い、ショードーフォンを投げる。

???「完成したのか。」

「ああ。」

???「そうそう……………次は……………ブレドランとドウコクが動くぜ……………
気をつける。」

「お前もな。」

???「何?……………どういう……………「レジス!」……………うわっ!？」

「会いたかったぞ!！」

「放せ!闇!！」

「い・や・だ……………んっ!！／／／」

「んっ!？」

「お熱いことで……………。」

「見てないで、助ける!！」

「うん。それ無理。」

「てめえは、どこぞの朝倉か!！」

ピキッ……………

「情報連結解除……………」

それを聞き……………

「俺が悪かった。」

「よろしい……。」

何故か、『世界の守護者』に言い負けしてしまう『次元の破壊者』。

「じゃあ、いったん戻るわ。」

「ああ。」

異空間――

「ふう……」

「???」早かったな。」

「たいしたことじゃないさ……『闇統べる王』。」

「ならばいいが……いつまで、いるつもりだ?」

「ふつ……『奴ら』の目的を探るまでだ。そのために……」

セイ』のシャドーと闇に情報を提供してるんだからな。」

「スパイは大変だな。」

タイムセイバーズ・訓練場――

「ハッ!」

「ハアッ!」

訓練場では、シンケンレッドとシグナムが模擬戦をしていた。

「レヴァンティン!カートリッジロード!!」

――j y a h o――

「紫電……」

「シンケンマル……」

「一閃!!」

「火炎の舞い!!」
シグナムとシンケンレッドの一撃の太刀が同時に決まる。
「くっ……」
放れる二人……

訓練場・観客サイド

「まさか……殿と互角とは……」
「あの姉ちゃん……つえーな。」
「うん。」
「丈瑠……」
「丈ちゃん……」

「シグナムの太刀を受けきるなんて……」
「すごい……」

フェイトとなのはの言葉に頷くフォワード一同。

違う場所では……

「ツイストルネードカード……天装!!」
イクスプロード……スカイツクパワー・
「バキマ!!」
アラタとジエスが模擬戦をしていた。
「くっ……スカイツクソード!!」
「ブレイティクブレイカー・ソード!!」
「ハアッ!!」
「レッドブレイク!!」

「ライトニングブレイク!!」

観客サイド

「すごい……」

「天装術じゃないのに……」

「ああ……すげえ、風だ。」

「おそらく、炎や水も出せるかもな。」

ゴセイジャーのメンバーがそう感想を言っていた。

「（マスターは……ガッシュや高町達の魔法以外は、私のユニゾンなしで出せるのか。）」

三途の河……

「シタリ!! いつになったら、地上に三途の河の水をあげれるんだ?」

「待ちなよ、ドウコク……ここは一つ、この世界を狙わないか?」

「何?」

「この世界じゃあ、『魔法』という物に、『非殺傷』なんてものを付けてるから、ナナシはもちろん、アヤカシが魔法に倒されることはないさ。」

「???」面白そうだな……この私も参加してやろう。」

「へっ……いいだろう……だが! ここは、三途の河にきた『ゲスト』に行ってもらうぜ……それと、『チノナマコ』をな。」

「???」御意。」（フフフ……）

クラナガン郊外

「ねえ？どう？」

「似合うぜ、かれん。」

「ありがとう。」

「やはり、空気も水も少し、汚染されている。」

ゴセイジャーの五人とジェス、かれんが周辺区域の調査と買い物を兼ねたパトロールをしていた。

別の場所では……………

「やつぱ、すげえな。」

「ああ、確かに。」

シンケンジャーの六人がクラナガンを探索していた。……………すると……………

ナナシ連中『ナ——————！！！！』

『ッ！！？』

ナナシ連中が現れ、街を破壊し始めた。

「殿！」

「待て……………管理局だ。」

「撃てっ——！！」

『ナ？……………ナ——————！！！！』

「怯むな！撃て——！！」

だが、魔導師の魔法はナナシ連中には、効果がなく、チノナマコの光弾に倒されていた。

「いくぞ……………」

『一筆奏上!!』
「一貫献上!!」

丈瑠達はシンケンジャーになり、魔導師とナナシ連中の間に立つた。

「何者だ!」
「俺達は……シンケンジャー……」
「シンケンジャー?」
「参る!」
『ハア………ッ!!』

別の場所では……

ビービービー………ビー!』
「ビービー?」
「来たな、護星天使!!」
『武レドラン!?』
「厄介な奴なのか?」
「ああ。」
「とにかくやろう!!」
「テンソウダー………チェンジカード………天装!!」
《チェンジゴセイジャー!!》
「プリキュア……メタモルフォーゼ!!」
「ライジングパワー……オーバードライブ……メタルフォーゼ!!」

『天装戦隊ゴセイジャー!!』

「知性の青き泉……キュアアクア！」
「ドラゴンソルジャーライジング！……参上！！」
「フフフツ……やれい！！」

その頃……

「シンケンマル……五重の舞い！！」

「サカナマル・千枚卸し！！」

「シンケンジャー……倒す……」

チノナマコがシンケンジャー目掛け、走り出した。

「あいつは！？」

「あの時……土と倒した……」

- - - 回想 - - -

- B L A D E : K A M E N R I D E : : : K I N G -

- F I N A L A T T A C K R I D E ・ B ・ B ・ B ・ B L A D E -

「ハアツ！！」

- F I N A L F O R M R I D E ・ B ・ B ・ B ・ B L A D E -

「やるぞ……」

「ああ。」

- A T T A C K R I D E : : : R E K K A D A I Z A N T O U -

『ハアツ！！』

- - - 回想終了 - - -

「何故、あいつが？」

そこへ……

『うわぁー！ー！』

ゴセイジャーとキュアアクア、ドラゴンソルジャーライジングが飛ばされてきた。

「しっかりしろ……」

「大丈夫ですか？」

そこへ……

「その程度か？ゴセイジャー……」

「武レドラン……くっ！」

「ハアッ！！」

「ぐっ……」

「無事か？ゴセイジャー！」

「ゴセイナイト……うん、大丈夫。」

「フフフツ……チノナマコよ、奴らに『あの二人』を見せる。」

「ワカツ……タ」

すると……ゴセイジャーとシンケンジャー達の前に傷だらけの……

…『次元の破壊者ことレジス』と『闇統べる王』がいた。

「くっ！……油断した。」

「っ！……仲間じゃないのか……武レドラン！！」

「仲間？……フフフツ、この二人が貴様らの内の一人と内通しているのは予想していた。……やれ、チノナマコ！」

「オー……」

『くっ……』

しかし……

「パイロ・シューター……」

「グオツ……」

「ぐっ！？」

この法撃により、レジスと闇統べる王は……シンケンジャー達の方へ走った。

「まったく……大丈夫かよ……ベホマラー!!」

ジェスの回復魔法で傷が治る二人とパワーの回復したスーパー戦隊とキュアアクア。

「おのれ……チノナマコ……後は任せる。」

「オー……」

そこへ……

???「苦戦しているようだな。」

「誰だ!?!」

「俺は護星の龍騎士……ゴセイドラグナイト!!」

『ゴセイドラグナイト?』

「遙か昔……『彼の地』に到達した、伝説のヘッダーの話をマスターヘッドから聞いたことがあるが……。」

「まさか……。」

「そのまさか……だが、この姿は『変身時』の姿だ。」

「変身!?!」

「ゴセイナイトの様にヘッダーに変形しないの?」

「ああ。……まあ、敵は倒すがな。」

そう言つて、ゴセイジャーとゴセイナイトの横に立つゴセイドラグナイト。

「大丈夫ですか? 闇璃。」

「それは、我のことか? 星光よ。」

「あなた以外に誰がいるんです? それに……私は今、セイスです。」

「ふっ、そうか。」

「どうする……レジス。」

「やってやるさ。……ショドーフォン!!」

「何!?!」

『えっ!?!』

「一筆奏上……ハッ!!」

その時……レジスが書いた文字は……『闇』……。

「シンケンブラック!……レジスティ・アルマー。」
シンケンブラック……それは……闇を基本とする侍だ。
「シンケンブラック……」
「まっ……七人目の侍だ。」
「(アルマー……ひょっとして……)ねえ、ジエス……。」
「ん?なんだアクア。」
「さつき、『アルマー』って、言ってたけど……」
「まあ……影の俺だな。」
「そう。(だから、『あの時』……ジエスと見間違えたのね。)」
「ようし……みんな……いくぞ!……」

シンケンジャー & amp・ゴセイジャー & amp・キュアア
& amp・ドラゴンソルジャーライジング & amp・セイス & amp
p・闇璃対チノナマコ・ナナシ連中・ビービ

バトル1 ゴセイジャー対ビービ 曲 天装戦隊ゴセイジャー

「スカイックソード!」
「スカイックショット!」
《スカイックソード/ショット》
「ランディックアックス!」
「ランディッククロー!」
《ランディックアックス/クロー》
「シーイックボウガン!」
《シーイックボウガン》
「レオンレイザー・ソード!」
「ドラグレイザー・ソード!」

ビービ「ビー！ビー！」

「数が多いい。」

「ならば……一撃で勝負だ！」

『ゴセイバスター！！』

「バルカンヘッダー！！」

《バルカンヘッダー！》

「ナイトダイナミックカード……断罪のナイティックパワー……」

「ドラグダイナミックカード……業炎のドラグニックパワー……」

《ゴセイダイナミック！/ナイトダイナミック！/ドラグダイナミック！》

『パニツシュー！！』

ビービ『ビー！？』

- ド、ドオーーーーーッン！！ -

キュアアクア&ドラゴンソルジャーライジング&セイス&闇璃対ナナシ連中 曲DARK NIGHT〜Ver RISING

「さあ〜て……まずは……これだ。」

《スキルライズ……モジカラ！！》

ドラゴンソルジャーライジングの特殊能力で、キュアアクアは水のモジカラ、セイスは光のモジカラ、闇璃は闇のモジカラ、そしてドラゴンソルジャーライジングは炎と雷のモジカラを身に纏った。

「プリキュア！サファイアアクアアロー！！」

「ダークエクスカリバー……」

「スーパースターライト……」

「ブレイカー！！」

「へっ……………ブレイティックブレイカー……………フォルムチェンジ！
……………スターソード！スターカッター！」
ドラゴンソルジャーライジングは、ダイレンジャーのスターソードとスターカッターを装備した。
「ハッ！……………天火星・稲妻炎上波！……………ハアッ！！」
ナナシ連中『ナ……………ッ！？』
ド、ド……………ッ
「決まっただぜ。」

シンケンジャー対チノナマコ 曲 侍戦隊シンケンジャー

「ハッ！」

「フンッ！！」

シンケンジャーはチノナマコと戦っているが……………シンケンジャーがチノナマコに若干、押されていた。

「ヨワイ……………」

「くっ……………（インロウマルはひとつだけ……………どうすれば……………）」
すると……………

「……………ハッ！！」

「ぐっ！？」

「……………ハアッ！！」

「ぐわっ！？」

『あっ！！？』

チノナマコを吹き飛ばしたのは……………

「……………無事か……………お前達。」

『姫！／姫様！／薫……………／姫さん。』

シンケンレッドこと第18代目志葉家当主『志葉薫』であった。

「母上……………」

「立てるか？丈瑠？」

「大丈夫です。」

「殿！！」

「爺……………」

「爺ちゃん……………」

「良くご無事で……………殿！みなに、これを。」

「インロウマル……………しかも……………六つも……………」

「爺ちゃん、ナイス！」

「いくぞ！！」

シンケンブラックを除くシンケンジャーはインロウマルを手にとり、シンケンマルに装着した。

「「スーパーシンケンレッド！！」」

「スーパーシンケンブルー！！」

「スーパーシンケンピンク！！」

「スーパーシンケングリーン！！」

「スーパーシンケンイエロー！！」

「スーパーシンケンゴールド！！」

「シンケンブラック……………これを使い！」

「有り難く……………恐竜ディスク！！……………ハイパーシンケンブラックー！！」

シンケンジャーは強化モードになった。

「いくぞ……………ハッ！！」

『シンケンマル！……………真・六重の舞い！！』

「シンケンマル！……………真・火炎の舞い！！」

「シンケンマル！……………真・暗黒の舞い！！」

「ぐわっ！？」

「ドオーーーーーッー」

シンケンジャーの必殺の太刀がチノナマコに炸裂、チノナマコは巨大化（二の目）にならず爆発した。

それから……次元の破壊者ことレジスティ・アルマーと閻璃はタイムセイバーズに参加、閻璃の性に『八神』が付けられた。(セイスには、『高町』が付けられている。)もちろん、志葉薰も参加した。

第28話 新たな侍／護星の龍騎士（後書き）

作者「次回……………第29話 星座の闘士……………お楽しみに。」

第29話 星座の闘士／星座の戦士（前書き）

グランセイザーと星矢が出ます。

第29話 星座の闘士／星座の戦士

地球・ギリシャ

「いくぜ！紫龍！！」

「来い！星矢！！」

「ペガサス！流星拳！！」

「盧山……百龍霸！！」

彼らは……^{セイント}聖闘士と呼ばれる者達だ……^{セイント}聖闘士には……^{ブロンズ}青銅、^{シルバー・ゴールド}銀、黄金の三つに分けられる。もちろん……^{セイント}聖闘士には女性の聖闘士も存在する。

「紫龍と星矢……相変わらずだね。」

「そうだな、瞬。」

「氷河は？」

「氷河なら……」

「舞え……白鳥よ！！」

そう言いながら、白鳥のポーズをとる。

「……」

無言の二人。

「氷河も相変わらずだね、兄さん。」

「そうだな、瞬。」

今、この場にいるのは五人の青銅聖闘士……ペガサス・星矢、ドラゴン・紫龍、キグナス・氷河、アンドロメダ・瞬、フェニックス・一輝……彼ら五人は……青銅聖闘士だが、黄金聖闘士に勝つほどの実力を持つ。

「また……腕を上げたな……星矢。」

「お前もな……紫龍。」

彼らは、今も修行を欠かしていない。

日本・東京

「いよゝしっ！……今日も頑張るぜ！！」

「ゴンツ！！」

「いてっ！？」

「朝からうるさいわよ、天馬！！」

「別にいいだろ？美羽姉。」

「あんたねー！？」

「天馬兄さんも美羽姉さんも静かにしてよ！」

「悪い、レオ。」

「ごめんね？レオ君。」

そこへ……

「また……兄弟喧嘩か？天馬。」

「洸！！」

「他のみんなは？」

「ダイニングで待ってる。」

「わかった。」

天馬達は、ダイニングに向かった。

この場で彼らの紹介をしよう。……まず、炎堂家の長男の天馬、次男のレオ、長女の美羽、風堂寺家の長男の洸、長女の涼子、次男の和、地碎家の長男の直人、長女の蘭、地碎家に居候中の『ブルー・スワット』のシヨウ、水堂寺家の長男の誠、長女の可奈美、次男の大悟……彼ら12人は、ある事情により、一緒の家に住んでいる。……そして、ギリシャの聖闘士と12人は自分達が巻き込まれる戦いをまだ知らない。

クラナガン・某所

???「この辺で良いな。……………ハアッ!!!」

謎の人物は、次元震を発生させようとしていた。

同時刻・ギリシャと東京

突如、発生した次元の穴は星矢達と天馬達を吸収し、扉を閉じた。

???「フハハッ!!!……………これで……………ッ!？」

「そこまでだ……………アケロン人!!!」

「チッ!？」

アケロン人は、煙玉を地面に投げ姿を消した。

「逃げられた……………」

星矢達と天馬達は同じ場所に転移され、ガジェット・ドローン……
総数十万に囲まれていた。

「星矢……………」

「やるしかないだろ……紫龍、瞬、氷河、一輝……小宇宙^{コスモ}を燃やすぜ!!」

「「「ああ!!」」」

「あなた達は……ここに……」

瞬は、天馬達に動かない様に言ったが……

「大丈夫だつて!……いくぜ!!」

天馬が言うと、一斉に手を挙げたりして、胸元に持ってきた。

『装着!!』

「えっ!?!」

「何っ!?!」

星矢達は天馬達が変身したのに驚いた。

「セイザータリ阿斯!!」

「セイザーミトラス!!」

「セイザーリオン!!」

「セイザーレムルズ!!」

「セイザーヴェルゾー!!」

「セイザーダイル!!」

「セイザータウロス!!」

「セイザーヴィジュエル!!」

「セイザードラゴス!!」

「セイザーゴルビオン!!」

「セイザーパイシーズ!!」

「セイザーギャンズ!!」

『超星神グランセイザー!!』

超星神グランセイザー……それが、彼ら12人の力だった。

第29話 星座の闘士／星座の戦士（後書き）

天馬「なんで、ほとんどが作者オリジナルのキャラなんだ……」
作者「グランセイザーの変身者……天馬と洸と直人と誠以外覚えてない。」

ジェス「次回 第30話 星座の力……お楽しみに。」

第30話 星座の力（前書き）

バトルシーンがほとんどです。

第30話 星座の力

クラナガン・某所

ガジェットドローンに囲まれている星矢達とグランセイザーは包囲網を突破するために動き出した。

星矢、タリ阿斯、リオン、ミトラス対ガジェット

「あんだ達は……」

「俺達は、『十二星座』の力をそれぞれ身に付けてるんだ。」

「『十二星座』だって！？……俺達の知り合いの『黄金聖闘士』と一緒の星座なのか！？」

「話をしている暇はないでしょ。」

見ると、ミトラスとリオンは既にガジェットと戦闘していた。

「よっしゃ！……ファルコンボウ！！」

「二人とも！！離れてくれ！！」

「オツケー！！」

ミトラスとリオンが離れたのを確認したら、タリ阿斯と星矢は同時に攻撃を放った。

「バーニング………ファルコン！！」

「ペガサス流星拳！！」 ガジェットは、タリ阿斯と星矢の攻撃で爆発した。

紫龍、レムルズ、ヴェルソー、ダイル対ガジェット

ハッ！！

紫龍、レムルズ、ヴェルソー、ダイヤルは初めてだというのに、コンビネーションでガジェットを一点に集めていた。

「今だ！！………盧山………昇龍霸！！」

ガジエツドは紫龍の技で粉碎された。

瞬、一輝、タウロス、ドラゴス、ヴィジュエル対ガジェット

「行け！ネビュラチェーン！」

「ハアッ！！」

ガジエッドと戦っていた一輝達だが……そこへ……

「シャーーーー！！！」

「イイー！！」

スペースマフィアのエイリアンの残党とシヨッカー戦闘員が現れた。

「エイリアン!？」

すなわち...

「ショウ！」

「ジェスカ？」

「助つ人……連れて来たぜ。」

そこには……サラやシグウの装備を持ってきた。

「サンキュー、サラ、シグ。」

「サラ、ショウ……エイリアンは任せます。」

「シグ！？」

「おいっ！どっいっつとだ。」

シグに詰め寄る二人……

「私には……『もう一つの姿』があります。」

「「えっ!？」」

シグは二人の前に進んだ。

「変……身……!」

その瞬間……シグの体が光に包まれた。

「仮面ライダーZO!」

シグのもう一つの姿……それは、仮面ライダーZOだった。

↑（同じ俳優なので……ちなみに……グランセイザーの豪とシヨウは同じ俳優。）

「行くぞ!」

「シヨウはエイリアンをやれ!」

「ああ!」

「俺は……」

その時……ジエスの前が光り輝き……『白き最強虎』と『蒼き

無敵の龍』の如き鎧が現れた。

「（これは!……いける!）」

その鎧を見た、一輝は……

「あれは……まさか!」

「必神火帝!天魔降伏!!……龍虎鎧装!!」

ジエスが叫ぶと同時に龍と虎の鎧が弾け、ジエスの身体を覆っていく。

「懇現!無敵青龍……龍虎王!!」

それは……超機人・龍虎王を聖闘士の『^{クロス}聖衣』で再現した形だった。

「行くぜ……ハアツ!」

龍虎王の一撃でガジェットは一点に集中し始めた。

「兄さん!!」

「ああ!……フェニックス!最大の奥義!……鳳翼天昇!!」

一輝は一撃を放つが……二体その攻撃をすり抜けていた……しかし。

「龍王破山剣……逆鱗断!!」

龍虎王の『龍王破山剣』の一撃が一体を落とした……………

「チェンジ! 虎龍王!!」

すると……………ジェスは、鎧装を龍虎王から虎龍王に組み替えた。

「聴け! 虎王を咆哮を!!……………ハアッ! ウォー……ッ!! ランダム・スパイク! ソニックジャベリン!! ハアッ!! 貫け……………ヴァリアブル・ドリル!!」

虎龍王の『タイラント・オーバー・ブレイク虎王乱撃』で残る一体を破壊した。

一方……………

「デイグテイター!!」

シヨウは……………セイザードラゴスからブルースワットの装備に替えエイリアンを撃退した。さらに……………

「ZOキック!!」

『イイッ……………!!?』

ZOキックでショッカー戦闘員は吹っ飛ばされた。

氷河、ゴルビオン、パイシース、ギャンズ対ガジェット

『ハアッ!!』

「凍てつけ……………フリージングコフィン!」

ガジェットは氷河の凍気で一つ残らず凍りついた。

「とどめだ!……………オーロラサンダーアタック!!」

氷河の攻撃で凍りついたままガジェットは粉碎された。

戦闘が終了し、星矢達と天馬達（シヨウ抜き）は……………ジェスカ

ら、状況を聞いた。

『別世界！？』

「やっぱ……………驚くよな。」

そんな時……………

???「ここに居たのですね……………星矢。」

『ムウ！！』

「ムウ？」

「ええ……………私は、ゴールドセイント黄金聖闘士……………アリエス牡羊座のムウです。」

聖闘士……………牡羊座のムウと青銅聖闘士の星矢達……………グランゼ
イザーはミッドにその足を降ろした。

第30話 星座の力（後書き）

ジェス「なんだ………今回は？」
作者「ほっといてくれ。」

アクセル「次回、第31話 未来から来た、戦士／消える守護者……」
ジェス「なんだよ！このタイトル……」
作者「消えると言っても………数話、別世界に行くだけだから……」
ジェス「信用できるか……」

第31話 未来から来た、戦士／消える守護者（前書き）

ちよつとばかり……ストーリー上無理があったかも。

第31話 未来から来た、戦士/消える守護者

ジェスは、現在……ミッドに来てしまった……星矢達に現在のミッドの状況を教えていた。

「なるほど……此処は、異世界で……様々な敵に狙われている……という訳ですね。」
「ああ。」

クラナガン郊外

「……ミッドチルダ……やっと、止まった。（急に転送魔法が発動したから……びっくりしたけど……いったい、いつだ？）」

クラナガン郊外に突然、転移した謎の青年……いったい何者だろうか？

クラナガン・とあるデパート

「休暇だったのに……ごめんなさい。」

「巧が世話になってんだろ？……同じライダーだし、別に気にしてねえよ、ギンガ。」

「ありがとうございます。ジェスさん。」

その時……

「ザケンナー!!」

「ウザイナー!!」

「ホシイナー!!」

「ナケワメーカー!!」

「ブルルル……ブルルル……」

ザケンナー、ウザイナー、ホシイナー、ナケワメーカーが一体ずつと……ワームが150体、現れた。

「ちいつ!!」

「いったん、逃げましょう!」

「off course!」

ギンガとジェスは、いったん……被害を最小源にするためデパートから遠ざかった。

「ここなら……」

だが……

「いくら逃げても……無駄だよ。」

「「っ!!」」

そこには……コブラージャ、スナツキーズがいた。

「コブラージャ……」

「光栄だね……だが、君とは初見だが……」

「ムーンライトから……話は聞いてるんでね。」

「なるほど……プリキュアの協力者か……」

???「ちよつと、ちよつと……何処に、『音符』が有るのよ?」

「（なんだ?）」

「これはこれは……ご機嫌いかがかな……『セイレーン』?」

「いいわけないでしょ!!」

「(セイレーン?.....それに音符?)」

「おっ!？」

ギンガがデパートの音楽ショップで買った、アコースティックギターの弦の間に隠れていた音符を見つけたセイレーン。

「音符、見つけ!!」

その時.....

「ブオオーン」

ジェス達の背後にピンクのオーロラが発生し、なぎさ達が走ってきた。

「先輩!.....はあ.....はあ.....大丈夫ですか？」

「ジェス、ギンガ.....怪我はない？」

「ああ。」

すると.....

「????『父さん!!』。」

「????『ちよつと!』」

「????『走ったら、危ないニヤ。』」

「????『それ以前でしょ!?!』」

ジェス達の方に一人の青年と二人の少女と一匹のネコ(?)が走ってきた。

「誰だ？」

「『ソウハ』だよ!.....『ソウハオル・T・アルマー』だよ。父さん。」

「北条響です。」

「南乃奏です。」

「ハミイ、ニヤ。」

自己紹介をする三人プラス一匹。

「ソウハ.....だっけ?ミドルネームのTはいつたい？」

「えっ?月影だけど？」

「まじ、てか？」

「まじ……です。」

しかし……… 周りを囲まれているから……… それを倒すのを最優先にするべく行動に移す。

「ギンガ！買ったものを……… お前の家に転送する。」

「うん！」

ジェスはギンガが買ったものをナカジマ家に転送した。

「しまった！！」

セイレーンは、音符を別の場所に移動させられ焦っていた。

「なぎさ達はザケンナーを……… 咲達はウザイナーを……… のぞみ達はホシイナーを……… ラブ達はナケワメーカーを……… ゆり達と響達はコブラージャとスナツキーズを……… ギンガとソウハは俺と一緒にワーム退治だ。」

『了解！／＼YES！！／はいっ！！』

なぎさ達とジェス達はそれぞれ変身アイテムを取り出した。

『デュアルオーロラウエーブ！！』

「ルミナス！シャイニングストリーム！！」

『デュアルスピリチュアルパワー！！』

『プリキュア！……… メタモルフオーゼ！！』

「スカイローズ・トランスレイト！！」

『チェンジ！プリキュア……… ビートアップ！！』

『プリキュア！オーブンマイハート！！』

『レッツチェンジ！プリキュアモジュレーション！！』

「ブリッツキャリバー……… サイガに変身したのと同時にセットアップして。」

《OK！》

・ピ・ピ・ピ……… STANDING BY -

「変身！！」

- COMPLETE -

《SETUP!》

「「変身!!」」

- KAMENRIDE.....BLUEDECADE -

- KAMENRIDE.....NEWBLUEDECADE -

「光の使者.....キュアブラック!!」

「光の使者.....キュアホワイト!!」

「輝く命.....シャイニールミナス!!」

「輝く金の花.....キュアブルーム!!」

「煌めく銀の翼.....キュアイーグレット!!」

「大いなる希望の力.....キュアドリーム!!」

「情熱の赤い炎.....キュアルージュ!!」

「はじけるレモンの香り.....キュアレモネード!!」

「やすらぎの緑の大地.....キュアミント!!」

「知性の青き泉.....キュアアクア!!」

「青い薔薇は秘密の印.....ミルキィローズ!!」

「ピンクのハートは愛ある印.....もぎたてフレッシュ!!キュアピ
ーチ!!」

「ブルーのハートは勇気の印.....つみたてフレッシュ!!キュアベ
リー!!」

「イエローハートは祈りの印.....とれたてフレッシュ!!キュアパ
イン!!」

「真つ赤なハートは幸せの証.....熟れたてフレッシュ!!キュアパ
ッショーン!!」

「大地に咲く.....一輪の花!キュアブロッサム!!」

「海風に揺れる.....一輪の花!キュアマリン!!」

「陽の光、浴びる.....一輪の花!キュアサンシャイン!!」

「月光に冴える.....一輪の花!キュアムーンライト!!」

「爪弾くは.....荒ぶる調べ!キュアメロディ!!」

「爪弾くは… たおやかな調べ！キュアリズム！！」

『二人はプリキュア！！』

「闇の力の僕達よ！」

「とつとつ、お家に……帰りなさい！！」

『二人はプリキュア！！』

「聖なる泉を汚す者よ！」

「あこぎな真似は……お止めなさい！！」

『希望の力と未来の光！華麗に羽ばたく五つの心！……YES！
プリキュア5！！』

『Let'sプリキュア！！』

『ハートキャッチ！プリキュア！！』

『届け二人の組曲！スイートプリキュア！！』

「さあ……行くぜ？」

「クールね。」

「キザの間違いじゃあ……」

名乗りを終えたプリキュア達（ダークズとアナザーズは今回はいない。）と戦闘準備完了の仮面ライダー達。

「ええい！……君達…後は任せるよ。」

「次は…音符を頂くよ！」

コブラージャとセイレーンは、その姿を消した。

「行くぞ！！」

『はいっ！/YES！/うん！/了解！』

ブルーデイクイド&NEWブルーデイクイド&
サイガキャリバー対ワーム（幼体147、成体3） 挿入曲 D
ARKNIGHT VerBLUEDECAD E

「さてと……」

- K A M E N R I D E K A B U T O -

- K A M E N R I D E G A T A K K U -

「変身！」

ブルーディケイドはカブト、NEWブルーディケイドはガタックに変わった。

「ウイングロード！」

サイガキャリバーはウイングロードを発動させた。

「乗って！」

「ああ。」

「はいっ！」

BDカブトとNEWBDガタックはサイガキャリバーが出したウイングロードに乗り、ワームに急接近した。

「リボルバー………シュート！」

「ハッ！」

「でやっ！」

サイガキャリバーは、リボルバーシュートで……BDカブトはライドブッカー・ガンモードで……NEWBDガタックは両肩にある『ガタックダブルカリバー』でワームを攻撃していく。

『ブルルル………』

ワームの成体の二体がクロックアップの体制に入った。

- A T T A C K R I D E …… C L O C K U P - -

「クロックアップ！」

BDカブトとNEWBDガタックもクロックアップした。

「（気をつけて………）………さて………行くわよ、キャリバー。」

《A L L R I G H T …… L O A D C A R T R I D G E ! 》

- E X C E E D C H A R G E -

「リボルビング………トンファー！」

サイガキャリバーの『リボルビングトンファー』でワームの幼体を全て撃墜した。

- クロックアップ空間

「ハッ!」

「オリヤ!」

『ブルル……!?!』

BDカブトとNEWBDガタツクはクロックアップ空間でワーム成体を押していた。

「よし……そろそろ……」

「はいっ!」

- FINAL ATTACK RIDE…… KA・KA・KA・KAB
UTO -

- FINAL ATTACK RIDE…… GA・GA・GA・GAT
AKKU -

「ライダー……キック!」

「ライダーキック!」

『ブルル!?!』

「ハッ!」

「オリヤ……!」

- CLOCK OVER -

クロックアップ空間から通常空間に戻ったBディケイドとNEWブルーディケイド……しかし、NEWブルーディケイドはある事に気づいた。

「ワームが一体いない!?!」

「えっ!?!」

「っ!!ムーンライト!後ろだ!」

ライダー SIDE OUT

プリキュアチーム対闇の僕達

「ダアーーーーッ!!」

「プリキュア! サファイアアロー!!」

プリキュア達は、コンビネーションや個人技で敵を倒していく。

「プリキュア! シルバーフォルテウェーブ!!」

スナッキー達を倒していく……ムーンライト……その時!!

「ムーンライト! 後ろだ!!」

「っ!!」

ムーンライトの背後にワーム成体が迫っていた。

「（やられる!!）」

ワームの攻撃がムーンライトに当たる直前!!

「シルバーフォルテスラッシュ!!」

「ブルル……!!?」

「誰っ!?!」

ムーンライトの危機を救ったのは……

「はっ!……NEWキュアムーンライトです。……あつちに

居るNEWブルーディケイドと同じく……未来から来ました。」

「そう……でも今は!!」

「ええ、敵を倒しましょう!!」

数分後

『エキストリーム!』

『ルミナリオ!!』

『プリキュア! スパイラル・ハート……スプラッシュ!!』

『プリキュア! レインボーローズ・エクスプロージョン!!』

『（広範囲すぎ……）』 ↑フレッシュ、ハートキャッチ、スイー
ト組

「それで、貴女は？」

「私？私は、ジュハ……………ジュハレイン・Ｔ・アルマーです。」
「そう。」

「ジュハ——！」

「あつ——お兄ちゃ————ん——！」

「で？なんで……………この時間に来た？」

ソウハ& amp; ジュハ……………事情説明中……………

……………
「で、未来の母さんに父さんの手伝いをしなさい……………って言わ
れて……………」

「私は、お兄ちゃんとお父さんが無茶しない様に監視してなさい
……………っていわれて。」

「俺って……………未来でも無茶するんだ。」 ↑いじけ中

「ジェス！？」

「「父さん！？／お父さん！？」」

すると……………ジェスの足元に『転位魔法陣』が発生した。

『ジェス——！』

『ジェスさん——！』

「先輩——！」

「父さん——！」

「お父さん——！」

「これは！？」

「ジェス——！」

「ゆり！！」

しかし……ゆりがジェスの下に行く前に……転位が完了してしまっただ。

「あっ…うっ」

ジェス

ツ
!
!
└

「いったい、世界の守護者……レナンジエス・アルマーはどこに行ったのか？」

第31話 未来から来た、戦士/消える守護者（後書き）

次回予告

曲 LEVEL5\JUDGE LIGHT\

ジェス「ここは？」

幻矢「学園都市さ！」

美琴「待ちなさいよ、あんた――――！！！」
上条「だぁ――――！！、不幸だ――！！！」

黒子「ジャッジメント風紀委員ですのー！！」

次回、第32話 学園都市

美琴「科学と……」

上条「魔術と……」

幻矢「天装術が交差する時……」

美琴・上条・幻矢「物語は動き出す!!」

第32話 学園都市（前書き）

私の書いてる、小説に飛ばしました。

第32話 学園都市

前回の魔法少女リリカルなのはS T S & a m p ; スーパーヒーロ
ーは……………

「これは!!」

ジェスの足元に展開する転位魔法陣……………

「ジェス!!」

「ゆり!!」

ゆりとジェスは互いに手を伸ばすが…………… 触れる直前にジェス
が消える。

「あつ…うつ

……………ジェス

……………ツ!!」

……………光の空間……………

「つ!!……………ここは?」

???? すみません。…………… 貴方を呼んだのは…………… 私です。

「あんたは?」

私は…………… 『魔法を司る次元の戦士』…………… 『マジカルデ
イケイド』です。

「『マジカルデイケイド』?…………… 何の用だ!!」

貴方にある世界を救ってほしいのです。

「俺に？」

はい！

「どこの世界だ。」

『とある科学と魔術の世界』です。

「だいたい、わかった。……行ってやるよ。」

ありがとうございます。

「そのしゃべり方からしたら……お前は……女か？」

秘密……いえ、禁則時効です。

「（朝比奈さん？）」

では……お願いします。

「ああ。」

あつ！後……

「何だ？」

何処に『落ちる』かは……運しだいです。

「なにぃー！？」

・パカッ・

「うわっ！！」

お願いします……青き……守護者さん。

・……学園都市……

・ヒューー……ゴンッ！！・

「いっつう……ここ……は……」

かなりの高度から落ちたジェスは、落ちた衝撃で気を失った。

「???「あら?.....そこのお方、大丈夫ですの?」
返事がない.....」

「???「ふう.....仕方ありませんわね。」

そう呟くと、少女は.....ジェスの肩に手を回し.....その場から消えた。

数日後.....第一七七支部にて、茶髪の少女と頭に花畑がある少女と髪の長い少女とツインテールの少女が数日前に道に倒れていた青年の様子を見に来ていた。

「うつ.....ここは?」

「???「ここは.....ジャッジメント風紀委員の第一七七支部ですの。」

「ん?.....あんたは.....」

「申し送れました.....私、白井黒子と申します。」

「へえ.....で、そっちの三人娘は?」

「私は御坂美琴.....こっちの頭に花を乗っけてるのが初春さんで.....こっちが佐天さん。」

「初春飾莉です。」

「佐天涙子です。」

「そっか.....俺は、レナنجエス・アルマー.....しがない、旅人さ。」

そう.....自己紹介をしたジェス。

「旅人.....ですの?」

「ああ。」

そこへ.....

「白井.....会わせたい奴って.....あっ!」

「ん?」

「まさか.....『セイ』.....か?」

「何故、その呼び方を知っている。」

「だって俺.....」

- K A M E N R I D E B L A C K D E C A D E -

「ブラックデイクイドだし.....」

「なるほど.....『コク』か。」

「正解！ただ.....ここじゃあ、幻矢って呼ばれてるけどな。」

「なるほどな.....で、いったい何処よ、此処？」

「ん？『学園都市』さ。」

「海東の指真似はしなくていい.....（とんでもないところに落としてくれたな。）」

- ...タイムセイバーズ・会議室

「ジェス.....」

「兄さん.....」

「先輩.....」

ゆり、ティアナ、うららやプリキュア勢と魔導士の一部は気力が抜けたみたいになっていた。

「どうします？これから.....」

「???「だったら.....守りを固めた方がいいよ。」

「誰だ？」

士が問いだした。

「「ユーノ君ー!」」

「ユーノ!？」

「久しぶり、なのは、フェイト、はやて。」

ユーノの助言で守りを固める布陣を考え出す、タイムセイバーズメインメンバー。

「（ジェス.....生きてろよ.....闇やゆり達が悲しむ顔は

見たくないからな。」

- - - 学園都市

「それで……………何か、事件ってある？手の負えないような。」

「別に……………ないですわ。」

「そうか。」

ジェスは、何故この世界に飛ばされたのかをその後……………考えていた。

第32話 学園都市（後書き）

次回の魔法少女リリカルなのはSTS&スーパーヒーロー
Iは……………

曲 ゼロからの逆襲

上条「あんたは？」

ジェス「旅人だ。」

海東「なるほど、この世界か。」

ジェス「海東……？」

幻矢「大樹？」

イマジン『ヒャーハハハ！！』

御坂「このっ！！」

ドーパント『ききはせん！！』

御坂「エッ！？」

ジェス「待てい！！」

幻矢「御坂！！」

海東「行くよ。」

- K A M E N R I D E
.....
-

ジ・幻・海『変身！！』

- B L U E D E C A D E
-

- B L A C K D E C A D E
-

- D I ・ E N D
-

御坂「えっ！？」

次回 第33話 都市伝説のライダー！

ジェス「正真正銘、通りすがりの仮面ライダーだ！！覚えとけ！！」

全てを破壊し、全てを繋ぎ……そして、全てを護れ！！

第33話 都市伝説のライダー！（前書き）

予告通りには……………いかないか。

第33話 都市伝説のライダー！

……学園都市

ジエスは、白井黒子と御坂美琴に連れられて、システムスキャン身体検査を受けていた。

『ルールは簡単ですの。目の前にある…ターゲットを破壊すれば検査は終了ですの。』

「オッケー。」

ジエスは、準備体操を始めた。

「どのくらいかな。」

「さあ？」

『準備良いぜー!!』

『では、スタートですの。』

黒子の合図と同時にターゲットが出てきた。

「（数は……一体……いや………30はくだらないな。）」

ターゲットの数を数えてからジエスは行動に移した。

「まずは………メラミー!!」

ジエスの火球魔法メラミがターゲットの二体を撃沈。

「次!………バキ!!………イオー!!」

続いて………真空魔法バキと爆発魔法イオがターゲットの五体を撃沈。

「っ!!（ビーム?………いや、ペイント弾か。………仕方ない。）

………アイン!!」

《ハイ、マスター………ユニゾン・イン!!》

その瞬間、ジェスの右眼が紅、左眼が翠に変わった。

「ティオー!!」

「ええ!」

「(アイン……声、任せた。)(ハイ。)セウシル!!」

ペイント弾をティオのセウシルで防ぎ……

「『アクセルシューター!……シユート!!』」

残り23体を『高町なのは』のアクセルシューターのジェスバー
ジョンで落とした。

「終わりか?」

すると……

『実は……今回の身体検査には……今、学園都市で暴れている
連中のデータも有りまして……後、四体ほど戦ってくださいな。』

「なっ!? てめえ!!」 抗議をする間もなく……新たに四体
のターゲットが現れた。

「ん? あれは……」

『最近、学園都市に出没する……怪物ですの。』

「なるほど……」

それは……『タランチュラワーム』、『ダークローチ』、『コ
ブラ怪人』……そして『ディケイド・キラ』だった。

「仕方ない……」

- K A M E N R I D E …… K A B U T O …… B L A D E …… B L A C K
R X -

「行け!!」

ジェスは三人のライダーを召喚した。

「変身!!」

- t u r n - u p -

「変身!!」

- H E N S H I N -

「変……身!」

「変身!!」

- K A M E N R I D E D E C A D E -

「やってやる……………来いよ！全てを破壊してやる！！」

「来い…………ローチ！！」

「行くぞ…………」

「俺は太陽の王子…………仮面ライダーBLACKRX！！」

その様子を見ていた白井達は……………

「あれは…………」

「仮面…………ライダー…………」

仮面ライダーの存在を知ってはいたが……………実際に見たのは、幻矢が変身した一回と今の場面だけだった。

ブレイド対ダークローチ

挿入曲 覚醒

『ギシャッ！！』

「ハッ！ハッ！……………SLASH……………ハアッ！！」

『ギシャッ！？』

- K I C K -

- T H U N D E R -

- M A C H -

- L I G H T N I N G S O N I C -

「ハア……………ウエ……………イ！！」

『ギシャッ……………』

ダークローチは、ブレイドのライトニングソニックを受けて、消滅した。

カブト対タランチュラワーム

挿入曲 FULFORTH

「ハッ！」

『ギュルル………』

「そろそろか………キャストオフ。」

- CASTOFF………CHANGEBEETLE -

『ギュルル………!!』

「クロックアップ。」

- CLOCKUP -

カブトとワームは同時にクロックアップした。

クロックアップ空間 - -

「ハッ！ハッ、ハアッ！！」

クロックアップ空間でもカブトがクナイガン・クナイモードでタランチュラワームを押していた。

「とどめだ。」

- ONE・TWO・THREE -

「ライダー……キック！」

- RIDERKICK -

『ブルル………!!』

「ハアッ！！」

タランチュラワームが背後からカブトを攻撃しようとしたが……カブトのカウンター型のライダーキックで倒された。

BLACKRX対コブラ怪人

挿入曲 仮面ライダーBLACKRX

「リボルケイン!!」

『シャーーーーッ!!』

「トアッ!」

BLACKRXはリボルケインを使い、コブラ怪人にダメージを与えていく。

『シャーーーーッ!!』

「くっ!!」

コブラ怪人はダメージを受けているにもかかわらず、RXを締め付けようとしていた……………だが

「フンッ……………RX・バイオリダー!!」

RXはバイオリダーになり、攻撃を回避した。

「バイオブレード!」

RXはバイオブレードでコブラ怪人に斬り掛かった。

「ハッ、ハッ、トアッ!!」

RXは、バイオブレードで数回斬ったあと、コブラ怪人を遠くに飛ばした。

「ハッ!……………RXロボライダー!!」

RXは、バイオリダーからロボライダーに変わった。

「ボルテックシューター!!」

『シャーーーー!!?』

RXロボライダーは、ボルテックシューターでさらにダメージを与え……………BLACKRXに戻った。

「行くぞ!トアッ!!……………リボルクラッシュ!!」

『シャーーーー!!?』

コブラ怪人はリボルクラッシュを受けて、爆発した。
ディケイド対ディケイド・キラ

挿入曲 RIDE The Wind

『……………』
「ディケイド・キラ…ヤプールが作り出した、『エース
キラ』や『メビウスキラ』に名前の響きが似てるな。」

『……………』
「っ！！」

ディケイド・キラは、ディケイドブラストに似た光弾を発射し
た。

「あぶねえな……………」

- ATTACK RIDE BLASTO -

「お返しだ！！」

ディケイドはお返しにディケイドブラストをお見舞いした。

「（さっきの一瞬……………ブレスレットが見えたが……………）」
煙りが引くと……………ディケイド・キラは立ったままだった。

「頑丈だな……………おい……………」

すると……………おもむろに、ブレスレットの方に腕を持っていく
……………ディケイド・キラ……………その動作は、エースキラに酷似してい
た。

「まさか！！」

『フンッ！！』

「ちっ！！」

- ATTACK RIDE……………BARRIA -

ディケイド・キラが放った……………ブレスレットをバリアで防ぐデ
イケイド。

『……………！！』
すると……………両手を顔の前でクロスし、姿を消す……………ディケイド・
キラ。

「……………今のは、ウルトラ戦士のテレポーション……………最悪だ

な。」

こうして、システムスキャン身体検査は、終了したが……

『計測不能！？』

「……………」。「↑コーヒーを飲んでる、ジェス。

「はい……………」ジェスさんは、能力者には無い……………」『特殊の力』
があつて……………」何が有るんですか？」

・コテツ！ - ↑ジェスが肘を動かした音。

「うゝいゝはゝるゝ……………」

「ごつごめんなさい！白井さん！！」

「……………」相変わらずの……………」無敵っぷり。」

「うるせえ……………」しかし……………」

考え込むジェス……………」幻矢と御坂はそんなジェスに気付いていて、
初春と白井と佐天は気付いていない。

「どうしたの？」

「いや……………」さっきのターゲットの一体がテレポーターションで逃げたのが気になってな。」

「……………」白井から聞いたけど……………」姿がディケイドに似てたとか……………」

……………」本来なら……………」違う怪人……………」らしかったが……………」

その時……………」

「緊急発令！……………」緊急発令！……………」常盤台学園にて『謎の怪人』が
暴れています。ジャッジメント風紀委員は学生の避難を……………」アンチスキル警備隊は怪人の対処を……………」

……………」繰り返す……………」

その警報を聞いた白井と初春は……………」

「初春！行きますわよ！」

「はっはい！！」

白井と初春は直ぐさま現場に向かった。

「幻矢……………」いや、コク……………」行くぞ！」

「オツケー……………」セイ！」

「私も!!」

「美琴は、此处にいる!!」

「えっ!？」

御坂も行く、言い出すが……幻矢がそれを制止した。

「どうして？」

「危険なところに……お前は行かせられない。」

「私は……学園都市第3位の超能力者よ……絶対に大丈夫よ!!」

「美琴!!」

幻矢とジェスの間を走り抜ける御坂。

「ちっ!……美琴!!」

「まったく……世話の焼ける奴らだ。……佐天は此处にいる……いいな!!」

「はい!!」

ジェスはそう、指示をして……幻矢と御坂の後を追った。

（まったく……何が危険な場所よ。……学園都市や常盤台は庭の様なもんだし……大丈夫に……？）

突然、御坂の前に灰色のカーテンが発生した。

（これって……最近、発生している……現象。）

その灰色のカーテンから……モルイマジ、T・REXドーパントが姿を現した。

（怪人!？……やってやるわ。）

（美琴のやつ……何処に?……ん?）

幻矢の前方400m付近に灰色のカーテンが発生しているのが見えた。

「まさか……くっ!？」

幻矢は、また走り出した。

(前方に灰色のカーテンが発生したのが見えた………何かが来たのか?………いそがねば!)

「(絶対に……倒す!!) ハアッ!!」

御坂は、イマジンに向かい……電撃を放った………が!

「あん?……何だあ、今の……」

「(嘘……効いてない……)」

御坂の電撃を受けて、平然としてる、モルイマジン……

「がああー……っ!」

「ひっ!？」

御坂に迫る、T・REXドーパント……

「助けて……誰か……助けてえ……っ!」

???「助けてやるよ……俺が……いや……」

『俺達が……ハアッ!!』↑仮面ライダーW的なノリで

「えっ!？」

御坂の前には……T・REXドーパントを蹴り飛ばしている……

幻矢とジエスの姿があった。

「まったく!……無茶すんな、美琴!」

「まったくだ。」

そこへ……

「ようやく来たか……青きディケイド……それに黒きディケイドよ……」

「「ディケイド・キラー!!」」
「フンッ!!」

ディケイド・キラーが……何かを幻矢達の前に投げた……それは

……

「っ!!……白井!!」

「初春さん!!」

白井黒子と初春飾利だった。

「おいっ、白井っ!!……白井っ!!」

「初春さん!!」

すると……

「うつ……うつん。」

「初春さん!!」

「御坂……さん？」

初春は、意識を戻したが……

「おい……白井……冗談は止せよ!!……目を開けるよ、白井!!」

「白井さん……」

「黒子……」

白井黒子だけが……意識を失ったままだった。

「いくら、呼んでも無駄だ……そいつは……」

ディケイド・キラーが何かを言おうとした時……

「レイズデット!!……ファーストエイド!!」

「っ!!」

すると……

「うつ……此处は？」

「白井!!」

「なっ!?!……幻矢さん？」

「よかった……本当に……」

「幻矢さん／＼」

白井黒子が、意識を取り戻したのが嬉しかった、幻矢は……白

井を抱き寄せ、白井は……そんな幻矢に抱き返した。……その時！

「ブオオーーン」

灰色のカーテンが出現し、四人の青年と五体のイマジンが出てきた。

「やあ！……こんな所に居たのか。」

「海東……」

「大樹……」

それは、海東大樹……それに……

「俺達を……忘れんな。」

「そうだよ。」

「無事でよかった。」

それは……

「翔太郎、フィリップ、野上……それに……モモタロス……」

「おうっ！」

「ウラタロス……」

「はい。」

「キンタロス……」

「ふん！」↑首を鳴らす

「リュウタロス……」

「イエーイ！」

「……ジーク……お前だけ、帰れ！！」

「家臣共と反応に差があるな。」

Wの左翔太郎とフィリップ、電王の野上良太郎とイマジンスだった。

「助かったぜ……翔太郎とフィリップは、ドーパントを……野上はイマジンを……海東は……俺と幻矢と一緒にディケイド・キラを相手してくれ！」

『ああ！／うん。／オツケー！』
すると……

「貴様ら……一体、何者だ!!」

デイクイド・キラが定番な台詞を言った。

「定番な台詞だね。」

「仕方ないんじゃない?」

「そりゃ……そうだろうな。」

「野上達は変身後……だろ?」

「うん。」

「じゃあ……僕らからだね?」

ジェス達が話してる時……

「何をしている!!」

デイクイド・キラが痺れを切らしていた。

「それじゃ……教えてやるよ……俺は!!」

「俺達はノ僕達は……二人で一人の……」

「真正正銘……通りすがりの……」

「仮面ライダーだ!覚えとけ!!」

「何っ!!」

- KAMENRIDE…… -

- CYCLONE -

- JOKER -

『変身!!』

- BLUEDECADE -

- BLACKDECADE -

- DI・END -

- CYCLONEJOKER -

- SWORDFORM -

- RODFORM -

- AXFORM -

- GUNFORM -

- WINGFORM -

ジェス達はそれぞれのライダーに変身した。

「俺……参上!!」

「お前達……僕に釣られてみる?」

「俺の強さに……お前が泣いた!」

「やつちゃうけど良いよね?……答えは聞いてない!!」

「降臨……満を持して……」

「『さあ……お前の罪を数えろ!!』」

ジェスや幻矢達は、仮面ライダーに変身した。

「殺れっ!!」

イマジンとT・REXドーパントはライダー目掛けて走り出した。

W対T・REXドーパント

挿入曲 W - B - X

『翔太郎?……相手があのドーパントだとしても……』

「真里奈じゃないんだ……間違えるか……行くぜ。」

「ガアアーッ!!」

「おりやつ!……ハアッ!!」

- HEAT JOKER -

「熱いのおみまいしてやる!!」

Wがドーパントを相手に有利に立っていた。

- HEAT METAL -

『翔太郎……そろそろ……行くよ?』

「ああ……メモリブレイクだ。」

- METAL MAXIMUM DRIVE -

「『ハア……』……メタルブラ

ンディング!!」

「ガアアーーーー!?」
「パキンッ」

電王チーム対モールイマジン

挿入曲 DOUBLE ACTION

「行くぜ? モグラ野郎……」

「へんっ!」

「言つとくが……俺は、最初から最後まで、クライマックスだ! 途中で泣き言は、聞かねえぞ。」

言いながら、デンガッシャー・ソードモードで斬りつけるソード電王。

「選手交代……ハアッ!」

他の電王も自分の武器でモールイマジンを攻撃する。

「いたたた……」

「(みんな……そろそろやるよ。) 良いぜ、良太郎。」

「モモ・ウラ・キン・リュウ・ジーク…… SUPERCLIMAX FORM」

電王は超クライマックスフォームになった。

「行くぜ……」

「FULLCHARGE」

「俺達の必殺技……超クライマックスバージョン!」

「ぐわあーーーーーっ!」

「へっ……決まったぜ。」

ブルーディケイド&ブラックディケイド&ディ
エンド対ディケイド・キラ

挿入曲 Treasure Sniper

「行くぜ？」

- - ATTACKRIDE..... SLASH - -

- ATTACKRIDE..... BLAST -

「ハッ!!」

「ぐっ!!」

「「ハアーーッ!!」」

「ぐおっ!!?.....おのれい.....ハアッ!!」

「回避!!」

ディケイド・キラを相手にブルーディケイド、ブラックディ
イド、ディエンドはコンビネーションで戦っていた.....が、ディ
ケイド・キラのプレスレット攻撃は回避するしかなかった。

「ったく.....なんで、ウルトラプレスレットを奴が?」

「わからないね.....」

「破壊するわけにもいかないし.....」

「ああ.....」

ブルーディケイド達は、どうするかを考えだした。

ライダーSIDEOUT

科学SIDE

「大丈夫でしょうか？」

「大丈夫でしょ。」

そこへ……………

「あれっ？……………御坂？」

「っ！……………当……………麻……………」

「上条さん……………」

上条当麻が通り掛かった。

「何を……………してらっしゃるんでしょうか？」

「……………こつちの台詞よ（です）（ですわ）！！……………」
すると……………

『うわあーっ！！』

ブルーデイクイド達が吹き飛ばされていた……………

「あんた達は……………」

当麻はブルーデイクイド達に言った。

「まあ……………世界を巡る……………旅人かな。」

「おっ！……………上条じゃねえか。」

「はっ？……………黒いのは……………まさか、星御門か。」

そこへ……………

「次で……………終わりだ。」

「しぶといねえ……………かなり。」

「言ってる場合か？」

『検索を完了した……………あのブレスレットは……………偽物のウルトラブレスレットだ。』

「……………サンキュー、フィリップ……………」

「じゃあ……………行こうか？」

- FINAL ATTACK RIDE… DI・DI・DI・DIEN

D -

「ハッ……………」

「ぐっ……………」

- EXTREME -

「『プリズムビッカー!!』」

- PRISM -

「行くぜ……」

- CYCLONE・HEAT・LUNA・JOKER MAXIMUM
DRIVE -

「『ビッカーファイナリジョン!!』」

「ぐっ……」

- FINAL ATTACK RIDE……DE・DE・DE・DE
CADE - -

「行くぜ……」

「ああ……」

「『ハアッ!!』」

二人のディケイドは、同時にジャンプした。

「ハッ!？」

「『ダブルディメンションキック!!』」

「ぐわぁー……っ……っ!!」

二人のディケイドの必殺キックで吹き飛ばされたディケイド・キラ……だが……

「まだだ……まだ……」

「『なにっ!？』」

『僕らの必殺技を受けて……まだ、立てるなんて……』

その時……

- FINAL ATTACK RIDE……NA・NA・NA・NA
NOHA -

???「スターライト……ブレイカー!!」

「ぐおっ……まさか……!？」

- ドッカラー……ッ……ッ……

「っ!………今のは……」

ブルーディケイドとブラックディケイドが辺りを見渡した時……

…視界に入っただのは……

「あれは……」

「白い……ディケイド……」

「……」

「おいっ……」

ブルーディケイドが叫ぶが……謎の白いディケイドは、そのまま……立ち去って行った。

「ひょっとして……今のが……都市伝説にある……『白き体の仮面の戦士』なのか。」

「それじゃ……僕は先に戻ってるよ。」

「ああ。」

良太郎とイマジンズ、翔太郎とフィリップは……灰色のカーテンを潜り……元の世界へ戻った。

「海東……状況説明……手伝え。」（ブラックスマイル）

「っ!?!?……あ、ああ。」

第33話 都市伝説のライダー！（後書き）

ゆり「次回の魔法少女リリカルなのは&super・スーパーヒーローは……………」

御坂「別の…………世界……………」

白井「解析不能のはずですわね。」

ジェス「じゃあな。」

ゆり「次回、第34話 さらば、学園都市……………早く帰ってきて、ジェス。」

第34話 さらば、学園都市（前書き）

短い上に……駄文な気が……

第34話 さらば、学園都市

- 第一七七支部

ジェスは、海東と共に自分が別世界の人間であることを説明していた。

「別世界……本当ですか？」

「当然の疑問か……海東！」

「仕方ない……」

と、言う……海東はその場にいる全員を灰色のカーテンに潜らせた。

「何？」

「何処……ですか？」

「……」

「おい、セイ……まさか……」

「ああ……此処は……「ジェス君か？」……えっ？アムロさん？」

そこには……連邦の白き流星……アムロ・レイがいた。

「実は……」

ジェスは、事情を説明した。

「なるほど……そういう事か……」

「まあ……また、『向こう側の世界』に戻らなきゃいけないので

……」

「わかった……みんなには、しばらくかかるとっておく。」
「お願いします。」

「じゃあ……………戻るよ。」

・ 第一七七支部

「……………」

「おい……………」

「一つお聞きますが……………今のは……………」

「現実だ。」

白井の疑問に……………即答するジエス。

「なるほどね……………」

「解析不能なわけですね。」

それから……………数日……………

「ちと、飛ばしたな……………」

「気にしたら……………負けだよ。」

「本当に……………行っちゃうんですか？」

「ああ……………」

「だったら！……………せめて、白井さんを！」

「人数が多すぎると……………別れずらくなる。」

今、この場には……………ジエス、海東、佐天の三人しかいない。

「星御門さんは……………呼ばないんですか？」

「あいつとは……………いずれまた、会える。」

「ジェスさん……………」

「そろそろだよ。」

「ああ……………じゃあな！」

「はいっ！！」

佐天は、二人の姿が消えるまで……………そこに立っていた。

「良いんですか？あれで……………」

「まあね。」

そこに、幻矢がきた。

「それよりも……………あの時は、助かったけど……………あまり、その『ベルト』の力に頼るなよ。」

「大丈夫ですよ……………貴方といれば。」

「ふっ……………そうかな。」

すると……………

「佐天さん……………」

「「ん？」」

「『お兄様』に……………あまり、くっつかないでもらえませんか？」

「白井さんのだけじゃ、ないですよ。」

「なっ！佐天さ……………」

「黒子……………」

「お姉様……………」

「あんたには……………『愛の上条様』が……………いるんでしょう？」

「お姉様？……………何を……………」

「悪いけど……………幻矢争奪戦の参加資格には……………『思い人がいる者は……………参加せず』があるから……………さっさとどきなさい？」

「はい……………ですの……………お姉様。」

「で……………このまま…元の世界へ。」

「そうも……………いけないみたい。」

「あゝ！？」

ジェスが元の世界に戻るのは……………いつになるのか？

第34話　さらば、学園都市（後書き）

作者「さてと……………」

幻矢「その前にさ……………何時、佐天が『白きディケイド』の力を手に入れたんだ？」

作者「その真相は……………別の小説で。」

幻矢「おいっ！！」

ジェス「次回　第35話　地球での模擬戦……………なんで？」

フェイト「リ……………リリカル……………マジカル……………がんばります／＼／」

なのは「フェイトちゃん、恥ずかしがらない。」

フェイト「でも……………なのは！」

なのは「仕方ないな……………これが手本だよ。……………リリカル・マジカル……………がんばります！！」

零矢「何やって……………」

なのは「はっ！！……………零矢君は見ないで／＼／／」

零矢「はあ？」

第35話 地球での模擬戦（前書き）

模擬戦……………少ない。

第35話 地球での模擬戦

- 地球 富士山麓

「今回の模擬戦は……チームバトル……ですが……！……シング
ルの方は審判をしてもらいます。」

「じゃあ……ユーノ君、審判……お願いね。」

「えっ？」

「アルフ……審判……お願いできる？」

「良いよ、フェイト。」

「ライダー組は……ほとんどチームで行けるな……オーズ以外。」

「そういえば……オーズだけいまだに一人だね。」

そこへ……

「……あれ？ミッドにいないと思ったら……地球に居たんだ。」

「誰だい？」

「俺は、ジヨウ……よろしく。」

「ああ……よろしくな。」

「「お兄ちゃん！？先輩！？」」

「ん？よお、シヨウ、璃杖。」

「「お帰りなさい！！」」

「うわっ！？」

そこへ……

「何をやっている？」

「ジヨウ？おい！」

「一人の青年と一人の少女がやってきた。」

「なっ！？ウヴァにメズール！？」

「あら……アंकじゃない？久しぶりね……キスしてあげ……」
「やめろ、メズール！」

「つれないわね……ア・ン・ク。」

「なんだ？今のメズールは……」

「なんか……別のライダー世界を巡ってたら……ああなった。」

「うるさいわね……虫に鳥……」

「「なっ！」」

何気に毒を吐くメズール。

「なんか……メズールって変わったね。」

「えっ！？そうかな……映司。」

「うん、変わってるよ。」

「なんか……今時の女子高生の反の……ビュンッ！……」

……！！！」

「何かいった……アंक？」

「いや……なんでもない。」

「（あのアंकが……メズールに負けてる。）」

そんな時……

「……」「火野……」

「……」「ヤッホー、火野ちゃん。」

「後藤さん、伊達さん。」

「今まで、何処にいた。」

「ミッドチルダです。」

事のあらましを大雑把に後藤と伊達に話した。

「なるほど……」

「その……管理局……だったけ？……救助隊もあるんだな。」

「映司さん！」

「あっ！エリオくん。」

「もうすぐ、模擬戦が……あれ？そちらの方々は？」

「あっ！紹介するね。……鴻上コーポレーションの後藤さんと

……『仮面ライダーバース』の伊達さん。……それと……アंक

の隣にるのが『虫型グリードのウヴァ』に『水棲生物系グリードのメズール』。」

「アंकさん以外のグリード……僕、エリオ・モンディアルです。」

「や〜ん！可愛い……ねえ、好きな子って……いるの？」

「えっ！？あの……」

「やめやがれ、メズール！」

「おいっ！早く模擬戦場に行くぞ。」

「じゃあ、案内します。」

「行くぞ！映司！！」

「あっ！！おいっ、アंक！！」

「待て、火野！！」

「お、お、おいっ！アंकコ！！」

「はあ、はあ……シヨウと璃杖もだろ……ウヴァ、メズール

……俺達も……」

「大丈夫なのか？」

「飛び入りでいけるでしょ。」

「ちっ！仕方ない。」

- - 模擬戦場

「最初は……スターズ分隊とライティング分隊でデモンストレーションをしてもらいます。……あと、特別にドモンさんとマスターアジアさんにもしてもらいます。」

『了解！』

スターズ分隊とライティング分隊が所定の位置についた。

「行くよ……………レイジングハート。」

「アイゼン!!」

「マツハキヤリバー!!」

「クロスミラージユ……………」

「セイグリッドハート!!」

『セー……ットアップ!!』

スターズ分隊はセットアップしバリアジャケットを身につけた。

「行こう……………バルディッシュ・アサルト!!」

「レヴァンティン!!」

「ストラーダ!!」

「ケリュケイオン!!」

『セットアップ!!』

「戦闘形態!!」

ライトニング分隊もバリアジャケットを身につけた。

「久々にやるよ……………フェイトちゃん!!」

「うん……………なのは!!」

なのはとフェイトの二人が空中でぶつかり、スバル&アイアナとエリオ&キャロがぶつかり、ヴィヴィオ（大人モード）とアインハルト（大人モード）がぶつかり合った。

「アクセルシューター!!」

「プラズマランサー!!」

「シュート!!」

「ファイア!!」

そんな光景を見ていた者達は……………数人を除いて啞然としていた。

「（あそこまで動けるのか……………まあ……………カブトライダーズにはスピードで負けるな。）」

そんなことを心の中で思ってるレジスである。

・数十分後……スターズ分隊とライトニング分隊のデモンストレーションが終わると……次にドモン・カッシュとマスターアジアが……

「行くぞ……ドモン!!」

「はいっ! 師匠!!」

と、言う……二人はパンチや蹴りを繰り出しながら……

「流派! 東方不敗は……」

「王者の風よ!!」

「全身!!」

「系列!!」

「天霸狂乱!!」

最後はドモンが左拳、マスターアジアが右拳をぶつけ……

「見よ! 東方は紅く燃えている!!」

『オー……ッ!!』

『スゲ……ッ!!』

男子のガキどもと……スバルにエリオが歓声をあげていた。

「恥ずかしいでしょっ! バカスバル!!」

「いたっ!!」

スバルにすかさずチョップをするティアナ。

「それでは! ……模擬戦の第一組は……仮面ライダーディケイドチーム対仮面ライダーW&Ozチーム。」

「だいたい…わかった。」

「模擬戦……ですか?」

「模擬戦には……ならないと思う。」

「あれっ? 大樹さんは?」

「別世界に出張中。」

と、デイケイドチーム……

「デイケイドか……」

「模擬戦に……なるのかな？」

「ならない……だろうな。」

「そうだろうな。」

「……右に同じ。」

「なんか……知らない奴がいるな。」

「伊達明だ……よろしくな。」

「ジョウだ……よろしく。」

そして……並ぶメンバー……

「さて……やるか？」

「ああ！」

「わかりました。」

準備をするデイケイドチーム……

「行くぜ……フィリップ。」

- JOKER -

「ああ……翔太郎。」

- CYCLONE -

「……。」

- ACCEL -

「ふう……。」

- SCULL -

「映司!!」

「ああ!!」

「お仕事、お仕事。」

「さーて……やるか？」

W & amp; オーズチームも準備をしていた……そして……

『変身!! / 変……身!!』

- KAMEN RIDER……DECADE -

- CYCLONE JOKER -

- ACCEL -
- SCULL -

《タカ……トラ……バツタ……タ・ト・バ……タトバ……タ・ト・バ!》

- ポカーン -

《カブト……ハヤブサ……パンサー……カ・ヤ・サー……カヤサ
ー……カ・ヤ・サー!》

両チームともに変身し……模擬戦の準備が完了した。

「先手必勝!」

- ATTACKRIDE……BLAST - 「ハッ!」

- CYCLONEMETAL -

- ENGINE……STEAM -

《タカ……クジャク……バツタ》

- プレストキヤノン -

《カブト……ビー……パンサー》

「そらっ!」

「ハッ!」

- LUNAMETAL -

『お返しだよ。』

「おわっ!」

そんな中、クウガ・マイティが跳躍して、Wに近づくが……

- HEATMETAL -

「そらよっ!」

「うわっ!」

「何っ!」

『攻撃を受けながら……メタルシャフトを掴むなんて……』

「超変身!」

クウガはマイティからドラゴンにフォームチェンジした。

『色が変わった……興味深い。』

「いやいや、俺達もだろ? フィリップ。」

『そうだったね。』

そんな事を言っていると……メタルシャフトがドラゴンロッドに変わってしまった。

『物を変化させるとは……実に興味深い。』

「だったらこれだ！」

- HEATRIGGER -

「燃やすぜ。」

- KAMENRIDE……FAIZ -

- ATTACKRIDE……PHONEBURASUTAR -

「ハッ！」

「うわっ……このやるし！」

- CYCLONETRIGGER -

「ハアッ！」

だが……ディケイドやクウガ、キバールは避けていた。

『翔太郎？こういう時は……』

- LUNATRIGGER -

「サンキュー、フィリップ。……ハアッ！」

『うわあ！！』

- LUNAJOKER -

「どんどん行くぜ？」

「くそっ、だったら……これだし！」

- FORMRIDE……FAIZ・ACCEL -

「むっ！」

「行くぜ！」

- start-up -

- TRIAL -

「全て……振り切るぜ！」

- TRIAL -

「ディケイドは……照井に任せるか。」

『そうだね。』

ライダーどうしの模擬戦？を見ていた機動六課のメンバーは……

「はやてちゃん……あれは……」

「模擬戦じゃなくて……ほぼ実戦だよね。」

「そう……やね。」

なのはとフェイトの疑問にそう答えるはやて。

「楽しそうだな。」

「行くなよ……シグナム。」

参加しそうなシグナムを制止するヴィータ。

「ふっ……さすがだな……ん？」

観戦していた丈瑠の下に黒子がやって来て、とある地図を広げた。

「この場所は……」

「丈瑠！……あそこー！」

「なにっ！？」

丈瑠が槩子が指差す方向を向くと……ナナシ連中とビービ、

ウガッツ、リンシーズ、カース、ジャリュウ兵が隙間から出て来た。

「丈瑠ー！」

「明石ー！」

「ああ……行くぞー！」

丈瑠達はナナシ連中共が出現した場所に走った。……その場所
は……

「こいつらは……」

『外道衆やガイアークの連中か……』

「土ー！」

「よお……やるのか？」

「ああ……」

「行くぞー！」

『応ー！／おっしやーー！』

『レディー！ボウケンジャー！！／ゴーゴーチエンジャー！！……』
 ……スタートアップ！！』
 『たぎれ！獣の力！！』
 『響け！獣の叫び！！』
 『研ぎ澄ませ！獣の刃！！』
 『ビーストオン！ハッ！！』
 『チエンジソウル・セット！……レッツ・ゴオン！！』
 『シヨドーフォン！』
 『スシチエンジャー！』
 『一筆奏上！』
 『一貫献上！』
 『ハッ！！』
 『テンソウダー！』
 『ガッチャ！！』
 『チエンジカード！……天装！！』
 『チエンジ！……ゴセイジャー！！』
 丈瑠達は……それぞれのアイテムで変身した。
 『轟轟戦隊！ボウケンジャー！！』
 『獣拳戦隊！ゲキレンジャー！！』
 『炎神戦隊……ゴオンジャー！！』
 『天下御免の侍戦隊……シンケンジャー！！参る！』
 『地球を護るは天使の使命！……天装戦隊ゴセイジャー！！』
 『ハッ！！……地球を清める宿命の騎士……』
 『ゴセイナイト！！』
 『我ら！スーパー戦隊！！』
 『おいっ……俺達を忘れんな。』
 『ふっ……そうだったな。』
 スーパー戦隊とライダーは……敵勢力に突撃していく。

その頃……機動六課は……

「あの化けもん！いつの間に……！」

「センサーには……引つ掛からなかったし……！」

「隙間を通つて来たのです……隙間センサーでなくては外道衆の

襲来は……わかりませぬぞ。」

「そうなんか？彦馬さん？」

「はい。……殿……今は、ナナシ連中だけですが……

アヤカシにご注意を……！」

彦馬はシンケンレッドに忠告をした。

「殿……！」

「爺の言う通りだな……みんな！注意しろ……！」

『ハッ！／ああ！／ハイ！』

その頃……

「此処は……何処の世界だ？」

「此処は……もしかして……！」

ジェスと海東は……先の『とある魔術と科学の世界』から……別の世界に来ていた。

???「師匠？」

「少年君。」

「アスム？」

それは……『ディケイド響鬼の世界』のアスムだった。

「また、こちらに来たんですか？」

「ちよつと……いろいろあつてね。」

「そうなんですか……………そちらの人は……………あの時の青いディケイドですね。」

「良くわかったな。」

ジェスと海東は……………アスムとしばし、話しをしていた。

戻って……………富士山麓

スーパー戦隊と仮面ライダー達がナナシ連中共と戦っている……………

……………機動六課とプリキュア、セイント聖闘士の周りに転移魔法陣が展開し……………

……………ガジェットシリーズが出て来た。

「……………星矢!!……………」

「ほのか、ひかり！」

「「なぎさ!／なぎささん!」

「咲!」

「舞!」

「満!」

「薫!」

「りんちゃん、うらら、こまちさん、かれんさん、くるみ……………行

くよー!!」

『YES!!』

「美希タン、ブッキー、せつな!」

「「ええ!」」

「えりか、いつき!……行きますよ!」

「やるっしゅ!」

「ゆりさんの分まで。」

「奏!」

「響!」

「璃杖……フェニーと氷ちゃんがいない分……」

「オツケー……やるよ!シヨウ!」

「みんな……行くで!」

『了解!!』

なぎさ達はそれぞれのアイテム……なのは達はもう一度、自分の
デバイスを持ち……聖衣クロスがその姿をミッドに適した形の『聖衣腕
輪レット』を自分達の前に翳して……それぞれの言葉を言った。

プリキュアチーム

『デュアル・オーロラウエーブ!!』

「ルミナス!シャイニング・ストリーム!!」

『デュアル・スピリチュアルパワー!!』

『プリキュア!メタモルフォーゼ!!』

「スカイローズ・トランスレイト!」

『チェンジ・プリキュア!ビートアップ!!』

『プリキュア!オープンマイハート!!』

『レッツプレイ!プリキュア・モジュレーション!!』

なぎさ達を七色の光が覆う。

機動六課

「行くよ……レイジングハート!!」
「バルディッシュ・アサルト!」
「マツハキヤリバー!!」
「クロスミラージュ!!」
「ストラダー!」
「ケリュケイオン!」
「レヴァンティン!」
「アイゼン!!」
「シュベルトクロイツ!!」
「セイグリット・ハート!!」
「ルシフェリオン!!」 「エルシニアクロイツ!」
『セットアップ!!』
「戦闘形態!」

聖闘士組 セイント

「ペガサス!!」
「ドラゴン!!」
「キグナス!!」
「アンドロメダ!!」
「フェニックス!!」
「アリエス!!」
『聖衣・アップ!!』
クロス

プリキュアチームに続き……機動六課と聖闘士達も自分の装備を
身に纏う。
セイント

「光の使者……キュアブラック!!」
「光の使者……キュアホワイト!!」
「輝く命……シャイニールミナス!!」
「輝く金の花!キュアブルーム!!」
「煌めく銀の翼!キュアイーグレッド!!」
「大いなる希望の力……キュアドリーム!!」
「情熱の赤い炎……キュアルージュ!!」
「はじけるレモンの香り……キュアレモネード!!」
「やすらぎの緑の大地……キュアミント!!」
「知性の青き泉……キュアアクア!!」
「青い薔薇は秘密の印……ミルキィローズ!!」
「ピンクのハートは愛ある印……もぎたてフレッシュ!キュアピ
ーチ!!」
「ブルーのハートは勇気の印……つみたてフレッシュ!キュアベ
リー!!」
「イエローハートは祈りの印……とれたてフレッシュ!キュアパ
イン!!」
「真つ赤なハートは幸せの証……熟れたてフレッシュ!キュアパ
ッション!!」
「大地に咲く、一輪の花……キュアブロッサム!!」
「海風に揺れる、一輪の花……キュアマリン!!」
「陽の光浴びる、一輪の花……キュアサンシャイン!!」
「必勝の黒い切り札……キュアジョーカー!!」
「魔を覆滅する金の杖……キュアロッド!!」
「爪弾くは荒ぶる調べ……キュアメロディ!!」
「爪弾くはたおやかな調べ……キュアリズム!!」

「スターズ1…高町なのは！」
「スターズ2…ヴィータ！」
「スターズ3…スバル・ナカジマ！」
「スターズ4…ティアナ・ランスター！」
「スターズ5…高町ヴィヴィオ！」
「スターズEX…高町セイスイ！」
「ライトニング1…フェイト・T・ハラオウン！」
「ライトニング2…シグナム！」
「ライトニング3…エリオ・モンディアル！」
「ライトニング4…キャロ・ル・ルシエ！」
「ライトニング5…アインハルト・ストラトス！」
「ロングアーチ1…八神はやて！」
「ロングアーチEX…八神閻璃！」
『行きます！！』

「ペガサス星矢！！」
「ドラゴン紫龍！！」
「キグナス氷河！！」
「アンドロメダ瞬！！」
「フェニックス一輝！！」
「アリエス…ムウ！！」

プリキュアチーム、機動六課、
聖闘士^{セイント}達はガジェットとの戦闘準備を完了した。

第35話 地球での模擬戦（後書き）

なのは「今回は短めに……次回、第36話……地球での戦闘……
……次回も魔法少女リリカルなのはS T S & a m p ; スーパーヒー
ローにテイクオフ。」

第36話 地球での戦闘（前書き）

短いし………駄文かも。

第36話 地球での戦闘

- 富士山麓

今、スーパー戦隊とライダー、プリキュア、機動六課、セイント聖闘士達が敵勢力との戦闘に突入するところだった。

スーパー戦隊 & amp; ライドーズ 対 外道衆 その他 雑魚

- HEAT JOKER -

「そらっ!!」

- ATTACK RIDE BLAST -

「ハッ!!」

《タカ……カマキリ……バッタ》

「セイヤ!!」

《カッターウィング!》

「よっ!!」

ディケイドやW達がナナシ連中共に攻撃をしていると……………

「ジョウ! ……メダルチェンジ! ……いってみよ!」

「オッケー、お嬢様。」

「いゃん…………お嬢様だなんて…………ジョウってばノノノ」

「早く渡してやれ…………メズール!!」

「わかったわよ…………ジョウ!」

「よしっ…………行くぜ?」

《サメ……カニ……クラゲ……サ・サ・サカク……サ・サ・サ力ク!》

「ハッ!」

仮面ライダーレルスはカビースーから水系コンボのサカクコンボになった。

「アंक!……オーズに渡せ!」

・ピーン・

「わかってる……映司!」

「おっと!……よし!」

《クワガタ……カマキリ……バツタ……ガータガタ……ガタキリバ……ガタキリバ!》

「うおー!」

仮面ライダーオーズはタカキリバから昆虫コンボのガタキリバにコンボチェンジした。

「ウォーターアロー!」

「ヘブンファン!」

「ランドスライサー!」

「ナア」

しかし……次から次へと……際限なくナナシ連中が出てくる。

「くっ!」

「きりがない……」

一方……

「アクセルシューター!」

「プラズマランサー!」

「クロスファイヤー!」

「シュート!」

「ファイア!」

なのは達はガジェットを攻撃していた……しかも……

『ダアー………ッ!!』
セイント
聖闘士とプリキュアもガジェッドとの戦闘に参加していたので思
ったよりも、早く片付いた。

「ちっ！なんて、数だ!!」
すると……

???「ヒャーハハハ!………もうへばったか？高岳の!」

???「ふふふ………」

「てめえら!……『ガイ』に『レイ』!」

「クエスターを忘れているぞ!」

「ちっ!!」

「シルバー!!………っ!!」

ボウケンレッドがボウケンシルバーによろうとした時………

???「貴様の相手は………この俺だ!ボウケンレッド!!」

「リュウオーン!!」

同じく………ボウケンブラックには………

???「ふふふ………」

「風の……ヤイバ!」

ブルー達には………

???「叩け………カース共!」

「ガジャか………」

「ネガティブの幹部達が………復活するなんて。」
すると………

「あなた達………そろそろ時間です………戻りなさい。」

「ロン!!」

「また会いましょう………ゲキレンジャー!」

ロンが消えると、同時に……ガジャやリュウオーン達はその場から姿を消した。

「逃げられたか。」

丈瑠達は、周囲を確認し……変身を解いた。

その頃の……ジェスと海東は……

「最悪なところに出たな……」

「此処は？」

「虚数空間……っ！」

ジェスの目に、プレシアとアリシアの入ったカプセルが落下してくるのが見えた。

「変身！」

- K A M E N R I D E …… B L U E D E C A D E -

「さらに！」

- K A M E N R I D E …… K A B U T O - - A T T A C K R I D E

…… C L O C K U P -

「しかし……これじゃ……あれは！？」

「デンライナー？」

デンライナーは、海東とジェス、プレシア、アリシアの入ったカプセルを回収して、再び時の砂漠を走っていた。

「間一髪でしたねえ……良太郎君に感謝してください。」

「わかってるって……サンキューな良太郎。」

「いえ……ところで、どうするんです？」

「ああ……とりあえず、プレシアの病を治す。……ルナヒーリング！」

「うっ！……体が……軽い。」

「病は治した。……次は……アリシアをぐっ！！」

「大丈夫かい？」

「ああ……少々、精神力が……」

「少し、休んでなよ。」

「そうさせて、貰う。」

その時……

「あなた達は？」

「通りすがりの仮面ライダーさ。」

第36話 地球での戦闘（後書き）

ジェス「あれ？プレシアの病……治した？」

海東「まあ……虚数空間に落ちた後だから、過去の歴史に変化はないけどね。」

ジェス「それなら……良いが。」

明石「ガジャ達が生き返ったのは………」

丈瑠「外道衆がからんでるだろう。」

作者「次回、第37話 守護者の帰還／護星の龍騎士の正体……
お楽しみに。」

第37話 守護者の帰還／護星の龍騎士の正体（前書き）

こんなんで…………どうでしょう？

第37話 守護者の帰還／護星の龍騎士の正体

時の列車デンライナー

「次は…… アリシアか…… コハナ、服を着させてからベッドに寝かせてくれ。」

「うん。」

コハナが準備をしてる間…… 良太郎達は退場。

「にしても…… よく、虚数空間に入れたな。」

「たまたま…… デンライナーの線路があoの空間に繋がってただけだよ。」

「たまたま…… ねえ。」

三人の話が終わると…… ちょうどよく……

「準備オツケーよ。」

「了解。」

ジェスは、アリシアが寝かせてあるベッドの前に立った。

「本当に…… 助かるの?」

プレシアがジェスにそう聞いた。

「ああ…… 魂がまだ、あの子の側にあるなら……」

「頼むわ…… アリシアを……」

「ああ…… ハア……」

ジェスは、精神力を高めるために集中しだした。

「（この子に…… 再び…… 命を!）…… っ…… ザオリク……!」

「ん…… うーん…… 此処は?」

「アリシア!」

「お母さん?…… お母さんなの?」

「そうよ、アリシア。」

「お母さん！」

「アリシア！」

プレシアはジェスの力で再び命を与えられたアリシアと抱き合った。

「ふっ……………ぐっ!!……………ハア……………ハア……………」

「「あっ!？」」

「さつきのよりも……………消耗するらしいね。」

「まあ……………早く……………俺達の世界へ……………戻ら……………なきゃ……………」

???「無茶するんだね……………結構。」

「誰？」

「フェイト？」

「ボクは、闇の書のマテリアルさ……………まあ、外見はフェイトだけだよ。」

「闇の書の……………マテリアル……………セイスと闇璃以外の……………」

……………最後の一人。」

「ふーん……………星光はセイスで闇王は闇璃か……………なるほどね……………」

……………ボクは何にしようかな。」

「ライシャ……………なんて……………どうだ？」

「ライシャか……………別に良いよ。」

「だが……………問題は……………俺達の世界に着いたら……………どうなる……………」

か。」

「それは……………心配ありませんよ。」

「オーナー？」

「どういうことだい？」

「彼女達がいたのは……………ジェス君、あなたの世界の過去ですからね。」

「俺の世界の過去……………つまり、過去のなのは世界だったのか。」

「その通り……………それに……………アリシアとライシャは、未来に着くと同時に……………その時間に適した姿になりますので……………」

「つまり……………成長するのか。」

「ええ。……………着くまでに時間があるので……………ゆっくりと休んでください。それと……………プレシアさんとアリシアには……………新しいデバイスを渡します。」

「新しいデバイス……………」

プレシアとアリシアはおろか、その場の全員が耳を傾けていた。

「まず……………アリシアには、フェイトのバルディッシュの同型の『バルディッシュ・ツヴァイ』を……………プレシアさん…あなたには、『バルディマザー』を……………渡しておきます。」

「これが……………」

「デバイス。」

その後、ジェス達は時間になるまで、デンライナーで休んでいた。

現在・ミッドチルダ

「……………ジェス……………」

ゆりは……………一人、ジェスが使用している部屋にいた。

「……………どこにいるの……………ジェス……………」

タイムセイバーズ兼機動六課・プリキュアルーム

プリキュアルーム……………そこには、パルミエ王国のココ、ナッツの

人間態と運び屋シロップの人間態、プリキュア達とそれぞれの妖精がいた。

「ゆりの様子は？」

「先輩の部屋に……ずっと、閉じこもってます。」

夏の質問にうらが返した。

「まずいな……プリキュアが一人でも欠けたら……真の力は発揮されない。」

「それは……どういうこと？」

「要するに、プリキュアはらが一人、少なかったら力が発揮されへんのや。ピーチはんとパインはんにベリーはんは、わかるやろ？」

「……うん。」「」

「私は、ほのかやメップル達がいないと変身出来ないし。」

「私は……ポルンがいないと……」

「私と咲も……チヨッピー達がいなきゃ変身出来ないし。」

「私達は……六人揃わなきゃ意味がないし。」

「私も……奏がいなきゃ……」

「響……」

それぞれのプリキュア達もパートナーや仲間がいなかった時の事を思い出したり、考えてたりした。

「ムーンライトの……パートナーの妖精がいれば……」

ムーンライトのパートナーの妖精……名は『コロン』……以前、ジェスと再会するまえに、ダークプリキュアとサバーク博士との戦闘で……ムーンライトが失ってしまった……当時のムーンライト……月影ゆりの大切な存在だった。

その夜……ゆりは……一人、機動六課の施設内の裏庭を歩いて

いた。

「（ジェス……私……自分がわからない……あなた
がいなきゃ……会いたい……すぐに……会いたい！！）」

「ザッ！」

「（はっ！……誰？）」

後ろで足音が聞こえて……ゆりは、後ろを振り向いていた。

「……へえー……面白い欲望だね。」

「あなたは？」

「……その欲望……かいほ……「させるかよ、猫野郎！！」……
……っ！」

「士……さん……」

士がゆりと侵入者の間に立っていた。

「……邪魔するんだ……じゃあ……相手するよ。」

そう言つて、侵入者は『セルメダル』を半分に割り『屑ヤミー』
を作り出した。

「……じゃあ、頼んだよ。ハッ！！」

「ちっ！変身！！」

「KAMENRIDEDECADE」

士はディケイドに変身し、逃げた侵入者には目もくれず……屑ヤ
ミーを倒していった。

そして、ジェスが別世界に跳んで一週間が経つ……そんな時
に……

「緊急事態発生！緊急事態発生！……クラナガン郊外にて巨大
生物が暴れている……魔導師は住民の避難を！繰り返す……」

「聞いての通りや……スターズ分隊及びライトニング分隊は民間
人の救助と安全な場所への避難誘導……タイムセイバーズに関

しては……『待機』が命じられとる。」

『っ！』

タイムセイバーズ側だけではなく、なのは達も先のはやての言葉に驚いている。

「はやて……それは？」

フェイトの問いにはやては……

「地上本部からの通達や。」

暗い雰囲気の中……なのは達は出勤するが……他のみんなよりも、シヨックを受けているのは……誰でもない……部隊長のはやてと……ゆりだった。

「ごめんな……みんな……うっ……うっ……」

タイムセイバーズのメンバーに謝りながら……はやては、泣いていた。

「（待機？……私達が……そんなの……そんなの！）」

しかし、そんな中……アクセルは……

「（住民の避難……まさか！……管理局が出した、避難させる位置と……『あの武装』の有効範囲は……やはり！）……シグナム……」

『どうした？アクセル……いきなり……』

「よく聞け……管理局が何故、住民を避難させてるのか……何故、俺達を待機にしたのか……やっと、わかった。」

『何をだ？』

「管理局は……『アルカンシエル』を使っつもりだ……！」
『っ！』

アルカンシエル……それは……闇の書事件を終わらせた……いわゆる勝利のカギだ……しかし、その範囲は……陸上でつかおうものなら……確実に無人にすることが必須条件なのだ。

『はやてちゃん！本当なの？』

「どういうことや？……管理局は、都市の一部を失ってもええ

んか？」

はやてがなのはの問いに応えると……………

「あの位置…………… ショウと璃杖の家が——！」

「なんやて——！」

すると……………

「……？」「お困りかい？」

「——「海東^{さん}——！」——」

海東大樹がそこにいた。

「じゃあ…………… ちょうど良いかな？」

「ハア？」

「そろそろだよ！」

『えっ？』

一斉に疑問な声を出す。

「特に…………… 数人にとってね。」

現場

「（あれっ？…………… 一人…………… 助け忘れたのかな……………）」

スバルはそう思い、ビルの屋上にウイングロードを使い降りて……………

…………… 青年に声をかけようとしたが……………

「メビウ————ース——！」

「わっ——！」

思わず、目を閉じたスバル…………… 次に目を開けた時には……………

青年の姿はなく…………… ウルトラマンメビウスが巨大生物に対峙していた。

「セアッ!!」

「ギャオーーーーン!!」

「（一発で……………決めるか……………ライジングブレイブ!!）セアッ!ハアーーーー……………セアッ!!」

メビウスは……………ライジングブレイブへと強化された。

「ライジングメビウムブラスト!!」

「ギャオー……………」

メビウスは、先の一撃で巨大生物が動かなくなったのを確認し、地上にいる……………ナナシを倒すために……………青年の姿に変わった。そこへ……………

???「面白そうだな……………俺も混ぜろよ。」

「誰だ?」

「俺は……………牙龍^{ガロウ}……………またの名を……………ゴセイドラグナイトさ。」

「ゴセイドラグナイト……………お前がねえ……………まあ、良さ……………ナナシ共を片付ける!」

「オツケー!」

「「変身!ノチェンジカード……………天装!!」」

- K A M E N R I D E B L U E D E C A D E -

《チェンジ……………ゴセイドラグナイト!》

牙龍はゴセイドラグナイトへ……………青年はブルーディケイドへ変身した。

機動六課……………ブリーフィングルームにて……………

「ジェス?……………うつん……………似てるだけかもしれない。」

現場

「速攻で決めるか……………ハア！……………ドラグメタリックー！」

「こいつで決めるか……………」

- FINAL ATTACK RIDE……………W・W・W・W -

ブルーデイクイドは一気に、Wルナトリガーになった……………

「トリガーフルバーストー！」

二人が戦闘に入って……………わずか、二分の出来事だった。

「さてと……………フォワードー！」

フォワード陣『ハイッ！』

「怪我人及び、被害の調査！」

フォワード陣『了解！』

「シグナムとヴィータは引き続き部隊が来るまでの指揮をとれ！」

「ハッ！／おうっ！」

「高町とテストロッサとセイスは俺と一緒に六課に向かう。」

『えっ！？……………ハイッ！！』

「牙龍もついて来い。」

「もとより、そのつもりだ。」

機動六課兼タイムセイバーズ・会議室

会議室には、引き継ぎが終わった、フォワード陣……………プリキュア

達……魔導師達がいた。

「みんな……さっきの戦闘は、ご苦労様です。……今日は……
……重大発表があります。」

「はやてちゃん……それって……」

「なのはちゃんが予想してる通りや……入ってな。」

「ああ。」

そこには……二人の青年がいた。

「まずは……牙龍君……自己紹介よろしくな。」

「ああ……俺は、牙龍……ほしちりがさう星護牙龍だ。……さっきの戦闘の分
がとれてるなら……俺がゴセイドラグナイトだ。」

「あの人が……カッコイイですねノノノ」

そんな感想を顔を赤らめながら言うセイス。

「そんで……みんなが……特に、ゆりちゃんが待ち望んでた
人や。」

「っ!!（ひょつとして……まさか!!）」

そうその人物は……

「よお！久しぶりだな……レナンジエス・アルマー……今、
戻ったぜ!!」

「はっ!!……あ……ああ……」

「ふう……ただいま、ゆり。」

「うっ……うっ……ジェス……っ!!」

「ごめんな、心配かけて。」

「ううん。よかった、無事で……」

そこに……

「???」あっ！フェイトだ!!フェイト……っ!!」

「???」おっ、おいっ!!」

「???」ふふふっ……」

「えっ!?!……貴女は?」

フェイトが尋ねたら……

「アリシアだよ！アリシア・テストロッサ!!」

「えっ？……姉……さん？」
「うんー！」

「アリ姉、落ち着きなよ。あつと！……ボクはライシャ……
ライシャ・テストロッサ。」

「ひよつとして……マテリアル？」
「そうー！」

と、誇らしげにライシャは言うが……ある人物の言葉で……

……

「アホの子が……何を誇らしげに言うんですか？」

「アホって、言うなーー！」

「見苦しい。」

「あうっ！？」

「……よしよし……アリシア、はしやぎすぎよ。」

「えへへ……ごめんなさい。お母さん。」

最後に来た人物にフェイトだけじゃなくなのほも驚いていた。

「………」

「えっ？」

「久しぶりね、フェイト……それに……あの時の魔法使い。」

「プレシア……さん？」

「母……さん？」

「いらつしゃい、フェイト。」

「うっ……うっ……母さんー！」

「フェイト！」

「生きてたんだね……母さん。」

「実は……虚数空間に落ちた後、ジェスに助けられて……私の病を治したり……アリシアに命を吹き掛けてくれたのも……彼ののおかげよ。」

「そうなんだ……ジェス、ありがとう。」

「別に……助けたかったから……助けたまでだ。」

「……失礼する。」

そんな空気に水を差す者それは……………

「出たな、KY執務官。」

クロノであつた。

「実は……………母さんから……………プレシアさんの罪を無くす代わりに……………機動六課への協力を持ち出したんだが……………あの事件の罪は既に無効だが……………どうする?」

「協力するわ……………アリシアやライシャをちゃんと育てるには……………此処は最適だから。」

「そうか……………それと、フェイト。」

「なに?クロノ。」

「明日からは……………プレシアさんと一緒にすむんだ。」

「えっ?」

クロノの言葉に軽いショックを受けるフェイト。

「プレシアさんが生きてるいま……………ハラウンではなく、フェイト・テストロッサとして、生きる。」

「ありがとう……………『お兄ちゃん』……………」

「そう呼ぶのは……………今日で終わりだぞ……………フェイト。」

「うん!」

「話しは終わりだ。」

クロノはその場から立ち去った。

「よかったね、フェイトちゃん!」

「うん……………母さん、姉さん、ライシャ……………これから……………よろしくね。」

「やったー!フェイトと一緒にだ!」

そんなほのぼのとした……………空気の中……………

「ほんなら……………今日は、パーティーや!」

『ハイ!!』

はやて考案による……………パーティーが執り行われる事になった。

第37話 守護者の帰還／護星の龍騎士の正体（後書き）

ジェス「捻りが……………」

作者「うるさい！」

はやて「次回！第38話 パーティー！！！」

アインハルト「読んでください。」

第38話 パーティー（前書き）

短いかな………

第38話 パーティー

ジェスが別世界から帰還し、新しいメンバーも加わった事で……
部隊長のはやて主催の下……パーティーを開く事となった。

「こんな感じやね。」

厨房ではやてやなのは達がパーティー用の料理を作っていた。…

……もちろん……

「完成だ……津上はどうだ？」

「ほとんど、大丈夫です。」

仮面ライダーカブトの天道総司と仮面ライダーアギトの津上翔一
も手伝っていた。……それに……

「はやてさん……ケーキの方も完成です。」

「お菓子も焼けました。」

プリキュアの南野奏と九条ひかりも手伝っていた。

その頃……

……「此処が、ミッドチルダ……っていつのは、わかるけど……

………いたい………どんな『世界』だ？」

そこへ……

「君は………別世界の住人だね。」

「???「あんたは?」

「私は、鳴滝……………君には…『世界の破壊者』とその仲間と戦って、倒してもらいたい。」

「???「なるほどね……………いいぜ!」

「頼むぞ。」

タイムセイバース・大食堂

「そんじゃ……………これよりパーティーを開始します!」

はやての、この一言でパーティーが始まった。

「まったく……………俺が帰ってきた……………ってだけで……………パーティーをするか?普通。」

「まあ……………八神らしいけどな。」

愚痴をこぼすジェスに返すのは、士だった。

「で……………カードの力は?」

「まだ……………一枚も力が復活しない。」

「一緒に任務をしたほうが良いんじゃないのか?」

「一理あるけどな……………苦手なんだよ……………非殺傷は……………」

「そっか……………」

士の言う通り……………仮面ライダーは敵にダメージを与えて倒すのは得意だが……………なのは達の魔法のように……………『殺傷』から『非殺傷』に切り替える事は出来ない。

「さすがに……………この世界の常識を破壊することは……………士でも難しいのか。」

そこに……………

「お兄様——!!」

「ジェス——!!」

「おわっ!？」

フェニーと氷狐がジェスに飛びついた。

「ぐっ…………お前らな…………」

「はあ…………お兄様の臭いですわ…………」

「ジェス…………寂しかったよ…………」

「…………ごめんな…………」

その後も…………ジェスのことを心配していたメンバーがやってきて、ジェスと話しをしたり、模擬戦の約束等をしていた。

「おいし——!!」

エリオとスバルの二人は天道と津上の料理を本当においしそうに食べていた。

「ん…………やっぱ!奏のケーキは最高!!」

響は、奏のケーキを頬張り。

「ハイ。ハミィ達の分よ…………」

『わーい!!』

「ありがとニャ。奏…………」

奏は、ハミィやメップル達にケーキを渡していた。

そんな時…………

「ゆり…………」

「ジェス…………改めて…………お帰りなさい…………」

「ただいま…………ゆり…………」

「父さん!!」

「お父さーん!」

「ソウハ……ジュハ……」

「お帰りなさい!!」

「ああ……ただいま。」

未来の息子である、ソウハとジュハがジェスの下にやってきた。

「あつ!……そうだ。ゆり!」

「なに?」

「実はな……スペシャルプレゼントがあるんだ。」

「えっ?」

ジェスにプレゼントがあると、言われて……少し驚くゆり。

「来いよ。」

それは……

???「やあ……久しぶりだね。ムーンライト。」

「……コロン……コロン!」

ムーンライトのパートナーの妖精コロンだった。

「コロン……でも……どうして?」

「この時間軸に戻る前に……心の大樹に行つて……コロンの魂を回収して……俺が復活させた。……ちなみに……その時

……少しだけ、その時間のムーンライトに会つたが……デンライナ
ーと一緒にだったから……記憶は……「夢じゃ……なかったのね。」

……えっ?」

「私……昨日、夢を見たの……コロンを誰かが助けてくれる
……そんな夢を。」

「ゆり……」

「ジェス……」

ジェスとゆりは互に見つめ合っていた。……その
様子を見てるのが数名……

「ゆりさん……ついに!」

「さつさと……やっちゃんだよ。」

「二人とも……もうやめようよ。」

「いつきだって……見てるじゃん。」

しかし……後ろで……

「いつき……私よりも……ジェスさんの方が……好きなんで
すか？」

ひかりが……少し、ダークな方向に傾いていた。

「ひっ……ひかり……！……ごっごめん……！……そういつのじゃ……
…」

「いつきなんて……もう知らない……！」

「あっ！待って！……ひかり……！」

走り去るひかりを追いつき。

「なにあれ？」

「さあ？」

すると……

「あなた達……」

「「（ビクウ……）」」

つぼみとえりかの後ろに素晴らしい笑顔のゆりが立っていた。

「「ゆり……さん……」」

「いつから……居たの？」

「えっと……ジェスさんと話す前からです。」

「ちよっ！つぼみ……！」

いつから居たのかを言うつぼみ……それに驚くえりか……
「そう……なら……『O H A N A S H I』が……

必要ね。……ねっ？二人とも。」

「「え……と……その……ごめんなさ……い……！」」
「待ちなさい……！」

つぼみとえりかはゆりの怒りを買ってしまい、ゆりから逃げてい
た。

「やれやれ……」

ジェスは、某角川アニメーションの主人公のよくでる台詞を吐い

ていた。

そんなこんながありながら……パーティーは終了し、天道や津上、フォワード達が後片付けをして、なのはや隊長陣は次の訓練メニューを組んだりして……この日は終わった。

第38話 パーティー（後書き）

ジエス「ゆりが……ちとなのは寄り。」

作者「やりたかったからな。」

士「鳴滝が久々に出たな……て、言うか……誰何だ！あいつは！（鳴滝と会話をしていた……青年のことです。）」

ジエス「確かに……」

作者「それは……次回で……第39話 狙われる戦士……お楽しみに。」

第39話 狙われる戦士（前書き）

狙われる……よりも、狙われた……の方がよかったかな？

第39話 狙われる戦士

パーティーが終了して……………早一週間……………

「……ふう……………ミッドチルダだから、魔導師を手駒に使いたいが……………ん？」

「みなさん！こんな服はどうですか？」

「良いんじゃない。」

「似合ってるよ、うらら。」

遠くから……………その様子を見ていた青年は……………
「……ふつ……………面白そうだな。」

そう言った瞬間にその場から姿を消した。

その頃……………ジエスは……………

「まったく……………模擬戦だけで……………五連戦はないだろ。」

シグナム、フォルカ、アレディ、フェイト、セイスと模擬戦をやっていた。

「大丈夫？ジエス。」

「ああ……大丈夫だ、ゆり。」

「しかし……」

「ん？」

「我ら五人と模擬戦を立て続けに行うとは……」

「言ってる……さてと、パトロールに行ってくるわ。」

「わかったわ。……さて、響……奏……ジュハ……あなた達

は私が模擬戦の相手をするわね。」

「でも……『お母さん』……この後、フェニーさん達とも模擬戦の約束をしてるんだよね。」

「ええ。」

「大丈夫？」

「大丈夫だよ……模擬戦の審判はボクがするから。」

「お願いね、コロン。」

「奏、響……頑張るニヤッ」

「オッケー！」

「私もガンバだ！オー……」

ゆりはジェスがパトロールに行った後……響達やフェニー達と模擬戦を行った。

ジェス達が模擬戦を終えた頃……のぞみやなぎさ達の前に謎の青年が現れていた。

「誰？」

「……君達……可愛いねえ……俺と一緒に来ないか？」

しかし……ひかりが……

「あなたは……闇の世界の住人ですね。」

「ほお……見抜くとは中々やるな……だったら……手加減無しだ……」

- K A M E N R I D E -

「変身っー!!」

- D A R K D I ・ E N D -

闇の住人の青年は仮面ライダーダークディエンドに変身した。

「さあて……お楽しみ。」

- K A I J I N R I D E W O R M J E W E L D O R P A N

T O -

「ハッー!!」

ダークディエンドは、ワーム達とジュエルドーパントを召喚した。

- A T T A C K R I D E D A R K B L A S T -

「可愛い声で鳴いてくれよ……ハアッー!!」

『きゃーーーっ!!』

「へっ……あん？」

ブラストで発生した砂煙が引いた時、のぞみ達の姿はなかった。

「何処だ!？」

すると……

「プリキュア! ファイアーストライク!!」

「プリキュア! サファイアアロー!!」

「マリンシユート!!」

「プロッサム……シャワー!!」

「サンシャイン……フラッシュ!!」

『ブルルル!？………』

「何だ!」

ワーム達がプリキュアの技で倒されていた。

「何だ! お前達は!」

ダークディエンドは、プリキュア達の方を向いてそう言った。

「私達がプリキュアだって……知らないで攻撃して来るなんてね。」

「プリキュア?……魔導師じゃ……ないんだな。」

その時……ダークディエンドは心の中で笑った。

「だつたら……やりなジュエルドーパント！」

ジュエルドーパントはダークディエンドの指示でプリキュアに幾つかのビームを出した。

「回避よー!!」

ホワイトの言葉で回避するが……

『きゃっ!?!』

ルミナス、ミント、マリン、サンシャインが当たってしまった。

「ルミナスー!!」

「ミント!!」

「マリン!サンシャイン!」

ビームに当たってしまった四人の姿はなく……代わりに四つの宝石があった。

「へー……プリキュアの宝石って綺麗だなあ。」

「ルミナス達を返しなさい!!」

しかし……

「おっと……それ以上近づけば……こいつらを……潰す!!」

『っ!!』

「潰されなくなったら……俺に従え!!」

「仕方ないわね……従うわ。」

「へっ……じゃあ、ついてきな!」

ダークディエンドの後ろについて行くプリキュア達……それを遠くで見ていた者達がいた。

「なぎさ達が……」

「ラブ、ジェスさんに報告しよう。」

「うん。せつな。」

フレッシュプリキュアのメンバーだった。……服装はジャージな為ダンスの練習をしていたで、あろうことが想像できる。

また、ラブ達以外にその様子を見ていたグループが……

「????.....気に入らねえな。」

「????「行くのか?」」

「????「ああ.....おめえら!”派手に行くぜ”!」」

「彼らはいったい.....何者なのか?」

「っ!?!.....ルミナス、ミント、マリン、サンシャイン.....」

「四人の波動が途絶えた.....いったい.....何が?」

「そこへ.....」

「順調にいつている様だな。」

「っ!?!.....鳴滝!」

「青きデイケイドよ、彼女達を助けたければ私と奴が指定する場所
所でデイケイドを倒せ!」

「鳴滝は、そう言う.....灰色のカーテンにその姿を消した。」

「土を.....倒せ.....か.....賭けに出るしかないな。」

第39話 狙われる戦士（後書き）

ジェス「今回は次回予告だけだ。……………次回、第40話 悪夢、デ
イケイド対ブルーデイクイド/プリキュア対プリキュア/海賊乱入
……………出来るのか？」

第40話 悪夢！ディケイド対ブルーディケイド／プリキュア対プリキュア／海

やってみたかったタイトルです。

第40話 悪夢！ディケイド対ブルーディケイド／プリキュア対プリキュア／海

ジェスがパトロールから戻ると同時に……ラブ達が駆け寄って来た。

「ジェスさん！……なぎささん達が！」

「知っている………せつな！！闇と響、奏、ダークファイブズを連れて来い！多分、模擬戦所だろうな……ゆりも居るはずだ。」

「わかりました！」

せつなは、闇やダークファイブズ達を呼びに走った。

数十分後………ジェスの部屋にラブ達フレッシュチームとゆり、闇、ダークファイブズ、スイートチームが集まっていた………それと………

「なんで……俺まで………」

士もいた。

「どうしたの？ジェス。」

ゆりがジェスに聞いた。

「ラブ達からの報告と………ある奴からの言い分で………なぎさ達が敵に捕まった可能性がある。」

「でも………なぎさ達だったらすぐに………」

「ルミナス、ミント、マリン、サンシャインが………ある怪人の力で『宝石』に変えられていて人質にとられていたら………どうする？」

『っ！！』

「なるほどな………だいたい、わかった。…それと俺がここにいる理由は何だ？」

「さつき言った、ある奴は……鳴滝だ。……鳴滝はルミナス達を助けたかったら……ディケイドを倒せ……って、言ってな。」

「まったく……鳴滝の野郎!」

「そこで……なぎさ達を連れ去った奴は……恐らく、なぎさ達を人質にするか自分の『手駒』として使うかもしれん。……俺と士が戦闘に入るまではやり達は待機……もしも、なぎさ達が操られていたら……ゆり、響、奏、フレッシュチームは待機……闇とダークファイブズが相手をしろ。」

『わかったわ。／はい。／了解!』

???「僕もいこうか?」

「誰だ?」

「キリヤだよ……『ライジング』?」

「キリヤか……お前もいたのか……それと、薫と満もいるんだろ?」

ジェスの言葉に答える様に、忍者の如く姿を見せる二人。

「咲と舞が……捕まったとなれば……」

「私達は捕まえた奴を許さない!」

咲と舞が捕まったことにより、捕まえた者に怒りを覚える満と薫。

「それで?……場所は?」

士がジェスに問い掛ける。

「クラナガンの郊外にある廃工場だ。」

「ライダー同士の闘いには……うってつけだな。」

「なお……今回の件は……機動六課やタイムセイバーズではなく……俺達個人で対処する……援護は期待するな。」

『わかったわ。／ああ。／はい!／了解!』

クラナガン郊外・廃工場

ジェスと士は鳴滝の指定した場所にいた。

「来てやったぜ！出てこいよ！！」

士が叫んだ。

「来たか、ディケイド。」

「鳴滝……。」

「なぎさ達は何処だ！！」

その時……

「……？」「そいつらなら……」「ここだ！」

「……っ……」

謎の声がする方に顔を向ける二人。

「かれん！！」

「おいっ！」

ジェスがかれんの名を叫んだが……その目はどこか虚ろだった。

「……お前……かれん達に何をした！！」

「……？」「別に……ただ、こいつらを俺の意のままに操ってやったま
でだ。」

「貴様！！」

「抑えろ！！……今は、鳴滝の要望通りにするしかないだろ。」

「わかった………士、手加減は………するなよ。」

「お前もな。」

士とジェスは、鳴滝と謎の青年に見える位置に向かい合う様に立
った。

「……変身！！」

「KAMENRIDEBLUEDECADE」

「KAMENRIDEDECADE」

士はディケイドにジェスはブルーディケイドに変身した。

「行くぞ………ディケイド！！」

「来いよ……ブルーディケイド!」
ついに、ディケイドとブルーディケイドの戦闘が始まった。

廃工場から、少し離れた林の中……………

「始まった様ね……………」

「なぎさ達は?」

《ゆり……………》

(ジエス!?)

《なぎさ達は……………ある男に操られてる。》

(えっ!?)

《作戦通り……………キリヤ、満、薫、ダークファイブズと闇を先行させる。》

「(わかったわ。……………闇……………みんなを連れて先行して。」

「いいのか?」

「ジエスが言ってたわ。」

「わかった……………行くぞ。」

キリヤ達は、闇と共に先行した。

「大丈夫かい? ムーンライト。」

「ええ……………大丈夫よ。」

「なら……………良いけど。」

「ハッ！」

「オラッ！」

ディケイドとブルーディケイドは互いのライドブッカードをソードモードに変えて切り合っていた。

「……ただ見てるのも退屈だな……」

そこへ……

「だったら……私達が相手になるわ。」

闇達に変身した状態で……謎の青年の前に立っていた。

「めんどくさいな……お前ら……相手をしてやれ。」

『……ハイ。』

かれん達はプリキュアになり、ダークプリキュア達に向かって行く。

「……俺もやるか……」

- K A M E N R I D E …… D A R K D I E N D -

「……変身……」

謎の青年はダークディエンドに変身した。

「……へっ……この世界にいるプリキュア共を……俺の配下にしてやる！」

すると……

- ダンッダンッ！ -

「……ぐっ！……誰だ！」

ダークディエンドは銃声のする方を向いた。

「……うるせえな……ちよつど、お前があまってるんだ……相手しろよ。」

五人の男女がダークディエンドに銃の様な物を向けてそう叫んだ。

「何を！？」

その様子を闘いながら見ていた、ディケイドとブルーディケイド。

「何だ？あいつら！」

「一般人は逃げる!!」

それが聞こえた五人の内の一人が……………

「???」悪いな……………こっちは普通じゃないんだよ……………おいっ、やるぞ!!」

その声と同時に、同じ物を取り出す五人。

「???」豪快チエンジ!!」

《ゴッカイジャー!!》

五人はまばゆい光に包まれた。

「(まさか!!)」

ブルーデイクイドは心の中でそう呟いた。

「(いつたい……………何が?)」

二つのグループが戦闘に突入したと同時に少しずつ、ルミナス達が変わえられた宝石に近いていた……………ゆりも心の中でそう呟いた。

「何だ! 貴様ら!!」

ダークデイクイドの睨む先にいたのは……………

「ゴークイレッド!」

「ゴークイブルー!」

「ゴークイイエロー!」

「ゴークイグリーン!」

「ゴークイピンク!」

『海賊戦隊ゴークイジャー!!』

五人はなんと、35番目のスーパー戦隊……………海賊戦隊ゴークイジャーだった。

「派手に行くぜ!!」

第40話 悪夢！ディケイド対ブルーディケイド／プリキュア対プリキュア／海

ジェス「何を……ブレイクしたんだ？」

作者「なにも。」

ジェス「おいっー!!」

士「次回、第41話……奪還プリキュアチーム／海賊戦隊の力……。

」

マーベラス「派手に行くぜー!!」

第41話 奪還プリキュアチーム/海賊戦隊の力(前書き)

ゴークイジャー登場!.....ちなみに、ゴークイジャーの女性陣だけは.....レンジャーキー以外のキーを持っています。

第41話 奪還プリキュアチーム/海賊戦隊の力

『海賊戦隊……ゴークイジャー!!』

ダークディエンドの前に立つ……海賊戦隊ゴークイジャー。

「海賊戦隊ゴークイジャー?」

「ああ!……派手に行くぜ!!」

ゴークイレッドはダークディエンドにゴークイガンを放った。

「ふんっ!!」

ゴークイジャーとダークディエンドは、互いの力をぶつけ合った。
「決めるか?」

ゴークイジャーが必殺技の準備をしようとするが……

「ほざくな!……あの宝石が……」宝石って……このことかしら?」……っ!!」

ダークディエンドは、いつの間にか……宝石をゆりが持っていることに驚いていた。

「てめえ!!」

- ATTACKRIDE DARKBLAST -

「ぶち抜く!!」

「くっ!」

- ATTACKRIDE……GURABITHI WALL -

しかし、ゆりに届く前にバリアで防がれた。

「ふっ……ゆり!!こっちに投げろ!!」

「ええ!!」

ゆりはブルーディケイドとディケイドの方に宝石を投げた。

「土!!」

「ああ!!」

- ATTACKRIDE……CONFINEBLAST……IL

L U S I O N - -

「ハアッ!!」

ディケイドとブルーディケイドの放った弾は、途中でいくつにも分離し……四つは、宝石に向かい……残りの十は、操られているプリキュア達に向かった。

キリヤ対キュアブラック、キュアホワイトSIDE

キリヤとキュアブラック、キュアホワイトの激闘の最中……二つのコンファインブラストの弾がキュアブラックとキュアホワイトの胸のブローチに当たり、二人を光で包んだ。

「あれっ?……私……」

「どうして……こんな場所に……」

キュアブラックとキュアホワイトは正気に戻った。

「なぎささん……ほのか……元に戻っただね。」

「あっ!……キリヤ。」

「キリヤくん!!」

「おっと!!」

キュアブラックがキリヤの名前を呟くだけに対して……キュアホワイトはキリヤの名前を言うと、同時に抱き着いていた。

満、薫対キュアブルーム、キュアイーグレッド

満と薫は、ブライドとウィンディーの力を持つ戦闘服ではなく……最初にブルームやイーグレッドと闘っていた時の戦闘服でブルーム、ウィンディーの相手をしていた。

「（操られているけど……）」

「（何故?本気ではないんだ?）」

すると…………

「精霊の力は……………今は、フラッピとチョッピーでコントロールしているラピ。」

「でも……………長くは続かないチョピー。」

フラッピとチョッピーがそう、満と薫に答えた。

「だったら……………もう少し、頑張つて。」

「咲と舞は……………必ず、元に戻す!!」

二組が戦闘を繰り広げていると……………二つのコンファインプラストがキュアブルームとキュアイーグレッッドの胸のブローチ部分に当たり、光が二人を包んだ。

「あれっ!？」

「私達……………どうして?」

正気に戻った、ブルームとイーグレッッド。

「咲!!」

「舞!!」

「満!？」

「薫さん!？」

満と薫は……………二人が正気に戻ったのが嬉しかったのか……………満はブルームに、薫はイーグレッッドに抱き着いていた。

ダークファイブズ対プリキュア5チーム

ダークファイブズは、ダークドリームがキュアドリーム、ダークルージュがキュアルージュ、ダークレモネードがキュアレモネード、ダークミントがミルキィローズ、ダークアクアがキュアアクアをそれぞれ担当して戦闘をしていた。

「くっ!?!……………どうする?技でも当てる?」

「ルージュ！！そんなことは、絶対にするな！！」
「ちっ！」

ダークルージュの問いにダークアクアが答え……ダークルージュは舌打ちしていた。

「だったら！……ダークプリズムチェーン！！」

ダークレモネードの放った、ダークプリズムチェーンにより……
一カ所に集められたプリキュア5チーム……それと、同時に……
五つのコンファインブラストがそれぞれのプリキュアのブローチ
やバラの部分に当たり、光が五人を包み込んだ。

「あれっ？」

「私達……」

「どうしたんでしょうか？」

ドリームとルージュとレモネードがそう言ってるが……

「なんで縛られてんのよ！外しなさいよ！！」

ローズがそう叫んでいた。

「ダークレモネード！もういいわ！」

「オッケー！」

キュアアクアの一言でチェーンを解くダークレモネード。

「あなたねえ！！」

「ああしないと、とまんないじゃんか！！」

「なんですって！！」

「何よ？やる気！？」

喧嘩腰なローズとダークレモネード……しかし……

「ローズ？」

「ダークレモネード？」

「（ビクッ！！）」

「喧嘩は……だめでしょ？」

「ハイ……すみません。」

キュアアクアとキュアレモネードに宥められる二人。

ダークプリキュア対キュアブロッサム

ダークプリキュアとキュアブロッサムは空中戦を繰り広げていた。

「ハアーーーーッ!!」

「……………」

声を出しているダークプリキュアに対し……………操られているせいか、キュアブロッサムは無言だった。

「（くっ!?……………何故だ?この動き……………まるで、魂が乗ってない。）」

「バツ!!」

空中戦の途中で距離をとるダークプリキュアとブロッサム……………

「……………」

ブロッサムは無言のまま、ブロッサムタクトを手に持った。

「っ!?（まさか……………フォルテウェーブを!!）」

しかし……………ブロッサムがタクトに手を触れる前に……………コンファインブラストが胸のブローチに当たり、光がブロッサムを包んだ。

「よしっ!!」

光が消えて……………ブロッサムは……………地上に向かって、落ちていた。

「あの!バカっ!!」

ダークプリキュアは自分が出せる最大速度でブロッサムの真下に回り込んだ。

「（地上との距離を考えたら……………衝撃は免れぬか。）」
そして……………

「ハッ!!」

ダークプリキュアは、ブロッサムをキャッチして……………地上すれ

すれのところで止まった。

「ふう……………ギリギリだったな。」

操られていたプリキュア達を解放したと、同時に……………四つの宝石に四つのコンファインブラストの弾が当たり……………宝石を、ルミナス、ミント、マリン、サンシャインに戻した。

ゴーカイジャー対ダークディエンド

ゴーカイジャーとダークディエンドは……………お互いの銃で撃ち合っていた。

「ちっ……………ならば！」

- K A I J I N R I D E …… D O R U B A D O R …… Z A K E N N
A R -

「行つてこいっ!!」

ダークディエンドは……………『宇宙海賊バルバン』の『サンバツシユ』の部下の『ドルバドール』とザケンナーを召喚した。

「おもしれえ!……………ゴーカイイエローとゴーカイピンクはあのか物を……………俺達はいつだ。」

「ハイ!」

「オッケー!」

「「おう!」」

すると……………ゴーカイジャーはそれぞれ、キーを取り出した。

『豪快チェンジ!!』

《ギンガマン!》

《マックスハート!》

ゴークイレッド、ゴークイブルー、ゴークイグリーンはそれぞれ……ギンガレッド、ギンガブルー、ギンガグリーンに豪快チェンジし、ゴークイエローとゴークイピンクは、キュアブラックとキュアホワイトに豪快チェンジしていた。

「なにいつ!？」

ダークディエンドはゴークイジャーが別の姿になった事に驚いていた。そして……それを遠くから見ていたメンバーも……

『なんで!?プリキュアになれるの!?!』

主にプリキュアメンバーズが叫んでいた。ジェスは……

「他の……戦隊に……」

士に至っては……

「まったく……似たような力を持ちやがって……」

不満を吐いていた。

「くそっ!……やれっ!」

ダークディエンドは、怪人に指示を出したが……

「へっ……行くぜ!」

ゴークイジャー対ドルバドール&ザケンナー

「『星獣剣!』」

「来やがれ!」

「『ハアッ!』」

「フンッ!」

「ザケンナー!」

「『ハアッ!』」

「ザケン！！？」

「ぐわっ！！」

ザケンナーとドルバドーの方が押されていた。

「トドメだ！」

ゴーカイジャーはゴーカイジャーのレンジャーキーをゴーカイガンにセットした。

《ファ～イナル…ウェ～ブ》

「ゴーカイブラスト！」 『ハアッ！！』

「ぐわあっ！」

「ザケンナー……！！？」

「ドオン！！」

「よっしゃ！」

それを見ていたプリキュア達は……………

「すごい……………」

キュアルージュがそう呟いた。

「みなさん……………ごめんなさい！！」

ルミナスがキュアブラック達の方を向いて……………謝りだした。

「私も……………迷惑をかけたみたいだし……………」

「私達も……………」

ミントとマリン、サンシャインも謝りだした。

「なーに言ってるの。」

「こっちは、仲間が人質にとられていたんだから。」

「ああいこですよ。」

そこへ……………

「お母さーーん！」

「つぼみ！」

「えりか！」

ジュハと響、奏が走って、プリキュア達のところに合流した。さらに……

「うまくいったな……。」

「ああ。」

ディケイドとブルーディケイド……さらには……

「おいっ、お前ら……怪我は無いか？」

ゴークカイジャーもやって来た……だが、ゴークカイジャーは、ダークディエンドが召喚したドルバドーが消えていない事に気づいてなかった。

第41話 奪還プリキュアチーム/海賊戦隊の力(後書き)

ジェス「なぎさ達を取り戻し、あとはダークディエンドだけだと思
つたら……。」

ゆり「ダークディエンドの召喚した怪人が巨大化してしまった。」

ジェス「次回、第42話……ダークディエンドの最後/海賊合体！

！」

ゆり「お楽しみに。」

第42話 ダークディエンドの最後／海賊合体!!（前書き）

久々に……長いかも。

第42話 ダークディエンドの最後／海賊合体！！

プリキュア達を解放し、ダークディエンドの前に並ぶプリキュア
やライダー達。

「響、奏、ジュハ……………変身しろ！ゆりも！！」

「はいっ！！」

「よし…やるぞー！」

「行くわよ！」

「ムーンライト！プリキュアの種を！！」

「ありがとう、コロン。」

「ドリー！」

「レリー！」

コロンがゆりにプリキュアの種を渡すと……………響と奏は、変身
に必要なフェアリートーンを呼んだ。

『ドド！』

『レレ！』

そこへ……………

「ジュハ！」

「お兄ちゃん！？」

「大事なもん……………忘れてんぞー！」

ジュハのところに来たソウハの手には……………NEWムーンライト
になるためのプリキュアの種があった。

「あつ！？……………ありがとう、お兄ちゃん♪」

「うわっ！……………抱き着くなよ。」

「えへへ♪」

「行くわよ……………みんな！！」

「はいっ！！」

ゆりの号令に即応する三人。

「俺も……………今回は、ディケイド以外の力で！！」

ソウハはロストドライバーを身に着けた。

「私達も！」

「『オツケー！』」

ラブ達もリンクルンを取り出した。

「『プリキュア！オーブン・マイハート！』」

「『レッツプレイ！プリキュアモジュレーション！』」

- DRAGON -

「変身！」

- DRAGON -

『チェンジ！プリキュア……ビートアップ！』

ゆりとジユハは銀と紫が混ざった光に包まれ、響と奏は……それぞれ、マゼンタのリボンと白のリボンで全身を包み……プリキュアに変身し、ソウハは……ガイアウィスパーと共に発生した、赤や青などの光の粒子をメタリックスーツに変換させながら……仮面ライダーに変身した、ラブ達は……ピンク、蒼、黄色、赤の光に包まれ、プリキュアに変身した。

「ぐっ……なにい！？」

ダークディエンドの前には……プリキュアやライダー達が並んでいた。

「貴様ら……… いったい、なんなんだ！？」

ダークディエンドがそう叫んだ。

「教えてやるよ！……… 俺は……世界の守護者……仮面ライダーブルーディケイドだ！……」

「俺は……通りすがりの……仮面ライダーだ！！覚えとけっ！！」

「僕は……未来の守護者……そして、ガイアメモリの戦士……仮面ライダードラゴンだ！！」

ライダー達の名乗りと共に、背後でそれぞれのライダーのメインカラーの爆発が起きた。

「こっちも……… 再度やるか……… ゴーカイレッド！」

「ゴーカイブルー！」

「ゴーカイイエロー！」

「ゴーカイグリーン！」

「ゴーカイピンク！」

『海賊戦隊……ゴーカイジャー……！』

ゴーカイジャーも再度名乗りをした。（ゴーカイジャーの背後も爆発が発生。）

「光の使者……キュアブラック！」

「光の使者……キュアホワイト！」

「輝く生命……シャイニールミナス……！」

「輝く金の花！キュアブルーム……！」

「煌めく銀の翼！キュアイーグレット……！」

「大いなる希望の力……キュアドリーム……！」

「情熱の赤い炎……キュアルージュ……！」

「はじけるレモンの香り……キュアレモネード……！」

「やすらぎの緑の大地……キュアミント……！」

「知性の青き泉……キュアアクア……！」

「青い薔薇は秘密の印……ミルキィローズ……！」

「ピンクのハートは愛ある印……もぎたてフレッシュ！キュアピ
ーチ……！」

「ブルーのハートは勇気の印……つみたてフレッシュ！キュアベ
リー……！」

「イエローハートは祈りの印……とれたてフレッシュ！キュアパ
イン……！」

「真つ赤なハートは幸せの証……熟れたてフレッシュ！キュアパ
ッション……！」

「大地に咲く、一輪の花……キュアブロッサム……！」

「海風に揺れる、一輪の花……キュアマリン……！」

「陽の光浴びる、一輪の花……キュアサンシャイン……！」

「月光に冴える、一輪の花……キュアムーンライト……！」

「月光に冴え続く、新しいき一輪の花……キュアNEWムーンラ

イトー!!」

『プリキュアオールスターズ!!』』

「闇の希望……ダークドリーム!」

「闇の炎……ダークルージュ!」

「闇の香り……ダークレモネード!」

「闇のやすらぎ……ダークミント!」

「闇の泉……ダークアクア!」

「闇を力とする者……ダークプリキュア!!」

『ダークプリキュアチーム!』

プリキュア達の場合は……爆発は発生せずに、各プリキュアからメインカラーの光がオーラのように発生していた。

「コロンは……こっちに。」

「シフレやコフレも!」

「あなた達は……私達が護るから。」

シフレ達は今回ばかりは……戦闘には、参加せずに応援に努めることとなった。

「ちい!」

すると……ザケンナーとドルバドーを倒した筈の砂煙の中から……ドルバドーが出てきた。

「なっ!?!」

「倒れてなかったのか。」

驚きを隠せない……ゴークイジャー……すると、ドルバドーは右手に持っていた『ボトル』の栓を開けた。

「せめて最後の御奉公を……バルバンエクス!!」

『バルバンの魔人は、バルバンエクスを飲むことによって、巨大化する。しかし……それは、自らの命をも縮める……まさに、最後の手段なのだ。』↑某アニメのV様の声で（笑）

プリキュア達は……この状況に驚いていた。

「巨大化した!?!」

「あんな大きいのは……」

「こっちは……あまり慣れてないし……。」
すると……

「しょうがねえな。」

そう呟くと、モバイレーツを操作した。

《ゴゝカイガレオン!》 モバイレーツの電子音声と共に……ゴ
ーカイジャーの船……ゴゝカイガレオンがその姿を現した。

『ハッ!』

ゴゝカイジャーは、ゴゝカイガレオンから降りてきたロープを持
ち、ゴゝカイガレオンに乗り込んだ。

「お父さん……あれ、なに?」

NEWムーンライトがブルーディケイドに聞いた。

「多分……あれは……」

ゴゝカイジャーがゴゝカイガレオンに乗り込んだら……ゴゝカイ
ガレオンの中から、『ゴゝカイジェット』、『ゴゝカイレーサー』、
『ゴゝカイトレーラー』、『ゴゝカイマリン』が出てきた。

「行くぜ。」

『海賊合体!』

ゴゝカイジャーの掛け声と共に……変形を始める各マシン。

「マジで……?」

「ありえない……。」

五つのゴゝカイマシンが合体し……ロボットになった……その名
も……

『完成!ゴゝカイオー!』

それを見ていた……プリキュア達は……

『ゴゝ……カイ……オー……』

ゴゝカイオーの名前を呟きながら……その姿を見ていた。

「ボサツとすんな!」

「俺達の本気を……奴に見せるぞ!」

- FINAL KAMEN RIDER……DECADE -

- FINAL KAMEN RIDER……BLUE DECADE -

ディケイドとブルーディケイドは、コンプリートフォームに強化変身した。

「お前らの分だ。」

- FINALLCURESRIDE... ALLPRECURE -

その瞬間……メロディ、リズムを除いたプリキュア達が光り輝き……ツールなしで、『スーパープリキュア』に変わっていた。

「凄い……。」

「これが……スーパープリキュア……。」

メロディとリズムは、他のプリキュアを見ながら呟いた。

「まあ……時間制限は無いが……なにぶん、力のコンプリートがまだ不十分で……パワーコンプリートは、俺がやっている。」

「「うそおっ!?!」」

「ホント。」

メロディとリズムの二人が驚いた後に……全員が横に並んだ。

ゴーカイオー対ドルバドー

「さつさと、決めるか。」

だが……

「そうは、いかん! はあ!」

ドルバドーは自身の角から銃撃を繰り出した。

『うわあ!』

「まだだぜ!」

その時……六色のオーロラが発生し、ドルバドーの攻撃を防いだ。

「なに!?!」

「なんだ?」

オーロラの中から現れた者は……………
挿入曲 星獣戦隊ギンガマン

赤いライオン、緑の翼龍、青いゴリラ、黄色い狐、ピンクの猫、
黒い牛……それと六人の戦士達。

「なんだ？……………お前ら……………」

ダークディエンドがそういった。

???「みんな……………行くぞ！！」

『おうっ！！』

六人の内、五人は……………両手を頭上で合わせて、胸元に持ってきて、
一人は……………待刀していた剣を抜き、剣先を地面に向けた。

「あいつら……………まさか！！」

ブルーディケイドCは、六人と六体の獣を見て……………彼らが何なの
か、予想した。

『ギンガ転生！！！！』

「騎士転生！！」

『ハッ！！！！』

すると……………五人が、赤、青、緑、黄色、ピンクの戦士に……………
……一人が黒い騎士の姿に変わった…………………それを見た、ドルバドー
やゴーカイジャー、プリキュア達は……………

「貴様ら！！」

「なんだ？」

『変わった……………』

それぞれ呟いたり、叫んでいた。

「てめえら……………何者だ！！」

ダークディエンドがそう叫んだ。

「ギンガレッド！！……………リョウマ！！」

「ギンガグリーン！！……………ハヤテ！！」

「ギンガブルー！！……………ゴウキ！！」

「ギンガイエロー！……ヒカル！」

「ギンガピンク！……サヤ！」

「黒騎士……ヒュウガ！」

「銀河を貫く……伝説の刃………星獣戦隊……！」

『ギンガマン……！』

『ギンガマン……それは、選ばれし者にのみ与えられる……名誉ある、銀河戦士の称号である。』

「ギンガマンだど!?」

驚愕の声を出す、ダークディエンド。

「バルバンの魔人は、俺達に任せて……君達は、あいつを……ハアツ……！」

「いわれずとも！」

ギンガレットにそう返すブルーディケイドC。

「てめえら……今度こそ粉々にしてやる！」

ドルバドーがゴーカイジャーとギンガマンと一緒に来た獣達にせまる。

「そうは、させない！！大転生！銀星獣……！」

ギンガマンは、自分達のパートナーの『星獣』を……『自在剣キバ』の力で『銀星獣』に大転生させた。

「星獣合体！ギンガイオー……！」

「騎獣合体……！」

ギンガマンは銀星獣達を合体させ、黒騎士は自身の体を黒い牛……『ゴウタウラス』の額からでる光を浴びて大きくし……ゴウタウラスと合身した。

「合身獣士！ブルタウラス……！」

「超装甲！ギンガイオー……！」

ギンガマンは……ギンガイオーに合体を終えた後に……自分達の身に纏っている『銀河の光』の力で……ギンガイオーを『超装甲ギ

ンガイオー』に強化させた。

「こっちは、これだ!!」

『レンジャーキー!セツト!!』

《ガ〱オライオン!》

すると……ゴーカイオーの発する音色に導かれ……もう一体の赤き獅子…ガオライオンが降り立ち……ゴーカイオーと合体……その名も!

『完成!ガオゴーカイオー!!』

さらには……

『レンジャーキー!セツト!』

すると……ガオゴーカイオーの胸にガオライオンの顔、両腕にガオライオンの後ろ足が移動し……ゴーカイオーの頭にある兜が変わり……ガオライオンの口や足の部分が開き……『火』、『天』、『土』、『水』、『木』の五つの文字が出てきた。

『完成!シンケンゴーカイオー!!』

ガオゴーカイオーはシンケンゴーカイオーへその姿を変えた。

「みんな……一気に行くぞ!!」

『おう!!』

「このやる……!!」

ドルバドーがシンケンゴーカイオー達に迫る……しかし……

「野牛鋭断!!」

「ぐおっ!?!」

ブルタウラスの野牛鋭断がドルバドーに直撃!

「今だ!!」

『烈火大斬刀!!』

シンケンゴーカイオーは……ガオライオンの胴体部分が変形した

……『烈火大斬刀』を手に持った。

「行くぞ!銀河大獣王斬り!!」

『Let's Go!ゴーカイ侍斬り!!』

「ぐわぁ……」

超装甲ギンガイオーの『銀河大獣王斬り』と……シンケンゴーカイオーの『ゴークイ侍斬り』を受け……ドルバドーは爆発した。

Wコンプリートデイクイド&プリキュアオールスターズ
対ダークデイエンド

「あとは……お前だけだー!!」

「くっ!？」

- FINAL ATTACK RIDE……DA・DA・DA・DA
RKDIEND -

「こうなりやあ……全員、ぶっ飛ばすー!!」

ダークデイエンドは……ダークディメンションシートをプリキ
ュア達に向けて放った……しかし……

- FINAL ATTACK RIDE……DI・DI・DI・DIE
ND -

- TRIGGER MAXIMUM DRIVE -

「ハッ!」

「『トリガーフルバースト!!』」

真横から来た……ディメンションシートでダークディメンシ
ョンシートが相殺され……さらには、ホーミング弾でダークディ
エンドライバーとホルダーに入っていたライドカードがダークディ
エンドの回りに落ちた。

「レモネードー!!」

「『ダブルプリズムチェーン!!』」

「なっ!？」

二人のレモネードのチェーンに捕まり……身動きのとれないダ
ークデイエンド。

「ジェス！」

「士さん！」

ジェスは……ブルーディケイドのマークを中心にプリキュアのマークが並んでいるカードを……土は自身のファイナルアタックライドのカードを手に持った。

「行くぜ？……土。」

「ああ。」

- FINAL ATTACK RIDE…… - FINAL CURES
ATTACK FORM RIDE…… -

「奴を空中に投げるー！」

- DE・DE・DE・DECADE -

- BU・BU・BU・BLUEDECADE -

「『せーのっ！ー！』」

二人のレモネードがダークディエンドを空中に投げあげると、同時に……ディケイドマークのディメンションカードと……プリキュア達のオーラでできた……オーラディメンションカードがダークディエンド目掛けて……並んでいく。

『ハアーーーーー！ーッ！ー！』

「ぐわっ！？」

ダークディエンドにディケイドCの強化ディメンションキック（別名ディケイドアンリミテッド）とブルーディケイドCのキュアズディメンションキックが直撃し……二人のディケイドは着地し、ダークディエンドは地面に落ち、変身が解かれていた。

「やったか？」

「……………」

土の問いには答えず……ジェスは、ダークディエンドの変身者に近づいていった。

「ぐっ……!?!」

「ダークディエンドの変身者は……体を起こしていた。」

「俺は……」

「お前は負けたんだ……俺達に……」

「ジェスがダークディエンドの変身者に声をかけた。」

「そうか……」

「何処から来た。」

「闇の世界……いや、『ダークライダーの世界』その『闇の世界』だ。」

「なるほどな……」

「そこへ……」

「???」「セイ」。

「……『セキ』か?」

「『セキ』と言われた青年が……ジェスを『セイ』と、呼びながら……近づいて来た。」

「どうした?」

「閻魔の爺さんに言われてな……そいつを引き取りに来た。」

「わかった。……ドライバーはこっちで処分する。……こい

つは、任せる。」

「ああ。」

その間……土達がジェスを待っていると……

「やあ、土。……今回は、面白い奴が……相手だった様だけど?」

海東大樹が翔太郎を伴い歩いてきた。

「海東……… 今回ばかりは、助かった。」

「なに……… 僕とは正反対の考えの持ち主だったからね………
手伝って当然さ。」

「しかし……… よく、場所がわかったな。」

今度は……… 翔太郎が………

「フィリップが……… ライダー同士の戦闘に反応する装置を……… シヤリオや我夢と一緒に製作して、テストをしたら……… 偶然にも………
… 此処の反応がきてな。」

「そこで……… 僕と半熟探偵君が此処に来たのさ……… しかも、ベ
ストタイミングで。」

しかし……… 翔太郎が……… ある単語に反応した。

「つておい！……… 半熟探偵つて……… 『ハーフボイルド』つて意味
だろ！」

「分かりきったことに……… 反論しないでもらいたい。」

そこへ………

「翔太郎は、完成されたハーフボイルドだろ？」

ジェスが歩いてきた。

「終わったのか？」

「まあな……… あとは、このドライバーの破壊だ。」

ジェスの手には、ダークディエンドドライバーとダークディエンド
のカード、その他のライドカードがあった。

「カードの方は……… 僕が貰うよ……… ダークディエンド以外
のカードは。」

「わかった。」

ジェスは……… 海東にダークディエンド以外のライドカードを渡し
た。

「ドライバーの破壊は……… ソウハ、お前がしろ。」

「うん。」

- DRAGON MAXIMUM DRIVE -

「父さん………」

「投げるぞ。」

「ドラゴン……バーストフレア！」

変身を解除してなかった仮面ライダードラゴンの技……『ドラゴンバーストフレア』という、砲撃技でダークディエンドライバーは粉々に砕け、ダークディエンドのカードも灰となった。

「これで……完了だ。」

そこへ……

「よう！」

「誰だ？」

「俺は……マーベラス。」

「それで……何の用だ。」

「いや……『未来のあんた』に……響と奏が……モジューレの次に大切な物を忘れてたから……お前に協力するついでに持って来たんだ。」

マーベラスの手には……ゴークイジャーの変身アイテム、モバイレーツが二つ……あった。

「『ギクウツ』……」

あきらかに……変な声を出す二人。

「別に良いじゃん！今回は、プリキュアの力だけでいったて……！」

「響……落ち着いて。」

そんな二人とマーベラスをよそに……

「ソウハ……あれって……」

「未来の世界の父さんが作った物……何だけど……多分、今から二、三年先だと思う。」

「シヨドーフォンの次は……モバイレーツかよ。」

そんなことを呟くジエス。

「そういや……あんた達はどうする？」

ジエスが……リヨウマに問い掛ける。

「星獣達は……森や自然の中で結界を張れば大丈夫だと思う……それに、俺達は……君を手伝うために来たんだ。」

「オッケー……案内するよ……タイムセイバーズの司令部へ……
マーベラス達もだからな。」
「は！？……俺は行かね……行くよね？マーベラス。（涙目＋
上目遣いの響）」……やっぱ、行くわ。」
『（弱っ！！）』

全員（響とマーベラス以外）見事な心の声のハモリだった。

第42話 ダークディエンドの最後／海賊合体！！（後書き）

ジェス「おいつー!!」

作者「んあ？」

ジェス「Wディケイドの戦闘シーンよりも……ゴークイジャー&mp;ギンガマンの戦闘に力を入れただろ！」

作者「さあな。」

ジェス「さりげなく……新キャラの『セキ』と、新ライダーも出てるし……。」

作者「それよりも……一つ……気にならんか？」

ジェス「そういや……ドルバドーが……まさか!!」

作者「その通り！自分の意思で巨大化させてみた。」

ジェス「怪人ライドで出したくせに……」

作者「怪人ライド系は……時たま、自分の意思を持てる設定にしてみた。」

ジェス「ディエンド系のライドは……海東は自我が無いけど……

…兄貴のレッドディエンドのライドは自我があるけど……」

作者「レッドディエンドのライドは最初から……自我持ちだ。」

ジェス「ふーん……で、次回は？」

作者「次回、第43話……魔導師と魔法^{アース}の戦士の邂逅。」

ジェス「魔力ランクは……厳しいだろ。」

作者「確かに……。」

第43話 魔導師と魔法（アース）の戦士の邂逅（前書き）

魔導師と魔法^{アース}の戦士の邂逅と言っても………実質、あんまり………
…タイトルに合わない感じが。

第43話 魔導師と魔法（アース）の戦士の邂逅

ダークディエンド戦を終えたジェス達は……リヨウマ達とマーベラス達を伴い部隊長室に入った。

「八神……いるか？」

「ん？……どないしたん。」

「ジェス君？」

「どうしたの？」

はやて、なのは、フェイトの三人が仲良くティータイム中だった。
「な」に……紹介したい奴らがいるからな。……入れ！」

ジェスに言われ、部隊長室に入る……リヨウマ達。

『失礼します！』

「じゃまするぜ。」

すると、関西人の血が流れるはやてが……

「じゃまするんやったら、帰ってな。」

「おう。」

帰ろうとするマーベラス。

「帰んなー！」

「うおっ！？」

しかし、ジェスに止められる。

「いや……あんた、ノリは合格やね。」

「はやて（ちゃん）……」

そんな、はやてを見て……呆れた声を出す……なのはとフェイト。

数分後……

「最初は……自己紹介やね。うちは、八神はやて……ここ、タ

「イムセイバースと一緒にある……機動六課の部隊長を勤めてます。」

「私は、高町なのは……スターズ分隊の隊長をやってるの。」

「私は、フェイト・テストロッサ……ライトニング分隊の隊長です。」

「はやて達が自己紹介を終えると……」

「君が部隊長か……俺は、リヨウマ。よろしく。」

「俺は、ハヤテだ。……よろしく。」

「俺は、ゴウキ。よろしく。」

「俺は……ヒカル。まっ、よろしくな。」

「私は、サヤ……よろしくね。」

「俺は、ヒュウガ……リヨウマの兄だ。よろしく。」

「俺は、マーベラス。」

「ジョーだ。」

「私は、ルカ。」

「僕は、ドン・ドッコイヤー……みんなは、ハカセって呼んでるんだ。」

「私は……アーム・ド・ファミーユと申します。」

「リヨウマ達とマーベラス達が自己紹介をしたが……ジェスがりヨウマ達にある提案をした。」

「なあ、リヨウマ……どうせなら、お前達の『力』……機動六課のメンバーに見せてやれよ。」

「わかった。」

「ジェスの提案をリヨウマは快く引き受けた。」

「八神……機動六課のメンバーを訓練場に集める。」

「了解や。」

数十分後……機動六課・訓練場

「兄さん……… いったい何？もう少し寝たいんだけど。」

少し不機嫌なティアナ。

「なんなんだろう。」

「珍しく、大人しいね……スバル。」

ナカジマ姉妹。

「キュク」……… キュツ

「フリード……… 眠そうだね。」

「うん……… ふあ」……… 寝る前に……… フリードと新しい魔法を

考えてたから、私もフリードも……… 寝不足で………

眠たそうにしている……… キャロとフリードを心配する……… エリオ。

「はやてとなのはが集まれって言ってたけど………」

「テストロッサも言ってたが……… シャマルとザフィーラを呼んでなさそうだな。」

シグナムとヴィータ……… その他大勢の機動六課隊員の他に………

………

「何をするんだ？」

「わからない。」

「アラタでもわからないのか。」

志葉家十八代目……… 志葉薫姫、志葉家十九代目……… 志葉文瑠、護星天使のアラタもいた。

「そんじゃ……… 始めようか？」

- KAMENRIDE……… LIOTROOPS -

「ざっと、五十体、行ってみよう。」

ジェスは、全体的に……… 青い（シアン色ではない）ディエンドライバーで、ライオトルーパーを五十体……… 召喚した。

「《ジェス君………》」

「《ん？……… なんだ、高町。》」

「《一般人に……ライダーはダメだよ。》」

なのはは、念話でジェスに……注意をしたが、ジェスからしてみれば、それは……なのはの勘違いだった。

「《あのな……俺の知り合いとかは……普通じゃないんだからな……まあ、見てろ。》」

「《??…わかつたの。》」

なのはは、念話を終えて……フォワード陣やフェイトと一緒にモニターを見ていた。

「みんな……行くぞ！」

『おうっ!!』

リヨウマ達とマーベラス達はそれぞれ、構えた。

『ギンガ転生!!』

「騎士転生!!」

『ハッ!!』

『ゴーカイチェンジ!!』

《ゴゝカイジャー!》

リヨウマ達とマーベラス達はその姿を……戦士の姿に変えた。

『星獣戦隊……ギンガマン!!』

『ギンガマン!……それは、選ばれし者のみに与えられる……名

誉ある、銀河戦士の称号である。』

リヨウマ達は……ギンガマンに……

『海賊戦隊……ゴーカイジャー!!』

マーベラス達は……ゴーカイジャーへ……

訓練場モニタールーム

『カッコイイー！！』 ↑スバルとエリオ

「……………あつー！」

「姫様？」

「母上？」

「（かつ……………彼らが……………顔を合わせずらい。）」

薫姫は、そう……………考えてた。

訓練場

「一チーム……………二十五体ずつでいいだろ？」

「わかった。」

ギンガレッドとゴーカイレッドの話が終わると……………ライオトルパーは一斉に動き出した。

「派手に行くぜ！」

「銀河炸裂！」

ギンガレッドとゴーカイレッドの合図で他のメンバーも動き出す。

ギンガマンSIDE

ライオトルパーがギンガマンに迫るが……………

「兄さん！」

「行くぞ、リヨウマ！」

ギンガレッドと黒騎士が並んだ。

『炎のたてがみー！』

すると、二人は……………手の平から炎を放った。

「俺達も続くぞ！…………ハアッ！…星獣剣…疾風一刃！！」

「星獣剣！激流一刀！！」

「星獣剣！雷一掃！！」

「星獣剣！花一心！！」

二人の攻撃を基点とし…………自分達の剣技を繰り出す…………そして…………

「行くぞ…………星獣剣！…………ハアーーーー…………炎一閃！！ハアッ！！」

「ハッ！…………ブルライアット…………黒の一撃！！」

「ドォーン！！」

「よしっ！！」

ゴークカイジャー SIDE

残りのライオトルーパーがゴークカイジャーに迫る。

「ライダーには…………ライダーだ。…………『ライダーキー』で行くぞ。」

ゴークイレッドの一声で一斉にライダーキーをバックルから取り出すゴークカイジャー。

『ゴークイチエンジンジ！！』

《ファーーーーズ！！》

《カーーーーザ！！》

《デルタ！！》

《サーーーーガ！！》

《オーーーーガ！！》

ゴークカイジャーのメンバーは…………レッドがファイズ、ブルーがサイガ、グリーンがカイザ、イエローがオーガ、ピンクがデルタ…………いわゆる、ファイズライダーズに変わった。

「（戦隊ではない！？）」

「ライダーキー……………か。」

薫姫とジェスは…………それぞれ、そう思った。

『ハッ!』

ファイズライダーズにチェンジしたゴーカイジャーの攻撃でライオトルーパーは消滅した。

「なかなかやるな……丈瑠、アラタ……走輔とジャン、明石に連絡を入れてある……三人が来たら……ゴーカイジャーの実力テストの第三弾を行え。」

「第三弾?……じゃあ、第二弾は?」

「俺がやる……ライダーキーの力を『引き出してる』かをチェックしてやる。」

ジェスとアラタの話が終わると……ジェスは、訓練場に行った。

「呆氣ないな。」

「ゴーカイレッドがそう呟くと……」

「実力テストは……まだ終わってないぞ……ゴーカイジャー。」

「何?」

「ギンガマンは下がれ。」

「わかった。」

ジェスに言われ、ギンガマンは訓練場を後にする。

「行くぜ?……変身!」

- KAMENRIDE……BLUEDECADE -

「面白れえ……行くぜ!」

『ゴーカイチェンジ!』

《カゝブト!》

《ガゝタツク!》

《ザゝビー!》

《キゝツクホッパー!》

《パゝンチホッパー!》

ジェスは……ブルーディケイドへ、ゴーカイジャーはマスクドラ

イダーズへ変身した。

「ふう……仕方ない。」

- ATTACKRIDE……ILLUSION -

ブルーディケイドはイリュージョンの効果で五人に分かれた。

「何!？」

さらに……

『変身!』

- KAMENRIDE……DOREIKU……SASWORD……KE
TARUSU……HERAKURESU……CARCASU -

五人のブルーディケイドは……ドレイク、サード、ケタルス、
ヘラクレス、コーカサスへ変身した。

「……行くぞ!」

しかし……

『クロックアップ!』

「ハイパークロックアップ!」

- CLOCK - UP -

- HYPERCLOCK - UP -

ブルーディケイドの変身したマスクドライダーズは、ライドカー
ド無しでクロックアップとハイパークロックアップを発動させた。

……そして、数秒後……

- CLOCK - OVER -

- HYPERCLOCK - OVER -

『うわあっ!?!』

瞬時にして、ゴーカイジャーの五人はマスクドライダーズから元
のゴーカイジャーに戻っていた。

「拍子抜けだな……その程度か?」

「なるお……」

ブルーディケイドは一人に戻って、ゴーカイレッドにそういった。

……そこへ……

- ド、ドンッ! -

和太鼓の音が鳴り響き……ジェスの後方に……ゴセイジャーのマーク、シンケンジャーのマーク、ゴーオンジャーのマーク、ゲキレンジャーのマーク、ボウケンジャーのマークを描いた幕が張られ……丈瑠を中心に……アラタ、明石が右……走輔とジャンが左に並んでいた。

「次は……俺達だ。」

「あゝっ？」

ゴーカイレッドは、丈瑠の一言に疑問を持った。

「行くぞ……ショドーフォン!!」

「テンソウダー!!」

「ゴーオンチェンジャー!!」

「ゲキチェンジャー!!」

「アクセルラー!!」

五人は……変身アイテムをそれぞれ取り出した。

「レディ!!」

「滾れ、獣の力!!」

「チェンジソウル……セツト!!」

「一筆奏上……」

「チェンジカード……」

「ボウケンジャー……スタートアップ!!」

「ビーストオン!!ハッ!!」

「Let's……ゴーオン!!」

「ハッ!!」

「天装!!」

《チェンジ・ゴセイジャー!!》

五人は……五大戦隊のレッドに変身した。

「なに!!?」

ゴーカイレッドは、レッドを始め……驚愕に包まれていた。

「熱き冒険者……ボウケンレッド!!」

「身体に漲る……無限の力!アンプレイカプルボディ……ゲキレ

ッドー!!」

「マッハ全開……ゴーオンレッド!!」

「シンケンレッド……志葉文瑠。」

「嵐のスカイクパワー……ゴセイレッド!!」

『スーパージョー!レッドチーム!!』

一方……

「兄さん……本気だったわね。」

すると……ティアナの持つクロスミラージュが……ギンガマンのリョウマに反応していた。

「ん?……すみません!」

「ん?……どうしたんだ。」

「いえ……私のデバイスが……」

《彼の中に……AA+の魔力量を感じます。》

「えっ!?……ひょつとして、『魔導師』ですか?」

しかし……

「そうか……俺達の『アース』は、この世界だと……『魔法』と同じなんだね。」

「えっ?アース?」

「アースは……そうだな、言うなれば……『地球の力』なんだ。……ギンガの森の戦士なんかは……誰でも持つてるんだ。」

「そう……ですか。」

「でも……」

「ん?」

「最初……俺は、兄さんみたいに……アースは大きくは、なかったんだ。」

「えっ!?でも、さっきは……」

「まあね、…………俺があそこまで、アースを大きくできたのは……
兄さんのおかげなんだ。」
「?? ……どういうことですか?」
「うん…………実は……」

- 回想 -

ゼイハブの攻撃で…………大地が割れて、中間にあった岩に手をかけて…………耐えているヒュウガ。

リヨウマ「兄さん!」

ヒュウガ「リヨウマ! ……お前の中にも、大きなアースがあるはずだ。ただ、自分を信じていないだけだ!」

リヨウマ「兄さん…………」

二人が会話をしているなか、徐々に閉じようとしている大地…………そんな時に、ヒュウガは持っている星獣剣をリヨウマに渡そうとする。

ヒュウガ「リヨウマ…………受け取るんだ。」

リヨウマ「ダメだ、兄さん! 早く手を…………!」

ヒュウガ「リヨウマ!」

リヨウマ「くっ…………」

ヒュウガに言われ、星獣剣を取るリヨウマ。

ヒュウガ「お前の力を…………俺は、信じてる。」

リヨウマ「兄さん!？」

ヒュウガは、リヨウマに星獣剣を渡し…………割れた大地の中にその姿を消した。

リヨウマ「兄さーーーーーん!!」

- 回想終了 -

「兄さんの一言があつたから……俺は、バルバンと戦うと……決心した……あの後、兄さんを……『ブルブラック』が助け、俺達と一緒にいるんだ。」

その話を聞いたティアナは……

「すみません!……辛いことを思い出させてしまつて……。」

そんなことを言いながら……ティアナは、涙を流していた。

「あれ?……なんで……ひつく……泣いて……るんだろ?」

「泣きたい時には……泣けば良いよ。」

「うつ……ひつく……リヨウマさん!!」

ティアナは、リヨウマの胸に顔を埋め、リヨウマはそっと……抱きしめた。

第43話 魔導師と魔法（アース）の戦士の邂逅（後書き）

ジェス「ゴークイジャーとスーパー戦隊レッドチームの戦闘は？」
作者「それは……次回だな。」

ジェス「何話でおわるのやら……」

作者「次回、第44話……海賊対赤き戦士達。」

マーベラス「派手に行くぜ！」

ジャン「ワキワキだ〜！」

明石「アタック！」

走輔「マツハで行くぜ！」

丈瑠「参る！」

アラタ「行くよ！」

第44話 海賊対赤き戦士達（前書き）

前半バトルメイン……………後半はメイン部隊の移動です。

第44話 海賊対赤き戦士達

機動六課・訓練場

『今、五つのスーパー戦隊を率いて闘った……赤き勇者達と……
…海賊という汚名を誇りとする、豪快な奴らが揃った。』

「さっきのギンガマンにしろ……なんで変身出来るんだ？」
「ひよつとしたら……『レジェンド大戦』が起こる以前の地球
では？」

「ありえるかもな。」

ゴークイレッドとピンクとブルーがそんな話をしていた。

「話し合いは……終わったか？……行くぞ！」

シンケンレッドの一声でゴークイジャーに向かうレッド達。

「仕方ねえ……行くぜ！」

ゴークイジャーもレッド達に向かい走りだす。

シンケンレッド & a m p : ゴークオンレッド対ゴークイブルー & a
m p : ゴークイグリーン

「ハッー！」

「ロードサーベル！」

シンケンレッドはシンケンマルで……ゴークオンレッドはロードサ

ーベルでそれぞれ切り掛かってきた。

「ちっ！…………ハッ、ハアッ！！」

「ゴーカイガン！」

ゴーカイブルーが二人の剣撃をいなし、ゴーカイグリーンがゴーカイガンでシンケンレッドとゴーオンレッドを撃つ。

「ハアッ！！」

だが、二人はその銃撃を自身の剣で防いだ。

「ええっ！？」

「やるな…………ハッ！」

驚くゴーカイグリーンを尻目にシンケンレッドとゴーオンレッドに迫るゴーカイブルー。

「へっ！」

「…………参る！」

シンケンレッドとゴーオンレッドの再び駆け出した。

ゲキレッド&p・ボウケンレッド対ゴーカイイエロー&p・ゴーカイピンク

「ゲキセイバー！」

「サバイブレッド！」

ゲキレッドとボウケンレッドは自身の剣を持ち、ゴーカイイエローとゴーカイピンクに向かう。

「ルカさん…………ゲキレッドは、私が。」

「オツケー…………任せたよ、アイム。」

ゴーカイピンクとゴーカイイエローは、ピンクがゲキレッドを……イエローがボウケンレッドを担当することになった。

「ハッ！！」

「ハイツ！…ハツ、ハアツ！！」

ゴーカイピンクは、ゲキレッドの放つゲキセイバーを素手でいなし、二撃を打ち込んだが、ゲキレッドは……ゲキセイバーの峰部分で防いだ。

「お前の動き……激獣拳か？」

「ハイツ！……ある人に教わりました。」

「おゝ！なんか、お前の心……ニキニキしてんな！俺も今……ニキニキのワキワキだゝ！！よし、もつと行くぞ。」

「ハイツ！」

再び、間合いを詰めて……互いの拳を打ち込むゴーカイピンクとゲキレッド。

「あつちは、楽しそうだな。」

「じゃあ、こつちも楽しくやる？」

「悪いが……そんな余裕はないんでな。」

ゴーカイイエローとボウケンレッドは互いの剣をぶつけながら、ゴーカイピンクとゲキレッドの戦闘を観察していた。

「同感………それっ！」

「ぐっ！？」

「もらいつー！」

「ボウケンジャベリンー！」

「危なっー！」

「なかなか、やるな。」

「そりゃ、どうも。」

ボウケンレッドは、サバイブレードの代わりにボウケンジャベリンを持ち、再びゴーカイイエローに向かった。

「リーチ長いなあ。」

ゴーカイイエローも愚痴をこぼしながら、ボウケンレッドに向かう。

ゴセイレッド対ゴーカイレッド

「スカイクソード！」

《サモン！スカイクソード！》

「ハッ！」

「おっと！……そらっ！！」

「っ！……ハッ！……ゴセイブラスター！！」

「ゴーカイガンー！」

ゴーカイレッドとゴセイレッドは……どちらも、剣と銃を持ち……

…互角の勝負に持ち込んでいた。

「ちっ……こうなりやあ！」

《ファ～イナルウェーブ！》

ゴーカイレッドは……ゴーカイサーベルにレンジャーキーを差し込んだ。

「ゴーカイスラッシュー！」

「ハッ！……レッドブレイクー！」

ゴーカイレッドのゴーカイスラッシュにゴセイレッドはスカイクソードを用いる……『レッドブレイク』で対抗した。

ド、ドォーン！

「うわぁーっ！！」

ゴセイレッドとゴーカイレッドは……技と技のぶつかり合いで発生した、衝撃波で弾き飛ばされた。

「マーベラスー！」

「マーベラスさん！？」

「アラタ！」

「ゴセイレッドー！」

両チーム共に……飛ばされた二人を心配して……ゴーカイジャーのメンバーはゴーカイレッドへ……スーパー戦隊レッドチームは

ゴセイレッドの方に走り出した。

「大丈夫か？アラタ。」

「うん……大丈夫。」

「マーベラスさん……。」

「心配すんな……アイム。」

シンケンレッドはゴセイレッドに……ゴーカイピンクはゴーカイレッドに声をかけて、無事であることを確認した。

「へっ……なかなかやるな。」

「そっちこそ……。」

ゴーカイレッドとゴセイレッドの会話の中で、二人を中心に横に並ぶ戦士達。

「お前ら……赤いので行くぞ。」

『オツケー。ノハイッ！ノああ。ノわかった。』

ゴーカイジャーはバツクルから……レンジャーキーを取り出した。

『豪快チェンジ！』

《ゴーセイジャー！》

《シンケンジャー！》

《ゴーオンジャー！》

《ゲーキレンジャー！》

《ボウケンジャー！》

ゴーカイレッドはゴセイレッド、ゴーカイブルーはシンケンレッド、ゴーカイイエローはボウケンレッド、ゴーカイグリーンはゴーオンレッド、ゴーカイピンクはゲキレッドに豪快チェンジした。

「そっちがそれなら……みんな……！」

『おう……！』

スーパー戦隊レッドチームのそれぞれのレッドは……自分のアイテム等を取り出した。

「ミラクルゴセイパワーカード……天装！」

《サモン！ミラクルゴセイパワー……！》

「超天装……！」

《スーパーチェンジ!》

「インロウマル!」

《スーパーディスク!》

「ふう……使え!走輔!」

「おう!恐竜ディスク!」

「スーパーゲキクロ……スーパービーストオン!」

「アクセルテクター!」

五人のレッドは自身の強化形態へ、その姿を変えた。

「奇跡の嵐!……スーパーゴセイレッド!」

「スーパーシンケンレッド!」

「ハイパーゴオンレッド!」

「過激気にアンプレイカプルボディ!……スーパーゲキレッド!」

「ボウケンレッド!アクセルテクター装着完了。」

ゴセイレッドは、ミラクルドラゴンヘッダーの力が宿る……スーパーゴセイレッド、シンケンレッドは、シンケンマルにインロウマルを取り付け……自身は迅羽織の様なものを身につけた……スーパーシンケンレッド、ゴオンレッドは、シンケンレッドから借りた『恐竜ディスク』の力を身につけた……ハイパーゴオンレッド、ゲキレッドは、スーパーゲキクロを持ち、さらに……過激気を使用した……スーパーゲキレッド、ボウケンレッドは、アクセルテクターを身につけた状態へ……ここに……『強化レッドチーム』が揃った。

「んなもん、ありがよ!」

抗議の声をあげる、ゴカイレッド。

「行くよ!……スーパースカイダイナミック!」

《スーパースカイダイナミック!》

「モウギユウバズーカ!」

「マンタンガン!」

「激気技!砲砲弾!」

「デュアルクラッシャー・ドリルヘッド!」

攻撃の準備をする……五人の強化レッド達。

「ちつ……コンプレッサンダーカード！天装！！」

「烈火大斬刀・百火繚乱！！」

「カンカンマンタンガン！！」

「激気技・砲砲弾！！」

「デュアルクラッシャー！！」

ゴーカイジャーの五人も攻撃体制に入った。

「パニツシュ！！」

「ハアッ！！」

スーパーゴセイレッドの一声で一斉発射をする、レッド達。

「ハアッ！！」

ゴーカイジャーは、五人で声を揃えて発射した。

「ドカーアーアーンツ！！」

「やったか？」

ボウケンレッドが疑問を抱く……すると……

《ファッイナルウェーブ！》

「まさか！？」

「その、まさかだ！……行くぜ！ゴーカイブラスト！！」

ゴーカイジャーがいつの間にか、基本の姿になり……五人揃って

のゴーカイブラストを発射した。

「ディフェンストームカード！天装！！」

《イクスパント…スカイクパワー！》

「ハッ！」

スーパーゴセイレッドのディフェンストームにスーパーシンケン

レッドの反のモジカラが融合し、ゴーカイブラストを防いだ。

「マジかよ。」

すると……

「そこまで！！」

ジェスが終了の合図をあげた。

「どうだった？」

「大丈夫だよ……………力を使いこなせてるのが、いくつか有るからね。」

「そうか……………ライダーに関しては、素人同然だな。」

「ぐっ……………！？てめえ！！」

「マーベラスさん！！」

「ちっ！」

そこへ……………

「ジエス！」

『ん？』

「ゆり。」

プリキュアチームを代表して、月影ゆりがジエス達のところへ来た。

「実力テスト……………ご苦労様。」

「大したこと……………じゃない。」

「ふふっ。……………ところで……………ゴークイジャーのメンバーは、『プリキュアキー』をどこで？」

すると……………

「どうせ……………『未来』から持って来たんでしょ？」

「『ソウハ！』」

ソウハが、突然来てそう言うが……………

「未来？……………いや、『光のクイーン』と『フィーリア』……………って言う、二人に渡された。」

「フィーリア王女に光のクイーンだと！？」

「ああ。」

「なるほどね。」

ジエスとゆり……………そして、ソウハの三人は……………理由が理由なだけに……………納得していた。

タイムセイバーズ・ミーティングルーム

タイムセイバーズのミーティングルームに……アクセル、アムロの二人がいた。

「……『次元交差線』？……なんですか、それは。」

「実は……ラー・カイルムやハガネに……空間転移やクロスゲートシステムの反応をキャッチできる装置が有るのは、知ってるね。」

「ああ。」

アムロは、アクセルの疑問に答えた。

「その装置から……時たま、次元交差線の異常を示す表示が出てしまってるね。」

「そうですか……パトロール強化をする必要がありますね。」

「ああ……ブライトやシャアにも言って置くよ。」

「『クワトロ』の間違いでは……「シャアだ。」……いや、しかし……「奴は、シャアだ！」……分かりました。」

アムロの強気の姿勢に折れてしまった、アクセル。

「（ふう……しかし、次元交差線……葵の言っていた……『次元境界線』とも、関連性がありそうだな。）」

機動六課の隊員食堂では……ゴーカイジャーメンバーとアラタ、丈瑠、走輔、ジャン、明石、薫姫、ジェス、ゆり、ソウハ……そして、スターズ&ライトニング一同が食事をしていた。

「うめえー!!」

「確かに……」

「ハカセより……断然だね。」

「ホントに美味しいですね。」

「どうせ……僕なんて……」

ゴーカイジャーの五人が……それぞれ感想を（一人だけは……ダメージ台詞を）言っていた。

「「お代わりお願いしますー!」」

「ん?……なっ!?!」 とある声に首を傾げたマーベラスは……
…声のする方に顔を向けて、驚いていた。

「まったく…… 毎度毎度思うが…… 何処に、そんな量…… 入ってんだよ。」

そう…… 料理のお代わりを頼んだのは、スターズ3のスバルとライトニング3のエリオの二人で…… すでに、十皿は食べていた。

『（どんだけ食べるんだ?）』

ゴーカイジャーの五人は揃って、そう思っていた。

数時間後…… ジェスは、アクセルとアムロの二人にハガネまで強制送還された。

「なんで?」

「厄介な事が発生してな……。」

「『次元交差線』と『次元境界線』の調査をするから……。」

アクセルとアムロがジェスを連行しながら…… 現状を話していた。
「…… つーことは…… しばらくは…… ロンド・ベルと地球連邦に

専念しろと……」

「ひらたくいえば、そうなる。」

「わかった……俺としても……あのダンクーガノヴァマックス
ゴッドのパイロットのメンバーを見たいし。」

すると……アクセルが……

「Dチームのメンバーは、五人の内、三人が女性だが……」

「いよっし！やる気出てきたー！……と、その前に……

……八神、ゆり。」

ジェスは、八神部隊長とゆりに通信を繋いだ。

『なんや？』

『どうしたの、ジェス。』

「しばらくは、『本業』に専念するから。」

『了解や……なのはちゃん達には、うちから言っとくわ。』

『わかったわ……つばみや響達には……私から言って置くけど

……無茶はしないでね。』

「わかってるよ。……じゃあ、またな。」

ジェスは、そう言って通信を閉じた。

「行くぞ……時間だ。」

「ああ……やってやるよ！」

こうして、ジェスは……ハガネ、ヒリュウ改、ラー・カイルム、
ナデシコを中心とした……『ロンド・ベル隊』のロボット乗りとし
て、一時的に機動六課から離れた。

第44話 海賊対赤き戦士達（後書き）

ジェス「次は……機動六課メインじゃないんだな。」

作者「スパロボ大戦メインの話しが少ないからな………なんで、キーワードにスパロボを入れたのかわからないじゃん。」

ジェス「なるほどね………メインに出すキャラは？」

作者「ジェスとアクセル以外は………まだ、思いついてない。」

ジェス「おいっー！」

作者「っーわけで………次回、第45話…転移！次元を越えた二体の魔神！！」

ジェス「おいっ………それって………」

作者「そんじゃ、叫ぶか？」

ジェス「は？」

作者「叫ぶ前に………『マジンガーZ』の兜甲児、『マジンカイザー』の兜甲児、『真！衝撃Z！』の兜甲児………つまり、異時空間同位体の三人の兜甲児と一緒に叫ぶぞ。」

ジェス「って、おいっ！『おっしゃー、行くぜ！』………ノリノリだし………だ………もう、わかったよ！！」

作&mp;ジェス&mp;甲児's『マジーーーーーン・ゴ
ーーーーッ！！』

第45話 転移！次元を越えた二体の魔神（前書き）

久々の投稿————ッ！！お待ちの皆様………お待たせしました——！！

第45話 転移！次元を越えた二体の魔神

- 多元世界 -

多元世界……それは、異なる時間の流れや、異なる時代、異なる世界が様々な要因で一つになった世界のことだ……もちろん、別の世界の同一人物も存在する。

熱海

今、熱海の町でぶつかり合う……二つの影がある。

「ぐっ！……このお！……ロケット…パンチ！」

その一体は……鉄の城『マジンガーZ』！

「ゲウオ……」

そのマジンガーZに吹き飛ばされているのは……タロス像。

「おのれ！マジンガーZ！……おのれ！兜甲児！」

「あしゅら男爵！覚悟しろ！」

「うぬう……」

そこに、一つの雷が走った。

「あしゅらよ！この場は、引くぞ！」

「すまぬ！ピグマン！」

すると……あしゅら男爵とピグマンは…雷と共に消えた。

「くそ！」

マジンガーZの操縦者……兜甲児は、悔しそうに…パイルダーの操縦管を叩いた。

東京

一方、別の世界では……東京を舞台に一体の魔神と一体の機械的な獣が闘っていた。

「くらえっ！ターボスマツシャーパンチー！」

その魔神の名は……『マシンカイザー』……獣の方は……『カラダK7』……総称で『機械獣』と呼ばれる。

「ギギ……………」

「トドメだ！ファイヤーブラスターー！」

「ギギヤーーー……………」

マシンカイザーのファイヤーブラスターで溶けてゆく機械獣。

「おっしゃー！見たか！あしゅら男爵！……この俺……兜甲児様とマシンカイザーは無敵だぜー！」

この世界の兜甲児の愛機は……マシンカイザー！。幾多の機械獣もマシンカイザーの前では手も足も出ない。

地球／ジェスのいる世界

「次元境界線が揺らいでる……………まさか。」
ジェスがパトロールをしながら、次元境界線をチェックしていた。
……………すると、目の前の空間が揺らぎはじめた。
「これは!!！」

多元世界・熱海

「ん？」
タロス像を倒し、戻ろうとしたマジンガーZの前方に空間の揺らぎが発生した。

「なんだ? ……機体が…引き寄せられる!!」
甲児の一言をよそに……………揺らぎは、マジンガーZを包み込んだ。
……………揺らぎが終わった頃には、マジンガーZの姿はなかった。

別世界・東京

その頃、マジンカイザーの方でも……………マジンカイザーを包む程の揺らぎが発生していた。
「（これは!! ……まさか!!）」
そんな、甲児の思考を遮るかの如く……………揺らぎの消滅と共に……………マジンカイザーの姿も消えていた。

地球・ジェスの世界

ジェスは、空間の揺らぎが地上に移動したのを追跡していた。

「この辺りのはず……。」
すると……………

スパロボ敵勢力増援BGM

『ギャーーーーーオッ!』

『ガアーーーー!』

Dr・ヘルの機械獣、ミケーネ帝国の戦闘獣、恐竜帝国のメカザウルス、百鬼帝国の百鬼ロボ、インベーター、ベガ星連合の円盤獣、ドラゴノザウルス、デスアーミー……………計六千体が地面や空中、水中から姿を現した。

「ちい!……………朱雀・烈火刃!」

ジェス……………ソウルサーガは、両手に持ったクナイに朱雀の様な炎のオーラを纏わせ、敵勢力に向けて投げた。

『ガアーーーー!』

「(くっ!……………奴らの数が多すぎる……………どうする?)」

その時!!

『ルストトルネード!』

「ルストハリケン!」

『グオッ!?』

二つの硫酸性の竜巻が機械獣を溶かした。

「っ!？」

その方向を向いた…ジエスは、目を開いていた。

「(マジンガーZにマジンカイザー!?!?……まさか!)」

ジエスが考えていると……

「ターボスマッシューパーパンチ!！」

「ドリルプレッシャーパンチ!！」

「スクリュークラッシャーパンチ!！」

『ゲッタートマホーク!ノダブルトマホーク……ブーメラン!！』

マジンカイザー、グレードマジンガー、グレンタイザー、二機の真ゲッターロボ、真ドラゴンがそれぞれの敵勢力に攻撃を仕掛けた。

……さらに!！

『出る!……!……!ガンダーーム!！』

ゴッドガンダム、ドラゴンガンダム、ボルトガンダム、ガンダムマックスター、ガンダムローズ、ガンダムシュピゲール、マスターガンダム、ノーベルガンダム、ライジングガンダムがデスアーミーの前に立ちはだかった。

「デビルガンダムは倒したはず……何故だ？」

「疑問は後にしろドモン……今は、目の前の敵を倒すのみ!」

「はいっ!師匠!！」

「行くぞ!ガンダム・ファイト……」

「レディ……」

『ゴ……!……!……!』

ガンダムファイター達のガンダムは、デスアーミーに向かって進んでいく。

「さてと……俺も……」『ちよつと!』……ん？」

「私達を忘れんじや……ないわよ!！」

ソウルサーガの後方にファイナルダンクーガとダンクーガノヴァ・マックスゴッドがいた。

「Dチームに獣戦機隊か……。」

『俺達も忘れるな……ジエス!!』

「いっつ!!」

ダンクーガの後方には……ソウルゲイン、アンジェルク、エクサランス・ライトニング、エクサランス・エターナル……四機のロボットが……さらに……ドラゴノザウルスを囲む様に……青、赤、黒、白のそれぞれの色に塗装された四機のグルンガスト……紫、青、灰色、赤のそれぞれの色に塗装された四機のヒュッケバイン。

「兄貴に……ラミア姉さんに……フィオナ……それとラウル……

……あっちのグルンガストやヒュッケバインは……イルム中尉達か……」

「おい!ジエス!ついでみたいに言うなよ!!」

「ラウル!黙ってなさい!!」

「うつ……」

「喋ってる暇はないぞ……仕掛ける!!」

『了解!／おうつ!』

ジエス達の機体も敵と交戦するために……速度を上げた。

マジンカイザー&グレードマジンガー&グレン
タイザー&マジンカイザーKS対機械獣&戦闘獣
&円盤獣

戦闘BGM・FIREWARSorいざ行け!ロボット軍団

「マジンガーブレード!!」

「ダブルハーケン!!」

「シヨルダースライサー!!」

『ファイナルカイザーソード!!』

それぞれの剣を持ち……敵に立ち向かう……マジンガーチーム。
「おいっ……ちよつといいか？」

『なんだよ！手短に済ませてくれよ！』

戦闘中……二人の兜甲児が通信していた。

「いや………そっちの世界にも、鉄也さんやシロー………さやかさんに弓教授は居るのか？」

『ああ！居るぜ！！』

すると………

「甲児くん！後は………一気に片そう。」

「わかつたぜ、大介さん！………鉄也さん！『おうつ！』………一気に決めるぜ！」

『俺もやるぜ！』

機械獣や戦闘獣、円盤獣を四方から取り囲んだ。

「くらえっ！プレストバーン！！」

「行くぞ！反重力ストーム！！」

「『こいつでトドメだ！！ファイヤーブラスター！！』」

三つの赤い炎と一つの七色の光波熱線が敵を焼き尽くす。

真ゲッターロボ（第3次α）対メカザウルス& a m p ;百鬼ロボ

戦闘BGM・ゲッターロボ！

「恐竜帝国と百鬼帝国は倒したはず………なのに、何故だ！」

「リヨウ！今は………それについて考えている時間はない。」

「わかっている！………行くぞお！」

リヨウは、真ゲッターをメカザウルスと百鬼ロボに向けて加速させた。

「ゲッター………トマホーク！！」

ゲッタートマホークで敵を斬り裂く、ゲッターロボ。

「オープン・ゲット！」

「チェンジ！真・ゲッター2！！……ミラージュドリル！！」

真・ゲッター2にチェンジし、すかさずミラージュドリルを地上の敵に命中させるハヤト。

「オープンゲット！」

「チェンジ！真・ゲッター3！！……ゲッターミサイル！！」

今度は、真・ゲッター3にチェンジして、ゲッターミサイルを空中と水中の敵に当てる、ベンケイ。

「リヨウ！次で決める！！」

「ああ！！」

ハヤトとリヨウマの会話の最中で真ゲットマシンに分離する……

真・ゲッター3。

「行くぞ！チェンジ！真・ゲッター1！！スイッチ・オン！！」

分離した直後に真・ゲッター1へ合体した。

「リヨウ！分かってるな？」

「ああ！感情を込めて、真・ゲッターのパワーを引き出す！！……

……ストナー・サンシャイン！！」

真・ゲッター1の必殺技の一つ……ストナーサンシャインを受けて完全に消滅するメカザウルスや百鬼ロボ。

真・ゲッターロボ（世界最後の日）& a m p; 真・ドラゴン対インベーター

戦闘BGM・HEATS

「来やがれ！ゲッター……ビーム！！」

先手必勝の如く……インベーターにゲッタービームを照射する竜馬……しかし……

『ギャオーーーーーッ!!』

「何っ!？」

「逆効果だ。」

「飽和状態は、いけない。」

「だったら、直接ぶつつぶす!ゲッター!トマホーク!!ランサー!!!サイト!!!」

竜馬は真・ゲッター1のゲッタートマホーク、トマホークを投げつけるトマホークランサー、トマホークの変形版のゲッターサイトでインベーターを斬り伏せる。

「ダブルトマホーク……ブーメラン!!」

ゴウは真ドラゴンのダブルトマホークを二つ合わせてインベーターに向けて投擲した。

『ギシャーーーーーッ!!』

インベーターの一体が真ゲッター1を包もうとする………だが「オープンゲット!!」

「チェンジ!ゲッター2!!ドリルハリケーン!!」

真・ゲッター2にチェンジし、ドリルハリケーンでインベーターの群れに風穴をあける、隼人。

「ギシャーーーーッ!!」

「ぐっ!？」

地上のインベーターの触手に真・ドラゴンの龍の顔を掴まれてしまった……ゴウ。すると………

「チェンジ!真・ライガー!!」

ケイが真・ドラゴンを真・ライガーにチェンジさせた。

「ドリルアタック!!」 真・ライガーのドリルアタックでインベーターを貫く。その延長線上の位置にいた……ヒトデ型のインベーター（本来、宇宙型）のリング状の光線に捕まる…真・ライガー。「うわぁ!!」

しかし……

「プラズマドリル……ハリケーン!!」

真・ゲッター2のサポートで脱出する、真・ライガー……しかし……真・ゲッター2を地上型インベーターが包もうとし、真・ライガーを宇宙型インベーターが包もうとした………が!

「大雪山おろし!!……ミサイルストーム!!」

「ゲッターエレキッ!!……真・ポセイドン!参上!!」

真・ゲッター3、真・ポセイドンにそれぞれチェンジし、インベーターを撃退する。

「ゴウツ!あれをするぜ!!」

「ああ……チェンジ!真・ドラゴン!!」

「弁慶!!」

「おうっ!!……オープンゲット!!」

「チエー……ンジッ!ゲッター1!!」

それぞれ、真・ポセイドンから真・ドラゴン、真・ゲッター3から真・ゲッター1へチェンジした。

「行くぜっ!!」

真・ゲッター1が真・ドラゴンの龍の顔部分に乗った。

『ゲッタービーム!!』

真・ゲッター1と真・ドラゴンの二つのゲッタービームが合わさり、インベーターを消滅させる。

ガンダムシュピゲル&ライジングガンダム&ノーベルガンダム対デスアーミー(五十機)

戦闘BGM・Frying the Sky

『ギャーーーーーッ!!』

「行くよ！レイン！シュバルツ!!」

「ええ！」

「わかった!!」

ノーベル、ライジング、シュピゲールの三体のガンダムは、デスアーミーの群れに突入した。

「ノーベル……フラフープ!!続いて、ノーベルリボン!!」

「必殺必中!ライジングアロー!!」

「行くぞ!シュトゥルム・ウントウ・ドラングー!!」

ノーベルガンダムのノーベルフラフープとノーベルリボン（ビームリボン）が数体のデスアーミーを裂き……ライジングガンダムのライジングアローが一直線にデスアーミーを貫き……残りのデスアーミーをシュピゲールが回転しながら斬り裂いていく。

ドラゴン&amp;ボルト&マックスター&ローズ対デスアーミー（百機）

戦闘BGM・燃え上がれ闘志

ドラゴン、ボルト、マックスター、ローズの四機をデスアーミーが囲んでいた。

「ひゅ……たった、百機かよ。」

「まっ!……おいら達を相手にするんなら……もうちょっと、ほしいかな。」

「ふ……確かにな。」

「では……行きましょうか?」

ジョルジュの一声でそれぞれ……デスアーミーに向かう、四機のガンダム。

「受けよ……我が洗礼!ローゼス……ビット!!」

「フェイロン……フラッグ!! 走れ、パオペイ!!」
「グラビトン……ハンマー!!」
「バーニイーンング…パンチ! シュウツ!!」
『ギャー……?』

四機のガンダムの猛攻に成す術のないデスアーミー達。

ゴッドガンダム&マスターガンダム対デスアーミー（五百機）

戦闘BGM・明鏡止水（マスターガンダム・スーパーモード&mp:ゴッドガンダム・ハイパーモード時の曲）

ゴッドガンダムとマスターガンダムの前方に五百機のデスアーミーが群れていた。

「ドモン! 分かっておるな?」

「はいっ!! 師匠!!」

「ならばっ! ……超級!」

「霸王!」

『電影弾!!』

「撃てっ! ドモン!!」

「はいーっ!」

ゴッドガンダムとマスターガンダムの合体技で直線上のデスアーミーを粉碎した。

「次だ! ……ダークネス・フィンガー!!」

「俺のこの手が真っ赤に燃える! ……勝利を掴めと轟き叫ぶ!!」
……爆熱! ゴッド・フィンガー!!」

マスターガンダムのダークネスフィンガーとゴッドガンダムの爆

熱ゴッドフィンガーが複数のデスアーミーを巻き込みながら直進する。

「爆発！」

「ヒート…エンド…！」

連続で技を出して……デスアーミーの残数が三十を下回った。

「行くぞ！ドモンよ…！」

「はいっ！師匠…！」

『流派！東方不敗が最終奥義…！』

「石！」

「破！」

『究極……天驚拳…！』

最後に石破究極天驚拳でデスアーミーを一掃する、ゴッドガンダムとマスターガンダム。

「後は……ドラゴノザウルス…一体のみ！……一気に行くぜ！」

その時……空間転移で量産型ゲシュペンストMark？、バルトルがソウルゲイン、アンジェルク、エクサランスエターナル、エクサランスライトニング、ソウルサーガのグループとファイナルダンクーガ、ダンクーガ・ノヴァマックスゴッド、マジンガーZを分断する様に出現し……グルンガストとヒュッケバインのグループもDC残党の相手をしていた。

「ちっ……葵……ドラゴノザウルスは任せるぜ…！」

「オツケー！……負けんじやないわよ。」

「負けねえよ。」

エクサランスライトニング&エクサランスエターナル&

amp;ソウルゲイン&アンジェルク&ソウルサ
ーガ対バルトール&量産型ゲシュペンストMark?

戦闘BGM・DARK KNIGHT or ASH TO ASH

「照準……よし！くらえっ！！……イリユージョンアロー！！」

『リアクター……』

『スマッシュャー！/フラッシュ！』

「青龍鱗！！」

「青龍・蒼波刃！」

五機の攻撃は……量産型ゲシュペンストMark?を撃墜するが

……バルトール群は予測していたかの様に避けていた。

「なにっ!？」

「まさか！」

「ODEシステムか……。」

ODEシステムとは……通常、一つの機体に一人のパイロットなのだが……ODEシステムを使用した際には、一人のパイロットに多数の機体をリンクさせ……操作するシステムだ……しかし、そのパイロットはバルトールの『道具』とみなされる。

「ODEシステム!？」

「やつかいなのを積んでるわね。」

「みたいだな……ラウル！フィオナ！……おとされんなよ。」

「お前もな……行くぞ！」

『了解!』

ジェス達の機体はそれぞれ動き、バルトールを攻撃する。

「この切っ先……触れれば斬れるぞ！……舞朱雀！！」

「ミラージュサイン！！」

「クラッシャー……スパイク！！」

「受けなさい……コズミックストライク！！」

「白虎と風の合わせ技だ……白虎・風刃閃！！」

しかし……バルトール群は直撃コースをさけ、攻撃をかわした。

「えっ！？」

「まずいな……」

すると……

「こうなったら……フォルムチェンジ！アルト！！」

ジェスの一声でソウルサーガは姿をアルトアイゼン・ナハト改に変えた。

「青い……ゲシュペンストMark？だと！？」

「行くぜっ！！レイヤードクレイモア！！」

ナハト改のレイヤードクレイモアがバルトールに放たれるが……
よまれていたのか……かわされていた。

「ちいっ！！」

その時！

・ピキーーーン！・

『っ！！！？』

アクセル、ラミア、ジェスの三人が謎のプレッシャーを感じた。

「なんだ？……この感じは……」

「大尉達とは違う……」

「誰だ？……まてよ。」

《右前方40度の方角です！マスター！！》

「っ！」

ジェスが念話で聞こえた方角に機体のカメラアイを動かしたら……

……腕が四本あるバルトールが見えた。

「腕が四本？」

「まるで……ジュピトリアンのパプテマス・シロッコが操縦する

『ジ・O』だな。ん？」

『パプテマス・シロッコ!!』

ジェス、アクセル、ラミアが同時に叫んだ。

「よまれて当然か……」

「だったら！フォルムチェンジ・ガンダム!!」

ジェスはアルトアイゼンナハト改をソウルサーガに戻し……別のフォルムに変えた。それは……

「ソウルガンダム!!」

『ガンダム?』

その時……一機の戦闘機がソウルガンダムのライン上に入った。

「来たか……コネクト!!」

ソウルガンダムと戦闘機が合体した……その名も……

「フライヤーソウルガンダム!!」

空中戦に特化した『フライヤーソウルガンダム』……フォルムチェンジにより様々な姿に成れる、ソウルサーガならではの特殊能力だ。

「ビームセイバー!!……懐に飛び込めば!」

しかし……

「ガキンツ!!」

「なにっ!？」

バルトールの四本の腕に防がれてしまった。

「ちい!!」

すると……

《その程度の腕でこの私に挑むとは……。》

ジェスの頭の中に謎の声が聞こえていた。

（貴様は!!）

《私の名は、パプテマス・シロッコ……そういえばわかるだろう。》

《

（シロッコだと!?!……だが、貴様はカミーユが倒したはずだ!）

《そう……私は確かに倒された……しかし、精神だけは宇宙空間を漂い……ある時、このバルトールの人工知能に入り込めたのだ。》
（精神だけの状態でバルトールを操ってるのか。）

《その通り……このバルトールのODEシステムと私のニュータイプ能力があれば、私は無敵だ！》

（ふざけんなー！………シロツコ！貴様は必ず倒すー！）

《できるかな？》

シロツコの精神が乗り移ってるバルトールとフライヤーソウルガンダムは二体はその場で睨みあっていた。

グルンガスト&ヒュッケバイン対DC残党

戦闘BGM・TIMETOCOME

グルンガストとヒュッケバインの四機構成二チームは、DC残党の操縦する……リオン、ガーリオン、バレリオン、ザク？、マラサイの相手をしていた。

「ザク？にマラサイねえ………久々に見たな。」

「イルム……まさかとは思うが……ザク？とマラサイ以外は、俺とヘクトールとアーウィン……初めて見るんだが？」

「マジで！？」

『こちらもだ……お前と私以外は、リオンやガーリオンは初めてらしい。』

「なるほどね………ただ、やるのは………一緒でしょ。」

『ふっ………そうだな。』

「そんじゃ、行くぜ！相棒ー！」

グルンガストとヒュッケバインは二機ずつに分かれてDC残党の掃討を開始した。

「遅れるな！イルム！！」

「心配すんな！リン！！」

「ブラックホールキャノン！発射！！」

「ファイナルビーム！！」

「行くぞ……グレース。」

「ええ、アーウィン。」

「チェンジ！ウイングガスト！……オメガレーザー！」

「フォトンライフル！！」

「いくよん！ダーリン！」

「オツケー、パットちゃん！」

「リープスラッシャー！！」

「チェンジ！ガストランター！ドリルアタック！！」

「行くぜ？ミーナ。」

「うん！！……レナンもご褒美、忘れないでね。」

「分かってるよ。……行くぜ！計都羅候剣・暗剣殺！！」

「シンオウブレード獅子王刃！！」

『斬！！』

DC残党……呆気なく全滅。

ファイナルダンクーガ&ダンクーガ・ノヴァマックスゴ
ッド&マジンガーZ対ドラゴノザウルス

戦闘BGM・灼熱の怒りor鳥の歌or感じてKnight！

「あれっ？甲児？」

「んっ？ 葵か？……久しぶりだな。」

「えっ？……あつ、そうね／＼」

「葵……」

「顔、真っ赤ですよ。」

「うっ、うるさいわね！今は、怪獣退治に専念しましょ。」

『（顔を真っ赤にしてる人に言われても……）』

甲児を見て、顔を赤くしていた葵を目の当たりにした、くららとエーダ。

「ドラゴザウルスか……こいつは、一気に決めなきゃな。」

「確かに……再生能力が半端じゃないからね。」

「別に大丈夫じゃないか？忍なら。」

「へっ……言ってくれるな。そんじゃ、いつちょ……やってやるぜ！……」

「AGGRESSIVE BEAST POWER」

「センパイ達には負けてられないわね。」

『葵！／葵さん！』

「みんな……良いわね？」

『オツケー！』

「やってやるうじゃん！！」

「やってやるわ！」

「やってやるさ！」

「やってやるよ！」

「やってやります！」

「MAX GOD BEAST POWER」

『ガア？』

「甲児！初撃お願い！！」

「おう！……ブレストファイヤー！！」

「センパイ！！」

「ああ！！」

「エーダ！お願い！！」

「ダンプブレード・シュート!!」

「断空剣!!」

「断空弾効剣!!」

『ハアーーーーッ!!』

「断空弾効斬!!」

『ガアーーーー!?』

三体の連携により爆発するドラゴノザウルス。

フライヤーソウルガンダム対バルツール（シロッコ）

「ほかの戦闘は……終了したようだな……後は、貴様とバルツール群だけだ!!」

《確かに……だが、この私には勝てまい!!》

（たとえ……敵わなくても!）

「???」そちらのガンダム!聞こえますか?」

「誰だ?」

「???」名前は言えません……今から、専用装備を送ります。専属パイロットも乗っています。では……御武運を。」

「専用装備に専属パイロット?……っ!」

《よそ見をしている場合か?》

「ちっ!」

フライヤーソウルガンダムとバルToolの戦闘が再開された。

「（ん?……リーダーに反応……あれか!!）」

《逃がすか!》

「ちっ……フライヤービット!!」

《くっ……小賢しい真似を!》

ジェスは、ガンダムの専用装備を受け取るため、バルToolにフライヤービットを放ち時間を稼いだ。

「??? 『ガンダムのパイロットですね。』」

「ああ! …… 戦闘継続中でな! …… 手早く済みたい。」

「??? 『わかりました。一度、フライヤーユニットをパージしてください。』」

「ああ。」

「??? 『パージ確認! …… 『ソウルライザー』スタンバイ! …… コネクト! ……!』」

「接続確認! …… ソウルライザー! …… 起動! ……!」

「??? 『起動確認! …… メインはそちらです。』」

「了解!」

ちようど、フライヤービットを撃墜したバルツールが! …… ソウルライザーに迫る。

《その様な武装をしたところで!》

「ダ、ダ、ダッ!」

「ぐっ! …… どうした! …… 動け! ……!」

「???」 (『GN粒子』が機体に行き渡ってない! …… どうして?)

「

《機体も満足に動かせんか?》

「動けっ! …… 俺は、こんなところで負けられないんだ。頼む! ……

! …… 動け! ……!」

「キーン」

「はっ! ……?」

「汝の魂の声! …… 良く聞こえた。」

「誰だ?」

「汝の心ともう一人の心が一つと成るとき! …… 我が力を貸そう。」

「俺の心と! ……!」

「???」 「私の心! ……!」

「俺はジェス! …… 君は?」

「私は! …… 『フェルト』。」

「そうか! …… 俺の心! …… 君に預ける。」

「私も……私の心……貴方に預けます。」

《別れの挨拶は済んだか？》

「（俺は……こんなところで……死ぬ訳にはいかない。）」

「（私は……ここで死にたくはない。）」

「俺は！」

「私は！」

『生きるっ！！』

・汝等の想い……しかと届いた。……四神と四霊の頂点に立つ……

龍神の力で汝等の機体に隠された力と新たな力を授けん！・

「（GN粒子が行き渡った！）今です！！」

「アクティブー！！」

・ギンツ！・

《なにい！？》

「ハアー……ッ！」

《まさか……こんな力が？》

「行くぞ！」

「はいっ！」

『トランザム・ブルー！！』

二人の声と同時にソウルライザーの機体色が蒼き粒子に包まれた。

『ハアー……ッ！！』

《バカな……この私が！！》

・ドンツ！！・

トランザム・ブルーを発動したソウルライザーの猛撃の前にバル
トール……否、シロッコは手も足も出なかった。

フォルムチェンジを解きソウルサーガに戻した、ジェスと『GN
ドライブ』搭載機の支援専用機……通称『オーライザー』に乗る、

フェルトは……音声のみの通信を行っていた。

「すまないな、おかげで助かった。」

『いえ……こちらも指示を受けて向かっただけですから。』

「顔を見せれないのは……何か理由があるのかい？」

『すいません……訳あって顔を見せれないんです。』

「そうか……じゃあ、今回はありがとな。」

『いえ……それでは、失礼します。』

「なあ……また、会えるか？」

『はい！……必ず……会います。』

ジェスは、遠ざかって行くオーライザーをソウルサーガのコクピットから見ていた。

「『必ず……会います。』か……。」

すると……

『ジェス……！』

「っ！」

ソウルサーガの四方にバルツールが展開していた。

「まったく……だったら、これだ！」

- ATTACK RIDE……ILLUSION -

イリユージョンのライドカードをソウルサーガに読み込ませ……四機に分身した。

『真・光覇白刃閃……！』

- ドンッ……

「南無散。」

全ての戦闘が終了し、別世界から来た、二人の兜甲児に現状を話していた。

『平行世界だって！？』

「ああ。」

「それじゃ……………こっちの葵は…俺の事を知らないのか。」

「ええ……………悪かったわね…知ってるような、そぶりをして。」

「本当は一目惚れなんですよ…葵？」

「なっ！／＼／＼くらら！！／＼／／」

すると…

・ブオォー……ン・

マジンガーZとマジンカイザーの装甲と同じ色のオーロラが発生した。

「あれは……………」

「次元や時間も関係ない……………全ての世界を繋ぐディメンションゲートだ。」

「こいつで……………戻れるのか。」

「そうだ……………葵。」

「へ？」

「何か……………一言、言っとけ。」

「え？わ、私は……………別に／＼／」

その時……………

・ピピッ！ピピッ！・

別世界の兜甲児達二人除いた全員の通信機が鳴り響いた。

「こちら、ジェス！」

『ジェスか！……………すぐに東京都に向かってくれ。』

「東京に？……………ブライトさん、どうしてなんすか。」

『高エネルギーを伴った物体の調査を君に頼みたい。』

「この場に居る、俺以外のメンツは？」

『マジンガーチームやゲッターチームはそろそろオーバーホールが必要だろう……………各研究所に向かうんだ。ドモン達はネオジャパンコロニーから召集がかかっている。アクセル達はハガネやヒリユウ改に帰到……………ダンクーガチームは、葉月長官が呼んでいる。』

『了解！／わかった！』 「急用なのか？」

「ええ……ごめん、何も言う事が思い浮かばなくて……。」
「そうか……そろそろ行くよ。さやかさんに心配かけさせたくないしな。」

「そっか……じゃあね。」
「ああ。」

葵とマジンガーZに乗っていた兜甲児の会話の後……それぞれの機体に戻り元の世界に戻って行った。

「リユウ！早乙女研究所に急ぐぞ！」

「そうだな……早乙女博士を待たせる訳にはいかないからな。」

「親父！あたしたちは？」

「それは……隼人が決めることだ。」

「おいっ！隼人！どうするんだよ。」

「ゲッターのパーツは……幸いにもタワーの中に余ってる……敷島博士にタワーをこの位置まで動かしてもらおう。」

「ふっ……。」

二つのゲッターチームはそれぞれ別々に動いた。

「どうする、甲児君。」

「光子力研究所に行ってみるさ。鉄也さんに大介さんは？」

「俺は、所長のところに戻るさ。」

「僕は……宇宙科学研究所に行くよ。」

「じゃあ、甲児君達は……途中までは、俺達と一緒にだな。」

「俺も行くぜ……なにしろ東京だしな。」

「ハガネやヒリユウ改の現在位置は……伊豆にある極東支部だ。」

「つまり、俺達も一緒だ。」
「すると……」

「なんだよ……スーパーロボットは全員が途中まで一緒じゃ、ねえかよ。」

ダンクーガチームもゲッターチームやマジンガーチームと同一の方向だった。

「ドモン……私達は一度……ブライト艦長に頼んでネオジャパン

コロニーに運んで貰いましょう。」

「そうだな、レイン。」 ガンドムファイター達はネオジャパンコロニーに行くために……一旦、ラー・カイラムに戻ることになった。

- 東京都 -

謎の高エネルギー物体が東京タワーの近くに落下した。しかし……途中で減速したのか、被害は無かった。

第45話 転移！次元を越えた二体の魔神（後書き）

次回予告

予告BGM・ウルトラマンガイア

ジェス「これが調査対象か……。」

我夢「こいつは!?!」

ジェス「怪獣の卵?」

我夢「コッヴが数体……入ってるのか?」

ジェス/我夢『メビウーース!/ガイアーー!』

次回、第46話『コッヴ再来!/SPD&宇宙刑事共同戦』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2808n/>

魔法少女リリカルなのはsts&スーパーヒーロー 青きディケイド伝説

2011年11月22日15時47分発行